THE KAIZO

改造

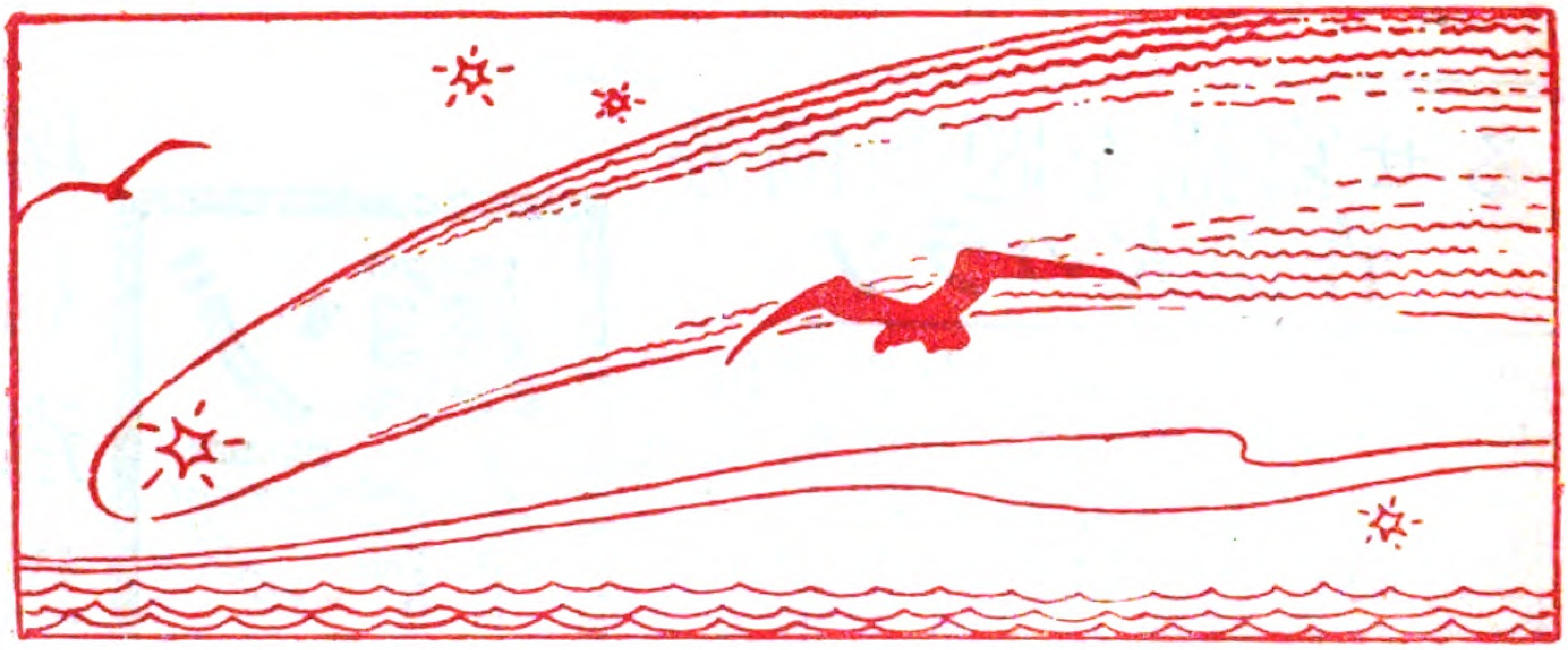
七月号

1921





改造七月號目次



創作

賀川豊彦著

東西る

人公を脅かして金を貸せと云ふ。疥癬の男が來て主人公と同衾する、一夜に四五十匹の南京虫に攻められる。主人公はこんな全ての困苦と迫害を忍びつゝ、基督教を説いてゐる。主人公は無抵抗主義者である。悪人に對して、抵抗せぬ。只沈默してゐる。只忍んでゐる。而して一歩進んで、あらん限りの愛を注いでゐる。主人公は人間を崇拝すると云ふ。乞食に對し、悪人に對し、淫賣に對しても人として尊敬してゐる

貧民窟の生活は食ふや食はずの生活である、人間は本能化した生活

改造

二大新聞の批評 ◇

貧民窟の生活は食ふや食はずの生活である、人間を本能化した生活である、之を見て、主人公は矢張り人間に失望せぬのである、毎日貧民窟の小兒を相手に嬉々として遊んでゐる。

此現實の社會を見ては、他の凡ての社會が虛僞と虛飾の如く見える、著者は、鐵拳とピストルと病氣に日夜脅かされてゐる。之は眞劍勝負である、之に比ぶれば、他の小說家が美しき燈と、美しき衣服を探すを以て、人生探檢と稱するのを聞くと、全く馬鹿氣た感じがする。

著者は日本の社會に存在する缺陷と病氣とを吾々に見せた。此書が出てた以上、政治家も國民も、貧民窟の問題に知らぬ顏をして居る譯に行かぬ。余は人間の屑に敬意を表する主人公に敬意を表すると共に著者が貧民窟の問題を天下に提供せられたに對して、世人と共に感謝せざるを得ぬ。（主筆馬場氏執筆）

大阪朝日新聞評

雜誌『改造』に連載中から深い興味を覺えさせられた小說である。社會改造主義者として、人知れぬ苦慘を嘗めたらしい、此著者の過去のリミニッセンスを親しく會見して聞くやうな感がする。その幾分に自敍傳的色彩のあることも否まれない。神戶を舞臺として、そこに幾多の牢獄のやうな下層社會に生活してゐる人々の生活を寫した後半の敍述は、此人ならでは他に描き得まい。

社　振替口座東京八四〇二一番 ◇

武者小路實篤著書

耶蘇

耶蘇よ。君を仰ぎ見ることで我等はどの位ゐ力を得るであらう。君のことを思ひ出す度に有難くなる。君の心の光りが我等を今更に照らしてゐる。それをまともに受ける時、自分は涙ぐむ。君の眞心は今や全世界に滿ちてゐる。この小さき弟を憐め。（著者）

四六判函入 上質紙二百廿頁
口繪 レンブラント『三本の十字架』ヽ著書が常に机上に掲ぐるもの、複製なり。
定價金一圓六十錢 送料八錢
第七版 發賣

新しき村叢書

（岸田劉生氏裝幀）
各篇定價三十錢送料二錢

第一篇 八版
自分の人生觀
新しき村の目的

第三篇 新刊
演說二つ
（内容）『新しき村の使命』『死に克つ爲には』
（六月下旬發賣）

第二篇 四版
新しき村の信仰
（内容）「新しき村の信仰」「新しき村と他の主義」「新しき村の將來」「正しき信仰と不正な信仰」

之等の書は總て我等新しき村の兄弟の手によりて印刷され發賣さる『新しき村の最初料學的所産』なり。

土地

著者最近の創作、散文三篇、戯曲四篇を收む。何れも眞と美との輝き溢れたるもの。著者の新作は我等の社以外に絶對に求め得ざる事を茲に公言す。

◎我等は別に月刊雜誌『生長する星の群』（五十錢）及『新しき村』（三十錢）を發行せり。

四六判函入二百頁
岸田劉生氏裝幀
定價金壹圓 送料八錢
第三版 發賣

新しき村出版部
曠野社
東京府北豐島郡長崎村高松一六一二
振替口座東京五二五四七番

會員募集

現代意譯 佛教經典叢書

顧問（高楠文學博士外學界權威者九氏）
監修（宗教大學教授渡邊海旭）
譯者（長谷川良信氏外新進の學者六氏）

初めて完成せる

佛教經典は宇宙の眞理を説破せる人類智識の一大寶庫なるも、原文の難解なる一部專門家の其一端を窺知し得るのみ。偶々現はれたる國譯の如きも未だ現代人に即するを得ない。本叢書は此の缺陷を補ひ、難解なる術語は悉く現代語に改め、深遠なる説相は悉く現代に意譯し、而も一經典の全部が抱持する同一佛乘への歸嚮經路を示し、一字一句の註解なくして、深遠幽玄なる經典の眞意に觸れ佛教の眞髓に透達せしめんとするのである。之れ現代人の熱望を貫ける一大弩弓佛典研究の一大革命にして、荷も現代文化に眼を開く者は速かに一讀せられんことを！

會則つき**内容見本**（ハガキ申越次第送呈す）

申込〆切**七月十五日**

四六版三百頁乃至五百頁
入會金二圓五十錢・會費一ヶ月二圓五十錢・一時拂二十七圓・送料各十五錢
八月より毎月一冊配本す

一大經典の現代譯

刊行書目（全十二卷）

- 第一卷 佛教經典概要
- 第二卷 阿含經
- 第三卷 佛所行讃（佛陀傳）
- 第四卷 華嚴經
- 第五卷 淨土三部經勝鬘經
- 第六卷 維摩經解深密經
- 第七卷 楞伽經
- 第八卷 法華三部經
- 第九卷 佛教道德經集
- 第十卷 大般涅槃經
- 第十一卷 大品般若經
- 第十二卷 佛教護國經世諸經

東京麴町區山元町一ノ三（新光社内）

佛教經典叢書刊行會

電話九段二六二六・振替東京四五四九八

NATSU NO YOMIMONO

Zenkoku Meisho Annaisha,

NIHON JUNYŪ KISHA NO TABI

	Teika	Yūzei
	Yen 2.30	12 sen

Nihon-Zenkoku itaru tokoro no, Meisho, Koseki, Jinjya, Bukkaku, subete yūran no basho wo itsuwari naku kakareta Annaisho dearu.

Zenkoku Meisho Annaisha,

ZENKOKU NO ONSEN ANNAI

	Teika	Yūzei
	Yen 2.50	12 sen

Naichi wa mochiron, Mankan, Taiwan, ni itaru made, Kakuchi no Onsen, Kōsen, wo meisai ni kakageta annaisho dearu.

		Teika	Yūzei
Takasu Baikei **HEIKE NO HITOBITO**	10 pan	Yen .95	8 sen
Takasu Baikei **SAIKAKU NO HITOBITO**	8 han	„ .95	8 sen
Ōhata Kyōzan SHIMBUMSHŌ BYŌSHAHŌ **MIBUN JITEN**	6 pan	„ 1.20	8 sen
Mizuno Yōshū **SUNA** (Kōgōshi)	2 han	„ .30	2 sen

Denwa Shitaya: 4204.
Furikae Tokyo: 19065.

Okamura Seikadō

Tokyo Asakusa
Yanagibashi

哲學叢書

全十二冊 四六判總布裝函入 定價各冊壹圓八拾錢 送料書留十八錢

(1)	認識論	廿三版	文學博士 紀平正美著
(2)	最近の自然科學	十四版	文學博士 田邊元著
(3)	哲學概論	廿四版	文學士 宮本和吉著
(4)	論理學	卅四版	文學士 速水滉著
(5)	西洋古代中世哲學史	十一版	文學士 安倍能成著
(6)	倫理學の根本問題	廿一版	文學士 阿部次郎著
(7)	宗教哲學	十四版	文學博士 石原謙著
(8)	精神科學の基本問題	七版	文學士 上野直昭著
(9)	美學	廿版	文學士 阿部次郎著
(10)	西洋近世哲學史	十一版	文學士 安倍能成著
(11)	現代の哲學	十版	文學士 高橋里美著
(12)	心理學	廿四版	文學士 高橋穰著

發兌 東京神田南神保町 岩波書店 振替東京二六二四〇 電話九段一三八〇 一三八一



═((改造七月號))═

街頭の哲學を建設せよ

社會問題を論議する人々が爭氣に富み、生活に直接の意義を有ち、尙ほ進んで街頭に出でて勇氣凛々たるは我々の喜悅に堪えぬ所である。それがために、僅々一二ケ年間に驚くべく社會思想は動搖し、哲學とか、宗敎學とかは忘られたるが如く、殆んど社會學を以つて總ての學問を征服したかの觀があつた。

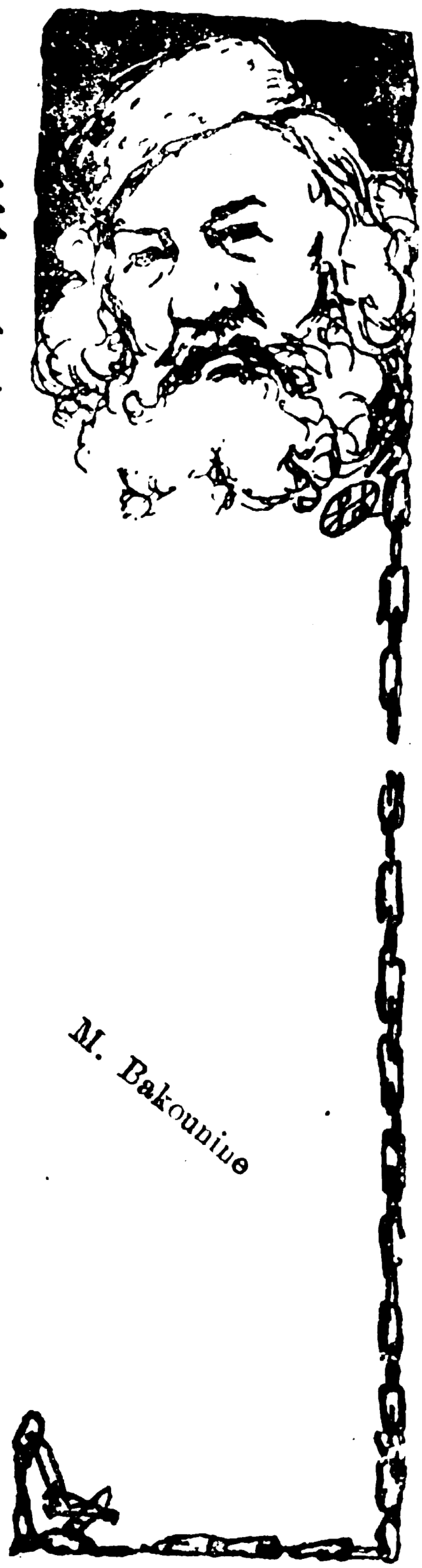
所が、近頃に至つて漸く哲學、宗敎學の擡頭を見るに至つたが、しかしながら、それ等の學科は不景氣の學問として見られ、それ等を研究する人々は血の氣の少ない特種人のするやうなものと見られた、從つて哲學とか宗敎學とかは淋しい連想、陰鬱な空氣をのみ呼び起こさした。

もちろん、その研究には命がけの幽玄な邃さが要來されるが、しかし又熱烈火の如き强き徹底さがなくてはならぬ、我等は哲人を以つてお葬式坊主や、アーメン屋の癡人と均しく見たくない。

殊に、現代では赤く火に爛れた勇まし、哲人の姿を見たいのだ、靜かな講堂や、寺院の大廣間にのみ封鎖しておきたくない、勇氣づけられたる哲人は一日も早く街頭に出でよ、そして汝の直觀によつて勇敢に戰へよ。

社會改造が社會思想家のみの世界でないと共に、それは實に哲人の所有すべき畑でもある、我々はその土地によつて產出されたる收獲の分配をのみに目眩むべきでない。

飽きぽい我が日本人はこれからいよ〳〵社會問題の深刻味に到着せねばならぬ、そこに到着するにはどうしても哲學の街頭化に俟たねばならぬ、再び云ふ、哲人よ街頭に出でて勇しく社會改造のために戰へよ。



無政府主義の父

——ミシエル・バクウニン——

大杉榮

一

死んだクロポトキンは『無政府主義の頭』と呼ばれた。

おと〻しの暮れ以來イタリイで暴れまはつて、今はミランの牢屋につながれてゐるエンリコマラテスタは、『無政府主義の腕』と云はれた。

そして我がミシエル・アレキサンドロキチ・バクウニンは、特に『無政府主義の父』と呼ばれた。

クロポトキンは無政府主義の理論を完成した。しかし其の完成と云ふのは、バクウニンが既に其の肉と骨とで築きあげた精神に、近代科學の衣を着せたまでの事であつた。そしてマラテスタは、此のバクウニンの血の、主として實行方面の濃い流れを引いたのであつた。

マラテスタは、まだ二十歳ばかりの時、五十人あまりの同志と一緒に、武器を執つて北部山地のベネベントに傳道的一揆＝……＝を試みて以來、世界の無政府主義者の間に理想的革命家として仰がれてゐる、今はもう七十に近いお爺さんだ。

クロポトキンは其の自叙傳の中に云ふ。

『マラテスタは火のやうな熱情と理智とに充ち滿ちた、全くの理想家で、其の全生涯の間自分の夕飯のパンの事も夜の寢床の事も曾つて考へた事がない。今でも自分の室と云ふ室も持たずに、ロンドンの街々を歩き廻つて、レモン水を賣つて生活しながら、夜はイタリーの諸新聞の爲めにすばらしい論文を書いてゐる。

最初フランスで投獄され、釋されて國外追放となり、イタリイで又投獄されて或る島に流され、逃亡して、そして又もやイタリイに姿を變へて入り込んだ。（此の『最初フランスで』と云ふのは間違ひらしい。最初はベネベントの一揆の時につかまつて、大ぶ重刑に處せられる筈であつたところ、裁判中に皇帝が死んで大赦となり、國外に追放されて了つたのだ。そして其の國外で、實際文字通りに席の暖まる暇もなくあちこちと走り廻りながら、故國で何か大事件があれば、いつでも、いつの間にかこつそりと潜入り込んでゐた。）

斯くして彼れは、イタリイでも其他の何處にでも（ヨオロッパぢうの何處の大事件にでも彼れの姿を見ない事は殆んどない）いつも白熱的闘爭の中にあつて、三十年間（今になれば五十年間だ）引續いてさうした生活を送つて來た。監獄から出て來た時にでも、島から出て來た時にでも、前に見た時と少しも違つてゐなかつた。そしていつも、人間に對する同じ愛を以て、敵や獄吏に對する同じ無憎惡を以て、友人に對する同じ心からのほゝゑみを以て、子供に對する同じ撫愛を以て、其の鬪ひを新しく始めるのであつた。』

クロポトキンの『一革命家の思出』は、實は『一革命學者の思出』である。其の日常生活も、いかにも學者らしい、綺麗なそして謹嚴なものである。そして其の人間が飽くまでも人道主義的で、惡魔的なところがちつともない。天成の平和と自由との無政府主義者である。クロポトキンの最も親しい友人であり且つ同志であつたルクリユ兄弟もやはりさうであつた。そしてクロポトキンの自叙傳の中に紹介された多くの無政府主義者は、皆なクロポトキンの此の鏡に寫されて描き出されてゐる。本當に皆な『全くの理想家』だ。マラテスタのやうな、放浪と謀反との兒の革命家でさへ、やはりさうだ。

『…………』とまで云はれて惡魔のやうに思はれてゐるバクウニンですらも、クロポトキンの前には、『最高至純の人生觀』を持つた聖徒のやうなものであつた。

『當時（クロポトキンが始めて西ヨオロッパに旅してスヰツルに行つた時の事だ）バクウニンはロカルノに居た。私は彼れには會はなかつた。私は今それを非常に殘念に思つてゐる。其後三四年たつて私が再びスヰツルに行つた時には、彼れはもう死んだあとだつた。彼れはジユラ山の其の友人等を助けて、彼等の思想を明かにし、又彼等の憧憬を深くし

た。彼れは彼等に、其の力強い、燃えるやうな、…………………………そしてギイヨオムがジュラ山地のロツクルで一小新聞をはじめて、社會主義運動に獨立的思想の新しい調子を響かせたのを見るや否や、彼れは直ぐロツクルへ行つて、數日間夜晝其の新しい友人達と語りあかして、無政府主義的方向への新しい運動の歴史的必要を說いた。其後彼れは、此の新聞に、人類の自由への歴史的進步に就いての、立派な深い長論文を書いた。其の新しい友人等に熱情を注ぎかけた。そして彼れは、偉はそこから、ヨオロツパの各地に擴がつた、無政府主義の傳道中心を創設したのであつた。

彼れがロカルノに移つてからは——これ以來彼れはイタリイに同じ運動を起し、又其の腹心の敏腕な密使ファネルリを通じてスペインにも同じ運動を起した——其のジュラ山地で始めた仕事は、彼れとは獨立してジュラの人々自身によつて繼續された。

ミシエルと云ふ名は彼等の話の間に屢々繰り返された。しかしそれは、其の言葉が法律のやうになつてゐる亡くなつた首領の名としてゞはなく、たゞ皆んなが仲間として愛した個人的友人の名としてゞあつた。

私が最も驚いたのは、此のバクウニンの勢力が、智力上の權威としてよりも、道德上の人格として感ぜられてゐた事であつた。無政府主義や、聯合主義に就いての話の際に、私は曾つて、「バクウニンが斯う云つた」とか、「バクウニンは斯う思つてゐた」とか云ふ事が、其の話の結末をつける爲めに云はれたのを聞いた事がなかつた。バクウニンの文章や言葉には、政黨などでは不幸にもよくあるやうな、皆んなが從はなければならぬ掟ではなかつた。理智が至上の裁判官であるべき事柄には、皆んなが自分自身の意見を述べた。其の一般の趣旨や態度には、バクウニンに暗示された事もあり、又バクウニン自身もジュラの友人等から借りた事もあるが、特殊の事柄には必ず彼等自身の個人的特徴が現はれて

ゐた。

私はたゞ一度バクウニンの名共者が一つの權威として叫ばれたのを聞いた事があつた。そして今でも、まだ共の話の場所や事情を覺えてゐる程、ひどくそれに打ち驚かされたのであつた。或時、若い男達が婦人等の前で、女性に對して餘り面白くない或る青年等の話を始めた。すると、共處にゐた婦人の一人が斯う云つて急に共の話をやめさせて了つた。「ミシエルが此處にゐないのは殘念です。あの人がゐれば、きつと皆んなに、こんな話は、させやしないんです。」

（二行欠）

二

社會運動や勞働運動は一道德的運動である。從つて共の運動共者が、それに從事する人々に、自然に或る道德的感化を與へる。…………………………………………

此の意味から僕は、多くの無政府主義者が、共の運動の經歷と共に…………………

又、クロポトキンやルクリユ兄弟のやうな、天成の平和と自由との無政府主義者が、共の運動に加はつて來た事をも怪しまない。

けれども僕等は、少なくとも僕は、さうした…………………無政府主義者を見てゐるだけでは、彼等に對する尊敬の念は起るが、親愛の心は湧いて來ない。どうも馴れ近づき難い。それよりも、同じく天成の無政府主義者でありながら、無政府主義社會でゝもやはり謀反人であるだらう程の本當に生れつきの謀反好きで、そして餘りきちやうめ

んでない、だらしのない日常生活を送つてゐる人の方が、僕には餘程なつかしい。そして僕は、僕等の父バクウニンの生活を思ふたびに、おのづからの微笑みを禁ずる事が出來ない。

バクウニンが、クロポトキンの云ふロカルノにゐた、もう晩年の時の事だ。ロシアの無政府主義者デバゴリ・モクロチチが訪ねて行つた。

『バクウニンは朝遲く起きた。で、十時頃でなければ、其の家へ行く事が出來なかつた。もう日はかん〳〵と照つてゐて、明るい外からはいつて行くと、階下にある其の室は眞暗なやうに思はれた。庭の方に向いてゐる一つか二つの窓は、漸く弱い光りを室の中に通すだけだつた。此の薄暗がりの中で、右の隅つこに、私は極く低い大きな寢床を見つけた。バクウニンはまだ其處に休んでゐたのだ。

Rが私を紹介した。バクウニンは兩手を私の方にのばして、喘息のせいか苦しさうに息をしながら、起きて着物を着はじめた。

私は私のまはりを眺めた。左には、長い机があつて、其の上に新聞だの本だの、其他書くのに必要ないろんなものが積み重ねてあつた。そばには、白い木の本棚があつて、いろんな書類を積んだ其の棚は天井までも屆いてゐた。室の眞中には、圓テエブルがあつて、其の上にはサモワルだの、茶碗だの、煙草だの、砂糖のかけだの、茶匙だのが、あちこちに散らばつてゐた。其のまはりには幾つかの椅子があつた。

バクウニンは大きなからだをしてゐた。尤も其の太つてゐるのは、確かに病氣のせいであつたが、顔は膨れてゐて、其の青い若しくは明灰色の眼の下には袋が出來てゐた。高い額が其の大きな顔を飾つてゐた。顳顬の上に灰色がかつた

髪の環が突つ立つてゐた。彼れは時々溜息をつきながら着物を着てゐる間に、明るいはつきりした眼ざしを私の上に投げた。私は其の眼ざしを感じた。そして一ことも私に話しかけないので、私は益々窮屈になつた。バクウニンは其第一印象で人を判斷すると云ふ事を私は聞いてゐたのだつた。彼れは今ちよつと私の人相を見よりとしたのに違ひなかつた。時々彼れはR―sと短い意見を交換してゐた。話しながらよく、もぐもぐと聞きとれない早口でものを云つた。齒が少ししかなかつたのだ。(其の長い獄中生活の間に、壞血病にかゝつて、齒をなくして了つたのであつた。)靴をはかうとしてかゞんだ時、私は彼れが息切れするのを見た。そして起ちあがりさまに、息をつまらして、顏ちうを脹らして眞蒼になつた。かうしたいろんな徵候は、それから二三年後に彼れを墓場に導いた其の病氣が、もう餘程進んでゐた事を示すのであつた。』(『デバゴリ・モクロヰチの思出』)

バクウニンとは終世の友人であつたヘルツエンも、其の『遺稿』の中に、彼れの容貌を描いてゐる。

『其の活動も、其の怠惰も、其の大きなからだも、其の食慾も、彼れの持つてゐる總てのものは、馬鹿に大きくて、他の人々のを遙かに超えてゐた。其の顏は、立派な鬣を持つた獅子のやうな頭の、巨人の顏であつた。』

デバゴリ・モクロヰチは猶續けて云ふ。

『バクウニンがお化粧を濟ました時、私達は庭へ出た。其處には、木の棚の下に、朝飯が用意されてあつた。そこへ二人のイタリイ人が來た。バクウニンは其の一人を私に紹介した。それは、バクウニンの親しい友人であり、イタリイの革命運動の爲めに可なり莫大な其の全財產を捧げた、カフイエロであつた。(カフイエロはマラテスタの先輩で、ベネベント一揆の首領であつた。あとに出て來るバルナタの家と云ふのは、此のカフイエロが買つたのだ。)彼れは靜かに私

達のそばに腰かけて、其のパイプを燻らしはじめた。郵便が來た。バクウニンは此の澤山ある新聞と手紙とを開きはじめた。暫くしてザイツエフが來た。やがてバルセロナの一揆に就いての盛んな會話がはじまつた。』

此の會話は、當時の無政府主義運動の一特徴である實行傳道、傳道的一揆の話で大いに花が咲くのだが、これはあんまり物騷だから省く。

『翌日私達は、バクウニンと一緒に、町の近くに彼れの名で買つた家を見に、船で出かけた。イタリイの革命家等が、其處に隱れ家をつくる爲めに、そして同時に又ロカルノでのバクウニンの地位を確かしめる爲めに、此の家を買つたのであつた。斯うして家主になつてゐれば、よしイタリイ政府からの要求があつても、彼れを其の地方から逐ひ出す事は出來なかつた。イタリイ政府はバクウニンが革命の陰謀に加はつてゐると云ふ、うはさをとうに聞いてゐた。で、いつ其の放逐を求めて來るか知れなかつたのだ。

私達は湖を斜めに横ぎつて、茨だらけの懸崖になつてゐる岸に近づいた。ロカルノから來る道が湖に沿ふて走つてゐた。そして其の上の方に原つぱが見えた。私達は狹い小徑を通つて此の絶壁を登つて行つて、小さな門から其の家の中にはいつた。漆喰の壁の平家だ。坂の上に出來た何處の家にでもあるやうに、湖に向つてゐる方が後ろの方よりも高かつた。とても住まれさうには見えない此の古い建物の厚い壁が、小要塞と云ふやうな見えを、此の家に與へてゐた。

中の方へはいつて行くと、濕つぽい惡くさい空氣が私達を包んで了つた。後ろの方の室には、窓が小さな畑の出來てゐる絶壁の方に向いてゐるので、暗かつた。其のかはり此の家は隱れ家としてはいろんな便宜があつた。其處からは何處へでも勝手に行ける湖の岸まで、人に見られずに忍んで行く事も出來た。税關を遁れる爲めに、小舟でイタリイへ行く事も出來た。

バクウニンは、「彼等」（イタリイの革命家等）と彼れとが、此處に「巡回印刷所」をつくつて革命の時に宣傳ビラを刷り、又イタリイから仕入れて來る武器や火箭や其他の謀反の「器械」を蓄へて置くのだと話した。

家の中を見てから、私達は地下室へ降りて行つた。其處には此の家の番人が、私達の爲めに、パンとチイズと惡い葡萄酒との食事を用意してゐた。食卓でも、私達は同じ問題に就いての話を續けてゐた。」

三

デバゴリ・モクロヰチは、猶數日の間、斯くして毎日バクウニンの家で遊んでゐた。

『が、遂に私は旅の仕度をしはじめた。私が出發する前の晩に、バクウニンは私の國に歸る費用を案内書で計算して見て、私の財布の中を見せろと云つた。金は十分あると云つても、どうしても聞かずに、やはり見せろ見せろと云ふ。私は仕方なしに紙入を開いた。丁度三十フランだけ足りなかつた。

――ボヘミアに友達がゐますから、其處へ寄るつもりです。そして其處で要るだけの金を借りるつもりです。と私はバクウニンに云つた。

――よしよし、さう云つたお伽噺をもつと話ししたまへ。バクウニンは斯う云ひながら、机の引出の中から小さな木の箱を取り出して、それを開けて、相變らず息を詰らしながら、金を三十フラン勘定して私に渡した。

――では、ロシアに着くと直ぐ、此の金はお返しします。

――誰に返さうと云ふんだい。私にかい。バクウニンは斯う云ひ乍ら更に附けたした。其の金は私んちやないよ。

――ぢや、誰れに返せばいゝでせう。

——どうだい、まあ、此の私有財産の主張者は。……とにかく、どうしても君が其の金を返すと云ふんなら、ロシアの運動にでも寄附してくれたまへ。』

バクウニンが金の事にてんで無頓着であつた事は、ヘルツエンもやはり先きに云つた『遺稿』の中に云つてゐる。

『五十になつても、やはり彼れは、モロセエイカ（モスコオの）の書生であつた。ブルゴオニユ（パリの）の放浪兒であつた。あすの心配もしない。金には無頓着で、あれば湯水のやうに右左にまき散らし、なければなしで、親のところへ無心に行く子供のやうな無邪氣さで、又それを返さうなどゝ云ふ氣はちつともなしに、手あたり次第に借りて歩く。そして、それと同じ單純さで、煙草も茶も買ふ事が出來なくなるまでに、自分の持つてゐるものを皆んなやつて了ふ。』

此のヘルツエンからは、始めてモスコオで相知つてから幾ばくもなく、ベルリンへ遊學に行く旅費の五千ルウブルを借りたのを最初として、幾度どれ程の金を借りたか知れない。

そして此のベルリンでは、ツルゲネフと一緒に住んで大學へ通つてゐたのだが、其處でも又其後パリでゝも、いつもバクウニンはツルゲネフに借りたり又尻ぬぐひをさせたりしてゐた。一八六二年一月二十五日附、と云へば丁度バクウニンがシベリアから逃げて歸つてから直ぐの事であるが、ツルゲネフからヘルツエンに送つた手紙の中にも、それに就いての事が書いてある。

『A君（バクウニンの事だ）に毎年きまつた金を集めてやる事は困難だ。Sはもう久しい以前にエジプトへ行つたし……此處にゐる外のロシア人は、とても話にならない。で、彼れの爲めにしてやる事は、どうしてもロシアの方でなければ駄目だ。僕個人としては、喜んで、毎年千五百フランづつを無期限で貸さう。そして其の最初の三分の一を今月せ

送る。これで僕は必要な額（六千フラン）の四分の一だけ確實にたつた譯だ。』

同じ年の四月十一日に、ツルゲネフは又ヘルツエンに手紙を送つてゐる。

『駱駝（バクウニンの弟のあだ名だ）が此處へ來た。錆びた戸のやうにぎり〳〵齒ぎしりをしながら、なが〳〵といろんな話をした。そしてラフアル兄弟の所書を置いて歸つて行つた。そこへはミシエルが借りた一千フランを返さなくちやならんのださうだ。僕は其のために寄附金を集めた。が、それは、僕自身が五百フラン出した外に漸く二百フランだけ集まつた。

バクウニンは僕に一千ルウブル送つてくれと云つて來た。僕は僕の出發前にそれを拂らうと思ふ。が、これはこれから三年間の御用金の前貸と云ふ名義にしてだ。前に拂つた五百フランと此の一千ルウブルとを加へると、丁度三年間にやる筈の金よりも、ちよつと少ない高になる。

それから、今妻君を呼び寄せるのは思ひとまらしてくれたまへ。全く馬鹿な事だ。少しは考へるひまを持つがいゝ。』

今まで云ひ遲れてゐたが、バクウニンはシベリアからヘルツエンをたよつてロンドンへ行き、ツルゲネフはパリにゐたのだつた。そして其の妻君と云ふのは、あとで詳しく書くが、シベリアの流刑中に出來て其處に居殘つてゐたのだ。

猶、一八六四年四月二日のやはりヘルツエンに宛てた手紙の中にも、ツルゲネフはバクウニンの事を書いてゐる。

『バクウニンは僕から金を借りた。そして其のお饒舌と輕はづみとで、僕を實にいやな地位に陷いれた。猶大勢の人が彼れの過ちの爲めに身をそこなつた。此のバクウニンが、僕に對してどんなに無茶な非道い罵詈讒謗をしたところで、それは當然の事だ。前から彼れの事をよく知つてゐる僕は、彼れから其の外の事は期待してゐなかつたのだ。』

が、斯うして二人が仲違ひした後にも、バクウニンの病氣の時とか困窮の時とかには、ツルゲネフはやはり彼れには

内緒で彼れを助けてゐた。

其他にも、バクウニンが金を借りたり、其の尻ぬぐひをさせたりした例や、又あとでそれらの人と喧嘩した例は、いくらでもある。そして、それにも拘はらず、實際バクウニンは時々隨分ひどい困りかたをしてゐたやうだ。

バクウニン夫人から、ロンドンでヘルツエンと一緒に『鐘』を出してゐたオガレフに送つた、二通の無心狀がある。

其の一つは斯うだ。

『窮迫が今私共の戸を叩いてゐます。きのふは三百十七フランの家賃を拂はなかつたら、家主から追立てを食ふ筈でした。これで止むを得ず、本月の末にロカルノの國民銀行へ支拂ふ事にして、三百フランの小切手を書きました。これが間違ふと執達吏がやつて來る譯です。斯う云へば、あなたは私の絶望と恐怖とをよくお分りでせう。そして私をそんなに絶望させ恐怖させるのは、其の爲めに私共の一切の動產をなくして了ふ恐れからではなく、さうした事のあつたあとでは私共はもうロカルノにゐる事が出來なくなつて了ふからです。私はもう私の有らゆる財源を盡して了ひました。そしてもうどうしていゝか分りません。ミシエルも何んにも持ちません。そして私はまだ二人の子供をかゝへてゐます。ミシエルの舊い友達であるニコラス・プラトノヰチさん、どうぞ私共を救つて下さい。執達吏に來られるやうな、にがい恥から救つて下さい。そしてどうぞ至急御返事を下さい。

此の手紙の支離滅裂なのは御免下さい。私はもう本心をなくして了ふ程困り切つてゐるのです。ミシエルは斯んな手紙を出す事に反對するだらうと思ひますので、彼れには内緒で此の手紙を書きます。

追て、御返事はロカルノの藥劑師ボオロ・ガヴエラリに宛てゝ、中の封筒にはマダム・アントリヌと書いて置いて下

さい。』

もう一つは其の直ぐあとで書いたものだ。

『あまり悲しかつたので、直ぐに御返事を出す事が出來ませんでした。私はきつとあなたが私共を救ふ方法を見つけて下さるものと思つてゐました。それが違つたのです。私のあの手紙があなたにまで引き起した、餘計な御心配、御不安はどうぞ許して下さい。そしてミシエルには何んにも云はんで下さい。どうせ、成るやうに成るんでせう。私共は本當の窮迫を知る最初のものでもなく、又最後のものでもありますまい。今まで私共は、それにおびやかされる度に、うまくそれを避ける機會を持つて來ました。しかしこんどは、どうも、どうしても年貢を拂はなければならんやうです。

此の手紙の短いのは御免下さい。それから切手をはらずにこれをお送りするのもお許し下さい。今私共は文字通りに一文なしなのです。』

これは、いづれも、前に云つたデバゴリ・モクロヰチがバクウニンを訪ふた時の、一八七二年二月にロカルノから出した手紙だ。アントワヌは夫人の名だ。

四

先きのツルゲネフの手紙の中にもあつたやうに、バクウニンはよく其の友人や同志と喧嘩した。

漸く二十歳を越したばかりの時に、軍人をよしてモスコオに行つて、當時スタンケヰチ等が組織してゐた新哲學運動の一團體にはいつた。後に有名な批評家となつたビイエリンスキイなども此の團體の中にゐた。スタンケヰチが外國へ行つてからは、バクウニンがそれに代つて、此の團體の牛耳を握るようになつた。そして彼れは、當時ドイツの思想界を支

配してゐたヘエゲル哲學を、此の團體の中に宣傳しはじめた。

ビイエリンスキイは最初は全くバクウニンの哲學の影響を受けてゐた。が、だん／＼に其處から離れ出した。そして遂にバクウニンと喧嘩して了つた。ビイエリンスキイの手紙に據ると、其の仲違ひはバクウニンの傲慢と出しやばりとがもとなので、友人等のつまらない個人的の事にまで嘴をいれるくせがあつた。バクウニンは『人間よりも思想を愛するのだ。』そして此のビイエリンスキイは一八三九年にスタンケヰチのところへ斯んな手紙を書いてやつてゐる。

『僕は春の來るのと同時に生きかへつたやうな氣がする。僕は自分自身で自分自身の爲めの生活を營む事が出來ると云ふ自信が出來た。他人の意志の下に屈してゐるなんて馬鹿な滑稽な事だ。此の世の中では各人は其の固有の天職を持ち、自分自身の進むべき道を持つてゐる筈だ。

ところが、バクウニンはこれを非常に怒つてゐる。彼れは、僕が獨立して自分の意志を持つたのを見て、驚いてゐるんだ。そして、これからはもう、僕の背中におぶさるのは危險で、いつ下へ投げやられて足で蹴られるかも知れないと思つてゐるんだ。』

ビイエリンスキイを信じていゝとすると、バクウニンの此の態度は、後年の無政府主義者として似あはしからぬ、怪しからぬ態度だ。そして猶此の態度は、ボトキンとかカトコフとかの他の友人等に對しても、同じやうに向けられたらしい。そしてカトコフとはなぐり合ひの喧嘩までしてゐる。そんな風で皆んなに離れられて了つて、モスコオにゐるのも面白くなくなつたものと見え、とうとうベルリンへ行つて了つた。

ヘルツエンは當時の日記に、『才能はあるが、いやな性格の、惡漢だ』と、バクウニンを批評してゐる。又、ビイエリンスキイからボトキンにやつた手紙の中にも、『バクウニンを其の知能の上から尊敬する事は出來るが、彼れを愛する事

は出來ない、とヘルツエンは云つてゐた』とある。

が、其後でも、カトコフはバクウニンの原稿を世話してやつたり、又ボトキンはバクウニンに金を貸したりしてゐるそしてバクウニンは、ビイエリンスキイとも、其の死ぬ前年にパリで會つてゐる。

バクウニンは又、同志のネチヤイエフや、カフイエロや、ラフロフとも、一時喧嘩別れした。

實際バクウニンは、ヘルツエンが云つたやうに、『多くの缺點を持つてゐた。しかし又共の長所も著しかつた。』(『ヘルツエン遺稿』)そしてビイエリンスキイが云つたやうに、『多くの罪を犯した、多くの誤謬を犯した。けれども彼れは、彼れ自身の中に、其の一切の個人的缺點を消して了ふ或る力を持つてゐた。それは彼れのたましひの奥に動いてゐる永遠の運動力である。』そして又ヘルツエンが云つたやうに、『彼れの性質には、何處か知ら子供らしい、率直な、單純なところがあつた。それが彼れに特殊の魅力を與へて、有らゆる人——弱いものも強いものも——を彼れに引きつけた。彼れと遠ざかるのは、氣取りやか傲慢な男ばかりである。』

殊に其の謂はゆる『永遠の運動力』は、彼れを非常な放浪兒にした。一八四〇年、年二十六の時に、始めてロシアを去つてベルリンに赴いて以來、殆んど共の一生を放浪と叛逆とに暮らしてゐる。

一八四二年には、ベルリンからドレスデンへ行つた。其處ではアルノルド・ルウゲが『ドイツ年報』を出してゐたのだそして此の雜誌に彼れは其の最初の革命的論文を發表したのであつた。

翌年、サクソンの政府がルウゲや其の友人等に敵意を見せたので、ルウゲはツウリヒに去り、バクウニンはスキツルへ行つた。そして其處で始めてワイトリンク等の社會主義者と相知つた。其の冬はベルンで送つた。が、其處でも又、スキツルの警察に不安がられて、ロシア政府から歸國命令を受けたので、一八四四年二月、ブラッセルへ逃げて、更に其處からパリへ行つた。そして此のパリには一八四七年までゐた。

バクウニンがマルクスやエンゲルスと知り、又プルウドンと交るようになつたのも、此のパリ滯在中の事であつた。が、四七年十一月、一八三〇年ポオランド一揆紀念會の席上で演説をして、ロシア大使からフランを逐はれて了つた。そして此のロシア大使は、バクウニンに對する世間の同情を殺ぐ爲めに、自分がスパイとして使つてゐたのだがどうもやり過ぎて困ると云ふやうならはさを立てさせた。

バクウニンは再びブルッセルへ行つた。しかし間もなく二月革命が起つて、再びパリの門がバクウニンの爲めに開かれた。彼れは急いでパリへ歸つた。すると、こんどはウインナやベルリンに事が起りさうになつたので、四月、彼れは更に又ドイツにはいつた。其處からポオランドの叛亂に加はらうとしたのだ。そして此のドイツでは、プロシアとサクソンとから逐はれて、其の年はアンハルトの公爵領で送つた。其處で彼れは、スラブの革命家等とハンガリイやドイツやイタリイ諸國などの他の諸國の革命家等とを糾合し、ロシア帝國、オオストリイ帝國、及びプロシヤ王國の三壓制君主國を破壞し、そして斯くして解放されたスラブ民族の自由聯邦を組織しようと企てた。

一八四九年一月、バクウニンは竊にライプチヒに行つた。其處で彼れは、プラアグの青年チエク團體と結んで、ボヘミアに一揆を起す準備にとりかゝつた。其の間に(五月三日)、ドレスデンに一揆が起つた。サクソン王は逃亡して民軍の假政府が五日間續いた。バクウニンも其の一揆の勃發する少し前に、ライプチヒからドレスデンに赴き、謀叛軍の一

首將となつた。

九月、叛軍は優勢な官軍に打ち破られて、フライベルクに退却した。バクウニンは其の途で、ボルンの助けをかりて此のボヘミアの土地で新しい一揆を起さうとした。が、ボルンはそれを承知しないで、其の軍隊を解散して了つた。バクウニンは仕方なしに、ホイブネルや音樂家のワグネルと一緒に、ケムニイツに向つた。そして其の晩バクウニンとホイブネルとは捕まつて、ワグネルだけうまく其の妹の家にかくれて逃げ了せた。

斯くしてバクウニンは、ケエニヒスタインの獄に投ぜられ、一八五〇年一月十四日、サクソン政府から死刑の宣告を受け、六月終身懲役に減刑された。そしてオオストリア政府から請はれて、プラアグに送られ、一八五一年五月十五日、オルミュツで再び死刑の宣告を受けた。そして再び又終身懲役となつて、こんどは本國のロシア政府から貰ひ受けられた。

五

其後のロシアでのバクウニンの生活は、一八六〇年十二月八日、彼れがイルクウツクからロンドンのヘルツエンに送つた手紙に詳細を極めてゐる。

『サクソンで、始めはドレスデンに、後ちにはケエニヒスタインに、一年間獄につながれ。更に其の次ぎの一年をプラアグに、五ケ月ばかりをオルムツに、いつも鎖づけにされて、しかもオルムツでは壁にぴつたりとゆはいつけられて。そして其のあげくに、とうとうロシアへ送られて了つた。

此のドイツやオオストリイで受けた尋問に對する僕の答は、極く簡單なものだつた。僕はただこれだけの事を云つた

に過ぎなかつた。「君等はもう僕の主義主張を知つてゐるんだ。僕は嘗つてそれを隠さうとした事はない。却つて僕はいつも公然とそれを主張してゐる。僕はドイツの民主的統一、スラヴ諸民族の解放、…………………………………………………………………………そして僕は武器を手にしたまゝ捕まつたのだ。だから君等は僕を裁判するのに十分な證據を持つてゐる譯だ。これ以外には、僕は君等の問ひに一言の答へをもしない。」

一八九一年五月、僕はロシアに送られて、直ぐさまセント・ピイタア・ポオルの要塞に入れられ、アレクシス半月堡に幽しこめられて、其處に三年を過ごした。」

セント・ピイタア・ポオルの要塞がペテルスブルグの有名な政治犯監獄であつた事は、ロシアの革命運動史の一ペエジでも讀んだ人は知つてゐるだらう。アレクシス半月堡と云ふのは此の要塞の一部分で、其處は特に厳重に警戒されてゐた。此の半月堡は平家と地下室とから出來てゐて、其の地下室の外壁はネワ川の中に降りてゐた。そして、一八二一年に、ペテルスブルグに洪水があつた時には、此の地下室の監房が水に浸されて了つた。

『此の監獄に入れられてから二ケ月たつて、オルロフ伯爵が皇帝の名代として面會に來た。そして僕に斯う云ふのだ。「陛下は斯う云ふ御命令で私をお前のところにお遣はしになつたんだ。教父に懺悔する數へ子等がやるやうに、懺悔書を朕に書くように云つて來いと。どうだ、書くか。」僕はしばらく考へこんだ。そして斯う考へた。法廷で、謂はゆる陪審官の前ででもあれば、僕は徹頭徹尾僕の我を通さなくちやなるまい。しかし斯うして四面壁の中に閉ぢ籠められて、熊のやうな奴の思ふまゝになつてゐる時には、形式なぞには構はずに、それを和らげてもいいだらうと。で、僕は一ケ月の猶豫を乞ふて承知したんだ。

そして、實際、僕は Dichtung and Wahrheit と云つたやうな一種の懺悔錄を書いた。要するに、僕の一切の行動は完全に知られてゐたのだ。それに就いては今更打ちあける秘密も何んにもない程に、僕は公然行動してゐたのだ。で、僕は此の懺悔錄の中で陛下の寬大を謝したあとで、斯う附け加へて云つて置いた。「陛下は私の懺悔を求められる。で、今私は懺悔をしました。し　し陛下は、懺悔者は他人の罪までも告白しなければならん事はない、と云ふ事を御承知になつて戴きたい。失敗後の私は、私の唯一の實で　る面目と、私を信じた何人をも決して裏切らなかつたと云ふ意識のほかに何にも持ちません。それで私は人の名は一切此處には書きません。」

其のあとで、多少の例外はあるが、僕は外國での僕の生活をニコラス（皇帝）に語つた。僕の企てた一切の陰謀を列擧して、彼れが其の內外の政治の上に教訓を得さうな所をも遠慮せずに、僕の一切の感じと印象とを書き記した。此の懺悔錄は、僕の地位の見込のない事が確實であるところ　ら、又ニコラス　氣質が猛烈であるところから、思ひ切つて大膽に書いた。それで此の懺悔錄は大いに皇帝の御意にめした。そして僕は、それ以來、彼れから何んにも尋ねられなくなつた事を喜んだ。」

「斯うしてセント・ピイタア・ポオルの要塞に三年間置かれた後に、シュルッセルブルグに移されて、更に其處に三年間置かれた。そして其の間に壞血病にかゝつて、歯がみんな拔けて了つた。

噫、此の終身懲役と云ふ事は何んと云ふ恐ろしい事だらう。目的もなく、希望もなく、何等生の興味と云ふものもなしに存在を引きずつて行くんだ。そして、毎日毎日、あすはけふよりももつと馬鹿になるだらう、と考へながら、幾週間もの間絶えず襲ふて來る恐ろしい歯の痛みに苦しんだ。そして夜晝少しも眠らせない不眠症。何をしても、何を讀

んでも、又ちよつとした間のまどろみの間にでも、お前は奴隷に過ぎないんだ、死骸に過ぎないんだと云ふ、いつもきまつた感情にもだへながら、氣も心も顛倒するやうな狂氣のやうな懊惱に苦しめられる。

けれども僕は勇氣は失はなかつた。宗教心がまだ僕の心の中に生き殘つてゐたとすれば、それは此の牢獄の中におしこめられてゐる間に叩きつぶされて了つたらう。僕はただ一つの事を希つてゐた。それは妥協や諦めに決して陥ちない事だ。何んにも變へない事だ。自分を欺いて慰安を求めると云ふ程に決して卑屈ならない事だ。…………

…………………………………………

ニコラスが死んだ。僕の望みが生き返つて來た。新帝の戴冠式と共に大赦令が出た。然るにアレキサンドル・ニコライヰチ（新皇帝）は、自ら、大赦名簿の中から僕の名を削つて了つた。そして、それから一ケ月ばかり後に、僕の母が僕の赦しを乞ひに行くと、彼れは「お前の息子は生きてゐる間はとても自由になれまい」と答へた。此の答への後、更に弟のアレクシスが會ひに來て、猶もう一ケ月間辛棒して待つ事にきめた。そして此の期限が過ぎても、まだ僕が赦されなかつたら、弟は毒藥を持つて來るかも知れなかつたのだ。

待ちに待つた其の一ケ月が過ぎた。そして僕は監獄につながれてゐるか、それともシベリアに流されるか、どちらかを選べと云ふ事になつた。勿論僕はシベリアの方を選んだ。それでもまだ、僕の家のものが僕を監獄から引出すまでになるのは、容易な事でなかつた。皇帝は牡羊のやうな頑固さで、僕に就いて差し出される一切の請願を斥けて了つた。或日、當時内務大臣のゴルチヤコフ公爵が皇帝の前に出ると、皇帝は手に一通の書狀を持つて、（之れは僕が一八五一年にニコラスに書いた例の懺悔狀だ。）だが、此の書狀の中には少しも悔改めのあとが見えない」と云つた。あの馬鹿はまだ「悔改め」を待つてゐたんだ。が、遂に、一八五七年四月に、僕はシユルツセルブルグの監獄を出た。そして一週

間宮内省第三部にゐて、漸く皇帝の特別の許しで、田舎へ行つて二十四時間兄弟等と會ふ事を許された。』

『四月にトムスクに送られて、其處で二年間暮らした。此のトムスクで、僕は或る面白い一家と知合ひになつた。其の主人はクサベリ・ワシリエヰチ・クヰヤトコフスキイと云つて、金山の役員をしてゐた。家族は、シベリアでの謂はゆるザイムカと云ふ、町から一里ばかりのところにあるアスタンゴヴオの田舎の、小さな家に住んでゐた。僕は毎日其處へ行つて、フランス語の教師として二人の娘の教育を受持つた。

だん〳〵僕は、其後僕の妻となつた娘と仲善くなつて、其の信用を得て、遂に彼女を熱烈に愛するようになつた。彼女も僕の感情に應じた。二人は結びついた。それ以來結婚してもう二年になるが、僕は全く幸福だ。他人の爲めに生きると云ふ事は、殊にそれが可愛いゝ女の爲めである時には、實に樂しいものだ。僕は全く僕を彼女に捧げ、そして彼女の方でも亦誠心誠意僕の一切の憧憬を分けた。彼女はもとポオランド人だ。しかし其の國の舊教的思想も持たず、又政治的狂信からも解放されてゐる。要するにそれはスラブの愛國者だ。

西シベリア總督のガスフオルト氏が、僕の知らぬ間にいろ〳〵と奔走してくれて、僕を官吏　役につかせる皇帝の許可を得た。勿論これは僕の釋放の第一歩だ。が、僕はそれを受け容れる事が出來なかつた。役人の筋のついた帽子なぞをかぶつてゐては、僕は革命家としての僕の純潔を失ふやうに思つた。僕は東シベリアへ行く許しを貰ふ運動をした。漸くの事でそれが貰へた。と云ふのは、僕が其處でムラギイエフ（東シベリア總督）の同情を得る事を心配したのだ。ムラギイエフは僕と知合になる爲めにわざ〳〵トムスクへ來たりして、公然僕に對する敬意を現してゐた。で、長い間躊躇したあとで、漸く其の許しをくれた。

一八五九年四月、僕はイルクウツクへ行つて、當時創立されたばかりのアムウル會社にはいつた。其の翌年は、ザバイカル州を旅行して、あちこちと走り廻はりながら、一年ぢうの一番いゝ一と季節を過ごした。其の年の始めに、僕は此の會社の駄目な事が分つたので、其處をよした。そして今は、ペナルダキ氏の鑛山に仕事を求めてゐるが、まだ其の運動は半成功にしか行なかい。しかし僕は何んとかして金のない弟共の補助を受けないで濟ませたいと思ふ。弟共は農奴の解放に就いてのペテルスブルグでの決定を待たずに、百姓共が耕して來た土地を　等に與へて、事實上其の農夫を解放した。そしてそれ以來、仕事は皆んな日傭勞働者にやらせてゐるんで、大ぶ金がかゝるのだ。此處では、今僕は可なり不安な生活をしてゐる。しかし、もう少しすれば、もつとよくなりさうだ。

もうロシアに歸つてもいゝ時分だ。が、今日までのところ、ムラギイエフがいろ〳〵骨折つてくれた運動は皆な無駄になつて了つた。シベリアから行く或る情報で、テイマチエフとドルゴルウキとは僕を歸止する事の出來ない危險人物と見てゐるのだ。しかしムラギイエフはまだ來年の春には僕の釋放を貰つてくれると云つてゐる。僕も彼れが成功してくれゝばいゝがと望んでゐる。ロシアに歸る事は僕にはもう絶對の必要になつたのだ。僕はこんな平穏無事な生活を營むように生れついてゐない。そして心ならずも、斯うして幾年も幾年も休息させられてゐるんだ。今はもう再び活動社會の中に僕を試煉する時が來たのだ。』

が、彼れはどうしても皇帝から其の許しが得られないで、とう〳〵一八六一年六月五日、妻は母のもとにやる事にして自分一人でイルクウツクを逃れ出た。先づニコラエスクまでアムウルを降つて、其處でアメリカ船に乘つて、九月五日に横濱に着いた。そして其處から更にアメリカ船に乘つてアメリカへ行つた。

六

シベリアから歸つてからのバクウニンの活動は、其の思想が益々社會主義的に進み、益々無政府主義的に深まるに從つて、愈々大きく且つ烈しくなつた。

（しかし僕はもう此處で、バクウニンの本當に其の肉と骨とで築きあげて行つた、無政府主義運動史の最高の一ページを語るひまのない事を甚だ遺憾とする。そして僕は彼れの死にまで急がなければならない。）

一八七三年九月一日、國際勞働者協會（インタナショナル）の第六回大會が、ジエネバで開かれた、ベルギイ、オランダ、イタリイ、スペイン、フランス、イギリス、スヰツルの代表者等が出席した。此の大會はインタナショナルの規則を修正して、評議員會を廢止し、インタナショナルを何等の支配的權威をも戴かない自由な聯合とした。其の規則の第三條に云ふ。『本協會を組織する各聯合や各團體は其の完全な自主權を保存する卽ち、其の意志に從つて組織され、何等外部からの干渉なしに其の事務を處理し、そして勞働者の解放に到達する爲に適當だと思ふ方法を自ら決定する權利を持つてゐる。

バクウニンはもう其の長い鬪爭の生活に疲れた。牢獄は彼れを其の年よりも老いさせた。其の健康は著しく衰へた。そして今はもう休息と引退とを望んでゐた。其時に彼れは、斯くインタナショナルが自由聯合主義の勝利の下に改造されたのを見て、愈々其同志と分れる時が來たのだと思つた。そして一八七三年十月十二日、ジュラ同盟の會員に一書を發

つて、『ジユラ同盟及びインタナショナルから退會する許しを乞ふ』と云ふ。『私はもう戰鬪に必要な力を持たない。勞働者階級の此の戰陣に、助ける事は出來ずに、たゞ邪魔にしかならないと思ふ。……で私は、親しい仲間よ、諸君に對する感謝と、諸君の大きなそして……仕事――人類の仕事――に對する同情に溢れながら、こゝに引退する。私は諸君の總ての歩みを兄弟の懸念を以て追ふて行く事をつゞけるだらう。そして諸君の新しい勝利の一つ一つを喜んで祝つて行くだらう。死ぬまで私は諸君のものだ。』

カフイエロはロカルノの近所に家を買つて、其處にバクウニンを住まはせた。バクウニンは其處で、其の最後に見出した靜穩と安全と比較的安樂とを享樂しつゝ、一八七四年の中頃まで全く此の新しい生活に醉ふてゐたやうだつた。

しかし其の間にもやはり、其の『永遠の運動力』はまだ燃えてゐたのだ。彼れは其のイタリイの同志等が　彼等獨得の傳道的一揆を準備してゐるを聞くと、起きあがつて、それに加はらうとしてボロニヤへ行つた。(一八七四年七月)が、不幸にして其の一揆は墮胎して了つた。そしてバクウニンは、百姓の車の藁の中にかくれて、漸く逃げ歸つた。

やがて急に病氣が進んで、其のからだばかりではなく頭までも侵して了つた。そして其の翌年にはもう、バクウニンは僅かに彼れ自身の影のやうなものに過ぎなくなつて了つた。

一八七六年六月、彼れは少しでも其の病苦から遁れようと思つて、ルガノからベルンへ行つた。(六月十四日)其處には舊友のドクトル・アドルフ・フオクトがゐたのだ。『僕は此處で君に治して貰ふか、それでなければ此處で死ぬつもりでやつて來たんだ。』

そして果して彼れは、七月一日正午、其處で死んで了つた。



階級闘爭當事者としての雇傭所得と資本所得（其一）

福田德三

一

階級闘爭を是認する人は勿論のこと、之を否認する人と雖も、階級の存在其ものを否定することは出來ない、階級の存在が總て階級闘爭の事實を產み出すことも亦否定することは出來ない。併し乍ら如何なるものを指して階級となすかは、常に階級、階級闘爭を口に絶たざる人々の間にあつてさへ、必ずしも一致した定論があるわけではない。昨年の社會政策學會に於て、河津博士は階級とは單に利害關係を異にする社會上の分立と云ふ意味なりと云はれ、森本博士は所

得の大小を異にするの謂なりと主張された。從つて討論の主題たりし所謂中間階級（コレハ社會政策學會幹事の大内兵衞君が新鑄された熟字である）なるもの丶概念は、甚だ漠然たるものであつた。階級鬪爭と云ふ場合の階級の中には、所謂『中間階級』など丶云ふものは含んで居らぬのが通例であるが『中間階級』なる一の階級を認めると云ふ以上、此階級も階級鬪爭の當事者たり若くはたり得るものと解釋せねばなるまい。左樣すると議論は全く混線して仕舞つて、抑も社會上の如何なる現象を指して、階級の對立と云ひ、階級の鬪爭と云ふか、支離滅裂な事になつて仕舞ふ外はないのである。所謂『中間階級』とは、獨逸語で『ミッテル・シュタンド』Mittelstand と云ふことを邦譯したのである。即ち獨逸語では、決して『階級』とは云はないのである。『シュタンド』と云ふのは、有賀博士以來普通に之を『等族』と邦譯して居る。此の等族は決して階級（クラッセ）と同じものではない。尤も英語では漠然と middle class（大抵複數を用ふ）と云つて居る、邦譯の階級は此の英語風の言ひ表はし方に倣つたものであらう。然し今日の如く、階級、階級鬪爭と云ふことが社會問題の中核とも云ふ可き地位に立つて居る時代に於て、其の階級なる概念を斯く曖昧模糊に、時に應じて異つた意味に用ゐると云ふことは、寧ろ有害ではあるまいかと考へる。階級なる語に如何なる意味を附するも其は差支ないであらうが其附した意味丈けは終始一貫して變へないことにせねばならぬ。然し如何なる意味でも差支ないと云ふのは、新たに此語を用ゆる場合の事であつて、今日の樣に此語が一般に慣用せらるゝこと稍久しきを經た時代に於ては、新たに勝手な意味を附することは害をなす、我々は最も多くの場合に於て使用せられる意味、殊に此語に必然的に附せられて居る意味を取る可き義務を有するものである。ソコデ今日最も多くの場合に使用せられる意味、就中此語を其旗印に標榜して戰つて居る社會主義の一般に使用して居る意味は、如何なるものであるかと云ふと、其れは等族（シュタンド）とは明白に異なるものとして、特に或る經濟的事情を標準とした社會上の分岐の意味である。其

の經濟的事實とは何であるか、答、其の得る故の所得の種類を異にすると云ふ事實是れである。從つて階級の對抗とは異種の所得の對抗から起ることであつて、階級鬪爭とは、異れる種類の所得を得て居る社會上の團業と團業との間の鬪爭のことを指して云ふのである。就中勞働所得と資本・企業所得とが、最も鮮かに其種類を異して居るものであるから此兩者の對抗が亦最も顯著な事實である。かくて階級鬪爭とは、主として勞働所得階級と資本・企業所得階級との間に於ける鬪爭を指して云ふのである。

所得の種類を異にすとは質の問題であつて、量の問題ではない、階級の分立は質の問題であつて、量の問題ではない。從つて森本博士說の如く、單に所得の大小を異にすることが、階級分立の基準ではないのである。勞銀が段々引上げられて、勞働階級の所得卽ち勞働所得が如何に增大するとも、其れで階級の分立、對抗、鬪爭が已むものでは決してないのである。勞働問題とは決して貧民問題と同一ではないと云ふのは、此謂である。日本の小作農の大部分の得る所得は量的に見れば、極めて少ないものであつて、或種類の勞働所得よりは遙かに小であることは、誰人も否定し得ざる事實である。若しも所得の大小が階級分立の基準たるならば、此の極小の所得を得る小作農は、其れより大なる量の所得を得て或る部分の高級勞働者とは、階級對抗を爲す可き筈である。然るに小作農の所得は純然たる勞働所得ではない、從つて小作農は勞働階級に屬するものではない、我邦では近頃國際勞働會議參列に關連して、小作農は勞働者なりや否やに就て可なり議論が戰はされたようであるが、學問上普通解釋する意味に於ては、小作農は決して勞働者ではないのである。農業勞働者と云ふのは、作男、日雇取りのことであつて、小作農は其れと同一視す可きものではない。さりとて、小作農は資本所得を得て居るものでもない、從つて資本階級に屬す可きものでもない。小作階級とも名く可き、一の特別な階級を成す可き筈のものである、何となれば、其所得は、純然たる勞働所得でない如く、純然たる資本所得で

もない。殊に今日所謂勞働所得の最根本的特色を備へて居らぬものである。今日の所謂勞働所得の特色とは何であるかと云へば、其れが雇傭の代價であると云ふこと是れである。他人に雇はれて勞務の給付を爲し、之れに對して雇主から報酬として支拂はるゝ所得が、今日の勞働所得（即ち賃銀詳しくは雇傭賃銀 Lohn, wages, salaire）であるのである。小作農は、地主に雇はれるものではない、地主との關係に於ては、借主である、地主に支拂ふ小作料は、賃貸借の代價である。此點に於ては、勞働者を雇ふ雇主は、勞働の借主であつて、其支拂ふ賃銀が、賃貸借の代價であるのと、稍全所を有して居るのである。

二

階級の對抗が重要の事實となつたは、一方は事業の主體たる雇主、他方は單に雇傭せられて働く勞働者であつて、其得る所得が一方は、自主的（Selbstbestimmend）であり、他方は受働的（Fremdbestimmend）であると云ふことから起つたのである。決して其所得が一方は大にして、一方は小なりと云ふ單なる量の差違の如き輕微の事から起つたのではない。即ち其得る所得が勞働者に於ては、雇傭所得（Lohneinkommen）であり、雇主に於ては、自己所得であると云ふ重大な差違が、階級の分立、對抗を鮮明ならしめたのである。

今日の私法に於ては、勞働關係を雇傭關係（Dienst-oder Lohnverhältnis）として取扱つて居る。現に我民法では、勞働契約のことを雇傭契約と名けて居る。コレハ我民法飜譯の原本たる獨逸の民法が雇傭契約と云ふ字を用ゐて居るのを其儘譯出したに相違ない。獨逸の民法では勞働契約のことを Arbeitsvertrag（勞働契約）とせず Dienstvertrag（雇傭契約ルーウヰー氏の獨逸民法英譯本 W. Loewy, The civil code of the German Empire. Boston & London 1909 にては contract of service）として居る、然し其實質は無論勞働契約である。非常に進歩した民法として知られて居る

瑞西の新民法（債務法）でも獨逸語では矢張り Dienstvertrag（雇傭契約）としてある。然し瑞西では獨、佛、伊の三語共に公認の國語であるから、法律も皆此三國語で書かれてある。新民法の佛文では、雇傭契約とせず勞働契約（contrat de travail）としてあり、伊太利文にも亦勞働契約（contratto di lavoro）としてある。即ち其の謂ふ所の雇傭契約とは勞働契約の謂なることを、最も明白に言明して居るのである。

されば何故に、勞働契約なる明白な文字を用ゐず、特に雇傭契約なる文字を使用するかと云へば、其れは實に實際の事實に於て此くする必要があるからである。即ち階級對抗の根本たる勞働契約なるものは、單に勞働すること丈けの契約でなく、雇傭されて勞働することの契約であり、所謂勞働關係なるものは單に一切の勞働關係を指して云ふのでなく勞働關係の中、特に雇傭によるもののみを指して云ふからである。此意味に於て、勞働階級、勞働問題、勞働爭議とは、一切の勞働するものに關するのでなく、雇傭勞働を營むものに關するのである。故に精確に云ひ表はすには、普通勞働對資本と云つて居るのを雇傭勞働對資本（Lohnarbeit versus Kapital）と云はなければならぬのである。乃ちマルクスは其有名な資本論梗概と目す可き一八四九年の小冊子に題するに、『賃銀勞働と資本』Lohnarbeit und Kapital と爲して、單に『勞働と資本』Arbeit und Kapital とはせなかつた。英譯に於ては、原文通り『賃銀勞働と資本』（Wage-labour and Capital）としてあるが、不幸にして我河上博士は此邦譯に於て、略して單に「勞働と資本」とせられた（社會問題研究第四冊）。之れはマルクスに取つては、迷惑な省略と云はなければならぬ。されば勞働問題と云ふのは適當には、雇傭勞働問題、勞働爭議と云ふのは、雇傭勞働爭議と云はねばならぬ、問題起り、爭議の起るは、單に勞働其事に就てゞはなく、其勞働が雇傭勞働であるからである。獨逸の民法（自第六百三十一條至六百五十　條）でも瑞西の新民法（債務法自第三百六十三條至三百七十九條）でも、又我日本の民法（自第六百三十二條至第六百四十二條

でも、此事を明かに承認して居る。其は別事ではない、雇傭契約の外に『請負契約』（獨 Werkvertrag, 佛 contrat d'entreprise, 伊 contratto di appalto ルーウキー氏の獨民法英譯では、Contract for work なるものを認めて居ること是れである。我民法の規定によれば、雇傭契約とは、『當事者ノ一方カ、相手方ニ對シテ勞務ニ服スルコトヲ約シ、相手方カ之ニ其報酬ヲ與フルコトヲ約ス』る契約であり 請負契約とは『當事者ノ一方カ、或仕事ヲ完成スルコトヲ約シ、相手方カ其仕事ノ結果ニ對シテ、之ニ報酬ヲ與フルコトヲ約ス』る契約である。獨逸民法では、雇傭契約は、我民法と同じく『勞務ヲ約シタルモノハ其約束シタル勞務ヲ給付シ、相手方ハ約束シタル報酬ヲ給與スル義務ヲ負フ契約』として居る。即ち雇傭契約に就ては我民法は間違なく獨民法を譯出したのであるが請負契約に就ては少しはき違を爲したものである。即ち獨民 では、請負契約は『請負人ハ其約束シタル仕事ノ作成（Herstellung ルーウキー氏は英譯して furnish として居る、之を完成と邦譯した獨逸民法の翻譯者荒波學士も、法案起草者と粗ぼ同樣の誤りに感化せられたものであらう。雇傭契約條文の同氏の翻譯も不精確である）注文者ハ約束シタル報酬ノ支拂ノ義務ヲ負フ契約』なりとしてある。我民法が『仕事ノ完成』及び『仕事ノ結果』としたのは、後に論ずる獨逸民法學者の謬說——其れは誤つて居る所の——に感化せられて、はき違ひの修正を試みたものと思ふ。原本たる獨逸民法から云へば、之れは贔屓の引き倒し、甚だ笑止千萬なことである。瑞西新債務法では、雇傭契約に就ては、稍詳しく、『勞務義務者ハ一定若クハ不定ノ時期ノ間勞務ノ給付、勞務權利者ハ賃銀ヲ支拂フ義務ヲ負フ』とし、更らに後段論ず可き、時間給、個數給の區別に關する民法學者通例の謬說を豫め斥ける用意を示して居る。即ち『賃銀ノ支拂ガ給付シタル勞働ヲ標準トシ時間ヲ標準トセザルトキ（個數給制、請負給制）ト雖モ、勞務義務者カ、一定又ハ不定期間雇用セラレ、又ハ就業スルトキハ、其契約ハ雇傭契約トス』としてある。（水口ドクトル譯瑞西新債務法の譯文は甚だ不精確、且つ誤譯も往々にして之を見出す、讀み難

し)。而して請負契約に就ては、獨逸民法と全く同く『請負人ハ仕事ノ作成、註文者ハ報酬ノ給付ノ義務ヲ負フ』としてある。

之を要するに、廣義にて云ふ勞働契約は、(一)雇傭契約(二)請負契約の二を含むものであつて、雇傭契約は狹義にお ける勞働契約と云ふ意味で、瑞西新民法では、其佛、伊文に勞働契約としたけれども、獨文に於ては依然として特に雇傭契約なる文字を用ゐて居るのである。

獨逸に於ては、此度の革命の結果出來た新憲法に於ては、其第百五十七條から第百六十五條迄に於て『經濟生活』なる條下に、勞働契約に關する大原則を新たに定めた。(美濃部博士は此新憲法全文を法學協會雜誌第三十八卷第二號——大正九年二月發行——に邦譯して掲げられた、玆には原文通りにする爲めに、博士の譯文によらず、拙譯を試みて置いた)新憲法第百五十七條は規定して曰く『勞働力は國の特別なる保護の下に立つ、國は一の統一的勞働法を作る』第百六十三條第二項に曰く『凡ての獨逸人に經濟的勞働によつて其生計を營む可能を與ふ可きものとす、適當なる勞働の機會を紹介し得られざるものには、(美濃部博士の譯『適當なる勞働の機會を得ざる者』は原文と大に相違す、國の勞働紹介機關によりて職業を紹介し得ざるときの意でなければならぬ)其必要なる生計に對して保障を與ふ、其詳細の規定は別に國の法律を以て之を定む』と。即ち(一)從來の民法の規定のみでなく更に大規模なる勞働法を作りて、勞働の保護を爲すことゝ、(二)自ら勞働の機會を見出し得ず、國營の勞働紹介機關(これは一九二〇年五月五日の國勞働紹介局設置令Verordnung der Reichsregierung über die Errichtung eines Reichsamts für arbeitsvermittelung vom 5. Mai 1920 によつて設置することゝなつてゐる)も適當の勞働機會を與ふること(これは失業、給養命令Reichsverordnung über Erwerbslosenfürsorge vom 26. Jan 1920 によつて爲すこととなつて居る)能はざるときは、國は其勞働

者の生計を保障すると云ふ大原則を認めたもので、我々が久しい以前から主張する『生存權の保障』は、革命によつて獨逸人凡てに與へられた譯である。但し實際は未だ其處まで十分には至つては居らぬが、現に角獨逸國憲法の大原則としては、勞働力の統一的保護法と、生存權保障とを認めたのである。然るに其勞働法に於て保護するものは、主として雇傭勞働であつて、一切の勞働ではない。而して憲法第百六十四條に於て特に農、工、商業に於ける獨立の中間等族（ミッテル・シュタンド）に對して保護を加ふ可きことを、別に規定してある。ヘーニーゲル教授は故に明言して曰く『狹義に於ける勞働法中には決して請負契約を含まず、革命以前に於ても社會的勞働法規の全體、殊に勞働保護法規は單に雇傭契約のみを對象として居る、其れと全く同じく革命後に起つた新勞働法規は悉く雇傭契約のみに關するものであるされば、革命後の今日に於ては、請負契約と雇傭契約とを從前より更らに明瞭嚴密に區別す可きことを忘れてはならぬ』と（Hoeniger, Einleitung Arbeitsrecht. Sammlung der reichsgesetzlichen Vorschriften zum Arbeitsvertrag, Mannheim, Berlin, Leipzig.1920. VII ff.

三

抑も勞働關係を二大別して、雇傭關係、請負關係とすることは、羅馬法に胚胎して居るので、今日各國の民法は日本の民法に至るまで、此點に於て一に全く羅馬法の影響の下に立つものである。羅馬法に於て此區別をしたのは、羅馬特殊の社會、經濟事情に基くものである。羅馬に於ては、他人から報酬を受けて勞務の給付を爲すことは、奴隷の爲す事であつて自由公民の爲す可からざる所とせられて居た。故に自由の公民が若し、報酬に對して勞務の給付を爲すことあれば、彼は直ちに自由公民權を失ふもので、自ら身を奴隷に墮す所以となつたのである。故に自由公民同士の間には、勞働關係なるものはあり得なかつたのである。唯だ奴隷の所有主は自己所有の奴隷を他の公民の望に任せて賃貸借する

ことが出來る、其契約の客體は自己勞務の給付でなく、所有奴隷の一定期間の賃貸借であつた。故に勞働契約は、賃貸借契約の一種として取扱はれて居つた。羅馬の盛時には、所在に此くの如き賃貸用奴隷の市が立つた。奴隷を多く所有して自用に余あるへは、其奴隷を市に出して顧客の來り賃借するを待つた。此く奴隷を市に出品することを locatio（賃貸、locare 置くと云ふ語から來ると云ふ、但し異論あり）と云つた。市に出た奴隷を賃借した借主は、其奴隷を引卒して己れの家に歸る、之を conductio（賃借、conducere 連れ歸ると云ふ語から來ると云ふ、但し異論あり）と云つた。故に奴隷賃貸借のことを locatio-conductio operarum（勞働の出品、引卒即ち勞働賃貸借）と名けた、之れが今日の民法の雇傭契約の源である。然るに勞働を報酬に代へて給付するのでなく、一定の仕事の作成を約し之に代へて報酬を受くるは、自由公民の爲して差支ないことと看做されて居た。即ち operae（勞働）が契約の客體でなく opus（仕事）が客體である場合は、決して其當事者を奴隷たらしめる所以ではなかつた。此關係を羅馬法では locatio-conductio operis（即ち今日の請負契約）と名けて、前の雇傭契約とは嚴密に區別した、前者は賃貸借であるが、後者は一種の賣買（emptio-venditio）と看做された。前者によれば勞働するものは人でなく物たる奴隷である、故に契約當事者ではない、單に契約の客體たるのみで、賃貸主なる主人を頂くものであるが、後者は自ら主人となつて、更らに奴隷を雇ひ入れたりなどして仕事を作成する獨立自由の人格者である。（Windscheid, Lehrbuch der Pandekten § 401. Dernburg, Lehrbuch der Pandekten II § 114）羅馬法の樣な非常に發達して居る法律に於て勞働契約に關する規定が甚た僅かであるのは、此點に思及べば直ちに諒解し得ることである。勞働雇傭は奴隷、若くは自ら身を奴隷に貶すを厭はざる人々に關することであるから、自由公民の法律たる羅馬法は深く之に關係する必要を見出さなかつたので、全關係を法律以外に置いて差支なしとしたのである。獨逸の民法では僅かに三十條、日本の民法では更らに少く僅かに九ケ條が千何ケ

條の民法中、雇傭契約に關する規定である。（最も進歩した瑞西債務法でも、四十四ケ條）人民の大多數に關する勞働法規が僅かに此數ケ條で、跡は主として全く財産法規であると云ふ。驚く可きアノマリー（變態）は、此等の民法が何れも羅馬法の末孫であることを最も有力に語つて居るのである。殊に大都市たる羅馬に於ては、賣買の一種たるlocatio conductio operis が却つて重要な地位を占めて居たもので、反對に locatio-conductio operarum は何等の重要なきものであつた。此の locatio-conductio operis が即ち今日の請負契約の源である。ソコデ兩者の間の區別は、寸毫も疑問や誤解を入れざる程嚴然たるものであつた。然るに今日に於ては、雇傭勞働者は奴隷ではない、完全なる權利の主體たる自由獨立の人間である。然るにも拘らず奴隷賃貸借の法規が之に適用されて居るのは、一見甚だ不都合の樣に考へられるが、實際の事實其ものを見れば、決して不當ではないのである。羅馬に於ては勞働者は雇傭契約の當事者ではない、雇傭契約は奴隷の持主と奴隷の借主との間に結ばれるので、奴隷たる勞働者自らは其契約の締結には少しも干與しない、唯だロカーレ（賃貸）せられ、コンドウチエレ（賃借）せらるゝ物件たるに止まるのである、今日の勞働者は左樣ではない。自ら契約の當事者、報酬權の主體たるものである。此點は確かに全く異つて居る。然し事實に於ては、雇傭せらるゝ勞働者が、自主自由の人たることは雇傭せらるゝ瞬間に於て停止せられて、其勞務を給付する間は羅馬の奴隷と大差なき地位に立ちて仕舞ふのである。雇傭は事實に於て自由公民の權威と尊貴とを滅ぼして仕舞ふこと、羅馬に於て locatio-conductio operarum の關係に入れば直ちに自由權を失墜すると殆んど同樣である。唯羅馬に於ては、其れが法律上の事であり、今日に於ては、法律上は依然として自主自由の人間であり乍ら事實上に於て左樣なると云ふ差ひがあるのである。故に於て特に雇傭契約と名け、之を請負契約と區別する獨逸、日本、瑞西の民法は甚だ實際に適應して居ることを諒解することが出來るであらう。古き羅馬法を蹈襲して居ることは、如何にも馬鹿らしいことである

に相違ないが、實際の生活が其れよりも更らに馬鹿らしいものである以上、法律が羅馬法の舊衣を纏ふて居るのは寧ろ甚だ當を得て居ると云はねばならぬ。（近來の民法學者は何れも遙かに進みたる見地を取る、例へば富井政章博士『民法の社會化傾向と其解釋方法に就て』法律評論創刊十週年記念論文集一ノ二一を見よ）。勞働契約法の大權威たるロートマー氏は、勞働契約を最廣義に解して請負契約、運賃契約、出版契約までも其中に含せて、唯だ時間給賃銀契約（Zeitlohnvertrag）と請負給賃銀契約（Akkordvertrag）との區別を爲すに止めて居るは、理窟に囚はれて實際の事實に背馳するものである（Lotmar, Der Arbeitsvertrag 1902—8）否、前にいふ如く瑞西の新債務法では明かに、請負給でも、一定又は不定期間雇用せられ、又は就業するときは、其は雇傭である規定して居るのである。

四

今日云ふ階級對抗とは、自主自立の資本、企業所得階級と非獨立非自主なる雇傭所得階級との對抗の謂である。一切の勞働所得階級との對抗の謂ではない。勞働所得を得て居るもの〻中自主獨立なるものは（小作農も亦此中に在り）別の階級を形作る可きもので、所謂勞働階級、適切に云へば、雇傭所得階級と同一階級に屬するものではない。否、今日の實情としては、自主獨立の勞働所得を得て居るものは、普通云ふ意味にての『階級』を成しては居らぬと云ふことが其大特色であるのである。獨逸語の所謂『ミッテル・シュタンド』とは即ち此等を含むものであつて、其れが階級を形作つて居らぬと云ふことは、之を『クラッセ』と名けず、『シュタンド』と名くることが最も有力に示して居るものと思ふ。我邦では近來『知識階級』などと云ふ分の判らぬ造語が切りに使用されて居る。知識は決して階級分立の基準たるものではない、假りに其事實あるものとしても、今日の所謂知識階級なるものは決して一の『階級』を成して居るものではない。然るに自ら稱して知識階級に屬せりと爲す人々が此く不精確な造語を平氣で人眞似をして使用して居るに至

つては實に驚くの外はない、かくて階級對抗、階級鬪爭てふ重大現實な事實の眞相を全く沒却して仕舞ふことは、社會運動の爲めに甚だ有害な事であつて、プロレタリアを第三階級の事なりと誤解する耳食論者と其愚を一にすと云ふ可きである。獨立自主の勞働所得者は今日（未だと云つても宜いかも知れぬ）は一の階級を爲す迄に共通の利害關係を有して居らぬこと、所謂知識階級が然るに同じである。唯だ社會上に於ての『シュタンド』（立場即ち等族）を漠然と形づくつて居るに過ぎぬ。故に此の『ミツテル・シュタンド』（大内君の造語によれば中間階級）なるものは烏合の衆であつて尨然且つ漠然たる混合體である。其中には所謂知識階級もあれば、獨立なる勞働所得者即ち請負賃銀收得者、手工業者（大工、左官親方の類）から、理髮床の主人、車宿の親方（挽子は雇傭勞働者多し）は勿論、我邦に數多き、作家、所謂自由職業者の大部分等を雜然と包含して居るのである。社會政策學會の中間階級研究が極めて雜白な何等學問的統一なきものとなり了つたは要するに此れが爲めである。此中間階級なるものを引率して社會改造運動（之を文化生活運動と名けて）を開始せんとする森本博士の企を我々が學問上の立場から見て、眞面目に受取ることの出來ぬ理由は茲に存するのである。

抑も等族（シュタンド）とは、社會上の立場と云ふことで、其は主として人の出生、世襲による身分を基準としたのである。此の等族の時代は既に過去に屬する、現代は階級の時代である。英國のサー・ヘンリー・サムナー・メーン氏は社會進化の大勢は『身分より契約へ』from status to contract の一言を以て要言す可しと云つたが、コレハ法律上のみの事で、實際は未だ中々完全に契約の時代にはなつて居らぬ、之に代へて『身分より階級へ』from status to class と云つたが遙かに事實に合つて居ると思ふ。然し未だ身分の時代は全く去つたわけではない、否或意味にては、今日と雖も、身分が重大な力を社會上に有しつゝあるのである。然ればこそ獨立勞働所得者は他の雜多なものと共に中間階級

と邦譯せらるゝ『ミッテル・シュタンド』の中に混在して居るので、其中から他日夫々の階級が分れ出づるか否か、又は其分岐以前に階級なるものは消滅し去るか否か、將た又た他の階級中に夫々分屬するに至るか否か、何れも將來の問題であつて、今日に於ては、何とも豫測することを許さないのである。

等族が身分を以て基準とする社會的の分岐であるに反し、階級とは經濟上、其得る所の所得の質の異なるを基準とする社會上の分岐である。其基準、一は廣社會的であるに反し、一は狹社會的（獨逸語で此の事を Gesellschaftlich と云はず sozial と云つて居るのは甚だ意味深いことである、社會問題、社會運動、社會政策、社會主義の『社會』は此の狹社會的 sozial に關するの謂で廣社會的 gesellschaftlich に關するの謂ではない）卽ち經濟的特に流通經濟的である。而して今日の中心問題たる階級對抗とは凡ての階級の對抗のことでなく、其中特に資本所得階級（マルクスに從へば餘剩價値の收得階級）と雇傭所得階級との對抗のことである。其他の所得は對抗することあり、せざることあり、繼續不協調的に對抗し、且つ鬪爭しつゝあるものではない。從つて階級對抗の原因たる所得の質の相違、對抗とは、雇傭者對被雇傭者の所得の相違、對抗を指して云ふのである。

五

法律學者の間には、雇傭契約と請負契約の異同に就て永い論爭が交されて居る。從來の民法學者の通說は、勞働結果又は結果を伴ふ勞働給付が契約の客體たるときを請負とし、結果に關係なく單に勞働給付のみを客體とするときを雇傭とすと敎へて居たが（我民法の譯者否起草者は此說に從つたものと見へることは前に言つた）グスターフ・リューメリンは其著『雇傭契約と請負契約』Gustav Rümelin, Dienstvertrag und Werkvertrag 1905 に於て、其妄なるを痛論した。彼は此標準では、兩者の分界線が結局分らなくなることを指摘した。オットー・ギーアケは其獨逸私法論債權篇

に於て（Otto v. Gierke, Deutsches Privatrecht 3. 591）雇傭は『働き』“Wirken”を約束するもので、請負は『仕事』Werk を約束するものなりと主張して居るが、コレハ通說より左まで進んだ說とも思はれない。『勞働契約論』の大著に於てロートマーは、請負賃銀 Akkordlohn を約するものが請負契約で、時間給賃銀（Zeitlohn）を約するものが雇傭契約であると主張して居ることは前に云つた通りである。瑞西の新法は此說を斥けた。特に經濟上から云へば、兩者は決して斯く明確に對立して居るものでなく、且つ兩者の外に幾多の賃銀形態がある（賃銀形態の事は本年末の社會政策學會大會に於て『賃銀制度及利潤分配制度』が討議題となつて居り、筆者は其報告者の一人たることを命ぜられて居るから、其折に詳論したいと思つて居る）、請負賃銀、時間給賃銀のみを以て區別することは不可能であり、又た不妥當である。加之此區別は專ら工場勞働に於て行はれる所で、其以外の勞働、例へば、商業使用人、技工、事務員、其他の使用人に就ては事實上此區別は全く無意味である。而して時間給であつても請負給であつても、工場從業勞働者は、殆んど全く一の雇傭勞働者たるの實を有して居る（瑞西の新法は、此實際事實に基いて規定したのである）。故にロートマーは後に至つて前說を撤回して曰く、時間給契約は悉く雇傭契約であるが、請負給契約は雇傭契約たるものあり請負契約たるものがある、區別の標準は、雇主の營利的經營の用の爲めにするか否か之れであると。然るにロートマーと並んで勞務契約法論の大家たるジンツハイマーは此說を駁して、同一の手工勞働（例へば、大工、左官の如き）が工場建築用に充てられるときは請負契約で、雇主の私宅建築用に充てらるゝときは雇傭契約であるなどと云ふことはあり得ないと言つた。如何にも其通りである。更らに又た時間給契約は皆雇傭契約であると云ふのも當を得て居らぬ。例へば電鈴据付け請負業者に電鈴の据付けを賴むと、彼はベルが何程、コードが何程、ボタンが何程と請求する外に、工賃何時間分何程と要求する。此工賃は時間給である、然し彼は決して雇傭勞働者でなく請負勞働者であることは明白である。彼

と註文主との關係は疑もなく請負契約の條項によつて支配せらるゝのである。畢竟時間給、請負給は、雇傭請負兩勞働契約を通じて行はれるのであつて、之を以て兩契約區別の基準となす可きものではない。賃銀形態が勞働關係を定めるのでなく、勞働給付の形態が之を定めるのである。其れは別事ではない。勞働者の勞働給付が獨立者として行はれる形態と從屬者として行はれる形態との差異之れである。即ち一は自己決定勞働(Selbstbestimmte Arbeit)であり、一は他人決定勞働(Fremdbestimmte Arbeit)であることの相違に基くものである。

抑も勞働給付の根本形態には二種ある。即ち(一)特定個別給付(Spezialarbeitsleistung)(二)不特定綜合給付(Gattungsarbeitsleistung)是れである。之れは物の給付(Sachleistung)に就ては夙に認められて居る所であるけれども、勞働の給付に就ては餘り注意せられて居ない。物の給付の外には、保險殊に運送保險に就ては此區別は明かに認められて居る。即ち保險の目的は特定個別的に定むることを通則とするけれども(所謂確定保險 Valued policy)、又たは特定綜合的に定めて置いて、更らに後から特別の申立によつて之を特定個別的に定むることも認められて居るのである。(所謂豫定保險open policy; laufende dersicherung)例へば村瀬博士『海上保險』明治三十二年刊第六十二頁を見よ)

物の給付に就て例を取れば、八百屋へ行つて店に並べてある此大根三本と此胡瓜五本とを持つて來て呉れと註文するときは、特定個別給付であるが、唯だ單に大根三本と胡瓜五本を届けて呉れと註文するのは不特定綜合給付を約するものである。所が勞働給付に就ても同じ事である。一日何圓何十錢又は一ケ月何十圓で汝を雇ふと云ふのは、不特定綜合給付を約するものである。此れ〳〵の仕事をして呉れ報酬は何圓何十錢出すと約束するのは、特定個別給付を約束するものである。之れが勞働給付の根本的二大形態であつて、其形態の異るに從ひ勞働關係は甚だ異るのである。事實として、雇傭勞働は大部分不特定綜合給付の形態を取るもので、請負勞働は主として特定個別給付の形態を取るものであ

る。例へば製本屋に或書物を渡して製本して貰ふとか、額縁屋に或油畫を渡して縁を作つて貰ふとか、壊れた椅子を家具屋に直して貰ふとか云ふのは、特定個別勞働の給付を受けるので、其契約は請負契約である。之に反し工場で勞働者を雇ふ、家庭に下婢を雇ふ場合には、不特定綜合的に約束するので、如何なる特定任務に服するかは、其時になつて始めて定められるのである。之れは雇傭勞働である。從つて舊說が請負勞働は、始めから仕上りの結果を約束し、雇傭勞働は然らずと云ふのも、此點に於ては事實に合して居る。製本屋は頼まれた製本がチャンと出來て居る可き責任を有する。椅子屋は椅子が注文通り修繕されて居る可き責任を有する。之に反し、自宅へ製本工を雇入れて日給何程を給すと約束し、さて何々の本を綴る可きかは、其都度之を命ずる場合は、契約の時には結果が約束されて居るのでない、唯一日何程で製本に從事すると云ふ事丈けが定まつて居るに止まる。然し其不特定綜合と云ふには種々な程度がある、商業使用人、普通の下婢の如きは、極めて不特定的な約束をするもので、主人の命の儘に何から何まで爲さねばならぬが、例へば簿記方として、電話係として、タイピストとして商業使用人を雇ふ場合、炊事婦、子供附、御針として下婢を雇ふ場合は、同じ不特定的ではあるが、始めから其範圍は限定されて、個別的ではないが稍々特定的に定められて居るのである。然し其凡てを通じて、多かれ少かれ必ず不定素を含んで居ることが其特質である。工場勞働者に就ても此理は同一である。斯く不定素を含むと云ふことが、雇傭勞働に特殊な問題を發生する所以であつて、概して云へば不定素が多ければ多いほど其特殊性は顯著となり、不定素が少いほど其特殊性は稀薄となり、全く特定個別的になると此の特殊性は殆んど皆無となり、從つて其特殊性の產み出す問題はなくなつて仕舞ふのである。今日の所謂勞働問題とは此特殊性の產み出した問題である。從つて特定個別給付を目的とする請負勞働は、今日の所謂勞働問題の對象となつて居らぬのであつて、綜合給付を約する雇傭勞働のみが對象となつて居る、獨逸新勞働法が主として雇傭勞働のみに其範圍を限つた

のは即ち此れが爲めである。

六

勞働給付の約束が不定素を多くか少くか含むことが、其勞働關係に特殊性を附與するのは何故であるか、之れ次に說明を要する問題である。

物の給付に就ては、特定個別的に其給付が定められる場合には、其給付の客體を特定するものは、受給付者卽ち買手、請取手である。果物屋の店頭に立つ人は、彼れが此れかと見較べて、さて向ふから何番目の函にある林檎を十個賣つて呉れと云ふ、給付者は其求めらるゝ所のものを給付しさへすれば宜いのである。尤も婦人客が呉服屋の店頭に坐して彼れか此れかと迷つて居るとき、唯今は此柄が一番流行しますとか、御宅樣には此品が向くと存じますとか云つて、實は客の自由選擇權を代つて行使するやうな場合はイクラもあらう。然し最後に然らば之を貰ひませうと決定するのは受給付者たる御客である。其反對に不特定綜合給付の場合には、特定權は全く給付者、賣手にある。明日三等米を一斗屆けて呉れと注文された米屋は、三等米一斗でさへあれば、自家庫中の何れの部分の米を給付しても濟むのである。彼の家は、米に目が利いて居り八釜敷から、成る丈注意して選んだ米を屆けよう、彼の家は妻君が無能で如何なる米を持つて行つても何とも云はぬ、其代り拂が滯り勝だから、少々位濕めつた米を屆けても宜いとか、其間に多少選擇が行はれ得る。而して、其が行はれぬとしても、特定權は全然給付者の手に存するのである。

トコロが勞働の給付に就ては、右と全く反對になるのである。不特定綜合給付勞働者卽ち雇傭勞働者は給付者であるが、其給付す可き目的物を特定する權能を全く若しくは殆んど有せぬので、特定權は一に受給付者たる雇主の手に存するのである。單に下婢として雇入れられた女は主婦が一々指圖して『用』を命ずる、商店使用人は其爲す可き特定の事

項は主人又は支配人から指示されて初めて勞務の給付を爲す。工場勞働者は其作業に就て全く特定權を有せぬ、多くの場合に於て、フォーアマンを通じて雇傭主が其權を行使するのである。換言すれば、不特定綜合勞働は悉く他人決定勞働であるのである。

自己決定勞働（請負勞働）を爲すものは、同時に其勞働に就て責任と危險とを負擔する。勞働の場所、時、執行方法其他を自ら決定する請負勞働者は、責任の完了と危險の防止とを自ら爲す可き義務を有する、即ち我民法第六百三十四條に『仕事ノ目的物ニ瑕疵アルトキハ、註文者ハ請負人ニ對シ、相當ノ期限ヲ定メ、其瑕疵ノ修理ヲ請求スルコトヲ得（中略）註文者ハ瑕疵ノ修補ニ代ヘ又ハ其修補ト共ニ損害賠償ノ請求ヲ爲スコトヲ得』としてあり、第六百三十六條には『前二條ノ規定ハ、仕事ノ目的物ノ瑕疵カ注文者ヨリ供シタル材料ノ性質又ハ註文者ノ與ヘタル指圖ニ因リテ生シタルトキハ之ヲ適用セズ、但シ請負人カ其材料又ハ指圖ノ不適當ナルコトヲ知リテ之ヲ告ケサリシトキハ此限ニ在ラズ』とし、第六百三十七條には『前三條ニ定メタル瑕疵修補又ハ損害賠償ノ請求及ビ契約ノ解除ハ仕事ノ目的物ヲ引渡シタル時ヨリ一年内ニ之ヲ爲スコトヲ要ス』とし、一年の後迄は請負人は責任を負ふ可きものとしてあり、第六百三十八條では石造、土造、煉瓦造又は金屬造の工作物に就ては、引渡の後猶十年間其擔保の責に任ずとまでしてある。而して更らに第六百四十條には『請負人ハ第六百三十四條及第六百三十五條ニ定メタル擔保ノ責任ヲ負ハザル旨ヲ特約シタルトキト雖モ其知リテ告ゲザリシ事實ニ付テハ其責ヲ免ルヽコトヲ得ズ』と定めて、飽迄も受負人の責任負擔を認めて居る、雇傭契約には之に該當する規定は一も之を見出すことを得ないのである。然る所以は自己決定と責任負担とは當然相伴ふ可き事柄であるからである。故に請負契約の場合でも、他人（即ち註文人）決定による事項に就ては勞働給付者の責任負担は解除され、危險は註文者の肩に繋ることになる（獨乙民法第六百四十五條を見よ、我民法には該當の

規定なし、六百三十六條の場合とは事情異る）、決定權なき事につきて責任を負担す可き理由なない、從つて他人決定の事實が入り込み來れば責任負擔も亦消滅す可きは當然である（我民法は此點に關し如何なる主義を取るか、此點不明瞭である、宜しく民法學者の研究に質す可きである）。

之に反し雇傭勞働には、自己決定權がないから、當然責任、危險負担の事實もない、之れは獨り時間給勞働のみに就て然るのでなく、個數給勞働に就ても同様である。賃銀制度の權威たる英國のシュロッス氏は、Time-wage very often has a Piece-basis, Piece-wage has in practically all cases a Time-basis『時間給賃銀も甚屢々個數給基礎を有し、個數給賃銀は事實上凡ての場合に於て時間給基礎を有す』と云ふことを、其『工業報酬法』論の第二章（D. F. Schloss, Methods of Industrial Remuneration 3. E. 1907 ch. II)に於て詳論して居る。獨逸に於て同じく賃銀制度論の權威たるベルンハルド氏は、此シュロッス説を稱揚して、此主張は全卷中の最重要なものであると云つて居る（L. Bernhard, Handbuch der Löhnungsmethoden. Leipzig 1906）責任負擔の點から云つても、誠にシュロッス説の通りで、時間給、個數給共に共通のものである（賃銀形態としての時間、個數給制の異同論は、前に言つた報告中に詳論する積りである）。

時間給、個數給と相對する賃銀形態に、請負給賃銀（Akkordlohn）と云ふのがある。社會主義者が個數給に極力反對して時間給を主張するに對し、然らば此の請負給賃。制度を採用して勞働紛爭の一因を除く可しとして、其の普及に熱中する人もあるが、之れは無益な徒勞である。請負給賃銀は、一見勞働者をして自主獨立の當事者たらしめるかの如く見へるけれども、實は必ずしも左樣ではない。賃銀仕拂の形式が請負形態を取ると云ふ丈けで、事實としては、請負給の下に於ても自己決定が必ずしも行はれるのではなく、否却つて多くは他人（即ち雇主）決定が行はれのである。此問

題は嘗て大なる爭議の對象となり、法律上甚だ疑義あるものとして盛んに論ぜられた。或者は請負給賃銀を受くる勞働者は請負契約によつて給付するものでありとし、或者は然らず此れ依然雇傭勞働なりとした。伯林の工業裁判所は、決定の標準點は一に雇主の決定權（Direktionsrecht des Arbeitgebers）が存するか否かにありと判決した（Reichsarbeitsblatt 1904. S. 639）。即ち雇主が決定權を握る場合は、賃銀は請負給であつても、其れは請負契約によるものでなく雇傭契約によるものと認むべきである。此の判決は誠に當を得て居るものである。更らに又た、勞働紛爭防止の効ありとせらるゝ賃銀形態には（一）利潤分配制（二）組合制集合請負（三）割增給制の三があるけれども、何れも完全に勞働者に自己決定權を賦與することを必し得るものではない。從つて此等の制度に依つて、眞に今日の勞働問題を解決し得るなどと云ふことは、決して望み得るものではない。自己決定權の完全なる若くは完全に近い讓與なき限り、今日の勞働紛爭は其跡を絶つものではないのである。

他人決定勞働の最も明白な例は『使用人』である。『使用人』Angestellte と云ふ文字其ものが最もよく其實を言ひ表はして居る。『使用人』に對しては『主人』Principal がある。『主人』とは決定權を全部持つ人のことで、『使用人』とは何等の決定權なき勞働者のことである。近來我邦では『從業者』又は『從業員』と云ふ美辭を以て之に代へることが流行し出した。然しイクラ名稱を取換へても、其實質は一向變つては居らぬのである。

之に反し、自己決定權を完全に有する勞働者の例は、株式會社の重役之れである。形式から云へば、重役も亦一の使用人である、俸給と云ふ報酬を以て雇はれた勞働者である。然し彼れは其爲す所に就て完全な自己決定權を有して居る。株主總會は重役を罷免することは出來る。然し其任期中は、重役は少しも、株主、株主總會は容喙せしめない、完全に自己決定を爲すものである。之は自己決定勞働の最極端な實例と見る可きである。（此故に、上田博士は、重役は、企業者なりと主張せられる、筆者は之に反對して、企業者は、株式會社其ものであると主張する。近刊上田博士『株式會社經濟論』第二版幷に拙著『經濟學論攷』を見られたし）。

六

近世社會政策の勞働保護とは、自己決定勞働の保護ではない、他人決定勞働の保護である。社會政策、公法的保護の必要なるは、後者に於てであるからである。獨逸の新勞働法が、他人決定勞働たる雇傭勞働のみを對象としたのは、決して失當な事ではない。他人決定勞働を營むものは、法律上は獨立自由の人格である筈であつて、實際には、く其れがないから、特に之を保護することを必要とするのである。(前掲富井博士論文三頁を見よ) 即ち事實上眞正の獨立自主權のないと云ふことが、社會政策の對象を形成するのである。ロジンは社會保險適用の範圍は、勞働者が眞に獨立者であるかないかによつて定めらる可きものなりと主張した。誠に然り、社會階級の對抗、階級鬪爭の實は、非獨立者たる雇傭勞働者と其雇主、其主人たる獨立者との間にのみ存するのである。所得の大小と云ふが如き、單純なる量の問題と解釋するのは、誤まれるも亦甚だしいのである。非獨立者對獨立者であるが故に、服從關係、上下關係、命令關係が當然起る。オット・ギーアケは、獨逸固有法(羅馬法系以外に立つ所の)に於ては、雇傭契約は、奉公契約(Treuvertrag)から起つたと主張した。我日本に於ても、西洋流の翻譯法律の入り込み來る迄は、雇傭關係は奉公關係であつて、決して、債務契約關係ではなかつた。此時代に於ては、獨逸固有法の行はれてゐた時代と同様に、主人と雇人との關係は單に權利、義務の關係ではない。即ち我民法第六百二十三條の『雇傭ハ當事者ノ一方カ相手方ニ對シテ、勞務ニ服スルコトヲ約シ、相手方カ之ニ其報酬ヲ與フルコトヲ約スルニ因リテ、其效力ヲ生ズ』などゝ云ふことは、夢にも考へた事でない。雇人は單に勞務に服することを約する丈けでない如く、雇主も單に之に其報酬を與ふることを約するだけでは決してなかつたのである。兩者の間に恩誼の關係、信賴の關係がある。賃銀の多寡の如きは寧ろ第二義に屬する。主人は報酬關係以外に於て雇人を愛撫し、保護し、訓育することが當然であり、雇人も亦單に勞務を給するのみでなく、服從、尊敬、奉仕することが當然であつた。即ち所謂主從關係であり、溫情主義によつたものである。之れは決して單に日本

斗りの事ではない、獨逸は勿論歐洲諸國のギルド全盛時代には何れも完全に其實のあつたことである。日本のみ獨り固有の國粹、國民性の美點、家族制度の長所として之を存して居たわけでない。西洋に於ても、例へば家内勞務（下婢、下僕）に就ては、未だ此の溫情奉公關係が行はれて居る。然し時勢の進歩に連れ、家内勤勞に就ても段々其れ〻薄らいで行く、工場勞働に就ては、其は始から殆んど問題とならない。何となれば其は事實不可能であるからである。主從關係、溫情主義を口に絶たざる日本の工場主にして、果して實際に昔の主人同樣の愛撫、保護を其勞働者に加へつゝあるもの一人にてもありやと考へ見れば、此理は、直ちに首肯せらる可き筈である。よし其實ありとした處で、日本の直譯法律は、之を認めて居らぬのである。否日本の民法は此の美風（引）を破壞した最有力な革命者であつたのである。雇傭勞働關係を權利義務關係と見るが、國體に背く所以であるならば、最大の國體破壞者たる責任は、羅馬法襲蹈の直譯法律にありと斷ぜねばならぬ筈である。豈に斯くの如き沒理ある可けんや。

奉公關係、信頼關係は、他人決定勞働の欠點を著しく緩和するものたるは勿論である。然し其れは、少數の雇人を使用する主人のみが爲し得ることである。今日は多數勞働（Massenarbeit）の時代である、其れでなければ、今日の經濟生活の生産者として成功することが困難である。多數の他人決定勞働給付者を使用する雇主か、昔の溫情關係を實現することは到底不可能である。問題は溫情關係、信頼關係の復舊に在るのではない、他人決定勞働の欠點、弊害を除くことにあるのである。他人決定勞働たる限り、其欠點、其弊害を掃絶することは、其性質上出來難いことであるが、社會法律、勞働法は可能の限りを盡して、他人決定勞働の欠點、弊害を絶滅せしめんとして出で來るのである。

溫情關係の存否に拘らず、少數の雇人對雇主であれば、他人決定勞働の欠點は其極には至らない。之に反し多數勞働者對雇主の他人決定勞働關係に於ては、雇主の決定權は、必然的に雇人に對し一種の強大なる威力關係（Machtverhältnis）に變形することを免れないのである。法律は雇傭關係を何處迄も、權利關係として取扱ふが、事實は其を飛超して、

權力、威力關係となり、勞働者は一天萬乘の君の外に更らに直接なる一種の下級統治者を戴くことになる。勞働運動、社會運動は即ち此の威力、權力關係を今日の私法が原則とする正當なる權利關係に引戻さしむ可く起つたのである。社會主義も共產主義も將た亦た無政府主義も法理哲學の眼から見れば、先づ以て（徹頭徹尾にはあらず）威力、權力關係の權利關係引戻し要求の叫聲と云ふ可きである。彼等は、他人決定を即時に全廢することによりて此要求を徹底せしむ可しと叫ぶのである。社會政策の要求も亦全く同じ立場に立つが、他人決定の即時全廢を要求するのでなく、他人決定の强力の緩和を要求するのである。故に前者から見れば、社會政策は甚だ微溫的な、不徹底なものとせらるので、其點は我々社會政策主張者も決して否定するものではない、何となれば他人決定たる以上、其弊害、其欠點を全く免れることの出來ないことは、我々も之を承認するものであり、承認せざるを得ざるものであるからである。然し實際上に於ては、少くとも社會主義者の多くは此の漸進的緩和に參與することを拒んでは居らぬ。其最も有力な任務は、即ち革命後の獨逸社會民主黨政府が作つた新勞働法(Arbeitsrecht 獨逸憲法第百五十七條）であるのである。

我々社會政策の立場に立つものも、獨逸の新憲法も、此緩和を、共同決定（Mitbestimmung）と云ふことに求めるのである。獨逸新憲法第百六十五條は規定して曰く『勞働者及使用人は、企業主と共同して、對等の權限を以て、賃銀及勞働條件の制定並に生產力の全經濟的發達に參與す可きものとす。双方の團結並に團結の協定事項は承認せらる。勞働者及使用人は、其の社會的及經濟的利益の擁護の爲めに經營勞働參議會並に經濟區域に從つて配備せらるゝ地方勞働參議會及全國勞働參議會に於て法律上の代表權を與へらる。』(下略)と。

Die Arbeiter und Angestellten sind dazu berufen, gleichberechtigt in Gemeinschaft mit den Unternehmern an der Regelung der Lohn-und Arbeitsbedingungen sowie an der gesamten wirtschaftlichen Entwickelung der produktiven Kräfte mitzuwirken, Die beiderseitigen Organisationen und ihre Vereinbarungen werden anerkannt.

Die Arbeiter und Angestellten erhalten zur Wahrnehmung ihrer sozialen und wirtschaftlichen Interessen gesetzliche Ve-

rtretungen in Betriebsarbeiterräten sowie in nach Wirtschaftsgebieten gegliederten Bezirksarbeiterräten und in einem Reichsarbeiterrat.

而して此條に基いて、一九二〇年二月四日『經營參議會法』Betriebsrätegesetz vom 4. Feb. 1920 と云ふ百六條から成る詳細の法律が發布され、其翌日には『經營參議會法選擧令』Wahlordnung zum Betriebsrätegesetz vom 5. Feb. 1920 經營參議會法施行國政府令及勞働大臣令 Verordnung der Reichsregierungvom 14. Apr. 1920 zur Ausführung des Betriebsrätegesetzes vom 4. Feb. 1920―Verordnung des Reichsarbeits-ministers zur Ausführung des Betriebsrätegesetzes vom 21. April 1920―なるものが發布された。

共同決定には一般的と特殊的の二種がある。勞働協約は一般的共同決定の代表的なものである。獨逸新憲法による經營勞働參議會は後者の代表的なるものである。而して經營勞働參議會は、共同決定の範圍を（一）勞務の給付（二）勞務關係の二のみに限つて居るのである。然るに之れを以て不十分なりとし、更らに進んで、全生產行程をも共同決定の對象とせねばならぬと主張したものが尠からずあつた。之れは、雇傭勞働給付に就ての自己決定、他人決定の對立の範圍を踰へて、資本處分、經營設備までも勞働者共同決定の範圍に入れんとするものであつて、問題の面目は全く變つて來るのである。これは憲法に於て明言した勞働力保護の爲めの勞働法の範分に屬せず、更らに廣い『社會化』の問題となるのである。（Hedemann, Das bürgerliche Recht und die neue Zeit Jena 1919を見よ）。獨逸の社會黨政府の新勞働法は未だ其處までは進んで居らぬ、雇傭勞働の給付及勞働關係のみに就て、共同決定を認め、唯一點に於て右の生產行程共同決定論に讓步したに止るのである。これに就ては可成烈しい暗鬪、公鬪が戰はされた。憲法第百六十五條の後段に『並に生產力の全經濟的發達』云々とあるのは其結果たる讓步の點であ。然し其意味は甚だ漠然たるもので、獨逸の革命を微溫的なり、不徹底なりと非難する者は、先づ最も強く此一事を責めるのである。（以下嗣出）（十・六・十一・稿）

三角同盟の死

本社特派記者
在倫敦　室伏高信

一、序言――同盟罷業、鎖め出し『ストッペーヂ』――『空前の危急』――ハインドマンに會つて――公衆の態度

『産業停止』を見ました。三角同盟の『脅威』を見ました。英國支配階級の總動員を見ました。私は倫敦へきてから丁度一ヶ月して、『黒い金曜日』を中心としての、英國における二大階級の、『空前』の鬪爭の一幕を見ることができました。

ある時は吸いこまれるような狂熱の心持ちをもつて、ある時は奈落の底へ落されたような失望の心持ちをもつて、またある時は物憂いほどの退屈な心持ちをもつて、そして物憂いほどの退屈のうちに、性急な人たちの狂熱と失望と退屈とを越して、英國階級戰爭の大潮流が、大洋においてのように、悠々として長くゆくのを見るために、短い私の英國滯在のうちの、長い一ヶ月を費しました。

四月一日からの炭坑夫を中心としての『産業停止』がこれであつた。

この『産業停止』が始まつた時に、支配階級の側ではそれを『同盟罷業（ストライキ）』だといふた。炭坑持主がそういふた。新聞紙がそういふた。ロイド・ヂョーヂがそういふた。これに對して勞働者の側はこれを『鎖め出し（ロックアウト）』だといふた。フランク・ホッヂエスが炭坑夫を代表してそういふた。『デーリー・ヘラルド』が勞働者の代辯者としてそういふた。それは『同盟罷業』であつたか？または『鎖め出し』であつたか？資本家の側から勞働者に宛てゝの次のような書簡が何よりも雄辯にこれを語つてゐるのである。

『こゝに貴下の注意を乞ひます……貴下と會社との間に現

存する勞務契約は一九二一年三月三十一日をもつて終了するといふことを…………』

一九二一年三月十六日

各會社

百二十五萬の炭坑夫はかくして三月末日を限に彼等の雇主によつて『鎖め出し』に遭つたものであることは疑ひを入れないところである。しかしまたこれと同時に雇主側から新賃銀の申出があり、その大部分は勞働者にとつての堪ゆべからざる條件であつたにしても、後に詳らかにする機會のあるやうに、この事件は、これを同盟罷業だとすることの全然誤謬であるごとくに、またこれを單なる『鎖め出し』とするにはあまりに複雑な問題であるといふことができると思ふ。

ロイド・ヂョーヂが謂ふところの『公平』な仲裁者として最初に坑夫の代表者及び雇主の代表者と會見した時に、この『公平』な仲裁者はこれを『同盟罷業』だといふた。そして坑夫の一代表者からの抗議に會つてから、彼れは、『ストツペーヂ』(停止)といふ言葉を使ひ初めた。それより先き『ストツペーヂ』といふ言葉は公平な人たちの間に廣く行はれてゐた。歴史は、恐らくこの事件を『ストツペーヂ』(Stoppage)または『産業停止』(Indutrial Stoppage)としても永く記錄するであらうと思はれる。

『産業停止』に對してロイド・ヂョーヂ政府は彼れの宣言どほりの國民的總動員をもつてこれに報いた。そして彼れのこの政策が勞働黨によつて非難された時に、空前の危急に對して、空前の手段が必要であつた、と彼れは答へた。彼れの答辯は勿論彼れの不名譽な『護國團』を辯護するための口實であるに過ぎなかつたにしても、この『産業停止』が彼れの謂ふところの空前の危急であつたことは、この事件とともに呼吸した凡ての人の決して否定することのできない事實であらうと思はれる。そは昨年の Council of Action. とともに英國勞働運動の總動員の『示威』を導いた。そして同時に支配階級の總動員を導いた。この瞬間において、全英國は、或は英國の全勞働運動は、危急存亡の瞬間に立つてゐたのであつた。

私はハインドマンの言葉を思ひ出す。今年七十九歳になる老ハイドマンは私がこの國へきて話し合つた英國人の一人であつた。『今は英國にとつて危急存亡の秋である。英國だけではない、英國の革命は世界の革命である……あなたはいゝ時にきた。今の一年の經驗は百年の經驗に當ることができる……。』老人は昂奮の色を包むことができないで私にこういつてくれ

た。彼れの言葉は決して私を欺きはしなかつた。

四月一日にいよ／＼『産業停止』が始まつてからも、一般の英國人は、またストライキか、といつた風に、例のとほりにパイプを啣へながら、考へてゐるような考へてゐないような顏付きをして、ステツキをもつて、船のような靴を穿いて、帽子を阿彌陀に被つて、百姓がお天氣を見てゐるような具合に、上向き加減で、倫敦の町を大股で歩いてゐた。その翌日であつたと思ふ、『タイムス』は公衆は平靜だといふことを書くために彼れの紙面の尨大な一頁を費してゐた。國王は豫期どほりに資本家の側に立つて逸早くも『非常時（エマアヂエンシイ）』の宣告を發したが、『平靜な公衆』は相變らずパイプを啣へてお天氣模樣ばかりを眺めてゐた。下院の新指揮官としてのチエムバアレンは國王の宣告についての討議を『延會』するための動議を繰返すのが物憂いように見えてゐた。

三角同盟の『脅威』が現實に感じられてきた時に、流石に血の環りのよくない英國人も、國王の『非常時』に氣がついたように、往來をゆくヂョン・ブルの面に、どことなく憤りの色が見えてきた。『黑い金曜日』はたゞ勞働者の側にだけ『黑い金曜日』であるように見えた。公衆は『タイムス』の謂ふところの平靜へと歸つた。しかし『黑い金曜日』が過ぎてからも『白い日』は英國のうへに輝いてはゐなかつた。そしてそれは『シテイ・オブ・ウエストミンスタア』が一人の侯爵の財産目錄に挿げられてゐる限り、またそして〇〇〇ホールが『蝌斗（おたまじやくし）』によつて代表されてゐる限り、永久に輝くことはないであらう。

私はこの『空前の危急』に、偶然にもこの國に居合せたものの一人としての私の見たまゝを記るします。

二　M・A・G・B――M・F・G――會長、侯、男――スミス、ダンカン、ホツヂエス

この戰では最初は炭坑勞働者と炭持主との爭ひであつた。坑夫側が坑夫組合（M. F. G. B）を組織してゐるのに對し、持主側は持主聯合（M. A. G. B）を組織してゐたから、この戰ひは炭坑においての組織的勞働者と組織的資本家との爭であつた。資本家側は英國における炭坑の持主の聯合であつて、極めて少數の例外を除いては、英國における百四十八の炭礦、四千の持主の、殆んど全部を組織してゐるものであり、その資本は一億八千萬磅と計算されてゐるのである。これに對し炭坑夫の總數は百二十五萬人であつてそのうち坑夫組合に屬してゐるものは約百萬（四月廿二日代表者會議は九十四萬八千百六十人を代

表してゐると報告された）であつて英國における最大の勞働組合である。

資本家側が現在の經濟組織――資本の私有、利潤のための生産、勞働の絞取の支持者であることはいふまでもないことである。『私有財産は維持されなくてはならぬ炭礦業の國有はこの國の經濟的幸福に有害である……炭礦業の國有は如何なる形においても産業の發展とこの國の經濟生活にとつて有害である』といふ原則のうへに立つてゐる――といふのがサンキー委員會においての彼等の代表者の報告であつた。この原則、言葉を換えていへば炭礦業における私有制度、利潤のための生産、勞働の絞取を維持するの原則を維持し、辯護するために組織されてゐるのが持主の組合（M. A. G. B.）である。これに對し坑夫組合（M. F. G. B.）は一九一九年の彼等自身によつての炭礦國有法案（The Nationalization of Mines and Minerals Bill. 1919）によつて明らかであるとほり、炭礦の國有と、國家及び生産者としての勞働者の代表者によつての炭礦業の管理を要求してゐるのである。他の言葉でいふと炭礦業の私有廢止と産業の民主的管理とを要求してゐるのであつて、それは大體においてギルデイズムの原則のうへに立つてゐるのであるが、その國有の方法からいふと、それは買收の方法をとるのではなくして『公奪』の原則のうへに立つてゐるのであり、またそれは議會的方法によつてよりは、寧ろ直接行動によつてこの新狀態への變化を導こうとしてゐる――少くともこうした傾向を示してゐることは彼れの多年の指導者としてのスマイリイによつて屢々雄辯に表現されてゐるのである。またその組織からいつても各種各階級の勞働者を炭礦業の産業別に從つて組織してゐるのであつて純然たる産業的組合であり、從つて階級的組織であり、階級的革命的勞働組合であり、就中この組合の最大根據地の一つとしてのサウス・ウエールス坑夫組合は英國における革命運動の一方の中心であると目されてゐるのである。

『産業停止』は最初はこの二つの團體――資本聯盟としての M. A. G. B と革命的勞働組合としての M. F. G. B. との戰ひにおいて起されたのである。

私は先づこの二つの團體を指導する人について一瞥を與へて置きたい。持主組合の指導者としては先づエヴアン・ウヰリアムスの名を擧げなくてはなるまい。彼れは現在の持主組合の會長の地位を占めてゐるので自然持主側を外部に代表するの役目を勤めてゐる。彼れはサンキー委員會においても持主側の代表

者の一人としてこの委員會に席を占めてゐた。

○エヴアン・ウキリアムス――あなたは坑夫は今後も石炭を自由に、また特價で手に入れるが至當だと考へられるのか？

○シドニイ・ウエッヴ――然り、彼等が今日なしてゐるごとく。……

○ウキリアムス――あなたは郵便局の雇人に切手を安價で賣りますか？

これはサンキー委員會の聽取書からの一篇である。この一節のうちにエヴアン・ウキリアムスなる人の面影がよく代表されてゐるもののやうに思はれる。彼れのほかには闘士としてニムモウがあり、世間的に著名な人としてはゲーンフオード男爵があり、礦地の持主としてのノウサムバランド侯爵、及びロンドンデリー卿がある。ロンドンデリーは嘗つて愛蘭總督であつたしゲーンフオードは遞信總監及び教育院總裁であつたことがある。ノウサムバランド侯は二十二萬四千五百英加の炭礦地の持主として英國炭礦業の『王』である。

○ロバアト・スマイリイ――若しさうだとすれば、あなたは法律について無知である……

○ノウサムバランド侯――さうであります。

（Coal Industry Commission. Vol. II, Reports and Minutes of Evidence on the Second Stage of the Inquiry, P. 620）

これに對して坑夫組合を代表して第一線に立つたものとしてフランク・ホッヂエス、ハアバアト・スミス及びダムカン・グレハムの三人が最も多く著れてゐる。スミスは現在の坑夫組合の代理會長であつてロバアト・スマイリイ退隱後における名義上の總裁者である。今日でも尚ほ坑夫時代の帽子を被つて、ヨオクシヤア訛りで話す、純然たる勞働者氣質の老人である。ダンカン・グレハムはスマイリイの後を繼いでランカシヤアから勞働黨の候補者として立ち、現に下院議員であるが、彼れの名が世間に聞えるやうになつたのは今度の『產業停止』以後のことである。『私は外見は粗暴であるが心は溫かである』と自分でいつたとほり、外見は甚だ粗暴である――彼れの父は坑夫であつた。彼れの妻は坑夫の娘である。彼れの二人の小供は坑夫である。そして彼れ自身は十一歳の時から坑夫の生活に入つた――彼れはスミスと同じく坑夫そのまゝの外見である。そして彼れの心も坑夫そのまゝの心である。古書をあさることは彼れの唯一つの道樂であるといはれてゐる。今年五十四歳になる彼れが太いパイプを啣へて、上着のポケットに手を入れて歩るいてゐるところはどうて見も立派な好々爺である。ところがこの好々爺が一度演壇に立つと、彼れの心からの叫び聲と、彼れの熱烈

な雄辯とは、あらゆる階級の人々の心底に訴へるの力をもつてゐることが證據立てられた。四月五日及び七日の下院における彼れの演説は彼れをして一躍、第一流の討論家の列に入らしめないでは置かなかつた。彼れは持主側の賃銀に反對して、かくのごとくんば、『坑夫は『怠業(アイドル)』しても勞働してもともに飢えるであらう』と。彼れがこういふた時に、何人もそれが百二十萬の坑夫の心からの叫びであることを否定することはできなかつた。就中、四月七日の議會における彼れのロイド・ヂョーヂとの討論が、ロイド・ヂョーヂの詭辯を遺憾なく論破してゐたことは、資本家側の新聞紙と雖もこれを承認しないではゐられなかつた。

だが、この『産業停止』の戰ひにおいて、百二十五萬の坑夫の智的源泉として最高の指導的役割を演じたものはスミスでもなく、ダンカンでもなく、實に今年三十三歳の一靑年、フランク・ボッヂエスであつた。彼れはロイド・ヂョーヂに從へば『非常に有能にして英明な人物』である。『デーリー・ニュース』に從へば『ホワイト・ホールの蝌斗にとつての惡魔』となりつゝある。『デーリー・メール』に從へば彼れは『歷史を造くる人』である。『デーリー・グラフヰック』に從へば彼れは『英國の勞働運動における最も光彩ある人物』でゝある。そして『イヴニング・ニュース』に從へば、彼れはやがて『勞働內閣の首班』となるべき人である。

彼れはチエプストウに近く生れて十四歳の時から炭山に働いた。二十歳の時にはラスキン・カレッヂの奬學金をうけた。二十五歳の時には既に勞働組合の一方の指導者であつた。三十歳の時に百萬の坑夫組合のセクレタリイとなつた。一九一九年のサンキー委員會では彼れは一流の學者と伍して少しの遜色がなかつたばかりではなしに、彼れの知識、辯舌、才能は、押しも押されもしない勞働運動の指導者としての彼れの現在の地位を保障した。『産業停止』がきた時に、彼れはこの國の首相及び祕相と卓子を圍むでこの國の勞働階級がその才能においても老練の政治家を瞠若ならしめることを明らかにした。

彼れの容貌は晴朗で、その額は理智と教養との人であることを示してゐた。そしてその辯論は條理井然として理智の人に訴へるとともに、熱情をもつて群衆に訴へる——然り『火に滿ちて』ゐる。

この白面の靑年こそロイド・ヂョーヂの謂ふところの英國における『空前の危急』においての最大の立物として、巨人のごとくに立つてゐた。

三、政府の態度——ヂョーヂ——管理の廢止——ホー

ンの人物――政府と坑夫組合――指導者を注視せよ」

――政府の八ケ條――『人間性』――『國有』――

この『產業停止』を通じて、ロイド・ジョーヂ政府のとつた態度は、英國における產業の戰が純乎たる革命及び反革命の性質をもつてゐるものであることを明らかにするために、大なる寄與であつた。

ロイド・ジョーヂは世界の詭辯家傳中に異彩を放ちつゝある政治家であつた。滑稽か、噴飯か、憤りかを感ずることなくして彼れの演說を聽くものは詭辯學の崇拜者であつた。彼れは三角同盟の指導者との會議において曰く、『社會の凡ての各部分に對して、政府の仕事は絕對に公平でなくてはならぬ……若しそれが公平でなくなつた時には尊敬と權威とに値ひすることを止むであらう』と。然り、政府は公平であらねばならぬ。そして公平なる政府は未だ嘗てこの地上に存在したことがなかつた。階級闘爭が近代政府の主要なる役割となつてきてから政府はその『尊敬と權威』とに値ひすることから益々遠ざかつていつたのである。わが『公平』なるロイド・ジョーヂ政府は正にこの『尊敬と權威』と止むべき、代表的な政府として立つた。

ロイド・ジョーヂ政府が炭礦資本家の側にあることは彼れの最初からの使命であつた。そしてそはサンキー委員會の報告に對する彼れの背信以來あまりに顯著なることであつた。

遂いことは今ま問題でなかつた。今度の『產業停止』についてロイド・ジョーヂ政府は如何なる役割を演じたか。

今度の產業戰は、既に今年三月の炭礦業のデコントロールの時に始まつたといふことは、決して誤つた觀察ではなかつた。政府の炭礦業管理は戰爭とともに始まつたのであるが、その管理は一九二一年八月末において終息することとなつてゐた。この八月末まで鐵道の管理も繼續されることとなつてゐるのである。ところが炭礦業の好景氣の際に、この炭礦業から、資本家とともに、勞働者の艱難な勞働――バアナアド・ショウの言葉でいへば『非人間的な坑夫の勞働』において、莫大な利益をその管理中に獲得した政府は、炭礦業が未曾有の不況に陷つた一九二一年の始めに、突如として炭礦業の國家管理の廢止をもち出したのである。二月十五日の國王の敎書のうちにこのことが明らかにされた。そして二月二十三日、政府は炭礦雇主及び坑夫組合の代表者と會見して、三月末限りに、炭礦業の國家管理を廢止することを宣告したのである。

炭礦業不振の際に國家がその管理を廢止した後に、何ごとが

この産業のうへに起つてくるかは、政府も、資本家も、勞働者もみなこれを知つてゐた。知らなかつたのはパイプを啣へて、お天氣の日に洋傘をもつて、落付いて往來を歩るいてゐる英國の『平靜な公衆』だけであつた。

資本家の側は、勞働者の側のしたごとくに、最初はこれに反對して立つた。エヴアン・ウヰリアムスは『豫期せざる管理の廢止』が資本家の坑夫操縱のためにいたく不利益であるとして反對を聲明した。しかし『平靜な公衆』は舞臺の表だけを見せられてゐた。八十歳のサラ・ベルナールを若い娘として受取るべき運命のもとに公衆の名が書かれてゐた。

持主側と政府との間には早くから管理の廢止について秘密會議を開いてゐたことを信ずべき多くの證據があつた。そして最後に管理の廢止後における準備について、政府と資本家との間に充分の協定が整つた時に『豫期せざる』デコントロールだといふ持主の代表者は管理廢止の賛成者として立つた。かくして百二十五萬の坑夫にとつての敵はたゞ一億八千萬磅の資本の持主としての持主組合ではなくしてその背後にロイド・ジョージ政府が、國家のあらゆる力をもつて立つてゐた。四月一日、坑夫組合が戰ひを餘儀なくされた時に、彼れの敵は、最早や單なる炭鑛持主ではなくて、組織的支配階級の政治的及び經濟的權力の凡てゞあつた。

最初政府を代表して立つたものはサー・ロバアト・ホーンであつた。サー・ホーンは一九一八年に始めて議會に入つた。彼れはスコツトランドの田舍から議會に出てきてまだ二年半とたゝないのに、今の政府での最大人氣者の一人である。今年の春、ボナ・ローが統一黨の首領を退いた時に、彼れの名は老將チエムバアレンと並んで、統一黨首領の候補者に計へられたほどに、英國政界の流行兒である。彼がこの名聲を博したのは彼れが昨年炭坑ストライキの調停者として立つて以來のことであるから英國の『公衆』の前に、彼れが如何に英斷として映じたかが分るのである。この政界の流行兒、貴族黨の秘藏息子としてのサー・ホーンは、彼等の期待に裏切ることなく、今度の『産業停止』に當つても、逸早く『産業調停者』資本家側の有力なる一代辯者として立つた。彼れは勞働者の側が四月一日を期して『停止』と行こうとしてゐる二日前に、既に持主側の『うそ偽りなき』代辯者として名乘りを擧げた。彼れは三月三十日、坑夫の代表者との會議の第一日において曰く、炭礦業に對する國庫の補助は全然不可能であると。ハアバアト・スミスは坑夫を代表してこれに答へて曰く、われ〳〵はパンプメンも、機關士も含むで、凡[illegible]

の仕事から手を引くであらうと。次の日、三月卅一日に、サー・ホーン、然り、この英國政界の流行兒、『産業調停者』、貴族黨の秘藏息子サー・ホーンは、再び坑夫の代表者と會見するために商務院の大臣室に安樂椅子を並べて待つてゐた。そして決心した坑夫の來らざる代表者の來るのを空しく待つて居たのであつた。

坑夫組合はこの日百萬の組合員に、その日の中夜を期して一齊に仕事を休むことを傳へた。百萬の組合員は一人のごとくに仕事を休むだ。この日の『タイムス』に曰く、坑夫は遂に昨日『革命の水の中に飛びこむだ』と。國王はこの夜勅書を發して曰く、英國は『非常時の狀態』に入つたと。この宣言のもとに、一九二〇年の法律によつて、政府は『公けの安全』のために廣大な權力を與へられることになつた。政府の戰鬪準備は整つた。政府は劍を提げて、勞働者の『革命の水』に面して立つた。

四月二日、サー・ホーンはデーリー・ヘラルド』の謂ふところの『大臣によつて曾てなされたことのない最も不名譽な陳述』によつて、坑夫組合の立場に對する非難を始めた。四月五日、彼れは英國貴族黨の秘藏息子としての名聲を博すべく、再び四月三日の陳述を繰返して、坑夫組合の立場を非難するために、長時間の演説をした。その長時間の演説は、勞働黨の妨害のために一層長時間となつたほどに、非常な妨害と嘲罵とをうけた。この非常な妨害嘲罵のうちに、彼れは坑夫組合の二つの原則――『プール』と國庫の一時的補助とが全體不可能であつて、この原則を除外するに非ざれば妥協は不可能であると主張した。然り、持主側の意見そのまゝが、『秘藏息子』の口から『國家』の聲として吐出されてゐたのであつた。ロイド・ジョーヂもまたこの日の議會において國庫補助の『原則』として誤謬であることを主張した。しかし彼れは最後に妥協の希望をほのめかしてその演壇を下つた。

その翌々日、四月七日ロイド・ジョーヂは坑夫組合の代表者と會見した。彼れはこの會議の第一の條件として、パンプメンを仕事に歸することの必要を說いた。彼れに從へば、炭礦は國民の重要な財產であつて、この重要な財產は、何ごとよりもさきに『國民的利益の安全』のために保障されなければならないと。そして、パンプメンに對しては、『國民的利益の安全』のために交涉の進行中に、三月三十一日に支拂はれたと同額の賃銀が支拂はれることが約束されたのもこの日であつた。

パンプメンが働くことは從つて炭坑の氾濫を防ぐことは、正しく『國民的利益の安全』のために必要なことであるに相違なか

つた。坑夫組合はこの點について政府と爭はうとはしなかつただが、パンプメンが仕事に就いた時に、資本家側は失ふところはなかつた。そして勞働者のみ飢餓の狀態に置かれなくてはならなかつた。そこでダンカン・グラハムは下院で次のように述べた、若し國民的利益の安全のためにパンプメンに三月三十一日までと同樣の賃銀が支拂はれるとするならば、協議の進行中何故にその他の坑夫に同樣の賃銀を支拂ふことはできないか。と。しかしグラハムの注文は不可能であつた。

『國民的利益』とは、ロイド・ヂョーヂにおいては、勞働者の利益とは全然敵對すべきものであつたからである。そこで坑夫組合とロイド・ヂョーヂとの交渉は不調に終つた。

その翌日、ロイド・ヂョーヂは再びこのパンプメンの復業を條件として、坑夫側と協議するために會商をフランク・ホッヂエスに送つた。ホッヂエスは條件付きの會見を拒絶した。

この間に、この國における最左翼の代表者としての『コムミユニスト』は屢々勞働者に警告を發しつゝあつた。彼等の指導者の態度を注視せよと。

その指導者の一人、最も勢力ある指導者の一人にジエ・エッチ・トーマスかあつた。また他の一人に『共産黨員』ロバアト・ウヰリアムスがあつた。ハリイ・ゴスリングがあつた。クラムプもあつた。これ等の『有力な指導者』は九日ロイド・ヂョーヂと會見して、坑夫組合とロイド・ヂョーヂとの交渉を復活せしめることに成功した。そして十一日朝の兩會見となつた。この兩會見は双方の讓歩によつてゞあつた。政府は『パンプメンの復業』を要求しなかつた。その代り坑夫組合は、炭坑の安全のために資本家または政府のとる手段――ブラック・レッグ――に干渉しないといふことを約束した。

この日の會見が無効に終つて、十二日の會見となつた。この日の會見は速記によつて公表された。その日、國庫の補助は全然不可能だといふてきたロイド・ヂョーヂ政府から八ケ條の妥協の條件が提出された。その条文は次のごとくである。

一、坑夫は利潤の國民的『プール』と賃銀の國民的解決とを要求する。政府の意見ではこの提案のうちの一方は實際的であるが他はそうでない。

二、各地の炭礦區域において坑夫と礦山所有主とが、特定區域の礦山能力と無關係に、この產業に於ける賃銀を平等にするための共同の『プール』に投與することを餘儀なくされるところの『プーリング』の協定は、國家によつての炭礦業の完全にして永久的な管理を再設することなくしては實行することができない。

三、純粹に任意的な計畫は從令有効に開始することができるにしても必ず失敗するであらうし、またそれは疑はしいことである。

四、國民的「プーリング」に必要なやうな嚴重な管理は、坑夫であると礦山持主であることを問はず、この産業に從事してゐるものから、必要な生産誘因を奪ひとるであらう。かくして礦山の生産力が不振に陥り、生産費が増大し、産業は外國の市場で苦境に陥り、そして石炭の増大した費用が、われ〱の他の産業を外國の商業において重大なハンヂキャップを付けるやうに、生産費を増大するであらう。そはこの國における多數から生計の方法を奪ひ、また他のものに生活費を増大するであらう。

五、各礦區において、各礦區における産業進行上第一の要求である標準賃銀が存在すること、そしてこの標準賃銀が滿たされるまでは利潤支拂が行はれないこと。各礦區においてこの標準賃銀を決定する原則は國民的に決定さるべきこと、そして各礦區において決定すべきその額はこの會議における討議の議題であるべきこと。標準の超過の場合の各礦區の賃銀の調査の方法も同じく國民的に決定さるべきこと、そして特定礦區における整調上の事情は、炭礦持主と坑夫との同數の代表者から成立する國民的委員會に委託さるべきこと。

六、この標準賃銀を決定するについては、たゞに石炭の價格について顧慮するのみではなしに、生産費の減少によつて賃銀を改善することの可能性についても、また坑夫と炭礦持主とのより密接な協同が行はれべきことについても顧慮さるべきこと。

七、坑夫の標準賃銀に對する持主の標準利潤の關係の問題、並に超過利潤の分配は、炭礦持主の利潤がこの産業に支拂はれた賃銀に對して如何なる割合をもつべきかを決定するの見解をもつて、この會議において、論究さるべきこと。

八、若し、この産業において支拂はるべき賃銀の割合について、坑夫と炭礦持主との間に、經濟的基礎のうへに立つて、ある協定が成立するとすれば、またはした時には、最も酷く行はれた地方における賃銀の急激の減少を緩和するために、短期間、貸付またはその他の方法によつて、援助を與へることを惜しまないであらう。

この八ケ條のうち國民的賃銀局の設置について政府は贊成の意見を表明してゐるのであるが、それとともに國民的プールには全然反對であることを明らかにした。そして『プール』なくしては『國民的賃銀』は事實上存在することのできないものであることは前に述べてきたとほりである。そこで坑夫組合の代理會長ハーバート・スミス曰く、政府の提案は最後の一ケ條を除いては全然株主側の提案そのまゝであると。そこで勞働者側は直に政府の條件を拒絶した。そして彼等の基礎條件としての『國民的賃銀局』と、『國民的プール』とを固執して立つた。

何故に資本家側は國民的プールに反對したか。それは彼等の利潤のために生産の原則を兩立しないものであることは前に述べたとほりであつた。エヴアン・ウヰリアムスは十二日の會議の席上に述べて曰く、かくのごとき組織は人間の生産に對する獎勵(インセンチヴ)を破壊すると。然り、これが彼等の唯一つの立場であつた人間はたゞ利潤への動機によつてのみ生産するものであり、この利潤への動機を失ふことは生産への動機を失ふことであるとは、彼等の人間性の解釋であり、彼等の道徳の標準であつた。低くして卑しきは資本主義のものにおける『人間性』であつた。

フランク・ホツヂエスはウヰリアムスに次いで立つた。彼れは彼れの『國民的プール』の性質と運用とを明瞭に述べた。そしてこのプールの結果は最大の犧牲を拂ふものが、資本家でなくして、比較的好況のもとにある炭礦に働く勞働者であることを明らかにした。然り、その犧牲の九十%がこれ等の勞働者の賃銀からきたるものであることを明らかにした。そしてこれ等の勞働者――例へばヨークシアの坑夫は、他の貧しき礦區に働く彼等の同僚の援助のために、彼等の多からぬ賃銀の一部を割いて喜むでこれを『プール』のうちに投入するの覺悟であると說いた。そして資本主義の『人間性』に挑戰して曰く、坑夫がこのように大なる犧牲に甘んじてゐる時に、何故に資本家のみその一時のより小さき犧牲によつて生産への獎勵を要求するかと。

最後に『公平』なる首相ロイド・ヂョーヂが立つた。彼れはその『人間性』を見ることにおいて資本家側の代表者エヴアン・ウヰリアムスとその意見を同じくするの光榮を擔つた。然り、彼れもまた資本主義的『人間性』のうへに彼れの議論の第一の基礎を置いたのであつた。そして更に一歩を進めて『國民的プール』は『國有』の一種であつて、國家的管理なくしては實行不可能の命題であるといふことに力を入れて主張した。

そこで坑夫組合と、政府並に雇主側と交渉は再びその基礎的原則においての利害の不一致のために不調に終つたのである。こゝに『産業停止』は一の規模をその最極に擴大するの順序となつた。爭ひは益々その熱氣を増し、益々その色彩を明らかにしてきた。そして英國における空前の一大階級戰が、組織的資本階級と、組織的一大勞働團との間に開始せられる。凡ての段どりへと、その舞臺を進めつゝあるもののごとくに見えた。

四、三角同盟の『再威』――『國王の大……』――坑夫組合の訴へ――トーマス――ソリダリテ――運輸勞働者の立場――いよ〱ストライキの宣言――驚駭な瞬間

三角同盟の態度が、この産業戰をして『空前』の大爭鬪へと導いたことは明らかであつた。三角同盟の脅威！然り、三角同盟の『脅威』がきた。現實にその脅威がきた。その『脅威』こそ嚴肅た『脅威』として人々のうへにかゝつてゐた。革命を見る人の心で、人々はこの『脅威』のもとに置かれてゐた。

三角同盟は、一九一六年に形式的に成立した。しかし既に一九一五年に事實上の成立をとげてゐた。その九ケ條の憲法は既にこの時に協定をとげられてゐたのである。三角同盟ができた時に、『タイムス』はこれを非難して、それは憲法上の政府を驅逐し、國民に對して責任を有する△△の大臣を恐迫するものである、といふた。

三角同盟のこの恐るべき力は未だ一回も實現されず數年かを過ぎた。そして今年の『産業停止』にと面することとなつた。『デーリー・ニユース』はこの産業戰の當初に賢しくも次のように述べた今や三角同盟が繼續するか否かを決定するの時がきたと三角同盟は正にかくのごとき時に面した。そして英國は、この三角同盟に面して立つた。

三月三十一日のことであつた。サーホーンガ坑夫組合の代表者と會見すべく、商務院の大臣室に安樂椅子を並べて朝の何時間かを待ちあぐんでゐた時に、坑夫の代表者は、その『蝌斗』に會見することの代りに、『ユニテイ・ハウス』の木椅子のうへに彼れの『同僚』と會見すべく歩みつゝあつた。そこに彼れの三角同盟の他の二大團體の代表者クラムプとハリイ・ゴスリングとが彼れのきたるのを待つてゐた。

この會合において、坑夫組合は、三角同盟の援助に訴へた。三角同盟は正に動くべきであることを主張した。

この會議の後に、シイ・テイ・クラムプは國民鐵道從業組合のために次のような陳述をした『わく／＼は事態の嚴肅のために深く印象された』と。ハリイ・ゴスリングは運輸勞働者組合のために次のような陳述をした、事態は……しかし『嚴肅』であると。

その間にチエ・エツチ・トーマスが海外から急遽して歸つてきた。トーマスは政府と資本家にとつての、平和の砂石であると見られてゐた。

『コムミユニスト』は再び勞働者に告げて曰く、汝等の指導を注視せよと。

クラムプは既に三月三十一日、坑夫に對する資本家の態度

——賃銀の『よろめくほどの切斷』は全勞働者に對する『大切斷』の第一步であることを證明してあつた。坑夫への賃銀切斷はやがて鐵道從業員への切斷である。そしてそはやがて英國の全勞働者への切斷である！然り、坑夫の今日の運命は全勞働者の明日の運命である！彼等の胃の腑を常に脅かされつゝある不幸なる多くの勞働者は誤りなく事態をそのありのまゝに感ずることができた。多くの勞働者の胸に、坑夫の胸に打つ恐れと、そして憤りとが、同じように鋭敏に響いた。この瞬間であつた、勞働階級のソリダリテの偉大な望みの見えてゐたのは。

英國勞働階級のソリダリテの望みは日毎に濃厚になつてきた。カーヂフの鐵道從業員に逸早くも坑夫との協同動作をとることを決議した。ニユウ・カッスルも、サウス・ウエールスも、そこで四月四日までに、英國の全體を通じて五十萬の組合員を有して、英國運輸業の咽喉を扼つてゐる鐵道從業員組合員の九十八％が坑夫とともに立つべく決した。運輸勞働者をまた各地において鐵道從業員とともにその態度を決しつゝあつた。

英國勞働黨の首領クラインスのいふたことは英國の勞働運動において眞理であつた。彼れ曰く、勞働黨の指導者の任務は指導することではなくして從ふことであると。その指導者の從ふべき時がきた。

四十五萬の會員を有する運輸勞働者組合の執行委員會は六日の會議で次のような決議を通過した。

『われ等は坑夫を援助するために、如何なる範圍にも必要であるにしても、われ等の力の及ぶだけの凡ての援助を與ふべきである』

次いで八日の代表者會議で同一の決議が通過した。そしてその日の午後六時には鐵道從業員組合の代表者としてのトーマスと、運輸勞働者組合の代表者としてのロバアト・ウヰリアムスとは次のような陳述を發表した。

『鐵道從業員組合並に運輸勞働者組合の執行委員の合同會議は彼等の雇主及び政府に對して、坑夫組合聯合とその雇主または政府との間における協調が再會するに非ざれば、三角同盟の充分なるストライキの權力は、次の火曜日の中夜とともに行使されるに至るべきことを警告すること』

かくして『次の火曜日』——四月十二日がいよ〳〵三角同盟の初めてその權力、然り、『その大臣を脅かし、憲法上の政府を脅迫』せんとする三角同盟の恐るべき權力を使用するの時と定められた。この瞬間こそ實に嚴肅なる瞬間であつた。この瞬間であつた、往來をゆく人たちのうへに憂愁の色の見えてゐたのは。

十二日夜のストライキは坑夫側と政府との交渉中であるといふの理由のもとに三月間延期となつた。そして金曜日（四月十五日）の午後十時までに交渉が解決しなかつたならば、その時間にいよ〳〵ストライキが開始せられるといふことが宣告された。その金曜日が刻一刻と近づきつゝある時に、英國は眞に空前の危機に際會しつゝあると思はれてゐた。

五、政府の戰術――軍隊の召集――世界歴史あつて以來の不名譽な『聯國團』――『國家』と『全社會』――『社會主義』――ロイド・ヂョーヂの活躍――『ニュー・ステーツマン』――『政治的』へ

政府は早くから戰ひの準備を怠いでゐた。政府は最初から持主の側に立つてゐた。政府が炭礦業の管理を突如として三月に廢止した時に、勞働者に對する政府の密謀は、勞働者の間に鋭敏に感得されてゐた。『分割して、そして征服する』といふ政府の戰術はデコントロールの時からして勞働者の間に恐怖をもつて信じられてゐた。政府がいよ〳〵『産業停止』の『公平』なる仲裁者として舞臺のうへに現れてきた時に、政府の意見は老坑夫ハアバアト・スミスがロイド・ヂョーヂの面前で喝破したとほり『雇主の意見』そのまゝであつた。雇主の意見そのまゝと同じく『プール』の計劃をもつて生産への奬勵を破壞するものであるといふた。

やがて政府は一歩を進めた。政府の戰術は積極的となつてきた。

四月四日、既に政府は軍隊の力を使用することの、不名譽なる働きを始めた。愛蘭から、軍隊がストライキ破りのために、逆動員を初めたことの報導されたのは既にこの日のことであつた。

四月八日は政府がその『あらゆる資源』によつてストライキを破壞せんことを汎く國民に布告した日であつた。ロイド・ヂョーヂはこの日の議會において告げて曰く、政府は、われ〳〵の共同團體の使用しうる『あらゆる資源』を使用するであらうと。そして『國王の軍勢を強大にするために』陸軍と海軍と航空隊との豫備隊を召集することを國王に忠告したといふことを議會に告げた。彼れの演説が終ると議長ロウサアは國王ヂョーヂの勅書を朗讀した。それは『國王自身の手によつて署名された』といふことが特に告げられた意味深い勅書であつた。その勅書によつて、『嚴肅な危機』のもとにおいて、陸軍、海軍及び航空隊の豫備隊が召集せられることが宣告せられた。この日の英國議會は、『英國の議會史に前例のない悲壯な光景』であると報導された。

次の日から豫備隊の召集が始つた。倫敦の一指揮官は勞働者

に告げていふた。『われわれは今や四ヶ年間戰つてきた獨逸と同様に恐るべき敵に對して國家を防衞するために』豫備隊を召集しつゝあるのであると。到るところの辻々に、國王の勅書が貼り出された。人々の心は一九一四年八月の恐怖すべき昔を思出すべく、悄々として貼紙に面した。やがてケンシングトン公園の鐵門が鎖ざされた。そしてカーキー色が天幕のうちに出沒するの光景物々しく見えた。翌日の繪入新聞は豫備隊登錄の光景『護國團』の寫眞で滿たされてゐた。實に勞働團體の『罷業』を破壞するために六十四萬一千の軍隊を召集すべく議會の協贊がえられたのである。そしてそのうちの二十萬は『護國團』の創立のために要求せられたものであつた。然り、それは純然たるブラック・レッグ――同僚道德の破壞のために使用すべく、ロイドチョーヂ政府によつて始めて創制された、世界歷史始まつて以來の不名譽なる軍隊の一團であつたのである。

六、『黑い金曜日』まで ―三角同盟の宣言――『內亂の挑發』――原則のための戰ひ――私有主義對社會主義――議會主義對直接行動――同胞相戰ふべくハイド・パークに銃劍が滿ちた。

凡ては『黑い金曜日』へと急いだ。

舞臺は三角同盟の『脅威』と、ロイド・チョーヂの『國家』との戰ひの舞臺となつた。三角同盟は四月十一日長文の宣言書を發表した。それは支配階級の挑戰に對する組織的勞働者の雄辯なる答であつた。その全文は次のごとくである。

炭坑夫は彼等の雇主によつて『鎖出し』をされたのである。國民的鐵道從業員組合及び運輸勞働者聯合はその力の及ぶ限りの援助を彼等に與へることに決した。……炭坑夫『鎖出し』は勞働運動の歷史上における危機である。そのうちに含まれてゐる爭點は勞働階級の凡ての部分にとつて致命的に重要である。組織的勞働者は、……人民の生活標準に對する侵食を許さないであらう。そしてこの標準がよつて維持されるところの勞働組合組織に對するあらゆる攻擊を極力排擊するであらう。……炭礦持主によつて要求された賃銀の空前の引下げはそれ自身その精神において挑戰的であり、そして承諾することが不可能である。……數時代の間、勞働組合運動はその綱領の劈頭において國民的賃銀協定の樹立を主張してきた。坑夫も、鐵道從業者も、運輸勞働者も、長い間かゝつての努力の結果これを獲得したのである。今や炭礦持主は、炭坑夫は地方別協定に逆轉することゝ主張して一方にこの原則を排斥してゐるとともに、サウス・ウエールス、スコットランドまたはダラムにおいて石炭を掘る勞働者がその經濟的地位を、ヨオクシャア、ランカシャアまたはミッドランドにおける同一組織の組

合員であり、同様な仕事をなしつゝある彼れの同僚労働者から全然區別すべきことを宣言した。……この我儘勝手にして不正な行動は労働組合主義に致命的な原則を脅威する。そは坑夫聯合の統一を破壊することを企らむだのである。今日の炭坑夫のうへに課せんとしてゐる條件は、拒絶するにあらざれば、明日は他の種類の労働者のうへに課せらるるであらう。……現在の地位に對する政府の責任は炭礦持主のそれよりも重い。……首相は組織的労働者をもつて國民生活を脅威するものであると非難した。われ／＼は答へる。若しも國民の幸福が脅威されたとしたら、そは労働者によつてではなくして、彼れと、彼れの統裁する政府とによつてであると。われ／＼は好むでではないが、止むべからずして、現在の政府が産業的交渉にむいて公平なる仲裁者でなくして、積極的な（縦令秘密にせよ）偏見者であり、そしてそは平和の名において語りながら、戦争を奨励するための行動をなしてゐるといふことの、結論に到着せざるを得ないのである。……義勇隊の召集のうへに、政府は組織的労働者に反對して使用するための機關として義勇軍を組織するの、新らたなる、そして忌はしき方略をとつた。かくして政府は明かに流血と内亂とを挑發するの厳粛な責任を引受けたのである。

スミス——ホッヂエス——アブラハム——クラムプ
——トーマス——ゴスリング——ウヰリアムス

三角同盟はその二日後、四月十三日夜、いよ／＼金曜日からストライキが決定された時に、再びユニテイ・ハウスから次のような宣言を發した。

『同僚労働者よ、われ等は將に重大な産業的闘爭に入らうとして、漏烈正に戦きんとしてゐる。金曜の夜十時鐵道從業員と運輸労働者とは彼等が第一に炭礦所有者によつて、第二に政府によつて拒絶された賃銀及び雇傭條件を規律する原理を炭坑夫のために獲得するの努力のために、彼等と進退をともにするのである。

『炭坑夫は彼等の賃銀を國民的基礎のうへに規律するの權利を拒絶された。……鐵道從業員と運輸労働者とは國民的賃銀協定の價値を充分に知つてゐる、彼等はこの方法によつて他の如何なる方法によつてよりも利益をうけてきた。そは國民的組織の勝利である。炭礦持主と政府とは炭坑夫聯合からこの重大にして適法な成就を奪取せんと求めてゐる。……挑戦が與へられて、坑夫がこれをうけとつたのである。しかし彼等は單獨で戦つてはならない。鐵道從業員と運輸労働者とは味方として立つてゐる。……われ等は革命を宣言してゐるのではない。われ等は協力して基礎的な労働組合の權利のために立つてゐるのである。今日この權利がわれ等から拒絶されたとしたら今後における全労働組合運動に對して拒絶されるであらう。戦ひは勝たなくてはならぬ。またそは勝つであらう。英國の労働組合主義は、その多年の艱難努力と犠牲とによつて適法に獲得した労働組合の成就を破壊せんと企てゝゐる英國の組織的資本の結合した努力に對して勝利を占めるであらう。

スミス――ホツヂエス――クラムプ――トーマス――
ウヰリアムス――ゴズリング――スタワンス――ムーア

この宣言を讀むものは英國勞働階級が如何なる心をもつて『産業停止』に面したかを知ることができるのであらう。然り、三角同盟は『賃銀及び雇傭條件を規律する原則』――『國民賃銀局及び國民的プール』の二大原則のために戰つてゐることを明らかにしたのである。そしていふた『炭坑夫は單獨で戰つてはならない』と。誰れかこの瞬間に三角同盟の決然たる態度を疑ふことができるであらう！その日、三角同盟は總同盟罷業を決したのであつた。そしてトーマスとウヰリアムとによつて更に次のような通告が首相邸へと送られた。

四月十三日

親愛なる首相――われ等は、國民的鐵道從業員組合及び國民的運輸勞働者聯合によつて滿場一致で通過した來る金曜の午後十時に彼等の組合員を召集するの決議を貴下に通達するの命をうけた。

この決議は、坑夫聯合から、彼等の商議の結果についての詳細と、且つ解決の基礎に到達することの失敗との報告をうけた後に、通過されたものである。

ヂェ・エッチ・トーマス
ロバアト・ウヰリアムス

次の日にロイド・ヂョーヂと三角同盟の二つの姉妹團體としての鐵道從業員組合並に運輸組合の代表者とがダウニング街で會見することとなつた。出席者に勞働者側からトーマスがあり、クラムプがあり、ウヰリアムスがあり、ゴスリングがあり、ビエビンがあり、ベン・スミスがあり、政府からロイド・ヂョーヂを初めとしてチエムバアレンがあり、ホーンがあり、ゲデスがあり、ブリッヂマンがあつた。この日ゴスリングは運輸勞働者を代表して、彼等が四十五萬の會員を提げて『同僚道德』のために戰ひに入るべきことを宣告した。彼れの宣告はダウニング街への爆彈のごとくに響いたであらう。そしてトーマスは五十萬の鐵道從業員を代表して『國民的原則』のために戰ひに入るべきことを告げたのであつた。

この宣告に對するロイド・ヂョーヂの應戰は、應戰ではなくして、挑戰であつた。彼れに三角同盟の態度をもつて、私有財産の主義の基礎を動搖せしめる『社會主義』であると共に、そは『直接行動』によつて憲法の基礎を破壞するものであると論じた。然り、彼れの見事なる手際によつて、過去十數日の復雜してゐる戰ひは簡單なる二つの命題に要約されたのである。曰く私有財産主義對社會主義、曰く議會主義對直接行動の戰ひと

戰ひは『黒い金曜日』に入るべく、漏刻正に盡きんとしてゐた。

ハイド・パークも遂にその鐵門が鎖ぢられた。銃劍と、ロリイと、『ブラック・エンド・タン』とは愛蘭に對して用ゐられただけではなかつた。戰ひは獨逸に對して戰はれただけではなかつた。勞働者の『敵』に對して戰ふべく、然り同胞相戰ふべく、ハイド・パークに銃劍が滿ちた。カーキー色が再び倫敦を支配すべく始めた。『愛國心』と『善良な市民』と、『全社會』との名において、支配階級とブラックレッグとを救ふべく英國の全勞働階級のうへに宣戰が布告せられたのである。

勞働者階級の應戰もまた……、精神に滿ちてゐるものに見えてゐた。鐵道機關士及火夫組合もストライキの宣言に加はつた。電燈從業員組合もストライキに決した。倫敦の夜は闇黑となるべく脅かされた。そして『黒い金曜日』のきたるのを待つた。

七、『黒い金曜日』が來た――『モスコウの陰謀』――その日の光景――政府の態　トーマスの人物――ホッヂエスの演說――ヂヨーヂの書簡――坑夫組合の態度――三角同盟は死んだ――坑夫は苦しい長い戰ひに入つた。

『黒い金曜日』がきた。銃劍の響と、三角同盟の脅かしとのうちに、倫敦の夜は明けた。六十四萬の軍隊、二百萬の三角同盟との脅威に包まれて、金曜日の夜が明けた。『空前の危機』――然り、その日は空前の危機を前にして曉を告げた。

ノウサムバランド侯は、この時の英國の支配階級の心を、統一黨のある會議でありのまゝに語つた。彼れに從へば、三角同盟は革命を企てゝゐたのである！それは英國の王制と議會制とを破壞せんとする『モスコウの陰謀』である！(Morning Post, Ap. 22) 實にこの貴族のいふてゐるとほり、そこには『英國における直接行動を指導する赤軍の前衛』としてレニン折紙付きのロバート・ウヰリアムスが立つてゐた。またそこにはヂヨーヂ・ランズベリイ――英國勞働運動の……精神としてのヂヨーヂ・ランズベリイが四方にその……精神を鼓吹しつゝあつた。……精神はこの瞬間に既に英國勞働運動のうへに指導的の精神となるべく、勞働階級の、未だ歷史上に經驗したことのないほどのソリダリテの示現のもとに、金曜日の一日は、英國にとつての、そして勞働階級にとつての一大試練の日として、人々の心に闇影を包みつゝ、刻一刻と最後の瞬間へと進むもののごとくに見えてゐた。

四月十五日、倫敦では林檎の花の眞盛りの時であつた。その

日の午後である、時ならぬ降雪が幾時間に亘つて倫敦の空を闇く、町を白く包むだのは。――この瞬間、私は深く外套にくるまつて、ハイド・パークの側らを歩るいてゐた。往來は人の足音を絶つた。たゞカーキー色のみが劍を提げて公園の門前に立つてゐるのを見た。

私はカール・マルクスの言葉を思ひ出す。第一インタナショナルの本部を英國から瑞西へと移さうとした時に、マルクスはこれに反對していふた、英國は革命のあらゆる物的の要素が備はつてゐる、そしてたゞ革命の精神が缺けてゐると。

四月十四日の夜は、英國の二大階級にとつて最後の夜であつたことは、舞臺の背後を知る人だけに知られてゐたのであつた。その夜、統一黨の有力なる議員の幾人かがロイド・ヂョーヂを訪ふて、内亂の避けなければならないことを說いたといふことが傳へられた。然り、この瞬間にロイド・ヂョーヂ政府が膝を屈して出ることが既に決定されてゐたと傳へられた。だがロイド・ヂョーヂはその『敵』の心をよく知つた。

『汝等の指導者を注視せよ』とは、『コムミユニスト』が幾度となく意味深く警告してきたところであつた。勞働者の指導者として、この空前の危機を擔つて立つてゐるものに、トーマスとウヰリアムスがあつた。ロバアト・ウヰリアムスは前に述べたとほり、共產黨員であり、また赤色國際勞働組合の指導者の一人であり、レニンの謂ふところの英國における『赤軍の前衛』として知られてきた人である。『デーリー・メール』に從へば彼れは正に『ダントン形』の男であつたのである。しかし彼れは『ダントン』だとしても小くとも英國流の『ダントン』であつた。マルクスの謂ふところの革命の精神に欠けた英國人としての『ダントン』であつたことこそロイド・ヂョーヂにとつては大なる幸ひであつた。そこにトーマスがゐた。トーマスは、英國の勞働者のうちで、支配階級から最大の好意をもつ迎へてられてゐる一人である。『そこにトーマスがある、』支配階級は意を安んじていゝのであつた。ジエームス・ヘンリイ・トーマスは今年五十六歳の分別盛りを『妥協』と『平和』とのために費しつゝある『穩健にして責任ある』英國流の曲型的指導者であつたのである。彼はあらゆる勢力はこの產業戰の全局面を通じて『平和』と『妥協』とのために費されてゐたのである。十四日夜、彼の力が如何に秘密に働いたかはやがて明らかにされるの時があるであらう。

その十四日夜、フランク・ホッヂエスは下院議員の集會の席上に招かれて坑夫組合の立場を説明すべく壇上に立つた。側らにトーマスがゐた。ホッヂエスはこの席上で、明瞭に、詳細に坑夫の立場を説いた。彼れの説明は深い印象を議員の一同に與へた。この席上に列つた一議員トム・ショウのいふところによれば、かくのごとき議員の集會において、一勞働組合の指導者が、かくのごとき權威をもつて語つたことは歴史あつて以來のことであると。

しかし、議員の質問に對して最後にホッヂエスの答へたところはこの産業停止の局面の變化のうへに重大な役割を演ずべく、一方にロイド・ヂョーヂ、一方にトーマスが待つてゐた。ホッヂエスの謂ふたことは、坑夫組合の二大原則としての國民的賃銀と、國民的プールとに何等の偏見を與へることがないとすれば、坑夫は一時的解決の方法として賃銀の問題について討議するの準備がある、といふことであつた。

政府黨の議員はこの答辭をもたらして夜深くロイド・ヂョーヂの門を叩いた。トーマスはホッヂエスの側らにあつて獨りうなづいてゐたと傳へられた。

その翌日、『黒い金曜日』には、新聞紙は尙ほ平和動くと傳へた。ロイド・ヂョーヂはこの朝、次のような書簡をホッヂエスに送つた。

親愛なるホッヂエス

昨夜（木曜）下院に出席した數多の議員諸君が貴下の最後の提案の意味を私に通じてくれた。

彼等は貴下の使用したそのまゝの言葉を書きとめてはゐなかつたが彼等の心中に與へた一般の印象では、取極めが一時的のものであり、且つ永久的解決を處理する場合がきた時に國民的プールの提案に關する進んでの討議について偏見を與へないとすれば、貴下は今やプールの問題を引起すことなくして、持主と賃銀の問題について討議せんとしてゐるといふことであつた。

若しそれが貴下の提案の正當な表旨だとすれば、賃銀の問題を研究する最良の方法を考究するために、私は貴下及び貴下の同僚代表を今朝（金曜）午前十一時商務院において持主との會見に招待する。敬具

デイ・ロイド・ヂョーヂ

ロイド・ヂョーヂは商務院の大臣室でホッヂエスのきたるのを待つてゐた。しかしホッヂエスは商務院に出席することの代りに、次のような書簡を送ることを餘儀なくされた。

親愛な首相

わが執行委員會は貴下の書簡を充分に考慮して、そして私に一時的解

決に到着すべき唯一つの條件は、既に貴下に示した二つの原則——即ち國民的賃銀局及國民的プールの承諾に伴ふものでなくてはならないといふことを陳述することを要求した。この場合わが委員會は、貴下の書簡に示された基礎のうへに持主と會合することの無益であることを思ふ。敬具

フランク・ホッヂス

政府と坑夫組合との交渉はかくして再び不調に終つた。坑夫組合の執行委員會は二票の多數でしかし決くたのである。ホッヂエスは辭表を執行委員會に提出したホッヂエス曰く

私が下院でなした提議に從つて行動しないこと、並に私が議員に向つて示した方針のうへに賃銀についてのこのうへの提案を聽取するために政府及持主と會見することを拒絶した執行委員會の決議に鑑みて私は私の行動が正當且つ適當なものであつたことを信じたし且つ信じつゝ、私は私の辭表を提出することの義務を感じた。

しかし執行委員會の勸告に從つて彼れはその辭意を飜した。

更に重大な事件がユニテイ・ハウスのうちに起つてゐた。『平和と安協』の才能としてのトーマスが最大の働きをなすべきの時がきたのであつた。トーマスはこの時を逸早くも捕えた。三角同盟はその夜のストライキを取消すことに決してゐたのである。

トーマスはユニテイ・ハウスで次のような陳述をした。

『三團體——鐵道從業員國民組合、機關士及火夫協會、運輸勞働者組合——から彼等の組合員に、今夜のストライキが取消されたことの通達が與へられた。』

その報導は石火のごとくに英帝國の津々浦々に響いた。トーマスは實にこの瞬間に英國の支配階級から賛辭と感謝とをもつて迎えられた。しかし何故にストライキが取消されたかは報告されてゐなかつた。それが翌日になつて、即ち四月十六日、ロバアト・ウヰリアムスによつて次のような陳述が發表された。

『鐵道從業員組合と、運輸勞働者聯合と、機關士及火夫協會の聯合會議は、四月十五日午後十時から彼等の各組合員がその勞働を撤退することのストライキの通告を取消すのほかなきに至つたことを知つた。金曜日朝の會議に面してゐた混亂の結果として、坑夫聯合に、彼れの求めた援助を與へるのに重要であつた三團體の自然的にして且つ結合的な希望が殘されてはゐなかつた。

部分的にして絕對的に不完全な同情ストッペーヂは坑夫に對して何等實質的な寄與をなすことができないで、三團體の力を弱めたであらう。木曜の夕に至るまでは勞働階級のソリダリチの著大な表現のあらゆる希望が存在してゐた。しかしその時から發生した事情は、ストライキの要求が立つてゐた確乎たる基礎を破壞した。

この會議は變化した事情の生を深く悲しむものである。この會議

は、殘念にも、その組合員のストライキを取消すことの結論に到達するほかに　くべき道はなかつたのである。

三角同盟は死んだ。未だ一度もその力を用ゐることなくして、三角同盟は死んだ。バアナアド・ショウはこれを說明していふた、三角同盟の力はこれを使用するにはあまりに偉大であると。コールはこれをもつて、『三角同盟の性質と構造との缺陷』に由來するものであると說いた（Westminster Gazette, Ap. 27）その原因の如何は研究の時があるであらう、しかし三角同盟の死んだことは疑のない事實として橫はつてゐた。然り『黑い金曜日』に三角同盟が死んだ！

坑夫は單獨で戰つてはならないといふたのは三角同盟の宣言であつた。『同僚道德』のために立つといつたのはゴスリングであつた。國民的原則のために立つといふたのはトーマスであつた。そして『黑い金曜日』は、ゴスリングから『同僚道德』を奪つた。トーマスは『國民的原則』を殘して去つた。坑夫は『單獨』での長い、苦しい、戰ひにと入つたのであつた。

（一九二一年四月廿八日――倫敦にて）

アナトール・フランスの『赤化』

バーナアド・ショウもボリセヰズムに傾むいたそうだが、佛蘭西ではアンリ・バルブユスやアナトール・フランスが共産黨に入黨した。いづれも日本の文壇にお染みの顔觸れだから面白い。

一日に二百人や三百人死んでゐるのでは、東京の町を歩るいて流感が流行やつてゐるような氣はしない。まさかに町を歩るいてゐて流感が顏にぶつかるほどの事はない。ところが唯つた一人でも、自分の知つた名前の人がやられると、すわこそ流感が押し寄せて來たといふ氣持になる。

勞農政府は『今に倒れる』『今に倒れる』を根氣よく足掛け五年間繰返してゐる、そんじよそこらの識者先生は、世界ぢうの無名の勞働者が日に日に『赤化』することには一向平氣だ。泰然自若として『今に倒れる』を繰返して居られるが。バーナアド・ショウだの、バルブユスだの、乃至はアナトール・フランスまでが赤色の流感に罹つたと聞いては、少々薄氣味が惡るいに相違ない。

ところがアナトール・フランスの共産黨入黨については、こゝに耳寄りの噂がある。といふのは斯うである。

ジノイエフ(第三インタナショナル委員長)は、マルクスの孫に當るロンゲーを手に入れようとしたが、遂に失敗に終つたので、今度はアナトール・フランスに白羽の矢を立てた。

或日フランスは巴里郊外の閑靜な書齋でルドルフ・ヒルフエルデイングの文集を讀んでゐるところへ、ジノヰエフの密使がやつて來た。ジノイエフの密使は、先づフランスに取入るつもりで、フランスの文章はヒルフエルデイング以上だなど、頻りに油をかけたが、フランスが取合はぬので、今度はポケツトから、幾束かの紙幣を取出した。彼は紙屑同樣のソヴイエツト政府の紙幣を、無理やりにおつゝけやうとした。

しかしフランスは、一も二もなく紙幣を押し除けてしまつたのでジノヰエフの密使は、今度は擲彈を取出して、共産黨入黨書と並べてフランスの前に突きつけた。そして斯う叫んだ。

『憚りながらわつちらは、バクニンの親方から、誰れでも彼れでも容赦をせぬことを敎はつた。神妙に署名をするか、それとも命を貰はうか!』。

『君が其擲彈を破裂させたら』――フランスは靜かに斯う答へた――『二人とも死ぬだらう。私は老人だ、死んでも構はぬが、君には氣の毒だ。見掛けたところお若いようだ。活き永らへてさへゐなさつたら、いつかは又た考へ直ほす時があらう』。

ジノヰエフの密使は、固よりフランスの言葉は耳にも入れず。ポケツトから有名なアルメニア人の虐殺者エンヴエル・パシヤとレーニンとの肖像を取出して禮拜した。そしてフランスをせき立てた。

そこでアナトール・フランスは、『之は私の爲ではない、私はあなたの爲に署名するのだ』と云つて入黨書に署名した。

これは獨逸のある日刊新聞の記事だそうであるが、この記事は、『ジノヰエフの暴虐は永遠には續かぬであらう。そしてフランスは靜かにヒルフエルデイングの文集を讀み耽つた』といふ、お誂え向きの詩的な一句で結ばれて居る。

レーニンも最う六七度死んだ。今更らレーニン病死も振はない。莫斯科、ペトログラードもはや何處も陷落した。さりとて婦人國有の蒸返しも氣が利くまい。水に溺れた者は藁すべでも摑みたがる。英國政府の御聲がゝりで『プラウダの贋版まで出來てゐる重寶な世の中だ。何がな助け船の吉報か。新聞に出さうなものと頸を長くしてゐるそんじよそこらの識者先生に、丁度手頃の藁すべのつもりで右の吉報を内々でお知らせする。

(山川均)

社會現象批判

梅雨期の日本

山川均

梅雨は何時あけるか

この頃の日本は――と問ふ人があつたら、何人も、梅雨空だと答へるに極まつてゐる。頭の上からは、不愉快な雲が押さへつけてゐる。濕めつぽい風が吹く。押入には黴が生える。ねだは腐つて來る。しかし畑の茄子と、胡瓜と、唐玉蜀は、ずんずん育つてゐる。

何人もこの、息苦しさを感じて居る。何人も、頭の上から何かしら押さへつけてゐることを感じて居る。唯だ少數の人のみがそれは資本主義の密雲であるといふ、明瞭な意識をもつて居る。この意識は畑の茄子のように、胡瓜のように、唐玉蜀のように育つて居る。しかし多くの人々が、唯だ之を不愉快な壓迫感として感じてゐるうちに、梅雨の兆候は到る處に現はれてゐる。疑獄事件の黴が、資本制度のお勝手元や戸棚の隅に、一面に擴ろがつてゆく。

砂利、瓦斯、阿片、滿鐵、郵便、工廠、謂ゆる最近の疑獄事件を暗誦するだけでも、大した努力が要る。或る新聞には『擧國疑獄』といふ見出しがあつた。そこで一團に志士愛國家といふ一種族が蹶起して、竹箒を物干竿の先につけたので、梅雨空の密雲を一掃しようとする。之を『國民的大運動』とはいふのである。

しかし肝腎の『國民』は靜まり返つて、一向に『運動』せぬ。國民は本能的に、黴は梅雨空の特徴的産物であることを知つて居る。彼等は、資本主義を解剖したことはない。けれども彼等は直覺的に、是等の國民的大問題が、要するに一團の資本閥と、他の一團の資本閥との間の、利害の衝突、從つて權力慾の衝突に外ならぬことを知つて居る。彼等は、到底梅雨空の雲まで屆く氣遣ひのない竹箒を振り廻して――この梅雨空だけ

は、後日の爲に安全に保存しておいて——あはよくば競爭者の手から、黴を生やす機會を奪ひ取らうとする運動に、興味を示すほどの餘裕がない。

國民は唯だ、これだけのことを知つて居る。若し知らないにしても、少なくとも感じて居る。今日の世の中の表面に泡立つてゐるものは、利害關係を異にする幾つかの財閥と、其劣敗者の悲鳴を代表する『正義』と『赤心』と、愛國と日當二圓で國民　命に傭はれる立ん坊と無賴漢、——今日の世の中は、少くとも其表面の泡沫は、これだけの『國民』で動いて居る。

梅雨は何時あけるか？　暦にも書いてない。しかし田舍の百姓はよく知つて居る。大雷の鳴る時は、梅雨のあける時である。

『量から』『質』へ

この梅雨空の雲の間から、勞働爭議の稻妻が絶え間なく閃めいて居る。大阪市電の罷工につゞいて、藤永田の爭議が起る。住友の伸銅工電線工も動きかけて居る。階級意識に於いて、遙かに東京の勞働者におくれてゐると傳へられた大阪の勞働界が、却つて勞働運動の先登に立つかのような光景を呈したところに、非常な興味がある。

最近の勞働爭議の特徴は、勞働者が過去二三年の好景氣時代に獲得した多少の地歩を擁護しようとする、防衛の鬪ひである。或場合には、この地歩が實際に脅され、或場合には、單にその威迫を感じた爲に起つたのであるが、要するに今日の勞働爭議はこの防禦の精神を特徴とするものである。

然しながら勞働者の實力は、却つてこの防衛の鬪ひ、消極的の鬪ひによつて現はれる。經濟界の萎縮と共に、勞働運動の下火となつたのを見て、過去兩三年間の謂ゆる組合運動が、畢竟好景氣時代のお祭騒ぎに過ぎなかつたものとして、組合運動の前途を悲觀する人がある。けれど今日の消極的防衛的の戰ひに、日本の勞働者がこれだけの戰鬪力を示し得たのは、過去兩三年間に於ける實戰の成果である。この二三年間に於ける日本の勞働運動が、不幸にして何物をも遺さなかつたにしても、尙ほ勞働者の間に、抹殺することの出來ぬ、階級的の自覺を遺したことは爭はれぬ。昨今の勞働爭議は、最近兩三年間に於ける日本の勞働運動の決算と見る時に、その裡には重大な意味がある。

勞働運動が一小決算期に入つて居る兆候は、東京の組合運動界にも現はれて居る。最近に於ける組合界の、最も著しい出來事は、組合同盟の分裂と、知識階級的指導者排斥の聲である。組合同盟の分裂が喜ぶ可きことであるか、悲しむ可きことであ

るかは、玆には論じない。其結果が、日本の組合運動の發達に、如何なる新しい出發點となるかも暫らく不問に附しておく。更に組合運動と知識階級との關係は如何といふ、重大な問題にも立入らない。けれども是等の現象が善かれ惡かれ、疑ひのないことは、それが組合運動の一轉機を意味して居ることである。組合運動が、内部の整理に注意を轉じたことである。此意味に於ては、同盟の分裂も、知識階級的指導の排斥も、最近兩三年間に於ける組合運動の、一小決算期に入つたことを示して居るものに外ならぬ。

日本の組合運動は、量的方面から、質的方面に入つたといふことが出來る。

然しながら、この量から質への運動は、必ずしも日本の組合運動の特徴ではない。全世界の組合運動は、今や其内部を整理して、陣容を立て直ほすの必要に會してゐる。三角同盟が事實上に潰裂したのは、最も著るしい其一例である。世界を通じて組合運動には、一種の分解作用が起つて居る。そして此作用を起したものが、大戰によつて現はれた資本制度の新しい開展と露國革命の事實があつたことはいふ迄もない。各國の組合運動は、社會□□□□□の前に、組合運動の革命を必要として居るのである。

日本の組合運動に現はれた最近の兆候は、この世界的の潮流と何等の關係がないとは云はれない。國際運動から全く孤立して居る日本の組合には、唯だ此影響は最も微弱に、そして勢ひ、半無意識的に起つて居るだけである。

刻限の暗合

政府は西比利亞撤兵を斷行し、チタ政府——このレーニン政府の出店と云はれるチタ政府——と、商議を開くに決したと傳へられて居る。

デニキン敗れ、コルチヤク失脚し、ウランゲル敗走し、セミヨノフも到底ものにならず、折角のケレンスキー蹶起說、ペトログラード陷落說も虛構報と知れ、反革命派の花が迚も咲きさうにないといふ見切りが、大抵の目先きの見えぬ連中にも見えざるを得なくなつた刻限に、丁度その刻限に、偶然にも日本が西比利亞に駐兵する『必要』も無くなつた譯である。

之をキヤピタリズムの術語に反譯して見ると、列國の對露通商の開始と共に、西比利亞に既得の利害を持つてゐた資本閥の利害關係よりも、西比利亞に新しい利害を作らうとする資本閥の利害關係の方が、□□に取つて重大になつて來たといふことになる。

鬼ヶ島征伐の新陣容

警保局長が替つたので、社會主義征伐の新陣容が出來たとか、新思想の取締が嚴重になるとか、色んな風評がある。警保局とは新思想の取締に任ずる官憲だとすれば、少くとも十年一日の如く、舊思想を繰返して居る吾々と警保局とは、最も縁が遠いものだから、どうなつても善い譯である。

いづれにせよ、新警保局とは、長い刀で人民を保護して下さると云ふから、安心である。惜しいかな、劃一主義と杓子定規の方針は取られぬそうであるが、若し全ての階級と、全ての階級の宣傳と運動とを、劃一主義と杓子定規で取締つて下さるといふ保障だけ得たならば、日本の人民はもつと安心が出來たらう。

この頃の日本

この頃の日本は、毎日じめ〳〵と雨が降つてゐる。到る所に黴が生えてゐる。床下が腐りかけてゐる。人殺しが毎日ある。學校教育を受けた青年が、徴兵除けの祈禱をして貰つてゐる。『重箱を突つくやうなこと』の嫌ひな新警保局長の下に警察が罷工幹部を一網に打上げてゐる。『時』の兆候に最も暗い連中が、『時の宣傳』をやつて居る。（六月十二日）

官公吏の個人的不正と經濟組織の不正

長谷川如是閑

此頃頻發する、官公吏の不正事件に就て、世間は大分狼狽して居るやうであるが、併し一般の組織から考察して見ると、それはあながち驚く可きことではない。その不正事件なるものは何れも經濟上の行爲であるが、今日の經濟組織は、一般にさういふ不正と同一法則の上に成り立つて居るのである。官吏に賄賂を贈り、官吏が賄賂を收め、又使用人が公金を費消し、管理者が管理權を濫用し、監督者が監督權を逆用する等のことは、特に不正と云はれて居るが、一般の不正ならさる經濟行爲も、

今日の組織によると、矢張りその特別の不正と全く同じ動機によらざるを得ないのである。

企業者が生産品を賣る場合はどうであるか、出來るだけ生産者を虐使して、それに與ふべきものを最も少く與え、然もその生産品を賣る場合には、それが社會に必要であらふがあるまいが、そんなことはかまはないで、只だ、それを高く買ふものに賣渡す。それは要するに、他人及び社會の利益を、自分の利益の爲めに出來るだけ傷づけやうとして居るのである。云ひ換へれば、社會を利益することは自分に損失を招くことになり、自分を利益させることは社會を損失せしめることになるといふ組織になつて居る。即ち社會は常にさう云ふ人々によつて脅やかされて居るのである。

商賈が物を賣買する場合はどうであるか、彼等は、賣ろふとするものを手に入れるには、出來るだけそれを安價に買收せねばならぬと考えて居る。安く買收する爲めには、極力生産者の利益を少くする努力をしなければならぬ。即ち場合によつては生産者をして、殆んど生産費以下で、その物を手離すの止むなき破目に陥らせる様な手段をも用ひるのである。即ち他人の利益を蹂躙するとによつて、始めて自分の利益が成立ち得ると考えるのである。又事實がさうである。そうしてそれを賣らふとする場合には、買手が自分の利益を固執することの出來ない様な破目に陥るのを待つて、換言すれば賣手の請求を入れざるを得ない様な境遇に立ち至らせて、その品物を賣りつけることを理想として居る。即ち賣手と買手とは敵對の狀態にあるのである。かやうな賣買の方法を、今日の法律は是認し、且つ保護することに努めて居る。凡ての人々は此の法律の保護の下にが買行爲をなしつゝある。投機取引がその最も大規模の組織である。

次ぎに勞働の場合はどうであるかと云ふに、之れ亦人を使用するものは、商品の場合と全く同一に心得えて、最も安價に勞働者を使用し、最も高い効果をその使役から生み出させやうとする。從つて使役されるものは、その勞働の効果に對して、出來るだけ高い代價を取らふとするのであるが、此の場合は買手の方に、賣買の自由、選擇の自由、條件決定の自由等を握られて居るので、被使役者にとつては、自己の利益を 使役者の利益を奪ふことによつて増大せしむる能力に乏しいことになる。が、何れにしもその兩者は、一方の利益を害することによつて他方の利益が成り立ち得ると云ふ點では、その他の場合と異る處がない。

かくの如き、敵對關係は、今日の經濟組織の根本狀態で、吾々人間の生存は、今日の場合、此の約束に背ひては成立たない

ことになつて居る。此の約束を背くとは、即ち非敵對狀態を保たうとすることであつて、お互の關係をより道德的な協定關係に置かふとすることであるが、そういふ道德的行動を取るとすると、商賣も出來ず、人を使役することも出來ず、從つて經濟的成功が困難となる、換言すれば、不道德であることが經濟的に發展する必要條件になつて居るのである。

かう云ふ組織を國家が認め、法律が保護し、社會もそれに滿足して居ると云ふ狀態の下では、「〇〇でなければ經濟的に發展しない」と云ふ法則は、肯定されて居る譯である。從つて諸官署にしても、會社銀行にしても、此の一般法則から離れた組織ではないから、その中に棲息する人々は、勢ひ同じ法則の支配を受けて居ることを感ずるのである。具體的に云へば、團體及び團體の管理者、例へば、政黨であるとか、大臣であるとか、會社そのものとか、重役とか、大株主とか云ふものは、その高等政策として、「〇〇でなければ經濟的に發展しない」と云ふ一般法則の下で、それ〴〵經濟的發展を遂げて居るのである。而してその以下の人々も、それ〴〵自分自身の高等政策を持つて居るのであるから、矢張り大臣や重役が高等政策を行ふのと同じ心掛けで、自分の高等政策を行はんとするに至るのは當然のことである。滿鐵事件、シーメンス事件の如き、高等政策に基く不正事件は、適々その一端が法律の肯定する限界を出たことによつて、世間に認められて居るのであつて、若し全體が高等政策の中に隱れてしまつて少しも足を出さなかつた時には、決して世間の耳目に上らないのである。然も今日の凡ゆる組織の經濟的維持は、その耳目に上つて來ない「不正」によつて成り立ち得ることになつて居るのである。云ひ換れば「不正」がなかつたならば、今日の凡ゆる組織は經濟的に〇〇〇〇〇のである。政黨に不正がなかつたならば政黨は經濟的に崩れる。會社銀行に「不正」がなかつたならば會社銀行は經濟的に崩れる。凡ゆる組織の高等政策は經濟的不正に立脚して居るのである。そうして其高等政策は高等道德として肯定されて居るのである。

然るに今日の組織に矛盾のある點は、一方で現在の社會の經濟的維持を「不正」に立脚せしめ乍ら、他方に於ては成る可く不正を排斥することによつて成立し得べき組織を造らうとして居る點である。一般社會の經濟的維持を「不正」の原則の上に立て乍ら、或る一部の組織を不正排斥の原則の上に立てようとするのは不可能なことであるが、今日の社會はその不可能を行はふとして居るのである。

諸官署や、自治團體は、即ちそれであるが、それは一般社會が「不正」に立脚した組織を持つて居るに拘らず、社會的生存は

そういふ不正の原則によつては成り立たゝないといふ質を無意識に意識して、不正の原則を排斥する組織を夢想して居るのである。即ち中央政府や、自治團は、空想として不正排斥の原則の上に立つて居る。而もその方法としては、利益相反する色々の人を集めて、一方丈の利益を計ることの出來ない様な組織を造らふとして居るのである。

故に組織自體の空想的理想は確かに不正排斥である。處が一般經濟的行爲に於て、「不正」の原則に立つことを肯定し乍ら、その人々の相互牽制によつて、不正を正さふと企てるが如きことの空想であり、不可能であることは、歐洲諸國が所謂權力均衡によつて平和を保持せんとする企てが、いつも破れてしまふことによつても察知せらるゝのである。さういふ空想的理想は必ず經濟的權力者の專制によつて打ち破られてしまふことは云ふまでもない。中央政府でも自治團でも、要するにしまいには、經濟的權力者の專制又は經濟的權力者の爭奪の○○○○○り終るのである。云ひ換へれば不正排斥の組織は、結局高等政策としての「○○」の機關になつてしまふのである。

かゝる次第であるから、○○、自治團の類と雖も、高等政策としての「不正」を如何ともすることは出來ない。その結果、官署や、自治團の官公吏自身の高等政策を奨勵することになるそのは當然のことである。官公吏自身の高等政策とは、即ち、現社會が肯定して居る經濟的維持の動機としての「○○」を、彼等自身の經濟的維持の動機とすることである。それは表向きに現れないで、日常盛に官公吏の人々によつて行はれて居るのである。即ち、官署に勤めて居ても、それを成る可くお役目として、常に自己の利益は、公の利益を損失せしむることによつて成り立ち得る、と考えて居る點である。之れは多くの官公吏が、會社銀行員と同じく考えて居ることであり、此の考えが發展すれば、官公吏も又會社銀行員のやつて居るやうなことをしようとするのは當然のことである。例へば船成金の手代は、主人の爲め船の賣買に於ても、必ず一噸如何程と云ふ自分自身の儲をすると云ふ風習が船の賣買に於て盛んに行はれてゐることである。それは船には限らず何でもさうであるがそしてそれは背任罪にも横領罪にもならない形で行はれ、斯の如くにして利得した財産は法律が保護して居る。それが無罪であるとすると、官公吏が同じことをした場合に有罪になるといふことは、公平であるか不公平であるかは別として、官公吏の身にとつては馬鹿々々しく考えられることに違ひない。そこで官公吏もまた、出來るだけ法律に觸れない手段によつて同じ様な方法で利得しやふと思ふことは、人間自然の性情である。そこで法律の許す限りの不

正を行はんとし、場合によつては、便利に不正行爲が行はれる樣に〇〇を作らうとする。昔時、舊幕時代に、江戸城の改築と云ふことが木材商はじめ色々の商人の利益となると云ふ事實があつた。改築材料を買上る場合に不正の行われたのは勿論、その買上た材料を色々の名義で持ち出してしまふことが法律の許す範圍で色々出來たのである。例へば何々は造營所から外に搬出すことが出來ると云ふ規定があるとすると、役人と商人と結托して、或る品物は搬出許可の範圍の何々であるといふことにして搬出せしむる。材木で云つて見れば何尺以上のものは搬出が出來ないが、何尺以下のものは不用材として搬出せしむるといふ規定があつた、すると役人と商人は規定以上の長さの材木を規定の長さのものとして搬出せしむる樣なことをする。そのことが同じ利益に割込めない不平者によつて指摘されると、今度は規定以上の長さの材木を規定以下に切つて不用材にして搬出せしむるといふようなことをやつたのである。法律を作るものは官吏であり、それを執行するものも又官吏であり、それを監督するものも又官吏であるから、法律を〇〇に合致せしむるか、法律の範圍内で不正を行ふるか、何れかの方法で自由に不正が營まれ得るのである。

かくの如きことは法律が不完全で、監督が不充分であつた時代のことだと思ふと間違ひで、四間道路と規定されたものが、いつの間にか三間道路となつて居たといふことが、今でも行はれて居る。しかしそれは何れかいへばと幼稚な舊幕時代の方法であつて、現代ではもつと巧妙に、もつと合法的に不正が行はれてゐるのである。役人同志が摘發し合つて居る府や、市の行政の不法の如きは寧ろ枝葉であつて、全體の組織が依つて立つて居る處の「不正」に至つては廣大なものである。

經濟的發展は、工事、賣買等の形式によることになつて居るので、このごろ、摘發されて居る不正は皆な此の二つの行爲に關係して居る。然も摘發されない處の工事や賣買が、矢張り「不正」の原則によつて立つて居ることは疑ひないので、官署、自治團（一方の當事者）と、請負商人（他方の當事者）とは經濟的敵對關係に立て居るのである。後者はその敵方を陷れる爲めには凡ゆる手段を構ずる。前者の使用人が此の手段の奴隷となると云ふことは、中央乃至地方の政治が、經濟的權力者の機關になつてしまふと云ふ大きな事實に比べれば極めて末端の事實である。

右の樣な理由で、官公吏の不正と云ふようなことは、今日の樣な政治組織、經濟組織が〇〇と同時に直ちに發生し、その組織の進化と共に巧妙複雜に進化して行きつゝあるのである。

そこで目下の社會がやり切れなくなりつゝあるのは、官公吏の不正ではなく、全社會の經濟的維持が、前云つた様な「不正」に立脚して居ることなのである。で、現代の社會的研究は、前件の思想が、右の「不正」の範圍內で如何にしてその不正を矯正すべきかを見出さんとしたのに反して、根本的に、現社會の經濟的維持を「不正」の動機に因らない組織の上に立てやうといふのである。此の經濟的「不正」を動機とするが改められない限りは、それから發生する凡ゆる社會的不正は除き去ることは出來ない。經濟組織は、凡て、一方の利益を侵害することによつて他方の利益が成立つといふ原則によつて居るのだから、「〇〇」をしないものは亡びてしまふ。此の不自然な、不合理な狀態を如何にして改めようかと云ふのが、現代の社會思想內至經濟思想なのである。軍役や官公吏やの不正に驚き騷ぐ人々は、此の根本的「不正」に就いて深く考え及ばなければならぬ。

趣味ある同志に

一、本社にて記者を二人募集します、何れも雜誌に趣味ある人で、一生を雜誌「改造」記者として我等と生死を一しよになし得る體格頑健の三十歳以下の青年に限る。

一、一人は英文と英會話をよくする人、大學卒業程度の教育あるもの、自作論文を英和兩様に認め送らるべし、俸酬は月百圓以上で希望通り。

一、一人は校正を擔當する記者、經驗ある、酒を飮まざる人が欲しい、俸酬は百圓以上、何れも編輯局宛に履歴書を送らるべし。面會は斷然謝絕します。校正記者は年齢を問はず。

一、採用する記者は荷車曳く位は平氣であつて貰ひたいこと。

「改造」編輯局

現代八大哲學者と其思想

ベルグソン哲學の精神　金子馬治
ラッセルの哲學　土田杏村
オイケンの思想　安倍能成
ハインリッヒ・リッカート　佐竹哲雄
ジョン・デユウイ　田中王堂
アインスタインの哲學　桑木彧雄
藝術の哲學者サンタヤナ　礫川道人
ベネデツト・クロチエ　桑木嚴翼

現代八大哲學者と其思想

ベルグソン哲學の精神

文學博士　金子馬治

第一

もう六十歳の峠を越えた、上品な物しづかな、そしてジツと物の核心まで見抜かなければ已まない深い思索の眼ざしを備へた一紳士が想像される。彼れはパリ郊外の極めて閑靜な、殆ど市中の雜沓をよそにした靜かな住居に、或はフランス西部の殆ど浮世の喧囂をよそにした山水明媚な別莊に、靜かに靜かに獨得の深い思索を續けてゐる。吾々は決してたゞ物の表面だけの觀察に留まつてはならない。直に物の核心にむかつて深い同感をさゝげなければならない。同情と同感とを缺いては、事物の精髓は吾々に開かれない。斯くて亦吾々は全力を致して全精神力を統一しなければならぬ。現に今思索しつゝある事物に向つて、全精神力をコンセントレートし集注し白熱化しなければならない。生命の全エネルギーが或は白熱化され或はコンデンスされて、當面の思索對象にふり注がれたとき、そこに初めて事物の深秘が直觀される。斯やうな深秘や核心が發かれるまでは吾々は忍耐に忍耐を重ね、努力に努力を積んで、どこまでもヰル、パワーを統一し集注しなければならない。古來の天才も大藝術家も畢竟は統一され集注された大なる意力を備へた者に外ならないと。これがベルグソンが後進者に向かつて教へた言葉であり、又彼れみづから今日まで實行し來たつた秘訣——ベルグソン哲學を大成させた秘事中の秘事であつたのだ。現に今ベルグソンが斯やうな思索の態度を持して、靜かな書齋に於て、ジツと物の核心に同感しコンセントレートしつゝあるさまが、ありありと目前に想像される。ベルグソンはつまり斯やう

にコンセントレートされた精神力であり、深く物の核心まで徹しなければ已まない强烈な同感力であつたのだ。彼は同感と意志との權化だとも稱へられる。

私は先づベルグソンがどこまでもフランス人——もつと廣くはフランス文化を代表した者であることを明らかにしたい。彼れの著述に接する毎に、私は彼れが如何にもフランス人であることを强く感ぜずにゐられない。彼れの血がユダヤ種族に屬するや否やはこゝで問ふところでない。思索の形式なり傾向なりが如何にもフランス式であることが目だつて感ぜられる。フランス式の思索傾向とは外でもない、一面に於て、最も透徹した最も精緻な科學的乃至論理的識見が全體を蔽ふほどでありながら、他面に於て、其の精確な科學的知識の根抵に、それとは全然反對とも見える一種不思議な深秘の脈——著しく宗教的なミスチシズムが到底拔くべからざる深い根據を備へてゐること是れである。一面に於ては、最も明確な最も精緻な數學的物理學的知識が豐富であつて、他面に於ては、生命や靈魂に關する宗敎的神秘の脈が著しい。明白な智見と神秘な信仰と、不思議に一致した形式を備へてゐる所にフランス式思索の特徴が有る。明かるくて暗く、暗くて明かるい一致がそれである。單に哲學者ばかりでない、詩人や文學者にも斯うした傾向を備へた者が、フランスには頗る多い。こゝでは假にパスカルを例に取つてベルグソンと並べて見る。他の點に於て、此の二人はどれだけ違つて居たにせよ、全體の思索の形式に於ては、何といふ不思議な一致が見られることぞ。未丁年者で早く數學上の發見をさへ遂げたパスカルは、科學的乃至數學的知識にかけては稀代の天才でありながら、同時に彼れは此等の數學や科學やを放擲した程の最も深刻な最も深秘な宗教的信仰を備へてゐた。一面に於ては、最も綿密に最も明確な思索的傾向を備へながら、他面に於ては、それとは反對の最も深秘な宗敎的信心に燃えてゐた。フランス人ぐらゐ數學的に綿密に精確な知識を所有してゐる者が他に有るであらうか。然かも同時にフランス人ぐらゐ一種のミスチシズムを懷いてゐる者が他に有るであらうか。パスカルはまさに此のフランス式思索の典型ではなかつたか。

然るにベルグソンも不思議なほど此のパスカル式傾向を發揮した。パスカルと同じく、彼れは一面に於て最も明確な數學的知識を備へてゐた。數學は實に彼の思索の半面であつた。此數學的又はフランス式精緻が根本となつて、彼れはまた特に心理學上並びに生物學上最もユムプリヘンシーヴな又最も卓越した明確な知識を備へてゐた。生物學上並びに心理學上の彼れの思索は、單にこれだけでも當代を數へるだけの價値ある最も貴い

最も獨得なものであつた。時間乃至流續に關する彼れ獨得の見解——一切の機械的な物質現象から精神現象を峻別した根本原理としての時間乃至流續に關する創見は、如何に數學的に精緻を極め微細を極めたものではある。心理的精緻や心理的卓越は元來フランス人民族固有の長所と稱へられるが、ベルグソンは最もよく此の特徴を代表した者ではないか。どこまでもジツと心のエネルギーを事物の核心に集注させて、それを數學的に精確に觀察し分析して行く處にベルグソン哲學の特徴が有る。多數世間の專門心理學者が機械だ實驗だと騷いでゐる間に、ベルグソンはジツと考へこんで、此等專門心理學者よりは遙に大きな遙に深い心理學を摑んでゐる。あれ程深く數學的知識に一身をひたすことが出來たればこそ、彼れは此の數學を基礎とした科學的知識から截然本能的又は直覺的知識を區別し得たのである。數學的又は科學的知識は要するに人類が物界征服のために造出した武器で、其の適用の範圍は嚴格に物界に限られると喝破した彼れは、此の方面に於ける最も深い造詣を代表した者と言はなければならぬ。

然るにベルグソンは、同時に他の半面に於て、最も深いミスチシズムを懷いた哲學者であり又あつたこと、これは多少でも彼れを理解した者には最も明白な事實である。パスカルが深い宗教的信仰を懷いてゐたやうに、ベルグソンも、其の思索の根抵には、明らかに一種莊嚴なモニスチツク、スピリチユアリズムとか、乃至はパンセイズムとか名づけらるべき根本假定——根本信仰を見せてゐる。此の唯心論的又は宗教的傾向は、勿論ベルグソン獨自の傾向ではなく、此の點に於ても、彼れは正當にフランス學界の中心傾向を代表してゐた。十九世紀フランス唯心論のチヤンピオンであつたラヴイソンに對してベルグソンは特に深い興味を感じてゐたやうに見える。加之、一時フランス學界を風靡した數學及科學は、遂に吾々に事物の精髓を示すことが出來ないといふ確信、これが十九世紀後半期に於ける多數學者の意見であつた。フユイエーにせよ、今日のブートルーにせよ、科學的基礎に立脚しながら、特に生物學的智見に頼つて、直に生命の眞髓に迫らうとしたは、フランス學界に顯著な傾向であつた故にベルグソンは、明らかに傳統のスピリチユアリズムの脈や生物現象を數學以外又は以上のものと觀る傾向やを代表した者で、此の點に於ても彼れがフランス人であつたことは到底疑はれない。

ベルグソンの神秘主義は、先づ彼れの精神力の見解に於て明白である。數學を根本とする一切の科學的知識は、純粹の物質現象か事物の表面だけかを解釋し得るに留まつて、遂に生命の

核心に徹底することが出來ない。此等生命の深秘に透徹し得るものは、ひとり同情的感情や本能や直覺や、其の外廣く生命力そのものに外ならない。感情や本能やは、固と生命力に一層根本的なもの原始的なもので、生命の精髓が直に此の形式を取つたものに外ならない。故に明かるい明白な知識は、生命中の最小の一點に過ぎずして、其の周圍には深秘な不透明な精神力が限りなく廣い領分を占めてゐる。若しそれ一擧ベルグソン哲學の根本をつけば、天地人生の一切現象は、こと〴〵く窮極の一大生命力――最も根源的な最も神秘的なエラン、ド、ヸーの無限の開發進展に外ならない。此の根本的生命力の不斷の活動進歩は、すなはち複雜無限な生命及精神の現象であり、そして此の生命力の停滯凝結――否其の退歩衰退――ベルグソンの言葉を借りて言へば其の下向――がやがて物質現象に外ならない。天地人一切の現象は、最も根源的な此の生命衝動の無限開發に外ならない。故に此のモニスチツクな生命衝動こそは、最も複雜深秘を極めた宇宙的靈魂であつて、其の無限に神秘な點から觀れば、それはひとへに神と名づけられ無限絕對と形容さるべきものである。こゝにベルグソンの宗教が有り、又ベルグソンの神が有る。たゞ此の神は最初から一切の神秘を開展した神でなく無限時間に無限開展を實現する神秘力に外ならない。

最も精緻な科學的知識に對照された最も神秘な宗教的信仰――これがフランス思想を代表したベルグソン哲學の精髓であつた。

第二

然しながら、ベルグソン哲學の精髓は、更に他の方面から觀察することが出來る。それは外でもない、此の靜かな思索者の哲學は、其根本精神から枝葉の思想に至るまで、徹頭徹尾藝術的特色を帶びてゐること是れである。換言すればベルグソン哲學は一種の大なる藝術であつて、藝術的精神がまさに其の核心を成してゐる。先づ吾々は彼れが著書には到る處にインサイトに富んだ藝術觀が散布してゐることを認めざるを得ない。藝術や詩に關する批評や解釋やが到る處に見出だされる。由來フランス人が強い藝術的傾向を備へてゐることは著名な事實であるが、ベルグソンはフランス人の此方面をも最も顯著に最も美しく代表してゐる。數學や自然科學を學修したと同時に、學生時代に於て、彼れは深くギリシヤ及ラテンの文學を學び、此の方面に於ても頗る卓越した能力を示したと言はれる。彼れの人格そのものが、嚴格とか道德的とか言はれるよりも、寧ろ高雅な藝術的特徴に著しいやうに想像される。彼れは普通の科學者や哲學者が藝術を解釋するやうに決して無趣味に殺風景にプロゼ

イクではなかつた。藝術家に固有な神秘の力は、彼れによつて最も敏感に洞察された。否彼れみづから此の神秘力の深い憧憬者であり、又事實此の神秘力の大なる所有者でもあつた。彼れが此の神秘力を所有しなかつたならば、恐らく彼れの哲學は全く生れなかつたでもあらう。

斯やうな神秘力とは外でもない、一切の藝術を産み出す根本の力――即ち直覺と創造と是れである。ベルグソンは、數學的知識に對して本能感情及直覺を主張した。彼れの哲學は、簡單に直覺の哲學とさへも呼ばれる。生命の核心に透徹し得るものは、ひとり藝術的本能乃至直覺のみであつて、此の直覺を外にしては、吾々は事物の精髓に到達することが出來ない。平生深く人間社會に關係してゐる所謂實際家よりも、寧ろ實際世間を離れてゐる詩人が何故より多く事物の核心に徹底するかといへば實際上並びに皮相上のすべての束縛を脫して、詩人は自由に其の直覺力を使用し得るからである。單に藝術のみならず、哲學もまた事物の精髓殊に生命の核心に達することを本務とするものとすれば、哲學者は先づ藝術的直覺によつて、當の生命の神髓に迫らなければならぬ。哲學は即ち直觀又は直覺の學であると。これがベルグソン獨得の哲學の解釋である。

單にこれのみでない。ベルグソンによれば、すべての有機物が備へてゐる生命力――有機體を形成し組織して行くオルガナイジング、パワーは、本能や直觀やの一層根本的な原形であつて、此の深秘な組織力がやがて無心の藝術活動に外ならない。何となれば、一般生物の成長は、決してたゞの分量の增加のみでなく、寧ろ深秘な組織であり、不可思議な創造である。廣く生物と精神作用とをば、斯やうに創造的に藝術的に觀たゝめ、ベルグソンに取つては、こゝから窮極的な一大藝術的直觀が産れてきた。即ち一切の生物現象――一切の精神現象――天地人全體は、たゞ無意味なたゞ機械的な運動ではなくして、實に創造的進化そのものであつた。創造的進化――こは明瞭にベルグソン哲學の窮極觀である。全天地人が不斷の創造と觀ぜられたのである。今日まで宇宙的實在をば、或は道德的方面から、或はたゞの活動的方面から、或は論理的方面から觀察した者は有つた。けれどもベルグソンほど明確に創造方面から之れを解釋した者は少なかつた。勿論これまでも種々な藝術的解釋は有つた。けれどもベルグソンほど明瞭に精確にまさに人の言はんと欲して言ふを得なかつた創造的進化を解釋した者は少なかつた此の點に於て、彼れは確に獨歩の天才であつた。彼れが創造的進化の說は、此の全天地人を直に大藝術活動又は大藝術そのものと觀たものではないか。原始的な生命衝動が直に藝術そのも

のと觀ぜられたのである。

若し此の解釋は、餘りにベルグソン哲學と藝術的に强め過ぎたと非難する人が有らば、私は斯やうな人に向かつて、一層深く藝術の精神を理解することを勸告せざるを得ない。ベルグソンみづからは何と答へるか不明であるが、少なくとも深く彼れの哲學を味ふ者に取つては、何は措いても先づ强く其の藝術的色彩の濃厚さが感ぜられることは、之れを禁止しようとしても遂に禁止すべからざる最も著しい特徴である。ベルグソンは哲學を藝術化したと言はれるも決して偶然でない。彼れの哲學は或意味では立派な藝術品である。

第三

私は更に別種な方面から――これまで餘り注意されなかつた他の方面からベルグソンを解釋して見たい。此の藝術的哲學者が夙にギリシヤ文學に關して深い素養を有つてゐたことは既に前段に於て注意した。或方面から見れば、ギリシヤの文學や哲學やは、ベルグソンの專門であつたとさへも見える。そは兎もあれ、ベルグソン哲學は、全體の輪郭に於て、將た其精神に於て、どことなくアリストテレース哲學を聯想させることは、果たして私一人だけの感想に過ぎないであらうか。或意味から言へば、ベルグソン哲學はアリストテレース哲學の復活ではないかとさへ感ぜられる。

固よりベルグソン哲學はアリストテレース哲學其のまゝの復活ではない。兩者の間には勿論大きな相違が有る。それにも拘らず、根本精神に於て兩者の間には極めて親密な關係が有る。こゝでは主として兩者のモニスチックな精神だけ比較して見よう。アリストテレースに取つては、一般の植物と動物と人類とは、根本に於て同一な靈魂（エンテレカイア）の發現であつて、有機物の生命現象と、高等動物の精神活動とは、程度の差こそあれ、本質に於ては全く同一不二であつた。草木の生命と人類の精神生活とは、根本に於て相通ずる一貫のものと考へられた故にアリストテレースに取つては、萬有は根本に於て同一なエンテレカイアの發現又は所造であつて、一切は互に相通ずるモニスチックな精神的なものと考へられた。アリストテレースの此の一元觀は、近代に於て屢々他の點が復活されたに拘らず、廣くヴイタリズムの排斥と共に、近代に於ては、容易に學者によつて復活されなかつた。固より復活の試みや、それに類似した學說は、斷片的には最近代に於ても試みられた。けれども此の古代ギリシヤの深遠な精神は、少なくとも今日に於ては、我がベルグソンによつて、最も大仕掛に最も組織的に且最も精確に復活され發揮され開發されたと觀られる。彼れは全然近代的

な方法と彼れ獨得のインサイトとによつて、時間と生長と流轉とが働く精神現象と有機界の生物現象とに共通な特徴であることを發見し、主として此の點から生物現象と精神現象との同一不二であることを證明した。即ちベルグソンに取つてはギリシヤの哲人に取つてと同じく、天地人は其の根本に於て同一不二なエラン、ド、ヰーの開發であり進化であつて、全體はモニスチツクな活きたエンテレカイアの開發そのものに外ならない。アリストテレースの哲學が、一切を生氣若くは生命を備へた活物と觀るヒロゾイズムの完成であつたとすれば、ベルグソン哲學もまた一切現象を活き〱と生命化したもので、古代ヒロゾイズムの精神を近代化したものとも解釋される。そこに此の二人者の最も親密な一致が有る。

單に全體を一元的な活きた生命と觀たのみならず、此の一元的生命が、最も單純な形から無數の生物學的階段を經て最も複雜な精神現象に發達し。此の生命と此の精神現象とが進化と發達とを根本特徴とすると觀せられた點に於て、ベルグソンは全くアリストテレースに一致してゐる。たゞアリストテレースは古代の知識を基礎としたに反して、ベルグソンは近代の最も發達した進化論を土臺としたに過ぎない。單に一般の進化思想のみならず、全生命現象を創造的進化と觀た點に於て、ベルグソンは全くアリストテレースを復活したとも解釋される。地下のギリシヤ哲人は、さぞかし我が意を得たりと微笑することであらう。

更にアリストテレースの精神と物質との關係論は、ベルグソンの物心關係論とは甚しく形式を異にしてゐるが、其の一元的精神に至つては、兩者全く相一致してゐる。斯くの如きは、ベルグソンに取つては、偶然な一致かも知れないが、彼れの哲學が全體として著しくギリシヤ的色彩を帶びてゐることは、如何にしても疑ふべからざる事實である。

第四

紙數、制限が有るから、極めて簡單に附記して置く。今日までベルグソンは、マクロコスムに關する哲學だけ書いて、まだミクロコスムに關するもの——即ち道德政治に關する哲學を示さなかつた。彼れが今日此の方面に努力を重ねてゐることは疑ひ無いが、今日まで示されたマクロコズムの哲學から推せば、彼れの人生觀が窮極廣い意味の理想的地盤に立脚さるべきは、更に疑はるべき餘地が無い。フランス精神を代表すべき藝術的色彩の濃厚な創造的文化主義は、窮極ベルグソン哲學の歸結であると想像される。

ラッセルの哲學

土田杏村

1　論理と情熱との持ち主

バアトランド・ラッセルは、不思議にも相反する二つの性格の平行的持主だ。謂ふところの二の傾向とは、一は論理に隨つての冷靜なる思索であり、他は情意に隨つての熱情的運動である。ラッセルが數學の原理の學究的檢討をやつて居る處を見ると、とても社會改造の情熱などを持つて居る人の樣には見えないで、單に一個の學究窮措大の姿を想起せしめるが、さて翻つて「社會改造の原理」や「自由への途」を論じ出す情熱の奔激を眺めると、彼が急湍の樣の性格の流露はまざ〱と其の紙面に躍つて居るに驚かされる。ラッセルの性格は冷熱だ。正に氷れる熱汁だ。

我々の環境惡を改造しようといふ性格の持ち主は、多くはヒューマニズム風の型に屬する人物である。人間は萬物の尺度なりといふ言葉が何時までも其等の人物の言動に支配原理となつて居る。プラグマチストは現代に於ける其の一つの代表者であつたと見てよいだらう。此れに反して專一に冷靜なる思索に沈潛しようといふ性格の持ち主は、自己の人間的要求などを一旦棚の中へ藏ひ込んで置いて、論理一點張り、學問の體系片押しで以て萬事を律しようとする。其の前者には學問自體の體系を無視して、たゞ淺薄に、たゞ通俗的に墮在する惧れがあり、其の後者には、現實複雜の事象に無頓着となつて、融通の利かない象牙塔内の窒息化骨を經過する危ふさが伴ふ。實にも此の危惧此の墮落を免れ得た哲人、社會改造家は甚だ少なかつた。然るにラッセルは、不思議にも其の兩端の性格を併せて具有する現代に稀れなる性格の持ち主なのである。

ラッセルの性格は冷熱だ。正に氷れる熱汁だ。

2　彼の哲學的企畫

實はラッセル自身が傾向の此の兩端を批評して居る。

彼によれば、現代の哲學の中には三つの主なる典型を認める事が出來る。第一はカント、ヘエゲルの末流としての所謂古

的傳襲の哲學であつて、此れはプラトオ以來の組織的哲學者の方法と結果とを、現在の要求に適應せしめようとするものだ。第二はダアウインに起つて、過去にはハアバート・スペンサア現代にはジエームス・ベルグソンを有力なる鬪士とし、又した所謂進化主義の哲學である。其の第一の古典的傳襲の哲學者として近年英國に勢力のあつたものはブラッドレイであり、此の學派の社會論國家論は今も尙ほ英國の一部に勢力を持つて居る。ブラッドレイによれば、世界は論理によつて構成せられるのであつて、卽ち其れは毫末も具體的の經驗に訴へる處が無い。併し其の論理は此のヘエゲル派の其れの如きである可きで無く、否寧ろ其れの反對でなければならぬ。卽ち『論理の眞の機能は、』彼の意見に隨へば、『經驗の事實に適應せられては其れは構成的であるより寧ろ分析的なる可きものだ。』此くして彼はヘエゲル學派の論理主義に反對する。次に第二の進化主義は如何なるものであるか。此れは其の方法に於ても問題に於ても共に眞の學問的哲學では無い。今其の一であるベルグソンの哲學を一言以て評せんか、第一に、其れの眞理は進化の事實に關して科學が蓋然（プロバブル）的であると許した處のものから立論して居まい。進化はたゞ宇宙の一部の研究である生物學の教へる處であつて、宇宙其のものに進化あるや否やを敎へる性質のもので無い。『哲學は一般的なるものであり、其の重要なる興味を存在するすべてのものに取るのだ。』進化主義の哲學は餘りに急ぎ過ぎた一般化を行つたものだ。第二に進化主義の動機及び興味は全然的に實際（プラクチカル）的であり、其の取扱ふ問題は純正哲學の問題には殆ど接觸しない特殊の問題を研究して居るものである。詳言すれば、進化主義の主として興味を置く點は、人間運命の問題だ。或は少くも生命の運命の問題だ。知識其れ自身の爲めでは無くて、道德的又は幸福に關しての興味だ。此れは哲學に取つては全く部分的の問題であつて、其れの全部的問題では無い。『哲學が學問的になる可きであるならば——而して此れが如何にして達成せらる可きであるかを發見するのは、我々の目的であるが、——哲學者が第一に、又最初に獲得す可きものは無利害心的知的探究心であつて、其れは眞個の學問の人を特色づけるものだ。』ベルグソンは、直觀こそは確實性を持つて居るといふ。如何にも直觀は知性に缺く處の信服性を持つては居るであらうけれども、自己認識でさへ、いろ〳〵の虛榮心や嫉妬心やの爲に、精確を保證し難いものである場合に、異れる人格の壁を透して此れを知る事は尙更不可能の事だと言はねばならぬでは無いか。

此く批評してラッセルは、全然經驗の事實に訴へない哲學と、直觀によつて知性を不確實のものと見る哲學との間に、第三の

哲學的立場を見出す。それは彼の所謂『論理的原子論』と呼ばれるものである。即ちラッセル其の人の立場だ。ラッセルによれば論理的原子論はハアヴアート大學の新實在論と其の根本的基調を共通ならしめて居るものだと言ふ。

ディルタイに隨へば、人間の世界觀には其れ〃〃の典型がある。此の事が眞だとするたらば、此の個々人を擴大して、各國には各國固有の世界觀典型の國民性を認める事が出來ると言へるかも知れない。實際多少はかうした傾向を斷言し得ると私は信ずる、大體に於て獨逸哲學者には主知的論理的傾向が強く、佛國哲學者には經驗的直覺的傾向が勝つて居た。ユーベルハウプト überhaupt（一般に）といふ語が、カントと言はず、獨逸唯心論の概觀的特徴であるならば。リベルテ liberté（自由）は大革命のモットオであつた許りで無く、佛國「自由の哲學」の方向特色を語つて居た。哲學の大問題は常に此の獨逸派の形式尊重哲學と、佛國流の內容尊重哲學と、兩者の統一如何に係つて居る。英國はロックヒユウムミル等を始めとして經驗論哲學の醸成地であつた。英語國民は本來的に經驗尊重の性格を把持して居る。其れ故に英國現代の哲學思潮は概略して經驗論的傾向であるけれども、併し英國人は又他面冷靜公平の氣風を有し、健全なる常識の把持者であるから、古來常識學派の如き哲學思潮を生み、又時にヘエゲル學派の代表者をすら產んだ。主知論と經驗論とを統一する仕事の適發は英國人に就て最適であるかも知れない。ラッセルの哲學的事業は丁度其の事に關與して居た。而して彼は此の事業の完成に最もふさはしい性格の持主であつた　である。

ラッセルの哲學的企畫は論理と情熱との調和の人格的基礎の上に立てられた。即ち其れは哲學上の主知論と經驗論との統一の事業であつた。ラッセルは此の企をば其の哲學の三部門の中に齊しくプロジエクトした。此れが結果は第一の數學の哲學に就ては『數學の原理』に、第二の一般認識論に就ては『哲學の問題』に、第三の社會哲學に就ては『自由への途』に、何れも學界を驚歎せしむる名著となつて晶化せられたのである。

3　「宇宙の市民」としての思索

哲學の研究には、哲學だけの取る可き或る特別の方法が存在しようか。カントの發見した批判的方法は此の質問に對する一の肯定的答辯であつたと見てもよい。蓋し我々の哲學は、他の常識や自然科學の知識の成立し得る根據自體を究明するものであるから、此れに常識や自然科學の方法の無力な事は言ふまでも無い。併し哲學は又一の學問であつて、感想や直覺の詩的表明では無いが故に、其の方法は又確固たる一の學問的方法でなければならぬ。即ち其の方法は同時に客觀性を帶んだ其れでな

ければならぬ。

此の後者の點に於ては、ラッセルは理想的に客觀的であつた。彼は其のあらゆる論文に於て、哲學が一の客觀的科學である、其の目的は純粹的に知識である事を力說して居る。其の爲めには彼は、哲學が一の完成せられた體系的科學である事を望んで居ない。たゞ一面的の眞理であつても、確實的なものであれば其れでよい。又其れがすべて確實的なものでは無く、答解を得る希望が如何程微少であつても、『此樣な問題の思索を續ける事、其等の問題の重要さを我々が知る樣になる事、斯樣な問題へのすべての接近を檢査する事、きつぱり確定せられた知識內に我々の思索的興味を宇宙に於て維持保有する事』其れだけで哲學の思索は正しい道を進んで居り、亦其の目的の幾分づゝを達成して居るとした。併し又同時にラッセルは、哲學だけの爲に或る特定の方法が成立して居るとは考へて居ない。

彼は言つて居る。『哲學的知識は、本質的には科學的知識と區別の無いものだ。哲學にのみ開かれて科學には開かれないといふ特別の知識の源泉は存在せず、又哲學によつて得られた結果は科學より得られた其れと根本的に相違して居るといふ事も無い。哲學の硏究を科學から分つ其の本質的特性は批判といふ事である。』此くしてラッセルが認識論を語り出す時には、普通の物理學者が物理學的現實の事象を語り出すと何の相違も無い態度である。たゞ其處に何等かの區別を見る可しとたらば、其れは彼自身主張する如く、彼の敍述には同時に銳い批判が加へられて居たといふだけの事である。

さて玆にラッセルの認識論が始まる。『如何なる理性ある人間も、其れを疑ふことの出來ないといふ、其れほど確實なる何等かの知識が抑も存在するであらうか。』『哲學とは何ぞやといふに、其れは我々が日常生活の中に於て爲し、又進んでは科學の中に於て爲す如く、無頓着にして獨斷的にでは無く、此かる質問を惑はしいものにするすべてのものを探究し、又我々の日常の觀念の底に橫たはつて居るすべての曖昧と混雜とを明瞭にさせた後、批判的に此の如き窮極問題に答へる、其の單なる企圖である。』彼は先づ我々の日常經驗する感覺に就て考察し、單に我々が感覺と呼んで居るものには、色、音、臭ひ、硬さ等の感覺的事實と此れを感覺する作用と、及び此の感覺的事實より論理を以て推論せられ、其の事實の原因になつて存在して居るとせられる物理的事物と、此の三者の區別を爲す可き事を論じた。例へば一のテエブルの感覺があるとすれば、テエブルの硬さはテエブル自體の性質だとは言へない一の感覺的事實であり、此れを感ずる我々の心的作用は感覺であり、此の感覺の原因であ

ると推論せられるテエブルは物理的事物である。すべての物理的事實の集合を物質と呼ぶ。此の如く一の心的作用に關係して三者の區別を爲す事は、現代の所謂獨墺學派の哲學者と呼ばれる。ブレンタノ、トワルドフスキイ、フッサアル、マイノング等の等しく試みる處であり、獨墺學派では此れを內容、作用、對象と呼んだ。ラッセルは我々の心的作用と峻別せられる對象の世界、卽ち彼の所謂外的世界の存在を推論しようといふのであつて、茲に彼の哲學は、獨墺學派と全く同樣に從來の獨逸唯心論の傾向と區別せられる、客觀的傾向の方法を取る事となつて來た。

4　非我の哲學

ラッセルの哲學の客觀的方法は如何なるものであるか。其はすべての論理、論理的命題を、一々我々の認識作用に換元せず、論理を、命題を、論理自體、命題自體として、丁度我々が何等かの數學式を取扱ふ如く、純粹客觀的に、分析し、考察しようといふのであつた。此處にラッセルの詳密なる命題研究が始まる。彼が論理と言つて居る場合には其れは歸納法でも無ければ、又ヘエゲル論理でも無く、客觀的なる所謂數學的論理なのであつた。此の論理はブウルの途を追うたものであつて、ラッセルによれば、希臘以來論理に於ける最初の著しい進歩はペアノとフレーゲの二氏によつて爲されたといふのである。此くして命題に就ては、數學に於けると同樣に、命辭の關係といふものが非常に重要のものになつた。或る物が或る性質を持ち、或は或る物が或る關係を持つ事を主張する命題を原本的命題と呼ぶ。要言すれば原子的命題は是も原本的の命題である。原子的命題に肯定的又は否定的に對應する事實を原子的事實と呼ぶ。原子的命題が基礎となつて他の多くの複雜なる命題を生ぜしめる事は、恰も原子が、分子の中に這入り込むと同樣のものである。茲に彼の哲學の論理的原子論の名が出來した。存在する世界は多數の物と性質と關係とから成立して居る。

彼は更に我々の知識に就て詳密な分析を試みた。知識には物の知識と眞理の知識とある。兩者共に此れに直接知と派生知とを區別する事が出來る。派生知は其の末になればなる程、確實度を薄めて行くけれども、併し其れは全然の僞だとも言はれない事である。然らば所謂眞理とは何であるか。ラッセルは此處でも亦從來の眞理に關する見解を愼重に分析したる後、眞理の對應說を主張した。若しも客體關係によつて關係せられた、客體命辭から成る一複合統一體が信念の中にあると同一の順序に存在するならば、此の複合統一體をば、信念に對應する事實といふのである。

通俗に哲學と言へば、或る哲學者の世界觀人生觀を意味する。術語的に言へば所謂形而上學である。併しラッセルの哲學からは毫末も獨斷的形而上學の聲を聞く事が出來ない。其れ故にラッセルに就て哲學上の何等かの結論や何等かの信仰を聞かうとするならば、其の人は直ちに失望する。彼にはたゞ部分的の認識論的研究があるのみだ。ラッセルは寧ろ世間一般の人間の求める形而上學的獨斷を排斥した。而して此の如き要求を生産する個我の執拗を客觀的對象の世界に沒入せしめ、「宇宙の市民」としての公平を以て個我の迷執を批判し破却しようと力めた。若しも強いてラッセルに形而上學を求む可しとならば、「自由人の愛」が即ち其れであると言つてよいかも知れぬ。彼は其の著『哲學の問題』の最後に於て次の如くに主張して居る。『眞の哲學的瞑想は、其れの滿足を非我の擴大に見出し、又瞑想されて居る客體を廓大し、しかも其の場合に主體は瞑想しつゝある樣なすべての物の中に見出す。自由の知性は神の見る如くに見、此處彼處の區別を離れ、希望と恐怖を離れ、習俗的信仰と因襲的僻見の桎梏を離れ、靜澄に、非激情的に、單一にして又獨特なる知識の欲望に於て――知識、其は非個人的にして、純粹瞑想的にして、人間に取り獲得の可能なる知識――見る のである。』

此れ即ちラッセルが轉じて社會哲學と論ずる場合の態度であつた。信條であつた。彼は此れに於て、唯理論に相當する國家社會主義と、經濟論に相當するアナアキズムと、兩者の統一を求めて結局コオル、ホブソン等のギルド社會主義の立場に贊成した。併し其の批判は徹底的に非我への沒入である。因襲的僻見の打破である。其の態度には非激情的の激情が動いた。非個人的の個人が生きた。

ラッセルの哲學は正に冷熱だ。ラッセルの人格は正に氷れる熱汁だ。

オイケンの思想

安倍能成

一

ヴント、コーエン、ウインデルバンド、リップス等が大戰爭の前後に相次で死んでしまつた今日に於て、オイケンは獨逸が有する、否世界が有する僅少な老哲學者の一人になつた。彼はもう七十五の高齡である。近年オイケン協會といふものを組織して哲學的思想的宣傳の事業を新たに始めたといふことを聞くと恐らく彼の老健は一向衰へないものと見える。しかし私は世界戰爭以後に於ける彼の著述は一向讀んで居ない。彼が戰爭以前に於てその文化の方向を危ぶんで警告を加へた獨逸國、戰爭の最中にその正義を辯護した獨逸國の現狀並に未來に對して彼が如何なる具體的意見を有するかは、私に取つて興味多きことであるがそれも私は知らない。けれども私はオイケンの根本思想がこの戰爭によつて一變したとは信じない。私がオイケンの在來の著述によつてオイケンの思想を傳へることは、恐らく甚しくオイケンを誤るものでないと信ずる。實際オイケンの根本思想を知らうとするには、オイケンの著述を悉く讀む必要はない。殊にオイケンの如く單なる學究でなく、自己の思想を世に傳へて世を改めようとするに熱心な思想家に於ては、その著述の中には幾多の反復がある。邦譯になつたものでは『新理想主義の哲學』更に平易なものとしては『人生の意義及び價値』を熟讀することによつて、彼の根本思想並に現代觀は十分に覗はれる。

オイケンの思想はベルグソンの哲學が新しい程新しいものではない。彼の哲學はカント以後、フイヒテやヘーゲルによつて代表せられる獨逸の理想主義的形而上學の復活といふ意味で、新フイヒテ哲學若しくは新ヘーゲル哲學とも呼ばる可き性質のものである。それも例へば現代の新カント派がカント哲學を更に分化發展せしめてそれに學的仕上を加へた程の學問的事業をも彼は獨逸の古典的哲學に對してはやつて居ない。哲學者としての彼の意義は忘れられたる哲學の形而上學的意義を力說する

ことによつて、現代の文化と現代人の生活とに根柢と中心とを與へようとしたことにある。彼はこの目的の爲に在來の形而上學に存する固定を打破して一層これを流動的なものとしようとした。彼に新しさがあるとすれば恐らくはこの點に見出さるべきであらう。

二

オイケンの興味の中心は人間である。彼は自然を論じて居なくはないが、それは主として人間に於ける自然的要素であつて自然哲學は獨立した考察の對象とはなつて居ない。彼にとつて自然は人間の創造によつて征服せられ同化される可きものであつて、人間に對して獨立の領分を別に主張し得べきものではなかつた。彼の哲學の根本原理たるものは精神生活(Geistesleben)であつて、それは固より普遍的な宇宙的な性質を有するものであるがしかし、それの有する創造の働が實現せられるのは、人間及び人間の繼續的集合的生活なる歴史に於てであつた。かかる意味に於て人間の創造的活動は世界の最も肝要な部分であつてそれは世界を改め變ふべき性質を有するものである。精神生活は世界全體の中心となり、全體を支配し、全體を同化すべきものであるが、その仕事は已に完成し、固定したものでなくして未完成な流動的な狀態にある。それは常に內より無限に生に發展すべきものである。而してその發展の任務を負ふべきものは人間生活である。

彼の此點に歸する考を今少し明かにする爲に彼の時代觀を以つて來て見よう。彼は現代の生活を組織せる要素として、前代から傳來のものには宗教的生活、內在的(汎神論的)唯心論の生活、特に現代的なるものとしては自然主義的生活、社會的生活及び主觀主義的生活を擧げて居る。所謂宗教的生活に對して彼の批難の要點はそれが精神生活を現實と隔離した固定的な形にしてしまふといふことにある。卽ち精神生活の現實世界に於ける實現を無視して居るといふ點にある。精神生活は根本的な優越な支配者たる位置にあるものではあるが、それが我々人間の現實生活に現はれぬ以上は、精神生活は我等と沒交涉になつてしまふ。其から第二の內在的汎神論的の唯心論は前者の如く內と外、精神と感覺、神と世界との對立を認めずして、寧ろその調和を認めようとする者であるが、それはオイケンから見れば精神生活の現實生活に對する支配の力、當爲(ゾルレン)の關係を弱めるものであつて、我等の戰鬪我等の行爲(タート)を避けて一種の美的靜觀に陷れようとするもの、簡單にいへば、精神生活と自然生活、理想と現實との二元的對峙の事實を無視しようとする者である。この二つの無勢力に對して自然主義的生活は非常の勢力を得て居る

この生活は自然科學的世界觀に基づくものであつて、自然を工藝の上から支配すると同時に人間を自然の一片と見るものであつて、人間の生活を空なる主觀的理想から解放して、事實の地磐を確な足取を以て歩ましめ、從來の傳統的束縛から脫せしめたといふ功績は著しく、その主張の步調が整つて居て理想主義の樣に區々でなく、その所說が現實的、具體的、客觀的である爲に、多くの人を承服せしめるといふ强味を有した。しかしかかる考方は人間の內生活を物質的條件の下に束縛し、その獨立を奪ひ、獨特の目的を亡し、價値の觀念を消失せしめて唯だ力の大小といふことをのみ强く燒付けるに至らしめた。それは人間の生活の根柢核心にして同時に理想たる精神生活を無視して生活徒らに尨大複雜にしてその意義に至つては茫然として尋ね難いといふ、狀態を生んだ。現代人の生活はかく自然化し機械化すると同時に他面に非常に人間臭くなつた、それは所謂人間文化(Menschenkultur)を以て現代の特色とした。この人間文化は一面に於て社會的生活、他面に於て個人主義的主觀主義的生活となつて現はれた。そうして一方は社會的組織を力說し、他方は個人の解放を主張した。殊に前者に於ては勞働が今までない規模の大きな。緊密な組織を以て形造られ社會はすべての個人を皆その束縛の下に置く樣になつた。しかし此等の組織は個人を以て全體の勞働を遂げる爲の器械、手段と見做すに至り、問はれるものは成果であつて人間の魂でなかつた。人間によつて形造られた團體が、非人格的な一種のからくりになつてしまつて、個人はその暴力の下に屈從する外はなくなつた。かくて社會的組織勞働の文明は本來人間によつて造られたのにも拘らず、今や却つて人間を奴隷とするに至つた。しからば此に反對して起つた個人主義、主觀主義の主張は如何といふに、その大膽なる斷言にも拘らず、それが單なる氣分に止まり、或は痙攣的であつて十分に底力がなく、未だ個人を本質的に根本から高め、改めるに足らない。

　オイケンをして言はしめるならば、自然主義的生活も社會的生活も又個人主義の主張も、その根本欠陷は精神生活といふ形而上學的根抵のない所にある。人間が眞に自己の本質なる、換言すれば眞の自己である精神生活を自覺してその自覺から力を汲み來る時、人間は始めて自然の恐るべき量の爲に洗去られて價値の生活を失ふとを免れ、社會的組織に束縛せられて自己の獨立と自由とを失ふとなく、又單なる主觀主義以上に直に根柢から自己を高め得る。現代に對立する個人的文化と社會的文化、主觀主義と客觀主義、技術主義(Technismus)と唯美主義、功利文化と氣分文化とは、互に相反對する如くにしてしかもその病根

は一にある。ここに彼が單なる個人主義に反對しつゝしかも所謂單なる歷史主義、文化主義にも反對する根據がある。彼はヘーゲルの歷史觀が餘に個人を輕視することに反對して居る。歷史從つて文化は眞の意味に於ける個人の本質を生かすものでなければならぬと同時に、それは個人の生きた本質に根ざすものでなければならぬ。しかも個人をその本質から生かす時、それは必然の勢として超個人的になつて來る。人間生活が社會をなし歷史を形造る所以はそこにある。全體的な文化の生れ來る所以も亦こゝにある。

三

かくの如くにして精神生活の働は人間に向つて(an)でなく、人間の裏に(in)又人間から(aus)生じなければならぬ。人間は唯だ精神生活に結合しただけでは足らない、それを確實にする爲には、それを我等自身に於て生まなければならぬ、精神生活を事件(Ereignis)たるに止めずして體驗(Erlebnis)としなければならない。人間が自然生活を超越して精神生活へ向はうとすることは、個々人の生活に於ける事實、並に歷史的社會的の事實であるといふのではまだ足らない。これ實に人間の本質である。人心の最も深き所に存する直證である。人間の根本經驗(Urerfahrung)である。これを認めずして彼の哲學がないのみでなく、これを外にして又意義ある生活もない。如上の考方から見て明なるが如くオイケンの精神生活は單なる論理的前提としてのアプリオリではない、それは單なる知識によつて認識せられるものでないと同時に、其自身又單なる知識史には單なる意志より以上の本質的な精神的實在である。

彼が自然生活を否定して文化生活、價値生活を說き、かかる生活の根抵としての當爲(ゾルレン)を認める點は、同じく新理想主義の名の下に呼ばれる新カント派と共通な點である。しかし彼が新カント派と最も著しく異なる點は、その論理主義的でなくて形而上學的であり、實在論的である點である。新カント學派中リッケルト等の西南獨逸學派は概念以前の所爲として直接經驗を置いて居るが、概念的思惟と直接經驗との關係は十分に明でない。コーエン等のマーブルヒ學派は思惟の內容は外から與へらるものではなく、思惟によつて要求せられるもの、與へられたるものは問題として與へられて居ると說いて、思惟の無限な未完成な發展を說く點に於て、オイケンの精神生活の說き方と多くの類似點を有するが、しかし思惟の流動性發展性を認めつつも、コーエン等は全然論理主義、主知主義の立場を棄てずして、思惟を先にして實在を後にする點に於てあくまでもオイケンと立場を異にする。兎も角カントの認識論に存在する實在論

的傾向と論理主義的傾向とを分つて、論理主義的傾向をその行くべき所へまで行かしめた功績は新カント派に歸しなければならないが、我等は又今に至つて新カント派によつて棄てられた實在を求めずして止むことを得るだらうか。事實に於て少くとも私にはカントに殘れる實在論的傾向が懐しいといふ感じを抑へることが出來ない。

オイケンによつて反復力説せられる宇宙と人生との根本的實在なる精神生活は、果して空漠なるものとして、我等の概念的思惟の對象となり得ざるものとして棄て去り得べきものであらうか。よし一應は認識の道を淨めんが爲に捨て去られても、遂にいつまでも棄て去られるべきものであらうか。總じて我等が實在を求むる形而上學的要求は論理主義者のいふ如く引込めらるべきものであらうか。新カント派が形而上學的問題を抜にして構成し上げた學的成果は非常に精刻な立派なものであつても、我等は尚そこに何等かの物足らなさを感じはしないか。我等の本質の自覺とその本質の上への生活の建設を説くオイケンの叫びは私にとつては無意義とは思はれない。

唯だ然し彼に於て精神生活が如何なる規定の下に、或は認識となり、行爲となり、美的諦觀となるかの批判が十分でない。彼が人間一切の文化活動に精神生活を採つて來るのによいが、此等一切に於ける精神生活の分化によつて明瞭に批判的に説かれて居ない。此點が彼の哲學の學的價値を低くする最も重大の原因であらう。彼は精神生活其者の主張には急であるが、精神生活が諸の文化の領分に於ける精神生活の受く可き規定を説くことをおろそかにした。私は此等の問題に關する彼の所説に於ても彼の直覺に富んだ全體を把む感じを認めるが、彼の思索の精到を認めることは出來ない。しかしながら彼は「十七世紀に於てコメニウスは照された世紀の裏にあつて光の缺乏を感ずるといつたが、我々は生活のこよなき充溢の裏にあつて、正しき生活を見失つて居る」と言へる人である。又現代に於ける認識の問題は「明瞭」（Noch Klarheit でなくて、むしろ「實在性と本質性」と（Nach Realität und Wesenhaftigkeit）志さるべきを説ける人である。我等は徒らに彼の短所をのみ責めてその長所を沒却すべきではない。

學者としてのオイケンは歴史家として最も長所を有して居る。彼は細密なる考證的研究家ではないかも知れぬが（[illegible]き時代にはさういふ風な研究もあるが、しかし時代と人間との特質を全體として感得し、その短所と共に長所を認める暖き同感を有する點は及び難い。現に新プラトン派のプロチヌスの如きも彼によつてその思想家としての價値が顯揚せられた所は大で

あつたといはれて居る。その意味に於て彼の「大思想家の人生觀」はやつぱり名著であると思ふ。

時代の觀察者としても上と同じことは言はれる。しかし彼は到底天才ではなかつた。彼はニーチエを評して、その說の「餘りに基礎乏しく、餘に甚しく單なる氣分」(Zu wenig fundiert, zusehr bloss stimmung)といつたが、しかし文明批評家としての深刻は遂にニーチエに及ばなかつた。彼は時代の弊害を感じつつ、ニーチエの如くこれを自ら病む程の痛切がなかつた。彼は天才の偏倚を脫したと共に、多少健全なる人の呑氣さを持つて居ないとはいへない。兎もあれ私は彼が我等に對して說いた生活の態度、根本の考方現代文明に處する道は、世界戰爭を經たる所謂改造は聲高い今日といへども尙決して意義を失はぬことを信ずる。

（一〇、六、五）

尙オイケンに就て少し委しく知りたい人は拙著「オイケンを見て頂きたい。

ハインリッヒ・リッカート

佐竹哲雄

一　思想の系統・位置

ネッカー河畔に沿うた靜かな學問の市なるハイデルヘルヒに於て、近世の大哲人であり且つ詩趣華かなりしヴインデルバントの後を襲うて、チエラー、クノーフイツシア以來名譽ある哲學の講座を擔任したのは、ハインリッヒ・リツカート Heinrich Rickert である。一八六三年にダンチッヒに生れて長らくフライブルヒ大學にゐた吾哲學者は、眞理を渴求する青年と、新に形成された獨逸國と共青年とに對して、この古典的なしかも新しい講壇から、如何なる思想と學說とを贈るであらうか。氏が從來の思想を背景として『生活の哲學』(Philosophie des Leb-

ms）と「哲學體系」（System der Philosophie）の新著を公にしたことは、深き興味と刺戟とを與へる。リッカートは其師ヴインデルバントと共に、新カント學派中に屬してカント哲學の眞髓たる新理想主義の哲學を奉じた。オットーリープマンが當時の實證主義的精神に反對して「カントに歸れ」と唱へてからこのかた、哲學の主流を形成してゐた新カント學派からは、二つの大きな流れが分れ出た、その一は北獨マールブルヒ大學を中心とするコーエン、ナトルプ、カッシラーなどの屬する一派であつて、數學的自然科學を精密科學と認めて主として其概念構成を論ずる。その二は西南獨逸のハイデルベルヒ大學を中心とするヴインデルバント、リッカート、ラスク、などの屬する獨逸西南學派であつて、科學の概念を限定して數學的自然科學の外に尙主なるしかもこれと對等の價値を有する文化科學を確立し共概念構成を論ずる。隨つて前者は純粹理性批判の思想を以てカント哲學の眞精神と解するに對し、後者は實踐理性批判及び判斷力批判をカントの圓熟せる思想と考へて、自然認識に對して價値認識を主張するのである。

　西南獨逸學派殊にリッカートを强く動かしたのは、一方では知識學を樹立し他方では「人間の本分」「現代の特性」「獨逸國民に告ぐ」などの著書に由つて歷史哲學の精神を明かにしたフイヒテである。ヴインデルバント、リッカートの主意的精神と目的觀的立場とは共源をフイヒテに發する。フイヒテの哲學の方法は目的觀的方法と呼ばれる、その目標は種々の理性價値の間の關係を鮮明にして、その機能に統一を與へる點である。そのために先づ初めに理性價値或は眞理價値の終極目的を立て、この目的の輝きの下に、總ての理性價値をその必然的の手段として引出して來る。しかしフイヒテの方法には形而上學的の要素が潜んでゐた。この要素をすてゝ、その代りにロッツエの妥當の思想を運び入れたのが、西南獨逸派の目的觀的批評法である。だから批評法は常に一の眞理を假定し、ヘーゲルの所謂「眞理に向ふ勇氣」を認めてゐる。かりにかゝる條件を認めないといふ人があるならば、その人は全く緣のない人である、隨つて全く眞理や學問を認めない人である。懷疑主義の人でも眞理を認めてゐる。こゝにフイヒテの「ならば」（Wenn……So……）の意味が表れてゐる。吾々の思惟でも意志でも感情でも凡てに互つて規範的意識が含まれてゐねばならない。批評は規範的意識が認める當爲或は價値の存在を承認して、かゝる價値の　現に必要なる文化活動の諸形式を明かにするのである。この場合に經驗から得られる材料は機會を與へるにすぎない。其方法は全く經驗を加工する意味での先驗的でなければならぬ。リッカート

は方法論に於てフィヒテの思想に動かされたばかりでなく、認識論の根本思想や文化科學論に於てもフィヒテの歴史哲學に負ふところが多い。ウインデルバントの胸に芽を吹いたフィヒテの文化思想が、リッカートの清明な頭腦に由つて、文化科學としての基礎を確立され、力學を中心とする自然科學の一群の學に對立して、歴史學を樞軸とする文化科學の他の一群の學が聳え立つに至つて、學の批評に於ける一偉觀を添へ、多大の影響を學界に與へた。

二　價値思想の認識論的確立

リッカートの哲學は其主著「認識の對象」や「認識論の二途」などに由つて認識論的に不動な地盤を得た。デカルトが甞つて其新哲學を創設するに當つて懷疑の門を通過して「吾思ふ故に吾在り」の境地に達したが如く、吾々の哲學者も認識論的懷疑の解明に由つて、先づ凡ての獨斷と謬見とを碎破した後に、疑惑に由つて最早疑ひ得ない最後のしかも無假定なる立場に達した。眞理なる終極の假定は懷疑に由つてのみ照し出されるものであつて、疑ふことも質問することも得ない、疑問は已にこの眞理を認容するところに初めて成立するのである。されば認識論は無假定を理想としながら、眞なる思惟を研究する眞理論となる。思惟が眞であるためには、表象要素或は過程とは異つたものでしかも再び單なる思惟となり得ない或物を必要とする。この或物こそは認識論の主要問題たる認識の對象であつて、しかもそれは超越的客觀的でなければならぬ。こゝにリッカートが鋭い論理を以て形成した超越的といふ概念と客觀的價値といふ概念内容が鮮かに前景に浮び來る。

意識内容が現象界に屬して因果律に支配されるからといつて、その原因として超越的實在を假定する思想は、模寫說の不成立や經驗的實在論の立場を明にすれば、直に自己の不合理を認める。また意識内容の生滅變化不規則を補助するために、連續的なる超越的實在を要求する思想も誤りである。知覺の世界が缺陷に充ちてゐるからといつて、其缺陷を補うものとして超越的實在を假定する謂れはない。ディルタイは吾々が直接意志し感動し感情を有する完人から出發すると說くのであるが、此も完人の超越性は心理學的立場から見ても許されない。よしんば認識作用に對立せる意志であつても、自我の一要素たる以上は超越的實在ではあり得ない。認識の材料は凡て現象性の原理に由る意識内容の内在論にすぎない。

氏に由れば認識の對象は認識材料をして妥當ならしめる超越的價値である。氏は批判哲學の精神に由つて超越的實在を否定するから、其點では内在論と共通な點を有してゐるが、價値が

規範的意識に對する關係から、價値の超越性を主張する。氏は初め「認識の對象」二版（中川氏譯）に於て超越性確立の途を先驗心理學にとつた。事實に基く知的作用を分析して、其內に含まれた要素に由つて超越的對象を明かにした。表象作用を認識作用と解すれば模寫說に陷らざるを得ない、表象と實在の關係は、判斷作用に由るの外はない。判斷作用は是認と非認の要素を含み、これに伴ふ判斷確實性が超時間的な當爲を示す手懸りを與へる。「認識の二途」を公にした以後の氏は「認識の對象」三版に於て上の方法に對して先驗論理學の立場をとつてゐる。それは直接に眞理を認めて、超越的價値の論理的構造を論ずる。研究は是認作用よりも一層客觀的な問と答との關係から始まる。眞理を含むもので認識作用から獨立なるものは文章である。文章の意味には書く人や聞く人の理解する意味もあるが、その外に永久の意が存する。理解作用に基く意味は變化するが、その變化の裡なる眞理は實は恒常的な眞理である。眞の意味は心理學實在としての理解作用の意味とは異なるから實在ではない。意味は一々の言說の有する語義ではなく、絕對に分割を許さない統一的全體としての論理的意味である。認識の對象たる意味は、部分に分割されると其意味を失ふのである。だから意味は形而上學的實在でも經驗的實在でも觀念的實在でもない、プラトーのイデーや數などが實在として認識されるのは、それを基礎付ける意味價値に由るのである。リッカートの語を藉れば「意味は總ゆる實在以上に又は以前に存する」。意味或は價値判斷に關係するものである。實在の否定は無であるが、價値の否定に由つて消極的價値と積極的價値とが表はれる。非人間的の概念を實在と解すれば、この否定たる非人間は內容の否定となるが、價値概念としての人間的を人道的と非人道的と對立せしめると、非人道的は反價値を示すのである。否定によつて一方では無意味を他方では反意味を表はす。文章の眞意味は超越的價値に基くのである。

三　文化科學の論理

リッカートに由れば認識論は全く認識の形式に關係するものであるから、形式論が問題の中心となる。氏は主觀客觀の二樣の對立を明かにして認識の主觀が判斷意識一般卽認識論的主觀であることを論證した。認識論的主觀に由つて成立する對象の形式と經驗的主觀に由つて成立する判斷の形式とが區別された。そしてこの關係から文化科學の概念が誘導される。

對象の形式は價値の世界に關する二種の形式と範疇の形式とを含んでゐる。超越的眞理の世界はラスクの所謂純對象界であつて、形式と內容の共在の世界、妥當自體の世界である。この

止まるもので未だ實在に何等の關係も有しない。實在に至らんとする要求を充すものは範疇である。範疇は中間にあつて當爲から實在形式に移らしめるもので、對象を構成するから構成的範疇と呼ばれる。概念以前のものは、先づ範疇に由つて形式を與へられる、何者リッカートでは認識とは分割だからである。吾々に直接與へられた個々の知覺内容は全く形式を含まない非合理的のものと考へられてゐるが、實は所與性の範疇に基くものである。所與性の範疇は範疇である限り普遍的であるが、個々の知覺内容に關係するから個別的である、卽ち個別的なものの規範この存在の範疇（Kategorie des Diessein）である。この個別的經驗を法則的に結合すれば自然の概念を得るとカントはいつた。リッカートは鋭き批判をこの點に向けた。

カントは知覺判斷から余り燥急に自然に移つてゐるが、其間に客觀的現實在（objektive Wirklichkeit）の世界を認めねばならないと氏は論ずる。個別的な所與は更に客觀的現實在の諸範疇に由つて關係統一を得てゐる。この世界は時間空間因果性諸物性等の構成的範疇に由つて構成されてゐる。因果の如きに於ても一の實在的紐帶である。

内容と區別されて一回的特徴を有するものであるから、異質性を有する。この現實在は内包的にも外延的にも見渡し得ないほど雜多なもので、一回的で特殊的である。か〻る個別性は更に一回でありながら、因果性を有する、か〻ることは不可能と思はれるかもしれないが、それは現實在範疇としての因果性と因果法則とを同一視するからである。氏は因果について、現實在範疇としての因果性と歷史的因果律と自然因果律とを區別した。一回的因果的な現實在は概念以前であつて、これを概念化するにはその異質性を除いて連續性をとるか、連續性を捨て〻異質性を生かすかの外はない。客觀的現實在そのま〻は概念化されないから、兩者の間には間隙がある。

吾々が對象の形式から判斷形式に移り、經驗的主觀に立つとき自然科學と文化科學の對立が生ずる。リッカートは「歷史哲學」「自然科學的概念構成の限界」「文化科學と自然科學」（拙譯）等に於て文化科學を確立した。ウインデルバントは「規範と自然法則」「歷史と自然科學」等に於て、法則普遍概念を論ずる自然科學と一回的特殊的のものを敍述する歷史と區別した。リッカートはこの思想に基いて、客觀的現實在の個別的因果性を生か

し來る歷史的認識を救ふために、文化科學の概念構成を論ずる。自然科學は全く沒價値的に現實在から一般化的方法に由つて概念を構成する。一般化的方法は現實在內容の共通要素を抽象し單純化するものであるから、個々のものは只類例にすぎない。類例となれば個別性が失はれるから、個別性を生かすためには自然科學に限界が横はる、現實在を普遍に關係せしむれば自然となり、特殊性個別性に關係せしむれば文化となる。こゝに個別化的概念構成の問題が生ずる。

普通に歷史學はランプレヒトなどの考に由れば心的法則を明かにするのであるから、心理學の基礎とするといふ。併し心理學は自然科學の方法に基くものであるから、個別化的概念構成には無力である。心理學は歷史學に補助を與へるが、基礎とはなり得ない。また歷史は藝術の如くに直觀的ではない。藝術は個別性を捨てゝ直觀に生きるが、歷史學は科學である限り直觀を捨てゝ個別性に生きる。歷史は非直觀的概念を作るべきである。先づ歷史は多數の客觀中から其除くべき客觀を發見し、この中にその本質的なものを選び出さねばならない、だから歷史には選擇のアプリオリを必要とする。個別化的概念をなすとは、文化價値に關係することである。個別化的概念構成は價値關係の作用である。ウインデルバントに由れば文化は人間意識が理性規定に由つて所與の中から作り出したものである。文化價値は超越的價値とは異つて方法論的形式に關係する實在的形式である。選擇のアプリオリは歷史的文化科學を可能ならしめる。文化は全く人工の加はらない自然と異なつて、人が理想目的に隨つて行動した所産であるから、價値が附加されてゐる。現實在の一回的な不可分割的な不可置換的な個別性は、單なる文化に無關係な自然科學的な個體ではない、妥當たる文化價値を帶びゐる狹義の個別性卽ち文化財であつて概念化を許すところの歷史的個別性である。現實在を價値關係的方法に由つて把握することに由つて個別的文化內容が明かになる。價値關係は主觀的實踐的評價作用ではない、歷史的因果律は選擇の原理に由つて構成したものを更に體驗作用に由つて補ひ、これを歷史的關係に由つて文化價値に於て發展せしめるのである。

四　文化價値と生活

概念の體系たる科學は現實在の加工から成立するから、現實の改造である。一般化的取扱に由つて成立する自然と個別化的取扱に由つて成立する文化とは、內容的にも對立する。一般形式としての文化價値が一回的個別性を生かすもので、その客觀的に表はれたものが、文化過程であり其結果が文化財である。個別價値を帶び理性目的を有する文化財は、歷史現象を樞軸と

して法律經濟文學倫理學美學宗敎等の諸科學に表はれる。これらの諸科學を貫流するものは價値關係的な文化的系統である。

ところが文化價値が主觀に關係すれば、評價作用となつて實踐的傾向をとる。一般に價値關係作用はこの實踐的作用と混同される恐れがある。かゝる實踐的作用は意欲の方面から起つて來るのであるが、理論の方面からと等しく、良心に基くのである。價値哲學の說く當爲の規範性は眞理への意志に關係するもので、論理的良心倫理的良心の根柢たる純粹意志の活動卽ち事行(Tathandlung)に基く。凡ての價値は一の創造的作用に基く。フイヒテの創造的自我活動の精神實踐理性の優位、意思本位的傾向はこゝに表はれてゐる。當爲の根柢には論理的自律、隨つて先驗的自由がある。しからばこの創造作用を動かすものは何であるか。

自然と文化が對立するが如く、價値の世界と實在の世界とは對立する。ウィンデルバントが自然法則と歷史とについて述べた如くに二者は、プラトー以來の努力にも係はらず、依然アンチノミーである、こゝに人間の苦惱がある。吾々の有する世界は吾々が實在を改造した一斷片にすぎない。しかしそれが吾々の創造であり製作品であるところに無限の愛を感じ、眞理への無限の勇氣を生ずる。藝術的創造作用にも比すべき思惟の創造作用、人格的自覺活動は常にこれに對立し來る不合理なるものを征服せんとするところに表はれる。フイヒテの所謂非我に對する自我の克服である。こゝに人間の心を勵まし進ましめる力がある。吾々に眞と思はれ善と表はれ美と感ぜられる世界はこの活動の表はれである。文化生活の諸價値は凡て深き自己の創造作用の形像(Gestaltung)にすぎない。ゲーテの「愛すべきものは個體である」の句の裡に、文化思想を認める。新に哲學の體系と生活の哲學をとかんとする吾々の哲學者は吾々に何を指示し何を與へるであらうか。余は徐ろに其姿を描きつゝ多大の感興を唆られる。

ジヨン・ヂユウエイの哲學

田中王堂

ジヨン・ヂユウイの哲學は米國人の哲學である。十八世紀に於ける英國人が、ジヨン・ロツクに於て彼等の代言者を得、同世紀に於ける獨逸人がエマヌエル・カントに於て彼等の代言者を得た如く、十九世紀の終りより二十世紀の初めに於ける米國人は、ジヨン・ヂユウエイに於て始めて彼等の恰當なる代言者を得たのである。過去に於て、あらゆる偉大なる、即ち、眞正なる哲學者は彼等の屬した國民の生活の結晶であり、同時に、其れの注脚となつて居つた如く、ヂユウエイは現代に於ける米國人の生活の結晶であり、同時に其れの注脚となつて居る。後年に到つて、現時の米國人の生活を離れて、ヂユウエイの哲學の趣向の說明出來ないことは無論であるが、同一の理由で、彼れの哲學を外にして、彼等の生活の精神の理會出來ないことも明白である。この事實よりして、例へば、ジヨサイヤ・ロイスのやうな人々の哲學が有ち得ぬ意味に於て、ヂユウエイの哲學は、卓然として、米國人の、若しくは、米國文明の哲學である

今日、米國人が其の奔放なる天眞と、溌溂たる氣分と、雄大なる企畫とを以て產業民主主義を創設し、經營して居ることは其れを歎美の一對象とすると否とは人每に殊ならざるを得ないが、確かに、驚異の一對象たることだけは失はない。然し、最近に至るまで、不幸にして、其れの企畫に關しては、剴切にして而かも、深遠なる究明者、闡明者が稀有であつたがために、其れは纔かに、盲目の衝動たるに止まつて居て、進んで、反省と批判とを伴つてはたらく概念とならなかつた。わたくし共が、現に米國人の生活の中に見出だす數多くの誇張と、空想と、矛盾と、不徹底と、勢力の消耗とは全然この一つの缺陷より分派して居るのである。之れがために、彼等は彼等の祖先より傳統として繼紹し來り、現に、尙ほ信奉して居る十七、十八紀に於ける歐洲の社會狀態より發生した法律や道德が、彼等の實際生活の要求を滿たすのに、とれだけ不十分であり、不安當である

かに氣付き得ず、隨つて、彼等の實際生活が、眞に、切に、要求するところの法律と道德とは如何なる種のものであらねばならぬかと透徹し得ない。畢竟するに彼等はまだ彼等の活動と理想とに關して解放されて居らぬのである。彼等を解放して彼等をして、出來るだけ自由に、出來るだけ經濟的に、彼等の生活方針を改造せしめ得、又絕えず改造して行く見識と想像力とを抱かしめ得るものは、獨り、彼等の生活の樣式たる產業民主主義の理論的根抵は如何なるものであるか、其れの構成とはたらき振りとは如何なるものであるかを、彼等のために分析し、擧示する哲學あるのみである。そして、ジョン・ヂユウエイの哲學はこの目的のために工夫されたのである。

ヂユウエイの思想の變遷の傾向に就いて、わたくし共の決して看過してはならない重要なる一つの事實は、彼れが始めて彼れの研究を發表し出して以來、最近に到るまで、唯心論的の見地を棄て、或は、其れを變更して、次第に經驗說的の、若しくは、自然主義的の見地を採用して來たことである。是れは、誰れにしても、彼れの『心理學』や、『倫理學』（最初發表の分）や『ライプニッツ』やを取つて、其等を彼れの『實驗論理學』の序說や、其れに收められた最終の論文『實行の判斷』や、彼れと彼れの同學との論集『創造睿智』の第一論文に比較して見れば、直ちに解かることである。是れは、確かに實證すべき傾向であつた。

其の經過を研修の上だけで說明すれば、最初に彼れが取り入れた、或は、彼れの師より注入されたのは、ヘエゲル主義であつた。尤も、ヘエゲル主義と謂つても、彼れの主として選擇したのは、其れを形而上學としてではなく、大まかに歷史や生活を解釋するのに極めて便利な心理學說としてではあつたが、孰づれにしても、彼れが、一度、ヘエゲルの信徒であつたことは事實である。さうであるに拘らず、ダアウインの進化論よりの感化にせよ、ジニムスの心理學說よりの感化にせよ、或は、ベエコンよりジエ・エス・ミルに至るまでの思索方法の一層深刻なる色調よりの感化にせよ、彼れは終にヘエゲル式唯心論の桎梏を脫却して、今日、彼れがインストルメンタリズムの名に主張し、依つて宣傳しつゝある獨自の實驗主義を工夫することになつたのである。

若しわたくし共にして、彼れを眞正なる哲學者、即ち、彼れと利害と運命とを共にする彼れの同胞の代言者を取るならば、單に學究的には、斯く敘述され得る彼れの思想と興味との變遷は、わたくし共に對して如何なる意義を暗示するであらうか。其れは、彼れを取り搔く環境の社會的制度と、社會的價値と

に包和されつゝ生長した彼れの生活を中核とし、標準として、其れと併せて其の環境を觀察し、理會し、統一しようと眞劍に志した時に、彼れは借り物たるヘエゲル主義の不便、卽ち、虚僞に目覺めて來たために、一部分、其れを修正し、一部分、其れを廢棄して、一層善くこの目的に適する一つの哲學の創始に著想することになつたことを暗示するのである。そして、斯くして彼れに依つて工夫された哲學は、自然の行き掛りより現に米國に於て見出だされる産業民主主義の組織の下に存在しつゝある人間の生活の眞相を究明し、闡明することを其れの職分とするものであつたのである。無論、米國人が人間であり、米國の社會生活が人間の生活であると云ふ極めて單純な事由よりして、ヂユウエイの哲學には多くの普遍性と恒久性との含まれて居ることは事實である。隨つて、この限りに於て、わたくし共に對して、貴重な啓發と教化とを與へ得ることも事實である。然し、この事實あるがために其れの考察と推理との特徴は、この特殊の視角よりしてのみ親切に會得さるべきものなることをわたくし共は忘れてはならぬ。

　ヂユウエイの哲學は、産業民主生活の哲學である。其れの組織とはたらき振りとを考察し、批判しようとするのが彼れの努力の一切である。今日産業民主生活を構成するところのものは通常人と科學者とであるから、彼の哲學は通常人の生活と科學者の生活との中に見出だされるものを其れの材料の一切とするといふことになる。そして、彼れが優に證明した如く、通常人の仕事の處置と、科學者の科學の研究とは、全然、同一の原理に依つて支配されて居るのであつて、是等兩者の活動はその間に何等の障壁をも有たぬのである。たゞ、是等兩者の活動の互に異なるのは、一方に於けるはたらきは、他方に於て、一層洗練され、一層正確なものとなるだけである。

　彼れの意見に從へば、知識の作用たる反省は、人間の生活の一次的の活動でもなく、又、其れがはたらく場合に於ても、決して人間の生活の全範圍を支配するものではない。其れは二次的のものであり、部分的のものである。其れは一次的なる或る物より生じ、其の或る物のためにはたらくのに過ぎない。この或る物とは、或る一時に方つて、其れの焦點と、末梢と、パアスペクチイヴとを有てる、在るがまゝの生活そのものの一齣であつて、ヂユウエイは其れを當境（situation）と呼んで居る。そして、實際に、わたくし共が、或る時は友人と談笑し、或る時は夕陽の美を鑑賞し、又、或る時は仕事を取り扱つたり、若しくは、科學を研究したりするところから、當境の態容も社交的より鑑賞的に、鑑賞的より反省的にといふ風に、取次に移り

然に、回期的に、或る困難の現はれる當境の中に置かれるのであるが、若しわたくし共にして其の困難を反省に依つて或る風に解決しなければ、生活の支持は覺束ないものとなるから、反省の生ずる機會と、反省のはたらきと、反省のはたらいた結果とを吟味することが、わたくし共に取つて極めて大切な事柄となる。されば、生活を持續し、失敗を避けて成功を求める必要上、何人でも、多少、是等の性質を理會して居らぬ者、理會しようと努めて居らぬものはない。たゞ彼等の注意の多くは斷片的であり、又間歇的である。其れを一層意識的に、一層總合的にするために、論理學、即ち、哲學が人間の活動の一部として發生したのである。

變化し、若しくは、發展する人間の生活に在つては、過去に於て工夫された方針で支配することの困難な種の新らしい要素が、臨時、當境の中に現はれて來る。在來の方針は、この新らしい要素に對して支配力を有ち得ないために、生活の中に矛盾は生じ、其れの平衡は破壞される。こゝに始めて、一旦破壞さ

に横たはる與料を生活の中に整齊することに限らるゝのである然し、それは、其のまゝでは生活と何等の交渉も有ち得ぬものとなつて居る。

されば、兩者の間に或る交渉を成り立たしめるには、與料をして生活に含まれた要素と關係を生ぜしめるに必要なる符號、即ち指標的意義を其れの手より引出さねばならぬ。然し事實として、與料は多數の成分より成り立つ一つの複合體である。生憎、必要とされる符號、即ち、指標的意義は裏面に隱れて表面に顯はれて居らぬ。そこで、其れを見出すためには、先づ其の複合體を個々の成分にまで分解せねばならぬ。（この理由よりして、わたくし共は總べての分子說と、唯物說とに含まれた合理性を認めねばならぬ。たゞ、其等が往々不合理となるのは、中途に於てさうして見出ださうとした符號、即ち、指標的意義より遊離し、若しくは、其れを沒却して了ふからである。）さうして、必要とされる符號、即ち、指標的意義の所在と性質とが見極められた時に、始めて與料全體が如何なる關係を生活に對し

て有つて居るが明瞭にされる。かうして、始めて與料は生活の中に取り入れられ、かうして、始めて生活は其れを支配することが出來るのである。この場合に、與料の有てる符號、卽ち、指標的意義の性質が生活に取り入れられる方向と様式とを決定し隨つて在來の方針を變更し、擴張することは言ふまでもない。

通常人が彼れの仕事を處置する時と、科學者が彼れの研究を遂行する時とに於て、與料の種類に從つて、反省のはたらき振りに、簡單と複雜と、粗雜と精密と、演繹的たると歸納的たるの相違はあるが、其れの經過は、大體同様である。

物的と心的、客觀的と主觀的、乃至、事件と理想等の對立はたゞ、一旦破壞された生活の平衡を回復しようとして、反省がはたらく經過の中に現はれる作用上のものに外ならない。與料の有てる符號、卽ち、指標的意義は、或る範圍の內で、絕えず後に來たる整齊の方向を限定する力を有つて居るから、この意味に於て、其れは物的であり、客觀的であり、事件である。然し、其れの整齊された曉に、其れの取る最後の様式は、全然、可能性たるに止まるから、この意味に於て、其れは心的であり、主觀的であり、理想である。

以上は、極めて粗雜ながら反省のはたらきに關するデュウエイの意見の一端を敍述したのであるが、かゝる事實より、彼れは知識の性質を(一)特殊的のもの(二)其れの組織を發生的のもの(三)其れの作用を改造的のものと斷定し、其れを主張して、あらゆる形而上學的哲學も認識論的論理學とに反對して居るのである。

アインスタインの哲學

理學博士　桑木彧雄

アインスタインの相對性原理は物理學の一原理であるが、その論じてゐる範圍の性質上、科學の基礎を論ずる哲學者の決して看過することのできない題目であり、既に之に關する哲學者の研究の發表も少くないのである。夫等の中には、この相對論は例へば絶對をいふカントの哲學と一致しないものであるといふもあり、又反對に、兩者の間に何等矛盾がないと論ずるものもある。先きに夫はオックスフォードで哲學のコングレスの研究題目となつたが、又近頃實證論的理想主義を稱ふる獨逸の一哲學雜誌の「アインスタインの相對性原理と近世哲學、特にかのやうにの哲學との關係」といふ論文を募集してゐるのもある。併しアインスタイン自らがいかなる主義の哲學を懷抱してゐるか、いかなる哲學に導かれてこの原理を見出したかは、氏が夫等に就て何も書いてゐないのであるから夫を知ることはできない。唯だ氏が二三の論文の中で、かの實證主義、相對主義を力說したエルンスト、マッハを頻りに推稱してゐるのを見るのである。後にも述べる樣に氏の仕事にマッハの認識論が大なる影響を與へてゐることは爭はれない。併し氏の哲學上の主義が――若しあるとしたとき――全くマッハに同じきや否は明でない。元來マッハの哲學上の主義を何と名くべきか、人が往々マッハの哲學として其所說を論評するを、マッハは自分に哲學なるものなく、自分は哲學者でないと特に辯じてゐた。マッハはその實證論の立脚地から常に形而上學に反對してゐるので、かやうの言をなすのであらうが然しながら哲學のないとすることも亦哲學上の一主義であるともせられる。此頃モスコウスキーといふ人が「アインスタイン」と題する一書を著はした。エッケルマンの「ゲーテ對話錄」に倣つて、アインスタインに科學哲學乃至教育文藝社會の雜多の問題を話しかけて其の得た答を集錄したといふものである。その中に、アインスタインには哲學に對する一種の偏見の、マッハと同樣なものがあり、氏も亦傳統的に中世哲學に對する科學者の反抗を保持してゐると著者は

述べてゐる。科學者は數學的實驗的研究法の精密なるを誇り、科學の中に不精確なる概念の竄入するを容るさない。其故で科學が形而上學の概念より分離しやうと云ふとには、科學者は皆一致してゐるやうであるが、併し個々の概念に就ては人々見る所に相異がある。例へばマツハはニユートンの力學の形而上學的なるを痛擊してゐるのである。然るにプランクはマツハの認識論を以て科學の理想を沒却するものとしてゐる。古くは、ガリレイやデカルトの自然の機械觀は中世哲學の内在因説(オッカルトフォース)への反抗であるが、デカルトのプレヌム説に反し、ニユートンの云ふHypothese non fingo の套句は經驗を超越しないといふ當時の新思想を表白した。然しながらその萬有引力なる擬人的設想は却て内在因説の復活であると同時代のホイゲンスやライプニツツは非難したのである。又コントは主ら形而上學を排して科學を尊重したが、そのエーテル假説を形而上學的とした説は當時の科學者に容れられなかつた。又例へばヘルムホルツの勢力保存の論文も哲學的の名の下に初めは葬られようとしたのである。アインスタインの相對性原理は形而上學的なニユートンの力學原理に代はり、又内在因的なる引力の設想を去り、定義の困難なるプレヌムやエーテルに代へて數學的に定義の精細なる空間や時間の觀念を導入したのであるが、空想的で數學的な假説の重疊に過ぎないといふ批評も――其の力は弱いが――ないのではない。この原理の哲學的意義としては哲學上の相對論絕對論、ヵ理想主義現實主義を決定するといふよりは、他の物理學上の原理の樣に夫等の何れもに若干の論據を與ふべく、唯だ物理學の組織を認識論的に純粹ならしめたところに大なる意義のある樣に思はれる、夫に就て呰ば次に述べよう。

アインスタインの相對性原理には特殊的と一般的との二段の別がある。前者は一九〇五年に、後者の完成せるものは一九一六年に發表せられた。アインスタインは一八七九年の生れで前者は實にその二十七歲のときである。前述モスコウスキーに從へばア氏十六歲のとき既に此問題に疑を抱き始めたといふ。前述エーテル假説なるものは、讀者の知らるゝ如く、物理學者が光波電波を傳ふるものとして空間に瀰漫せるエーテルなるものを假定してゐるの謂である。實にこのエーテルに相對的な物體の運動の性質いかんがエーテル假説を生じて以來の疑問であつた。ア氏少年時代既に之を知つてゐたといふのである。特殊相對性原理は一部この問題を解いたのである。相對性原理は之を推擴めれば凡ての知識が相對的であることを云ひ、オーギユスト、コントに從へば凡ての眞理が相對的であるといふことが唯一の絕對の眞理であると云ふのであるが、夫等は哲學上の相對論で

アインスタインの論ずる限りは運動の相對性である。運動は相對的にのみ認識せられる。物體自身の上の現象の觀察では、其物體が動けりや否を知ることができぬと云ふに在る。吾人が汽車や電車の中、時として全く其動と否とを忘れ窓外を望みて初めて、山川家屋の靜止の假定の下に、車の運ばるるを意識することがあるであらう。假定といふは山川家屋は地球と共に運ばれ幷て靜止してゐないとせらるるであらうからである。かやうな運動の相對性の中でニュートンは絕對の運動といふものを假定したのである。夫は絕對空間に相對的な運動といふことである。併しニュートンは空な空間に對する一樣な運動は全く認識することができないとしたのである。然しながら一樣ならざる運動に於ては力が働くから運動の絕對認識ができるとした。例へば絕對空間に於て二個の流動體の夫々球狀をなすものがあり甲に比して乙は、乙に比し甲は廻轉してゐる詳細に見れば甲は切口圓なる楕圓體で乙は球であつたとする。然るときニュートンの力學に於ては甲は絕對に廻轉してゐる、乙は然らずとする。廻轉運動をなすものには遠心力が働らき、恰も甲に於て其作用を見るが故にといふのである。例へば地球と恒星とは相對的に廻轉してゐる。地を靜とすれば天動說を得る。併し地球の自轉が絕對廻轉であることは地球が廻轉楕圓體をなすことで知るといふ。然るにマッハは絕對空間といふ如き不可認識の概念は凡て用ひない。其故に絕對運動なる概念はあり得ないとするのである。地球の自轉といふは恒星に相對的な廻轉といふことであり、所謂遠心力の結果と云ふ如きは相對運動の結果であるといふのである。大なる廻轉體の傍の靜止體にも同樣の效果あるべきものとする。

一方にマッハ等の絕對廻轉否定說があつたとき、却てニュートンの不可認識とした絕對進行運動の可認識なるやうなる豫想を生じた。夫は先に述べたエーテル假說の結果である。光波がエーテルを傳はるとするならば之に向つて動く物體と之に背いて動く物體とでは光を受取る時間が兩者に於て異なるであらうから其時間の差の測定に依てエーテルに相對的な物體の運動（一樣なりとも）を知るであらうからである。エーテルが空間に固定してゐるとき夫は絕對運動の認識となる。十九世紀に入り光はエーテルの波動であるといふことに說の一致を見た時エーテルの密度、彈性率などの計算があつた。併しマクスウエルが光波は即ち電波であると云ふに至つてエーテルの力學模型（普通の物質の運動狀態に依つてエーテルの運動の機構を類推せしめるもの）は極めて複雜になり、寧ろ絕望となつた。ローレンツの電子論に至つてエーテルから、密度彈性といふ樣な物質的力學

的性質を取去り唯だ之を空間に靜止し不動なるズブスタンツとしたのである。然るに期待された測定光がこの靜止エーテルを傳播する時間の測定で物體(地球)の絕對進行を知らうとする實驗が無効であつたのである。この結果を基としてアインスタインは、ニュートンの力學で不可認識としたやうに、一樣に進行せる物體の上の現象の觀察では其物體が動けりや否やを知ることができないと云ふ原則を、力學現象のみならず、光學現象にまで適用せしめ、之に加へて、光の速度は物體の運動に無關係な恒數であるとし、この二定理を根本としたのが一九〇五年の氏の特殊的相對性原則である。前述二定理の結果として時間及空間の計量が動體に相對的であることを導いた。相對的であるが故に前述實驗の無効果の所以を說明し得たのである。是等の結果の重要なるは相互に一樣の進行運動に在る物體は凡て何れを特に拔んでゝ靜止せりとも運動せりとも云ふことの不可能であるとに在る。然らば各動體に相對的な空間や時間に於ても同樣でなければならない。卽ちそれらの間に絕對な空間、絕對な時間を否定することゝなつたのである。かくてエーテルに相對的な所謂絕對進行運動を否定した。ローレンツはエーテルより物質類似の密度や彈性の凡てを取去つたが、唯だ之に速度といふ性質だけを殘したのである。卽ち物體がエーテルに對する運動といふことには意味があるとした。然るにアインスタインは今、エーテルに取殘された最後のこの力學的一性質までも葬去つたのである。

以上は一樣なる運動に就てゞあるが一樣ならざる運動といふは、落下する物體は其一例で、夫は速度が一樣に加はりつゝある運動をなしてゐる。ニュートン以來之を以て地球引力の作用となすのである。等速運動の相對性を等加速運動に推擴めて引力の作用を惰性の作用に類推せしめて說き、光に及ぼす重力の作用を論じたことはアインスタインは旣に一九〇七年に之を試みた。私は一九〇九年の春瑞西を旅行してベルン市に當時そこの特許局の技師であつたアインスタイン氏を訪ふた。このごろの氏の手紙に

Ich erinnere mich noch sehr gut Ihres Besuches in Bern, zumal Sie der erste Japaner, überhaupt der erste Ostasiate waren, den ich kennen gelernt habe. Sie verblüfften mich damals durch Ihre grosse theoretischen Kenntnisse………

とあり、末段滑稽に類するが、三時間ばかりを共に散步などし私が氏に聞いた談話の斷片は當時東洋學藝雜誌に「留學雜記」と題した中に記した。私は等加速運動の相對性は絕對廻轉の否定

したのである。氏はマッハの認識論を論理的であるが物理學者に物足らぬと云ひ、プランクの演説の末段の云方を巧妙に評したりした。又其頃プランクの唱出した量子論が漸く學界を動かし始めて、物體がエネルギーを吸收し放射するを從來連續的としたのにそこに、不連續性を認めようとしたのである。其結果は光波說よりは古の微粒放射說に類する所もあり、エーテルの實在性を失はしめたやうな相對性原理と結びつき易い。私がア氏を訪ふた頃は、氏はこの問題に興味を傾け、プランクの此の過まりを指摘し(プランクは後に夫を訂正した)又光の分子說を完成すれば記念像が立つなどと戯れたのであつた

其前後數年氏の研究は主として量子論に關係してゐたが一九一一年に氏は再び四年前の等加速運動の相對性の問題を取上げて光線に及ぼす重力の作用に就て詳論し、スペクトルのずれ、光線の屈曲を豫言した。この以後學界に重力論の種々の流れを生じた。アブラハム、ミー、ノルドストレーム、石原博士其他が之に貢獻したのである。重要なる根本假定は所謂重力質量と惰性質量との相等といふことである。然るに光速度の不變といふことが先に相對性原理の基本をなしてゐたが、重力に依る光線の

然しながらアインスタインは却てこの相對性を一層擴張し、一九〇五年に見出したものを特殊的相性原理と呼び、新たに一般的相對性原理を樹立した。一九一三年頃より始めて一九一六年に完成したのである。この一般化に於て氏はマッハが實にその一生の仕事（レーベンスアルベイト）ともしたニュートンの絶對空間、絶對時間說排斥の認識論的研究に大に負ふ所があることを述べてゐるのである。特殊的相對性原理は進行運動にのみ關する相對性でニュートンの力學と同樣に認識論的に不十分である、一般化に於て始めて之を十分にし得たといふ。氏の論文の完成せられた一九一六年にマッハは七十八歲を以て逝いた。氏はマッハの追懷の辭にマッハの仕事の科學者に認められなかつた不當を鳴らし、若しその壯年氣鋭のときに光速度の問題が今日の程度に知られてゐたならば恐く自分の得た結果は彼に見出されたらうとさへ云つたのである。マッハの與へた影響は之を以ても知り得る。この一般的相對性原理に於て完全に絶對廻轉を否定したのである。然しながらこゝに所謂眞理の相對性に從へば地球を廻轉せりとする力學と地球を相對的靜止せりとする力學とは必しも同一なるを要しないであらうが、同一である方がより簡單である。より簡

單なるものを得るためにアインスタインが苦心したのである。ミンコウスキーの四次元說を擴張し又最直軌道律を入れて之をなし得たのである。ミンコウスキーの空間三次元に時間一次元を加へて四次元の世界を考ふるといふ說はアインスタインの特殊相對性原理より導出されたもので、略ぼ似た考は少し前にポアンカレが述べたのである。アインスタインの一般化の結果、ミンコウスキーの四次元はユークリッド幾何學的連續であるが一般化したものは非ユークリッド的連續となり非ユークリッド空間には所謂空間の曲率がある。理論の結果は物質より遠く離るればこの曲率なく、近きに從て曲率を得る。(三次元空間の曲りは二次元の平面と曲面との關係によりて類推するの他に直觀の道はないのである。)卽ち物體の附近の空間はひずむ、ひずむが故にこの部分に直線は畫かれない、其故に光線は物體附近に於て屈曲するといふ。從來引力と稱せるものは今空間のひずみといふことを以て代へられたのである。物體の存在に原因するが所謂內在因の考とは甚だ違いものがある。又その方則も距離の自乘に逆比例するといふを以ては近似的にしか表はされないことゝなつた。ひずむ空間に何等か實在を考ふべきであるか。アインスタインは之に就てもフレネル、ローレンツの假定せると異なつた意味で、實にマッハのいふ意味でエーテルを考へようとする。マッハのいふエーテルは惰性物質の性狀を定むるのみならず、又惰性物質に依りて定められるといふ相對的のものなのである。

ニュートンの力學が絕對の空間時間の實在から出發するは所謂超越的實在論である。エーテルの力學模型說も亦歸趣同である。力學模型說の行詰まつたとき所謂數理現象論を生じた。現象の數學的記載に止めて認識を超越した說明を敢てしないと云ふのである。マッハ、キルヒホフの影響であつた。プランクはこのマッハの認識論の影響を喜ばなかつたのである。先に私がアインスタイン氏に批評を聞いたといつた「物理學世界像の統一」の講演の中に之に關する部分がある。プランクはマッハのいふ眞理の相對性に反對し其絕對性を云ひ、火星の住民も一度は我々の物理學を有したいといふ譬喩を用ひたのである。たきに記した、ア氏がプランクの講演を巧妙と評したといふは講演の中に、理論の優劣を絕對的に判ずる決定的實驗なるものがあると云つたことであつた。Experimentum Cruciscioと云はベーコンの用語である。然しながらマッハと大部分意見の同じヂューエムは此の如き實驗のあるを認めないことを述べてゐる。決定すると解釋することが既に理論であるといふのである。ア氏がマッハに物足りないといふは是等の懷疑的態度であつた。

一九一八年プランク六十の祝にアインスタイン氏が祝辭を述べた。其中に「世界像（ウエルトビルド）」なる言葉を繰返してゐる。世界像の「考へ得られる凡ての理論的構造の中でその時々に或る一つが無條件に他の凡ての上に勝（ナ）ぐれるのである。感覺の世界がその理論の體系を決定すると云ひ得る。併し感覺から理論の根本へ導く論理の道は何もないのであるが、唯だ經驗に感入するに基く直觀に依るのである」と云ひ、ライプニッツの云ふ Prästabilierte Harmonie の憧憬が理論家の不斷の努力の源泉であると云つた。最後の言の如きはプランクの云ふ所と一致するであらう。「その時々に或一つが勝ぐれる」といふ如きは相對論とも矛盾しない、是等がア氏の哲學的傾向を示すとも云ひ得やう。アインスタインがプランクに就て書いた他のもの丶中にプランクが音樂を好み中學を出で丶後、音樂學校と大學と何れに入るべきかを考慮したことを記してプランクの論文に藝術的完全があると評したが、アインスタイン自身も亦音樂に大なる嗜好を有し、藝術に親しむ性格あることを前述のモスコウスキーが記載してゐる。ア氏が、私にはガウスよりもドストイエフスキーの方が感じが深いといふ樣な言をなしたのをモスコウスキーは咎めて氏の藝術觀は諒するが兩者の比較は無理である。ドストイエフスキーなくば「カラマゾフ」はないであらう、がガウスがなくとも誰かはガウスの坐標を考へ得たであらうと云つたのに對し、ア氏は之を否定し、科學の組織、發達が天才の創造に負ふことの多いことを述べてゐる。恰もマッハやデューエムが科學の歴史に對する相對的な見方と同樣なのである。

私は實驗に決定的と稱すべき絶對的なものがないやうに、物理學上の理論にも哲學上の議論を決定するやうなものがないであらうと思ふ。ニュートンにリヤリスティックの傾向があつてもカントは其の結果をアイデヤリスティックに成立せしめたのである。唯だ理論の組織としてはアインスタインは、測り得られないものは物理學上の概念でないと云ふ。そして絶對運動を排除したのである。夫に依りて物理學の組織が認識論的に純粹になつたと云へやう。併しさうして得た「普遍」が經驗に先つものか、後るゝものかに就ては相對性原理は何も語り得ないであらうと思ふ。（終）

（一）空間の實在といふこと既に哲學の問題である。マレブランシュ、ライプニッツが之を論じたこと、空間内の運動の力學的基準のこと、エーテル假説に依つて夫が如何に變化せるかなどに就ては、私は絶對運動論と題し、明治三十九年東京數學物理學會に於て一論文を讀み、同年東京物理學校雜誌に夫を掲載した。

藝術の哲學者サンタヤナ

礫川道人

『改造』記者足下。

わたくしには、我が國に於ける文壇及び學界の諸士の所爲に對して、久しく抱いて來た一つの怪訝があります、其れは他でもありません、これまで彼等は苟くも西洋に於て文人とし、學者とし、乃至、宗教家としてや、名を成した者の著述とさへ云へば、其等が我が國の文化の開發にどれだけ意味のあるものであるかを問ふに遑あらず、先を爭つて其等を歡迎し、馬鹿らしき程度にまで法外に、時代錯誤的に、其等の價値を鼓吹したに拘はらず、獨り、ジョオジ・サンタヤナに限りて其の選に洩れて居たことであります。トルストイや、ニイチエや、タゴオルや、ジエイムスや、ラツセルに學ぶところが多くあると將へた彼等は、サンタヤナより何物をも學び得ないと考へたのでありませうか。それとも他に十分な理由があつたのでありませうか。或る人は彼れの著書が我が國に行はれず、彼れの思想が我が同胞に依つて攻究されない主な理由として、彼れの文章の難解であるの一事を擧げるのであります。無論、彼れの文章は難解でないとは言へませんが、一層大なる理由は他にあると思はれます。其れは、西洋に於ても、サンタヤナの天才は極めて少數なる識者の間にのみ認められ、珍重されて居るに止まるのであつて、彼れに關する俗衆の評判は、延いて我が國に於ける文壇、若しくは、學界の流行か惹き起すまでに至らないからであります。理由の孰れにあるにせよ、若し我が同胞にして一層智く、一層賢く、一層善良に生活することを望むならば、そして若し哲學者にしてさう生活する道を敎へ得るものならば、わたしは誰れに行くより先きにサンタヤナに行つて其れを乞はねばならぬと信じます。何故ならば、わたしの見るところでは、今日、數多くの生ける哲學者中で、彼れほど透徹して人間の生活を理會し、彼れほど純眞に彼等の運命に同情して居るものは、彼れを外にして、皆無でないにしても、極めて稀有であるからであります。

始めてサンタヤナの著書に接する者は、一向に浩蕩たる彼れの知識と奥邃なる彼れの思想、委蛇たる彼れの句法と、絢爛たる彼れの辭彙とに眩惑し、ただ、光芒を放つ個々の格言の排列を看て、其等を貫通する雄大なる理論の系統を見ず、彼れの意見の眞骨頭の那邊に存するかを捕捉し得ないのであります。然し、彼れにして努めて其等を再讀し、三讀するならば、彼れは著者の到頭反覆說くところのものは、至つて平明にして單純なる題目であることを覺るに到るのでありませう。其れは冷靜に、公平に、そして深刻にあらゆる方面に於て、人間が自己を表現して來た、そして、現に表現しつゝある有樣を觀察し、その觀察した結果を綜合し、醇化して、そこに人類の幸福のために一大條件を劃しようとするのであります。されば、彼れ自身も明らかに『哲學の有ち得る最高のアンゼッションは、彼れの種族の記憶と判斷とのために代言者となることである。』と語つて居ります。そして、彼れが口を極めてプレトオとアリストオトルとを推稱して居るのも、畢竟するに、上下四千年に亙つて輩出した幾百の哲學者の中で、是等の兩人が人間の性情の發動に關する考察と、評價とに於て最も正鵠を得て居ると、彼れは考へたからであります。

サンタヤナは人間の生活のはたらき振りを忠實に觀察して、一つの歸結に到着しました。其れは、總べて理性的のものはそれの材料から云へば悉とく自然的のものであり、總べて自然的のものは等しくそれの終極に於て理性のものなるの傾向を有つて居る。兩者の區別は纔かに作用上のものであつて、決して本質のものではない、自然的のものが組織さるれば、其れは、理性的のものとなり、理性的のものが解體すれば、復、自然的のものに還つて了ふ。斯くして、理想は衝動の組織されたものであり、概念は知覺の組織されたものに過ぎないから、(精神病者や被催眠者に見られる如く)理想が解體し、概念が解體した場合には、是等は、復衝動に還へり、知覺に還ることとなるといふことであります。この事實より、彼れは人間の幸福に取つて必順なる一つの要件を構造して居ります。それは、生活を理性化するに方つて、出來るだけ其れを組織する總べての要求の價値と權利とを認容しなければならないといふことであります。彼れはこの見地より卓拔なる一個の文明史家として、生活の合理化の四大機關たる社會生活と、宗敎と、藝術と、科學とがこれまで取つて來た發展の經路に就いて同情あるそして、深遠なる解釋を試みて居ります。社會生活にしても、宗敎にしても、藝術にしても、はた、科學にしても、人間が、(其の始め理性の萠芽を含んで居るに拘はらず、全然混沌たるものとしか見えなか

つた）彼れの衝動と感覺とを其等の意味の暗示に隨つて醇化して、自己の生活と發展との爲に工夫した構造でありますから、ますます是等を完成して行く道は、是等をして最も善く衝動や感覺の本質を尊重しながら、最も善く其等を整齊する様式と精神とを取らしめるにあることを彼れは發見して居ります。隨つて過去に出現した、或は、現に存在する是等のものの優秀と劣惡とを、全然、この一つの見地より彼れは批判して居ります。

彼れは、信仰に於て、神秘主義と禁欲主義とを排斥して居ります。何故ならば、其等は幸福なる生活に必要なる或る種の欲望を否定するからであります。彼れは、哲學に於て、超越主義を非難して居ります、何故なれば、其れは幸福なる生活に必要なる或る種の經驗を無視する傾があるからであります。これと同時に、彼れは、政治に於て、平板なる民主主義を、藝術に於て混濁せる印象主義を卑下して居ります。何故ならば、其等は共に幸福なる生活に必要なる理性のはたらきを抑壓して出來たものであるからであります。

サンタヤナの留意するところのものは、進歩よりも幸福であり活動よりも調和であります。尤も、人間の性情の根本意義に徹した彼れのことであれば、進歩と活動とは人間の生活が如何なる境遇に置かれても、其れの幸福と調和とに對して本質的の關係のあることを知つて居りますから、無論是等のものの價値を無視することはしませんが、彼れに在つては、是等のものはたゞ幸福と調和との方便として、始めて或る價値を有つて來るのであります、隨つて、彼れは科學よりも道德を重んじ、道德よりも藝術を尊びます。つまり彼れの意見に從へば、科學は道德の方便であり、科學と道德とは藝術の方便であります。この點よりして彼れは確かに藝術至上主義者であります。然し、こゝに斷わらなければならないことは、彼れの謂ふ藝術は今日世間に行はれるやうな人間の欲求の小部分を滿たすために人間の生活の小部分を抽出して之が材料とした藝術ではなくして、人間の總べての部分が、人間の欲求の總べてを滿たすやうに完全にはたらく作用そのものであるのであります。彼れの言葉に從へば、『斯くして理性の生活は藝術といふ言葉を其れの最高義に取つて、藝術と呼ばれ得るところのものの別名である』であるのであります。この意味で彼れは又、彼れの『理性の生活』第三卷『藝術篇』に於て、最高の藝術とは政治の最も完全に達したものの謂であると云つて居ります。

彼れは天成の藝術家でありますこの科學の時代に於て、殆ど總べての哲學が、科學の注脚を事として居るのに、（無論、其れ

には十分の意味はあるが）彼れの哲學が藝術の展開のために努めて居るのみならず、彼れの哲學そのものまでをも一つの立派な藝術として居るのは、實に學界の珍とすべきであらう。彼れの哲學は、歴史と社會とに出現したいろいろの事相を可なり深刻な論理と、嚴正な推理とで論議して居るに拘はらず、彼れは其れを取り扱かふ態度の極めて豐潤に藝術的なるが故に、いつでも、わたくしが彼れの書より受ける感興は、最も優れた藝術より受ける感興と全然同一なものであります。哲學者はして藝術家たるの天分を有つて居る點に於ては、プレトオを除いて、サンタナヤは古今獨歩であると言つても差支へないと思ひます。

サンタナヤの哲學は、最も完全なる意味に於て、ヒユウマニズムの哲學であります。卽ち一方に於て超越的の見解を排斥すると同時に、他方に於て、感覺的の見解を排斥して、飽くまで經驗本位、人間の本位――極言すれば、個人の生活本位――の立場を固守して、知識や、道德や、藝術や、政治の意義と作用との闡明に努めて居るといふ意味に於て、ヒユウマニズムの哲學であります。

然し、彼れの哲學には何等の缺陷も含まれて居らぬとは言はれません。こゝでは其れの各に就いて煩瑣な批判を下して居る暇はありませんから、たゞ其等の一二の名目だけを擧げることにします。

たとひ彼れの主張する通り、想像力と知力とは、もと、その本質に於て同一のものであるにしても、知力が想像力より分化して知力と成るのには相應な刺激よりの訓練が必要であります。然し、彼れは知力の分化にはこの訓練の經過の大切であることを無視して居ります。是れはその缺陷の一つであります。

彼れは辯證學と物理學とが初めより異なる心のはたらきより生じたやうに說いて、是等兩者の間に二元を立てて居ります。是れもその缺陷の一つに相違ありません。

然し、彼れの哲學に於て見出される最大の缺陷は、彼れが現代人の生活を理會せず、此れに同情を寄せて居らぬことであります。之れがために彼れは科學を論じては、其れを單に修養の道具としてのみ取り扱ふに止まり、工業を論じては、此れを一概に奴隷的と貶し、社會を論じては、現代の產業制度を全然不問に附して居ることの一事に歸せねばなりません。

是等の缺陷の總べては確かに彼れが餘りに希臘主義を信奉し過ぎた自然の結果であります。

ベネデット・クローチエ

文學博士　桑木嚴翼

一

若し現代の學界に在て、各國を代表し得るものを列擧すれば、伊太利に於ては、必ずクローチエの名を逸するを得ないであらう。其の諸著を英譯したエインスリーは、一九一七年出版の『論理學』譯本の序文に於て、歐洲諸國がチユートン族列強と大爭鬪の最中に此書を公けにする出來を說き、之に依つて、世界文明の未來が何所に存すべきか、といふ事をアングロ・サクソンの世界に指示したい、と言つて居る。卽ち、其考によれば、將來文明の中心となるべきものは、羅甸文化の由緒ある傳統を繼承し、併せて至高至醇の希臘思想を包括する所のものに他ならないのである。然かも其の證左となるものは實にクローチエの哲學にあるとすれば、此の南歐哲學者は、今や佛國のベルグソンと共に、羅甸民族の智慧を双肩に擔ふとも謂ふべき位置に達したと言つてよい。且又、其書は今は殆ど凡て英國に飜譯せられ、所謂チユートンたる獨逸の學界に於ても、夙に一部の人士に識認せられたのみならず、今なほ新に其の飜譯を見る有樣なのである。

此の如くクローチエの名は、今は全く世界的とも稱すべきものであるが、然し數年前にはまだ決して然かく喧傳せられて居たのではなかつた。私自身も今を距る十數年前、一九〇八年獨逸に開催せられた萬國哲學會に於て、其の總會に於ける講演者となつたのを見て、初めて伊太利の學界を代表するに此人のあることを知つたのである。當時の講演は、後に其の『美學』の英譯書中に採錄せられたもので、其際多大の感興を以て迎へられたものである。クローチエは後晩餐會の席上に於ても亦演說を試みたが、其時同國人の會員が狂熱的に喝采したのを見て、他國人たる私は聊か苦々しい感じを有つたのであつたが、一伊人の紹介で一二言を取り交すことを得て、其の温厚謙讓の態度に敬意を表せざるを得なかつた。併し當時は僅に其の美學が獨譯せられて居たのみであつたから、エインスリーの所謂チユート

ン世界にこそ多少知られて居たが、アングロ・サクソン民族中には反て餘り多く知已を得て居なかつたのであらう、と想像される。

然るに爾來數年を經て、現今に於ては其著書は殆ど皆英佛獨等の諸國に飜譯せられ、我國に於ても既に其の紹介が公けにせられ、又其の經濟及道德に關する主著は飜譯せられて居る。其の此の如く勢力を得來つた原因は抑も何所に存するのであるか。

ベネデット・クローチェは（Benedetto Croce）一八六六年ナポリに生れて居るから、なほ六十歲にはやゝ遠く、歐洲知名の碩學に比べれば、割合に後進と云つてもよい。獨逸等に於て哲學を學び、ヘーゲルの『哲學全集』を飜譯したりして居るが、然し「セナトーレ」の位置にある人で、本來學究的哲學者ではない。其の自傳によると、初め獨逸の哲學を尊崇し、如何にもして其の奧義に通じようと努めたが、後に至つて、其の難解なのは獨逸哲學其ものゝ空漠たる詭辯に過ぎないからである、と悟つたといふ。然しとにかく獨逸哲學の素養と理會とに乏しい人ではないが、其上に又、其の本來の伊佛的雜駁氣質を加味して、此に一種の學風を構成した所に、其の特色を發揮して居るのである。而して多くの哲學者が學究的であり、隨て多少一般世俗と隔絕する傾向の存する中に在て、全然素人的態度を保持する所が、反て又多數の人々を惹き付ける所以となつて居る。是等が其の暫くにして博く名聲を博するに至つた外面の事情であらうが、更に深く其内面を考へれば、其の說が著しく綜合的性質を帶びて、而かも何れも皆現代の機運に符合するものであるといふ點が、許多の渴仰者を招徠する理由であると思はれる。クローチェを稱して單に人氣者といふことは、固より此哲學者に對して禮を失する言であらうが、善い意味に於て人意を得たものであるといふことは、必しも不當な觀察ではなからうと思はれる。

然らば如何なる點が綜合的であるか。之を說くには先づ簡單に其の學說を敍述しなければならぬ。

二

クローチェの哲學は精神の學といふ語で表はされて居る。即ち Filosofia dello Spirito でエインスリーの英譯獨佛譯等には Spirit, Geist の學等の語を用ゐてあるか、カーは之を「Mind の哲學」と呼んで居る。要するに、心或は精神といふ語を特別の意味に用ゐて、哲學の問題を之に限つたのである。其中に包括せられる諸問題は、各一卷の書に於て論究せられ、恰かもカントの三批判書が其主要なる問題を網羅する如くして、

總計四卷の書となつて既に出版せられて居る。卽ち其は

一、美學 (Estetica, come scienza dell'espressione e linguistica generalle)。

二、論理學 (Logica come scienza del concetto puro)

三、實際的哲學 (Filosofia della pratica——Economica ed etica)

四、史學論 (Teoria e storia della striografia)

である。其他にはマルクスの唯物史觀を批評したものや、伊太利の歴史哲學者として昔に己の先驅に擬したルドギコ・ギコを傳へたものや、ヘーゲル哲學の價値を論定したもの等數種あるが、思想の本系を示したものは上の四種である。然も以上四書の中、基本となり又總說となつて居るものは實に其の第一書である。蓋しクローチエの哲學は卽ち心の學で、而して歸着する所史學となるのであるが、然し其が著名となつたのは其の美學說であつたのである。其故に我々の解說は其の全體の說明と共に、主として美學書の梗概を擧げるに止めたい。

クローチエは哲學を以て精神の學として居る、然らば之に對するもの卽ち科學は自然の學でなければならぬやうである。然し精神學自然學或は心學物學等と其の研究事項が全く二分せらるべきものであるか、といふに必しも然うではない。卽ち哲學と科學との差別は其の對象の性質は存せずして、其の見方の相違に歸するものであるとすれば、或は科學を以て具體的とし哲學を抽象的とするかも知れないが、是は全く誤りである。哲學の問題は心の作用に關係ある美とか眞善利とかいふ事柄であるから、極めて卑近であり、又反て具體的といへる。具體的なものゝみが、實であるから、諸科學は固より又有用で其れ〴〵深い自然認識を生ずるものであるが、たゞ抽象的に之を示すに過ずして、反て實在を示して居ない。而して抽象的なものは卽ち部分的なものであるから、科學は諸種に分れて來るが、之に豫想せらるゝ具體的實在的な學はたゞ一の哲學あるのみである。然も其具體的實在は心に他ならぬから、其故に哲學は卽ち心の學となるのである。

此の如く言ふと、哲學は心理學と同一となるか、といふ疑が起るであらうが、心理學は心の科學であつて哲學ではない。而して又一方には、此哲學が實在を以て全然心に歸する所は、唯心論若しくは觀念論を主張するものゝ如き觀があるであらうが、然しクローチエの所謂心は普通の心の如く狹く解せらるべきものではなく、實在が其自身或は我々に對して現れる場合に取る所の各形式の基礎を其中に有するものである。其實在は一の體系を構成して居るが、哲學は其の活動形式を表示して、是が其

過程中に於て相合して具體的經驗を形成する仕方を示すものである。此の如くして哲學は心を論することによつて實在の眞相を明にすることゝなるのである。

さて心の活動の方法を分つて知と行との二とし、即ち理論的及實行的の活動とするが、其の關係の順序を云へば、知は行に依賴しないけれども、行は知に依存するものである。然し知は普通に考へられるやうに、「心」と之と獨立な「物」との單純な關係ではなく、即ち單に考察のみならずして活動である。其中に直覺と思惟との二作用を包含するが、是が即ち『美學』と『論理學』との問題となつて居る。更に又行を分てば經濟的と道德的との二活動となつて、其が『實際的哲學』に於て論ぜられて居る。而して具體的世界は是等の心的活動を離れては何等の意味もない。試に夏の夕庭園を散歩すると、涼風、花香、遠くの樂聲、薄暮の微光等を離れて何物か殘るであらうか。然し是等は皆心的實在の一部に他ならぬではないか。更に又此感覺的性質に附加して、之を結合する概念があるとすれば、是も亦心的作用から生ずるものであるから、結局心的活動が即ち全實在であると言はれるであらう。

然し或は心活動をして全然受動の地位に立たしむべき或物がないであらうか。此の如き心的以外の實在が存在することを全く拒否することは出來ないが、然し是は單に限界概念に他ならない。而して若し普通に所謂物を以て之に擬さうとすれば、其は形式を有せざる抽象的部分に過ぎないことになる。哲學は全實在を抽象せずして、之を實驗する立場から其の形式を思惟して行く。故に物を單に物として抽象する自然科學は、學としては中間の階段に止まるもので、結局皆哲學に進むべき筈なのである。

斯く哲學の對象を心に限るが、其の所謂心は個人的性質を有するものであるか。若し然りとせば、其の個人心と一般的實在との關係は如何。之を解釋するものは「歷史」の概念である。即ち各個人心は其中に歷史を包藏する、即ち過去は其中心となるものであるが、然し又此過去は現在によつて決定せられ、兩々相働いて居るから、各心は瞬間的であつて同時に永久的である。而して此個人心は許多對立して居るが、其間に又歷史的關係は其の共通性質を有して、人の世界をつくるものであることを示して居る。

此の如くして所謂心は畢竟生物學的概念でもなく又形而上學的概念でもなく、歷史的概念或は歷史の概念であるといへる。此の心を論ずる哲學は實體論ではなくして方法論である、即ち哲學は秩序及び整頓の學であつて、普通の事實や史的事件等の

現象界を超越した理體的實在の學たる形而上學ではない。而して秩序等を論ずる方法論は史的判斷形成の學であるから、此點に於て哲學は結局史學に歸すると言ひ得るのである。こゝに其の哲學體系の第四部を『史學論』と名づける所以が存する。

三

クローチエの思想の大系は以上の畧說（カーの書に負ふ所が多い）によつて明かであるが、此中に包括せられる四部門の基礎をなすものは、實に其第一部門たる美學に關する著述である。其中には主として直覺（直觀）を論じてあるから、クローチエの哲學を一種の直覺哲學と見た場合には、正しく其の根柢を說いたものとなつて居るのである。而して此書は又其中に他部門の問題にも觸れて居るから、或意味に於て其學說の基礎とも稱せられるであらう。

『美學』の開卷第一には直覺的（或は直觀的——此兩語は便宜同樣の意味に於て錯綜して用ゐて置く）知識（又認識——是も亦同意義）の性質を評論して居る。先づ知識に直覺的と論理的との二種があるが、其の特質を一言すると、一は空想により、一は理智によるものである、或は又、一は個體に關し一は一般に關する、一は事物に關し一は關係に關する、一は直觀（形像）を生じ一は概念を生ずる、と言へる。而して普通の生活上には直覺的知識が大に活動して居るが、理論的哲學的方面では然らずして、論理なければ盲目である、主人なき從僕である、などゝ言はれて居る。然し直覺は果して此の如く論理に比して劣等の地位に置かるべきものであらうか。

クローチエは先づ直覺（直觀）が決して他に主人を要するものでない、といふことを說いて居る。直覺の中には思想が混入して居ることもあるが、又全く然らざることもあり得る。例へば月光の印象を受ける場合の如きは、純然たる直覺に他ならないのである。而して此の如く思想なくして直覺の存在し得ることは、卽ち思想が直覺に必須なものでないことを證明するものである。且つ又直覺に結合する思想は既に純粹の思想ではない。劇曲に述べられる哲理は、たゞ其劇中人物の特性を表す爲に用ゐられたものに過ぎない。藝術品に概念が混有せられても、其は哲學とは同一にはならない。反對に又哲學中に直觀が闖入しても、依然として概念となつて仕舞ふ。此の如くして直覺は論理以外の別天地を占めるものである。

然し又直覺は一方には知覺とも區別せられる。知覺は現實に生起する事實に對してのみ起るものであるが、直覺は必しも之に限らない。直覺に於ては現實的と可能的とか無差別に存在し、印象を單純に客觀化して行くものである。其故に直覺は空

間時間の範疇で組織形成せられたる感覺であると見たならばやゝ眞に近いと言へよう。然し直觀中には毫も空間時間に關係しないものもある、或は空間性のみを有する場合もある。とにかく空間や時間の形式を附ける時には思慮が交らなければならない。而して此空時共ものは直覺せられるものではない、又心理學上此表象は原始的のものではなく、たゞ事物を共體的個體的に示す場合の範疇或は機能に他ならない。

直覺は此の如くして又感覺と區別せられる。感覺は形なき資料であつて、單に活動性を有するのみで所謂動物性である。形式は恆常的で精神活動であるが、質料は變移するものである。一派の思想（即ち感覺論者）は形質の別を認めないが、是れは眞に直覺の性質を理會したものとは言へない。而して此の如き論者は又感覺の聯合を以て直覺と同一視するが、元來此聯合の語は曖昧である。若し之を意識的記憶の如きものに限れば餘り狹くなるし、又之を無意識的要素の結合とすれば感覺といふと異ならなくなる。或は又再生的でなくして生出的の聯合であるとすれば直覺論者の所謂感覺の如き受動的のものではなくなる。要するに感覺と直覺とを同一視する事は出來ないと言はねばならぬ。

然らば感覺と區別せられる表象とは如何。元來此表象といふ語は曖昧である。即ち或る定まつたものを表はすとすれば其は直覺であるが、單に感覺の集合であると見れば、たとひ之を第二次的と見ても依然として感覺たるを免れない。

此の如くして直覺を理會するには表象の如き受動的作用によらず、自ら作用する所の表現と之を同一視するを要する。此の表現に客觀化せられないものは感覺である、自然である。之に反して心が直覺的に認識する場合にはたゞ活動によるのみである。斯くて直覺的活動は結局其が表現するだけを認識することゝなるが、然し其方法は單に言語に限らず、線でも又色でもよい。

此の如く言ふと或は論じて、心中に好い思想があるが之を表現することが出來ない場合があるから、直覺と表現とは異なるといふが、然し實は既に考があれば之を表し得るものでなければならないのである。或人は又表象と表現とを區別し、何人も景色を表象するが、たゞ畫家のみが之を表現し得るとするが、實は然うではない。人々は日常たゞ世界の一部を抽象して感覺するのみであるから、感じて居て實は視ないと言へる。たゞ藝術家のみ眞に視るもので、即ち直覺直觀するものである。其故に結局直覺的認識は表現的認識である。

クローチエは此の如くして直覺的知識と藝術とを同一視した

が、此に至て其は其絶頂に達し得たと言つてよい。然し斯く論ずると共に異論を招く恐れがあるであらう。即ち藝術は直覺の一種に過ぎないのではないか。從來藝術を以て直覺の直覺であるとして、恰かも學を概念の概念であるといふやうにするが、然し實際藝術と直覺とはたゞ複雜の程度に於て相違するのみで決して別種と看做すべきものではない。又其內容的性質に於て異なるのではなく、たゞ其外延に於て相違するのみである、即ち其差別は余り分量的に過ぎない。斯くして直覺は結局皆美學に於て論究せられるものとなり、直覺を有する限り天才も凡人も單に分量の相違に歸するのである。而して是は天才を貶して凡俗としたのではなく、萬人を舉げて生れながら詩人であるとしたものである。

此の如く直覺的知識を藝術の本質としたが、然し一方には又此知識が理智知識と不可分なることを認めなければならない。概念知識は事物關係の知識である、而して事物は直觀せられるものである。故に直覺的知識がなければ概念はない。一方には又思惟は直觀に影響する、人は思惟することによつて印象と藝術とを析するものである。言語と論理的思惟とは同一ではないが、兩者は同時に存在しなければならない。而して言語は一の表現である。動物は言語なくして思惟するやうに見えるが、其は誤解である、何となれば、其は言語に相當する表現を有するから。或は又良案が拙劣に書かれることがある、といふが、實は、拙劣なる構想であるから拙劣なる文辭によつて書かれる、といふべきである。

此の如くして思想は特殊の直覺的形式を執つて現れることがあるが、然し結局同一であると言はねばならない。換言すれば直覺的知識の發現の極致は藝術と學術との兩者にあるもので其間に密接な關係があるから、學術上の著作は同時に藝術上の創作と稱し得るものである。而して理智的知識と直觀的知識の差別は畢竟二つの段階上の事に止まつて來る、卽ち其の第一段は表現であつて、第二段は概念であるのである。而して知識の形式としてはたゞ以上の二者のみで、其他にはない。或は歷史的知識の形式を舉げるものがあるが、是は內容上の差別に他ならぬので、形式としてはやはり直覺に他ならない。

クローチエは進んで歷史と藝術との根本的に同一なることを說き、更に美學に於ける歷史主義と主知主義の批評から、轉じて歷史哲學及理論學に於ける主知說を批評して直覺主義を說明し、後に獨立の書として說いた所のものゝ基礎を立てゝ居る。而して更に又一方には藝術と道德經濟との關係を論ずる爲め、上に述べた精神の理論的活動たる直覺的及概念的作用に對して

實際的活動を說いた。其形式は意志で、之が表れて行動となるから、知識を形式とする理論的活動は事物を會得するものであるが、實際的活動は之を變更する、即ち前者によつて自己を宇宙に順應せしめるが、後者によつて之を創作する。其故に知と意とは離るべからざるものであるが、然し之を混することは出來ない。隨て此實際的活動と美的活動とは同一ではない。美の目的を選擇するには實際上の顧慮を要しない、即ち表現は自由なる神來である。斯くクローチエは藝術の獨立を表現說に關聯して說述し、而して更に實際的活動を、利を目的とする經濟と美を目的とする道德とに分つて之を略論した。是が即ち彼の『實際的哲學』の根本となつて居るのである。

クローチエの美學書は以下更に藝術上の諸問題に關する議論に移り、結局藝術の本質たる表現を言語と結合せしめて、美學と言語學とを同一視するに終つて居る。

四

以上は『美學』の一部を拔抄したものであるが、之と先に揭げた概說とを參照すれば、此伊太利の非學究的哲學者が如何なる哲學體系を有するかを理會するに難くない。而して之に對する私の感想を一言にすれば、既に述べた通り、殆ど凡ての點に於て最も多く同感せらるべき性質を具へて居ると共に、非學究的色彩の到る所に認知せられる、といふことである。

先づ其の說が直覺を基礎とする所はベルグソンと共に一部の人々を惹付けるに最適したものと謂はなければならぬ。蓋し現代の哲學は多くは皆十九世紀中葉の科學主義を超脫せんことを努めて居るが、然し又往時の形而上學に入ることを屑とせず、一面感覺主義を排すると共に、他面には舊い理性主義とも離れて、こゝに批評哲學に關聯する學派の全盛を生じて居る。然し人々の形而上學的憧憬は固より一朝一夕にして消失すべきものではない。是に於て單一なる理論的要求を排しても何等かの方法で形而上學を建設せんとする。此場合に人々の最も多く奔る所は直覺である、直接的知識である。ヘーゲルやカントの貶して「シユエルマイ」と稱する所であらうが、一般人士は反て之を喜ぶ傾が多い。而して之を說いて然も近世科學の研究を無視しないものは、又一方感覺主義實證主義との諒解を得る望みがある。ベルグソンも亦此點から直覺主義を唱へて居る。クローチエの直覺主義はベルグソンの如き幽玄の趣きを欠くが、之を藝術と結合する所に又人を喜ばせるものがある。

然しクローチエは單に直覺に偏して多數の知識的事業に携はるものを敵とはしない。即ち其の直覺は畢竟概念と同一類のものであつて、其間に根本的差別がない。故に直覺主義ではある

が、ベルグソンの態度とは大に異なつて居る。此點に於て羅甸系民族に共通な主知説の傾向を明白に示して居ると思はれる。尤もクローチエは或場所に於て主知説を排して居るが、是は實は實證主義科學主義に對する辨駁であつて、全體を通じて主意說に對して主知説を執ることは掩はれない。而して是は又ヘーゲルの影響を看過することが出來ない點であらう。クローチエ自身は今は濫りに獨逸哲學の感化を無視しようとして居るであらうが、事實上其の存在することは掩はれ得ない。此點は一部分の人々には不滿足を生ぜしめることであらうが、反對に又獨逸學究の間に認知せられる緣由となつて居る。

一九〇八年の獨逸に於ける講演はクローチエが獨逸哲學者に知遇を得たことを思はせる。而して其說の最も多く同感を得た點は、其の歴史に關する獨逸西南學派の見解と一致して居ることに因るであらう。クローチエは其歴史哲學を自國の先人ギユに歸して居る、然しヘーゲル等と結合して更に獨得の見地を開いたギンデルバントやリケルト等と暗に交感する所のあることは疑ふを要しない。此の點からクローチエの主知說は主意說とも一致する所を生じて居る。殊に學を凡て法則定立の業に歸さうとする說に對して、特質記述を目的とする歴史をも學の中に包括せんとする說は、一種の主意說的要素を含有するものであるから、クローチエの學說には非羅甸的非主知說を生じ、ベルグソンと同じく英米の經驗派に承認せらるべき資格をも具へて來ることゝなるのである。

此の如くしてクローチエの學說は頗る包括的で、殆と現今に於て人望ある種々の見解を藥籠中の物として居る觀がある。卽ち綜合的性質を具へて居ると言へるが、然し又一方から見れば其の中には多少一致し難いものも混在して居るし、殊にたゞ諸說の長所を包括するのみなる如き所もある。是等は美學等の細點に於ても容易に氣付く所であるが、此點に於て若し甚しく惡い意味を有しない語とすれば、折衷的若しくは混成的（Eclecticism, Syncretism）と言ふことを得るであらう。而してこゝに其の非學究的或は素人的なる所があるやうに思はれる。固より素人的といふことも之を貶した意味で言ふのではない。寧ろ多くの場合には在來の型に囚はれない、といふ意味にも解せらるが、時としては又其論理的聯絡の不完全なることを意味する場合もある。然し是が又反て一般人士に親密な感を生ぜしめる所以でもあらう。此點に於てもクローチエが現今の一方に同感者を集め得る原因が存すると思はれる。

終りに、其說の現代的なる一面は、一部分に民衆的調子を保持する所に存する。直覺主義は學究に抗すると共に民衆的であ

ると言へるが、然しもし詩人天才の直覺を別視する時は差別觀を作はざるを得ない。ベルグソンの如き天才主義には凡俗は何となく距離の感を有せざるを得ないであらう。然るにクローチエは直覺を力說し、之を藝術にまで引上げると共に、其藝術を尋常人の經驗中に引下げた。各人は生れながら詩人であるとすれば詩人を賞揚することは敢て凡俗人の平等欲を毀損しない。寧ろ凡俗に對する自信の念を誘發するものであらう。此の如くして民衆の水平線を高める意味に於て平等主義を說くものとも見られる。是はまた其說がよい感じを與へ得る所以である。

× × × × ×

要するにクローチエの說を分解して要素に歸すれば、平凡陳腐、何等の新味もないやうになり、悉く皆何等かの學說に看出されるものとなつて來る。然し又是等を包括し綜合した所に、其の近代的色彩の鮮かさを觀取し得るのである。彼にはジョルダノ・ブルーノの情熱的天才を認めることは出來ないであらう。然し此の自然哲學者が、文藝復興期の諸思想を科學と哲學との兩面に亙つてよく綜合し得た趣は、其と同鄕の精神哲學者たる彼にも、亦親ふことを得るものであると言へぬであらうか。

捷ちし日の翌日

（大罷ストライキに）

賀川豐彦

雨ふる日
さみだれの
小溝の流
渦卷きて
淘れる水に
小笹落ち
吸はれるように
流されて行くを
じつと眺めゐる
自分の心
激動の
總同盟罷工の翌日
何とはなしに
涙ぐまるゝよ
おゝ小笹の運命よ！
小笹の運命よ！



自傳（2）

片山潜

東京監獄にて少年時代の追懷

上來記するところの事柄は、予の子供時代の境遇、即ち背景が如何であつたかを示す者である。予はかかる呑氣なる、しかも愉快なる境遇に生長して常に種々樣々の娛樂は次ぎから次ぎへと來て、現實の樂しみと將に來らんとする樂しみの期望とは、予の子供心を醉はしめ、母が勵むる學問などに心は傾かなかつた。殊に現今の如く詰込教育制度なる者がなかつたから、村內誰一人として予の年輩者の學問を爲る者はなかつた。孤母と雖ども如何ともすることは出來ない。村の子供等は皆遊んで居る。遊ばなければ親を助けて野良仕事を爲して居る、斯樣な風であるから、予は全く遊びに捉へられて寢食を忘れて遊んだ。天氣のよい日に野良に出て遊ぶ、これ程愉快なことはなかつた。戸外に在りて天然を友として遊ぶと云ふ事は、殆んど予の生命となつて居た。故に母の背に從つて

家にあつて學問など爲ることは無限の苦痛の如く感じた。然れども予は終に學問するべく餘儀なくせられたのである。

× × × ×

僅か七つ、八つの時分であつたらう、予は始めて手習のお師匠樣の所に上げられた。此の師匠と云ふのは氏神樣の神主で家本駿河守といふ人で、字「向ひ」に住んでゐる、予は毎日此處に手習に通つた。お師匠樣に「いろは」の手本を書いて貰ふて、之を見て草紙に習ふのである。四五の草紙に習ふと云ふよりも、無暗に墨を塗つて乾かす爲めに繩につるす、之が乾くまでは遊ぶので時計なども未だなかつた。寺子屋と云ふても當時は、予が唯一人であつたから退屈でたまらない、といふて始終外に出て遊んで居ると叱かられるから、手習を偽る風をして畫を描いて遊んだものである。今は小學校で畫學を教へる、畫を描くのは勉强の一つである。然るに予の子供の時は之と全く反對であつた。「人形書く子は頭かく」といふ戒言があつて、手習する子供が、人形などの畫を書いて手習をせぬと後年になつて恥をかき、終に頭を掻くようになるといふて、子供が畫を書くのは徒書として非常に叱責せられたものである。去れど予は唯一人であつたから、退屈になると畫を書いて遊んだ。此畫に就て思ひ出した。畫題がお殿樣のお通りの模樣であつた。之に關して少し說明する必要がある。抑も今の子供の理想は「兵隊さん」である、即ち勳章と金モールで飾れる軍服で、馬上に兵隊を指揮する大將である。然るに昔の子供心に無限の感興を與へたる者も亦之と大差はない。予の子供時代の喜んだのは戰爭ゴツコである。侍たることの眞似である。二本の刀を差して餓飢大將となつて遊ぶことであつた。予は此當時、「お殿樣のお通り」を書いて遊ぶのが非常に樂しみであつた。丁度此の時分予は一二度祖に連れられて、此の「お殿樣のお通りを拜み」に行つた。今考へると――此の殿樣のお通り――と云ふのは、彼の維新前に德川幕府の企てたる長州征伐に行つて歸りがけの、諸大名の通過のことであつたのである。今時の兵隊の通過に比ぶると昔の大名のお通りは、仲々盛んなものであつた。立派な鎧兜を着るか、又は赤の陣羽織に陣笠を戴き、馬に乘り、必ず數人の家臣を連れ、槍とか旗を樹てさせて、威儀堂々として行列を揃へて通つた。斯る新らしき觀覺は予の腦裡に非常なる、深い印象を刻んで居たから、手習などはソツチノケにして畫いて殿樣のお通りを畫いて遊んだ。かやうな風であつたから、神主の所に手習に行つても、何も習はずに遊んで仕舞つた。而かも尙ほ畫を畫いて遊ぶよりも、自然を友として遊ぶ方が愉快であるから、手習には色々な詐辯を拵へて行かぬ工夫をしたものである。ソコで母は家に置いては、爲めに惡るいと云ふて斷然本山寺のお寺に送ることとなつた。

× × × ×

予の連れ行かれた寺は遍庄院で、住職の名は寂忍と云ふ溫厚にして親切な一老僧であつた。大きな寺で一人の榮助といふ納所(なつしよ)(飯炊)と二人きり、時には客僧が來て居たこともあるが大抵は予を加へて唯三人であつた。老僧が葬式か法事にでも行くと老人の榮助と二人であるから非常に、寂しく感じた。榮助は元船頭であつたから仲々世間師であつた、予は老僧が留守になると手習などはせず、榮助に色々な經驗話だの昔話をさして聞いた。彼は飯を炊き、掃除をする以外、何も用がないから、よく予も相手にして話を爲た、去れど寺は陰氣で、佛間は線香臭く、何となく嫌な感じがして、子供などの居る所ではない。天氣がよいと寺外に出て遊んだけれども、家に在つて遊ぶやうな愉快は最早得られなかつた。

予は此の時代に悲觀的情感に陷り、後年に至るも全然之を一掃することが出來ない。この時分より予は一人居ることを何とも思はなくなつた。併し偶に家に歸ると再び寺に行くことが嫌で〳〵たまらなく、母に叱られてヤツト泣く〳〵寺に歸つて行つた。客僧が來て居ると賑かであるが時に窘めらるゝから困つた。

寺では手習の外に孝經の素讀を教はつた。子供の時、予は妙な癖があつた。其れは本を教へて貰ふと一二度でチヤンと讀めるやうに覺える。然るに自分の机の上に持つて來て讀んで見ると、一つも讀めない。何が何であつたか皆忘れて仕舞ふ。十四五まではかやうな風であつたから、一年以上も寺に居たけれども、孝經が上らなかつた。そして何でも皆斯く忘れるかと云ふと仲々そうではない。人のする話などは一度聞くと、決して忘れない。榮助から聞いた話は皆よく覺へて居る。唯素讀を習ふと一寸も意味が分らないから、ホンの一瞬間だけ覺へて居るが、直きに忘れる。此の忘れるといふ一事が予をして子供の時に學問を嫌やがらしめた最大原因である。今でも分らない本を讀むとか又はクダらない演説などゝ聞くと直き眠くなつて仕舞ふ。

×　×　×　×

大村綾夫先生は津山藩の儒者で詩作などと同じく聖堂出身の漢學者であつた。此のころ同じ本山寺の本坊と云ふ幕府時代の御朱印附のお寺に此の有名な先生が來て漢學を教へて居た。ソコデ予は一先づ家へ歸り毎日本坊の方へ通學して大村先生に就學することとなつた。本坊には三人の小僧と三四人の生徒が來て居たから遊び友達はあつた。然るに此處の法院樣（住職）は非常に怒つポイ人で一寸の事にも子供の頭を煙管の雁首でポカポカと叩き叩きした癇癪もちであつたから氣味が惡るかつた。併し予は全く大村先生の弟子であつて、直接この老僧の弟子でなかつたから、外の生徒又は小僧の如く叱られず、唯一度老僧から叱られたことを覺えて居る。

予は大村先生に中庸から始めて四書の素讀を教はつたが、只習つたと云ふだけで一寸も覺えては居ない。家に歸つて復習したことはない。又復習することが出來なかつたのである。素讀の外に大村先生は十八史略と外史の講義を爲て居た。我々生徒は皆此れを謹聽させられた。更に讀んだことのない又讀む力もない六ケ敷い本の講義を、二時間位も正座をして聞くのであるから、足がいたくて困り又時には居眠りをして老僧に叱られた。斯く毎日教育を受けると云ふよりも、寧ろ苦しめられて居たのである。しかし、昔の教育は大概かやうな不自然なものが多かつた。然れども後年に至つて此等の書物を獨りで讀む時に、ハハア大村先生の云つたのは此處だつたな！と思ふことがあつた。之もホンのところどころであつた。大村先生は温厚篤實にして立派な人品の人であつた。先生は非常に潔癖であつて、講義をしながらも耳をホセツタリ爪の垢を取つたりして之を灰吹の中に入れる。そして先生の講義の仕振は威儀儼然として極めて靜肅であつて、其音聲は爽快なる美音で一の音樂を聞くようであつた。そして先生は生徒に對して非常に親切であつた。予は一度も叱られたことはない。斯く本山寺に毎日通學して居る間に段々時勢が變つて來て今度は「山の上」に學校が建設さるゝようになつた。

×　×　×　×

それは維新の當時、我邦の思想界を支配する一大勢力は漢學であつた。もとより深く穿鑿せば維新の大業は人類進歩の結果であつて時勢の然らしむる所である。殊に歐洲の文明の滔々たる大潮流に激成せられたるものと謂はねばならぬ。然れどもそのよく此の維新の大

業をして成功の局を結ばしむる任に當りたる當時の志士にして當時尊王攘夷を主張して幕府の轉覆を企圖したる各藩の有志等は漢學者であつた。彼等は、當時改革思想を淺見絅齋の靖獻遺言、頼山陽の外史又は大日本史より得たのである。然り、維新前後思想界の牛耳を取り、天下の志士を指導したる者は藤田東湖の如き、吉田松陰の如き、皆其の思想を漢學より得たる者である。而して維新の大業は當時塾舍に群集せる學生等の成せるものと云ふも過言でない。かくの如く維新の大業が主として漢學者の手に依つて成功せるが爲めに維新の新政府が建設さるゝと共に之が事業に關係せる漢學者等は要路の地位に立つた。而して同時に漢學は復興した。是れ自然の結果である。そして岡山には西薇山（毅）美作には山田方谷等が盛に漢學を講じた。東都には岡鹿門、三島中洲、中村敬宇などが漢學の塾を開き天下の青年を薫陶して居た。そして維新の當時國事に奔走した安達清風と云ふ漢學者は予の郡に郡長となり赴任して津山の東北に在る郷原で「日本原野」と云ふ所の開墾に從事し此處に漢學塾を設立して居つた。山田方谷は主として予の郡に來て漢學を教へたのであるが、彼以外に漢學復興の原因を成し、然に百姓の子弟を集めて漢學を教へるようになつたのは多數の知識ある武士階級が急に民間に來つて雜居したと云ふ一事である。何故に多數の士族が民間に入り込んだかと云へば、彼の維新のドサクサまぎれに予が郷里即ち天領は濱田藩の領地となつた。この濱田藩と云ふのは石州濱田の城主であつたが維新の際戰爭に敗け、城を燒き捨てて美作の領地へ逃げて來た者で、此時天領も同藩に與へられたのである。そして予の近郷にお城を築くとて新舊領の人民を徴集して地均らしをした。そして多數の藩士は居る所がないから領内の各村に割り附けて百姓家に同居せしめた。一兩年の後、各村にて一定の家屋を建てゝ此處に住居せしめた。予の村にも四家族の士族が割り附けられて來て百性と同居した。固より御用と云ふので家賃を貰ふどころではない、此方から種々の物品を與へ又貸與してやつたので隨分と厄介な譯であつた。予の家にも七人家内の一家族が來て離れを一室と其下の物置とを占領した。彼等は依然として殿様より扶持米を頂戴して生活して居た。出る時には未だ二本の刀を差して居た。しかし最早や少しも威嚴などはなかつた。人民に對しては丁寧なものであつた。

斯く何の村にも津山の士族が百姓の間に來て生活することとなつた。而かも彼等は趣味は百姓のそれと全然異つて居る。純朴なる百姓が日夜營々として勤勉に勞働して居る傍らに於て彼等は何一つ有益なる仕事を爲さず日々飽食逸居、而かも美服を纏ふて好きな事を爲して遊んで居るから無智なる百姓の思想上に向つて、將た其の人情風俗の上に容易ならぬ感化を及ぼした。そして其影響は善と惡と二者であつた。一方に於て百姓の精神狀態に革命を來し或は不都合に感じ、又社會組織を疑ひ結局彼等を不眞面目に陷らしむる傾向を示し、又は徒らに彼等の外形を摸倣して華美に走るの弊に陷つた。少なくとも士族の雜居は百姓の平和的生涯を破壞したかの感を起さしむるのである。然れども亦一方より觀察する時は善良なる結果を與へたことも無視することは出來ない。善良なる影響は教育的方面に於て之を認むることが出來る。即ち一時に多くの知識ある、而かも、文明的生活を經驗せる士族の老若男女が殆ど同等なる交際を爲しつゝ我々の間に生存して居たと云ふことは種々知識上利益する所があつた。殊に、百姓の青年等は彼等と接觸して其精神を刺激せられ自ら奮發心を起すに至つたものもある。そし

て百姓間に文明的空氣を注入しやがて維新の革新事業を咀嚼する能力を養ふ資を得たことも事實である。百姓の子弟が漢籍を研究して見る考になり、終に山之上に漢籍の學校を設立するやうになつた。一般時勢の然らしむる結果たることは云ふまでもなきことながら士族が民間に雜居して居たと云ふことも直接の刺戟となつて居る。そして直接教育の任に當つた者は彼等士族であつた。その時の學校と云ふても誠に不完全なものであつた。只百姓の子弟を集めて手習と漢籍の素讀を教ゆるのみであつた。予も此學校に暫らく通學して矢張り四書の素讀を習ふた、固より同一の結果で何も得る所なく、依然忘れると云ふ精神上の苦痛を一層深く感じ益々學問に適せざることの辛き經驗を嘗めた丈けであつた。山之上と云ふ村は登明路と稱する峠を越した所にある誕生寺の直ぐ手前である。學校は此の村のお寺であつた。丁度此學校時代である、面白い迷信が流行して來たのを覺へて居る。當時は既に政府の命令で百姓は皆頭の髮を切つて居た、子供等もザンギリ頭となつて居た。然るに、斯くザン髮して居ると天狗見たやうな鼻の高い、顔の赤い髭の生へた毛唐人が魔法を掛けて生氣を失はして置いて物を掠めたり、子供などよりは生血を絞り取りて飲むそうなと云ふ恐ろしい風聞が傳つた。ソコデ學校に來てた子供等は急に小さなトンボ曲げを結ふて來たことがある。毛唐人に關しては色々な迷信が流行して隨分西洋人にも迷惑を掛け、時の政府も亦困難したものである。

× × × ×

山之上の漢學校はホンの一時であつた。間もなく小學校なるものが設立された。誕生寺の一建物を利用して成立小學校と云ふ名の下に設けられ數ケ村の子弟を收容して教育したものだ。予は年齢から云ふと最早や小學校の生徒になるべき者ではない、又家でも農事を手傳はせねばならないから何時迄も學校へは遣れないと云ふし、予も學問はサッパリ面白くない却つて苦しみであるから別に望みもしなかつた。然るに巡廻訓導（今の視學官）がわざ／＼予の家に來て羽出木から一人も生徒がないと云ふては政府向きが惡るいから、是非出して呉れろと頼まれた、それゆゑ予は小學校の生徒となつた。十四五の少年が小學校の一年生となつて糸、犬、家、猫、と單語を習ふたものである。予等の級は一級で十四五から十七八の青年が居た。しかし習ふ事柄も教育の方法も全く新規であつたから皆一時は熱心に勉強した。内藤、長井と云ふ二人の先生が教へて居た。内藤先生は一青年であつたが非常に算術が上手であつた。我々は兩先生に頼んで夜學を始め算術だとか「輿地誌略」だとかを教はつた。而して此夜學で予は洋算の分數の初歩まで習つた。予は小學校に行つて始めて學問の趣味を感じた。教はる事は皆よくわかつて、そして此の分ると云ふ事は非常に面白味を與へた、而して常に級の頭であつた。彼の漢學校では五經などを讀み非常によく出來た生徒があつたが小學校の科目では予が何時でも上席を占めた。殊に予は算術がよく出來て全校で予程暗算の達者に出來る者はなかつた。此の算術がよく出來ると云ふ事は予に非常なる勇氣を與へ從つて外の事も段々よく出來るやうになつた。巡廻訓導が來て見制の小學校と、連合試驗をした時、予は暗算が最もよく出來たと云ふので賞與を貰ふた。賞與と云ふても一錢位の鉛筆が一本であつた。其でも予は之を貰ふたのは愉快であつた。予は此小學校時代に一の出來心を語つて非常に笑はれたことがある。其は或る夜のこと、夜學が終つて（我々は學校の一室に寢泊りをして居た。）友人と雜談の末、何と云ふ調子であつたか、「斯樣な田

會で勉強するよりも、東京に行つて大學にでも入つた方がよい……」所が此の空想は予に取つて極めて突飛なる放言、しかも大言壯語の甚だしい者として吹聽せられ、終に予は各生徒からも、先生からも嘲弄せられるようになつた事を覺へて居る。併し此の如く一時笑物になつたことは予に取つて善い刺激であつた。皆が予の壯語を冷評して笑つたが只一人非常に同情を以つて予を遇した者があつた、其は女生徒の級長をして居た頼子と云ふ女子であつた。予と彼女とは非常に仲がよかつた。併し予の小學校に通つたのは前後百日ばかりであつたから此同情を久しくして吳れた愛らしき友人との交情も自然中絶することゝなつた。頼子の兄は予と同年輩で漢學校以來の友人であつたから、彼女と交際するようになつたのも自然の結果である。彼女は大きな酒屋の娘である。髮の黑い鼻筋のよく通つて目のサヤの拔けた愛らしき顏附で田舍には珍らしい縹緻のよい方であつた。そして其性質は温和で、頗る愛嬌に富んであつて非常に親切なたちであつた。同じ方角に歸るのであつたから屢々一所に歸つた。而して彼女が先へ歸つた時はきつと其の「離れ」の障子を明けて予が其處を通るのを待つて嬉しそうな笑顏をして目禮をした時には何か一日二日嘲をして別れたこともあつた。何うかすると頼子は話をする中に眞赤な顏をする、予も赤顏がホテツて來て終に別れて歸つたこともある。頼子と予との友情は仲々温かであつたが予が學校を止めてから彼女は何うしたか知らない。併し性質も、縹緻も、家柄も申分なく學問もよく出來た方であつたから、必ず良緣があつて樂しい幸福な生涯を送つて居るに違ひはないと思ふ。予は其後專ら勉強に志すようになつて終には故鄕を去ることになつたから便りなどした事はないが、小學校當時を思ひ起す毎に必ず頼子の事を思ひ、又其親切な愛らしき顏が目に見へる。而して予は陰ながら彼女の幸福な生涯を送らんことを祈らぬことはない。幼い時分の友達で殊に親切を盡して吳れた頼子の如き友だちの事を思ひ出す程床かしいものはない。

× × × ×

世の中は決して自分の思ふ樣にのみ行く者ではない。母が熱心に學問を強せようとする時に、予は之が嫌ひでいろ〳〵難癖を附けて怠つた、然るに少しく學問の味が分つて來て面白くなり、進んで勉強して見たいと云ふ氣になつた時分には家の都合で勉強することが出來なくなつた。この時始めて予は自己と云ふ者を發見した。考へて見ると今まで十四五年間は無我無中で生長したのである。全く境遇の子供であつた。自然の命ずるまゝに動いて來たのである。然るに小學校生活は短かかつたけれども僅に予をして玆に始めて自覺せしめた。所謂人間として獨立心の起つた時期であつた。それだから予の生涯に於ける第一革命が行はれたのである。今當時の心理狀態を解剖して見ることは予が今後如何なる經路を辿つて進みしかを理解する鍵となるであらう。予が幼時に學問が嫌ひであつたと云ふことを今より其心理狀態に立入つて硏究すれば、これは強ち予の我儘の結果でもなければ、又遊ぶ方が愉快であるからと云ふ爲めのみではなかつた。學問をして少しも向上しないから少も面白いことはない、學問は重荷を脊負ふて遠路を行くやうなものであつた。故に予が子供の時に學問が嫌であつたのは、予の罪と云ふよりも寧ろ予の性質の缺陷の然らしめたのであると思ふ。そして又一方より見れば當時の教育制度が予の如き性質の愚鈍なる者には適合せなかつたからであると云ふことも出來る。そして又予は他の子供に比較すれば抽象的知識の發育が晩く、かつこれが本

足であつたのである。由來子供の教育は雞の雛子を育てるように一所にしては甘く行くものではない。人の頭腦は其面の異る如く相違して居る。之を教育するにもまた其人に依つて教育を異にせねばならぬ。蘇國エヂンバラ大學では一級學生の數を十人乃至十五人と制限して居る。フロイベルだのペスタロチーが教育家として世界に名聲を揚げたのも此理由をよく理解して之を甘く實行したからである。予が子供時代の心理狀態は一種の跛である。即ち腦に缺陷があつたかの如くである。それは大學だの論語の素讀を敎はつて、之を永く覺へて居ることが出來ない。直ぐに跡形もなく忘れて仕舞ふ。されど外の日用一般の事柄に就ては他の子供と變つたことはない。却つて外の子供よりよく覺へて居る方であつた。で、素讀を習ふて覺へて居ることが出來なかつたのは、畢竟するに予の腦力は抽象的趣味を缺いて居たからである。若し全然缺いて居たと云ふ譯でなくとも、子供の時に發達が晩かつたのである。故にたゞ無意味なる素讀を機械的に記憶して居ることは何うしても出來なかつたのである。予は今でも哲學趣味が少ない。抽象的妄想に走ることは好まない、從つて獨斷説は嫌である而し予の子供の時分には此傾向が無意識に一層烈しかつたものと見へる、由來、人間の頭腦は非常に巧妙なる組織に出來て居る者であるが、決して完全な頭腦と云ふ者は澤山にある者ではない。俗に彼の人は記憶が確であるとか、學がよいとか云ふ、されど記憶にもいろ／＼ある。數字の記憶の確かな人もある。場所とか、時日とか歷史的事實に就て記憶の正確な人もある。また、目で見た事物を特によく覺へて居る人があれば、單に耳で聞いたこと、特に音聲を聞き分けて之をよく記憶する音樂者の如きがある。記憶の種類は澤山にあつて人おの／＼長所がある。耳には二萬程の筋があつて腦に連絡して居る。此筋は二萬程の音聲を一々擔任して聞き分ける。而かも一秒時間に耳は八ツから四萬迄の震動を聞き分ける能力を持つて居る。また、目は一秒時間に八度まで目に映ずるものを寫眞に寫して之を腦に送り、腦は之を記憶に認めるのである、人は此腦を練習して記憶を確かにすることが出來るのである。予は抽象的事物を記憶することが子供の時に出來なかつたが此外予は人の名前を忘れる缺點がある、其人の容貌から交際したことを覺へて居て其の名前丈け頓と忘れる癖がある。英語で之をノーメンクレナユワーと云ふて物の名前丈けを特別な記憶力として居る。米國の大政治家であつたゼームス、ヂー、ブレーンと云ふ人は名前殊に人の記憶が非常に確であつた。彼は生涯中に一度逢つた人の名は忘れなかつた。十年、二十年逢はなくても再會の時は必ず其人の名を呼んで應接した。たとへ其人の容貌が變つて居ても、其の聲その他でチヤンと覺へて居たと云ふことである。フレノロヂーの示す如く腦は其部分々々によつて特別の職掌を持つて居るから腦を大切にしなければならない。こゝに驚く可きかつ恐ろしい話がある、伊太利に極温和な性質で、而かも勤勉なる一石炭坑夫があつた。或日大きな石炭が頭に落ちかゝつて少し斗り怪我をした。一週間程すると全快した。然るに此坑夫は其性質が一變して其心情思慮が頗る猛惡になつた。之れはその行爲で着々と現れて來た、今迄とは打つて變つて喧嘩をする、人を負傷せしめる、終には殺人強盜までもやりかねなくなつて終に監獄に投ぜられた。所が伊太利はロンブロソー、又はフエリーなど云ふ有名な大學者が新派の犯罪學を唱導して居た。此犯罪人も亦此學派に調べられた。すると此の腦の一部に石炭の斷片が入つて居た。多分X光線でゝも發見したもの

であらう、早速之を取り去つた。所がこの恐るべき犯罪者の性格は全然舊に復して再び温順な者となつた。斯る急變は坑夫其者にも不思議であるが、科學は石炭の斷片が腦を壓迫して居たから斯る異狀を呈したのであると云ふことを證明したのである。然れども未だ此學派の犯罪論は社會の採用する所とならない。如何に眞理であるとしても、之を採用せば今までの犯罪論は破壞される。所謂意志の獨立又は自由を認める譯に行かなくなる、是れ今日英國派の犯罪學者が伊國派に大反對を表する所の一大理由である。予は兩者に眞理があると思ふ。而して伊國派の主張は社會刑罰の根本に施して居るから結局勝利を得るであらう。其は兎もあれ、腦は大切にしなければならぬ、殊に親たるものは子供の頭などは決して叩いてはならない。

予は子供の時漢學の如き意味の解せない素讀は一寸覺へても直き忘れたが普通の事物は容易く理解もなし、又之をよく記憶した。人が語る話などは一度聞いたら決して忘れない。此の實際的記憶力は年と共に發達して他人に劣らない。この種の腦力は祖父より享受した性質である。予の祖父と云ふ人は非常に記憶力の慥かな人で一生涯の見聞を皆覺へて居た。子供の時に習ふた四書の素讀を暗誦して居た位である。彼は甞つて間違とか誤りとかをしたことがないと云ふ位ゐであつた。實に明確な頭腦を持つて居た。彼が庄屋を勤めて居るころ、筆記をして文字の書き損ひを爲ぬと云ふことは、郡中庄屋間の評判で公儀に差出す喚問書などは皆な彼れに書かせたとのことである。彼の記憶力は重に實際的方面で見聞の事物を覺ゆると云ふが長所であつた。予は祖父の頭腦の幾分を貰つて居たものと見へて世間に關する記憶は青年時代よりだんだん發達したことを見る。結局予の頭腦は淺薄に出來て居るので平易な事物でなければ容易に理解が出來ない。從つてむづかしい哲學が嫌ひで、歷史とか社會學とか云ふ種の學問が好きである。今一つ予の頭腦に就て一言することがある。其は地理に關する記憶と理解力が人に比して秀れてゐるように思ふことである。たとへば一度通つた道はよく覺へて居る。所謂目記なる能力は自分ながら驚く程ある。又本を讀んでもどう云ふ字、何う云ふ事はページの何の邊にあつたと云ふことを覺へて居るから、之を見いだすことは容易であつた。此の見覺力即ち觀察力の慥かなことが予をして旅行を好ましむるようになつた。予は知らぬ所に行き、知らぬ道を歩むのは無限の愉快である。予は小學校で學問の趣味を發見し、しかも予は人並に學問の出來ると云ふことを自覺した。スルト急に勉强がして見たくなつた。然れども前記の如く家の事情が許さない。予は玆に愈々百姓となつた。此の後、數年間は殊に熱心した。子供のとき人のする仕事を見て喜び、又其眞似をして樂しんだが、今や自分が義務としてするやうになつた。自分でして見ると容易な事ではない。時には苦しいこともあつた。されど予は忠實に、又熱心に野良仕事をした。どのやうな事でも百姓のする仕事はしてのけた。鍬も揮へば、鎌も打つ、牛も使へば木樵りも爲るし炭も燒いた。草刈、柴刈り、田植へ、田の草取り、時には牛を追ふて駄賃持もした。この間隨分面白い經驗もある、全く純然たる百姓となつて日々に野に出て稼ぐのであるから、身體は見事になつた、此のときの農事働きは予をして他日非常なる勉強をなさしめて、尙ほよく耐忍し得せしむる素養を築いたのである。この時代には村内若衆との交際として云ふに云はれぬ興味ある經驗を得た。故に百姓の仕事に精通して居るのみではない、百姓の心理狀態をもよく知つて居る。

× × × ×

予は此時代に村内で貴重なる二人の友を得た、此の二人の親友と共に非常なる愉快も得、又利益も得た、その一人は横部松次郎と云ふて鍛冶の子で予と同年であつた、今一人は「向ひ」の總領で家本元泰（今正武）と云ふ予より三四歳上であつた。予は、此の二人と無二の親友となつた、三人友達でかく仲の好かつたのは實に奇遇であつた。數年間交際して一度も感情を害したことはない、何時でも三人集まると時の移るのを忘れて話をして樂んだ。我々三人の性質は各異り、その境遇もまた相違して居た。そして常に趣味は合致したし、思想も相兄弟して進歩した、三人の中一人は職人で、一人は神主、一人は百姓であつた。家本氏は年長者でもあり、世事に對する經驗もあつた、而して仲々議論家であつた。横部氏は元と町家育ちで世事に馴れ、常識に富み角の取れた才子であつた。そして才子に附き物である輕薄な所のない實によく出來た青年であつた。予は朴訥の鈍性であつて、兩氏に對しては總てに於て劣つて居た。ただ予は當時始めて知識を求むるに渇して居たから、勉強すると云ふ點に於ては僅かに兩氏に優つて居た。萬事に向つて進取力は予が一番であつた。そして兩氏は予の先頭であつたから、予は常に彼等を師友として喜んで交際を求めた。之も三人が常によく調和した。時に予と家本氏と意見の相違が起つて幾分衝突せんとする氣味があつても、常識に富みしかも性來平和を好める横部氏が必ず旨く調停の任に當り常に圓滿なる解決を見ることが出來た横部氏の性質は愛すべきであつた。そして常に滿足して我々の間に和氣を代表して居たから何時も彼が居れば非常に陽氣で愉快なる感想が自然に起つた。家本氏は理性に富んだ人で何時でも話は條理が立つて居てよく史實などを引照して我々に有益なる物語りをしてくれた。そして氏は非常に友情の深厚なる人で後年予の爲めに種々の事を盡て吳れた。氏の如きは實に得難い敬愛すべき良友である。三人は何でも一所にやつた。一時は俳諧和歌などの平民文學を研究して樂んだ。横部氏の父なる人は斯道に達して居られたから我々が稽古をするには非常に便宜を得た。又我々の間に新知識の輸入を爲る者は何時も家本氏であつた。そして横部氏は其父より得たる平民文學の知識を常に語りまた、氏自らもその趣味を發揮して我々同志に光彩を放つた。而して氏は創作に於ては何時でも優勝の地位を占めた。而して予は常に背後に在つた。兩氏にはかなはなかつた。只予は頗る熱心であつた。一心に勉強をした。人が一首を作る間に予は三首も作つた。無論拙劣なものではあつたが、云はゞ數でコナシタと云ふ風で何でもやつて居る中には餘り兩氏に負けなくなつた。そして常に三人は一致の行動を執り面白く愉快に暮したから自然村民の評判となり、村老たちも我々の言行に向つては相當なる敬意を拂つて居た。而して村内青年の模範となり風俗の上に善良なる影響を及ぼしたることは決して少なくない。我々は一時誠道會と云ふ貯金會を組織して貯金をしたことがある。我々三人は友人として種々の慰み事もなし、又さまざまの遊戲もした。だが我々の遊びは常に穩健なる種類であつて或は野外に出て自然を友として樂しむとか、家内に在つて文學趣味に耽るとか云ふ風で知識的に傾いて居た。而して我々は決して相互に直接の競爭的遊びはやらなかつた。百姓の若年者間によくある角力、競爭など若しくは碁、將棋など直接勝負を爭ふようなことはなさなかつた。故に互に勝ち誇るとか、負惜しみをするとか云ふこともなければ又相互感情を害するようなことは少しもなかつた。斯る友人關係であつ

たから我々は一層友情を濃厚ならしめて何時迄も圓滿なる交情を全ふした。從つて我々二人は四十年近く別れて居ても常に四季の時候の音信をなし機會ある毎に必ず再會して舊交を温める。横部氏は今津山町に在りて鍛冶職以外に金物商をなし成功して居る。家本氏は依然村に在り神主を勤め村民の牛耳を執つて居る。獨り予は一種放浪的生涯を送り常に他郷に在つて貧乏に苦しめられて來た。 人が斯く異つたる生涯を送るようになつたのは寧ろ自然の結果である。如何となれば兩氏と予とは境遇は根本的に相違して居る。兩氏は共に一家の總領である、一定の職業を有つて居る。然るに予は次男である、即ち相違は我々をして其生涯の經路を異にせしめた。而して一見三人が鼎立的調和の友情を以つて交際して居た時代には家庭關係から云へば予は一人兩氏と同等なる立場に在つて交際することは出來なかつた。常に兩氏の家に客となるも予は兩氏を予の家に客として饗 することとは不可能であつた。從つて兩氏に對しては自然一歩を讓る幾分内心にはヒケを取ると云ふ氣味があつた。之も論じ詰むれば三人友遊が成立し永續したる所以である。此時代の經驗を語れば從何してもつきない、實に世の中を何の苦もなく面白く可笑しく愉快に暮したのである。わがふる里は、氣候はよし、風景はよしそして總ての事物は人生を惠むために完備して居る。實にその時が予に取つては生涯中の黃金時代であつた。その時は余は輝く希望を以て腔裏を包んでいた從つて進取力は日々增加して來る事、成す事が愉快で又何でもやつて見ると可なりに出來た。偶には予が餘りに猛烈なる進撃的行動を取るので兩氏をして不快を感ぜしめたことがあるかも知れない。併し兩氏はもと／＼其經驗及知識に於て予の先輩であり、又總領であるか、自然に度量が廣く萬事について鷹揚であつた。故に後進者なる予の進歩はもとより彼等兩氏が歡迎して呉れたのである。予は次男であるが、實を云へば次男と云ふものは總じて小賢かしいが大抵我儘で狹量である。そして一體次男根情はヒガミがあり勝ちでコセコセする、利己的で意地が惡い、畢竟之は家族制度の結果で次三男は家庭に於て繼子扱ひにされる故であらう。然れども又次三男は常に進歩的である。進取の氣象に富んで居る、總領に取つて代らんとする氣慨を抱くことがある、所が總領は常に一家の愛寵を獨占するから時にスポイルドさるゝことがある。又往々ボンヤリして居るのもあるがそれでも次三男に比ぶれば總領は度量が廣い。思慮は先天的に深い、そして公平である。ヲトナゲた所がある。この意味に於て兩氏も總領であつて經驗知識及育ちに於て立派であつたから常に三人の友情關係をして圓滿に發達せしめたのみではない。予の性格を鍛ふ上に於て多大なる好感化を與へて居ると思ふ。故に予は今でも兩氏を友人に持つたことを感謝して居る。

× × × ×

そもそも如何なることが、予をして百姓たる境界を脱し學問に志さしめたか、是れ實に予をして故郷を辭し終に世界を我家となし、貧苦艱難逆境の間に他鄕に生存する所の運命を造り出さしめたる原因である。固より予が學問を好むようになつたのは年と共に來た所の自己獨立心の發揮に原因するのでもあらうが、又前記の如く小學で實際的教育の結果である。予は小學を止めてから前記の友人等と交際上いろ／＼な勉強をした外に獨學で勉强した。手當り次第に本を讀んだ、淡然無談だの種々の草本だのを讀んだ、假名附の四書を兄が持つて來たから、之で四書を讀むだ。又家本氏からも種々と書物を借りて讀み算術の如きは和算の獨學びの本を買ふて一生懸命

に研究して幾分均輪より開平開立迄も覺へた。然れども是れ等の勉強は皆面白半分でやつたので云はゞ學問道樂であつた。所が予は玆に一大決心を以て學問を爲さんとすることになつた。一百姓の身を以て學問を以つて身を立てんと決心するは隨分大膽である。今日なれば何でもないが、四十年の昔にあつては大膽と云ふより突飛なる妄斷と云はねばならぬ、左れど予は斯る決心をしたのである。そしてかかる決心をしたる時の境遇と事情と摸樣とは今でも予の記憶に有り〱と存在して居る。サテ予は當時農閑の副業として炭燒きをして金を儲けて居た。固より自分の家の山林を伐つて炭に燒くのであるから資本は入らない。自分で燒いた炭を自分で持つて賣りに行くのであるから丸儲けであつた。炭燒きの經驗もなか〱一種の技能を要して今から見ると面白いが直接やつて居ると容易な仕事ではない、夜も時には寐ることが出來ない。而して之を俵に入れる時は全身眞黑にならねばならない、併し炭燒きだの木樵りだのと經驗は別に珍らしいことはない、山の中へ行けば澤山に之を渡世の業として居る者がある。予も其一人であつたのだ。そして予は斯く燒いた炭六俵を牛に負はせ、四俵を自分が擔ふて五十丁もある大戸の問屋に毎朝の樣に持つて行つて賣つたものである。朝早く起きて行くから大概十時頃には家に歸つて來た。丁度此當時大戸の藏本（昔時貢米の納所にして當豪）の「離れ」で山田方谷が塾を開いて居た。故に予が大戸に來る度毎に盛んなる素讀の聲と多數學生等の愉快そうに遊んで居るのを見て羨しような感じもした。山田方谷は漢學者であつて數理に明確であつたから當時始めて世に行はれた物理學なども彼は生徒に教へていた。そして漢學力の效用を發揮して師範校出身者を顏色なからしめた。斯く藏本の塾は鄕里に大評判であつた。而して予の學問に對する趣味を刺戟したのである。丁度明治十年正月下旬であつた。予は未明に起きて何時もの如く牛に仕度させて炭を負はせ、予も炭を擔ふて牛を追ひて大戸に向つて出發した所が此日は朝から重い雪がボト〱降つて來た。傘を以つて居なかつたから頭から全身雪で覆はれたのである。そして炭俵の上にもだんだん雪が積んで重くなる、これで苦しいから全身汗で絞るが如くなる、スルト此熱で全身に積つた雪は解けて着物はビショ濡れとなり頭の雪は溶けて首から胸にズル〱と流れてくる、その氣持の惡るさと云ふたら今でも不快の念が起る程である。そして此の狀態は雪がだん〱はげしく降るに從つて增加した。荷は重くなる、着物も重く冷くなる、たゞさへ十七八貫目の荷物を擔ふて　十丁も來るのであるから疲勞するのに、此時は特別に勞れて、藏本の前に來た時には肩がチギレルやうであつた。そして何時もの如く學生の讀聲と談笑とが威勢よく障子から洩れてくる。この瞬間に予は思ふた。こんな苦痛を忍ぶつもりで學問をしたならば學問も上達が出來よう。そして予は此種の苦痛を甞めても學問を爲る方が炭燒をしたり、駄賃持を爲るより必度愉快であるに違ひない。予は斷然學問を爲る。學問で身を立てることにすると斯く獨りで決心した。そうか　學問の爲めにはこれ以上の苦難をも決して辭せない必ず成功して見せると思ふて確と決心した時には現在の疲勞と不快とは俄然消滅して非常に愉快を感じたことを覺へて居る。

×　×　×　×

予は依然百姓仕事をなし又炭燒もした。併し此決心と共に予の日常の生活狀態は一變した。予が是迄慰みの爲め面白半分に、云はゞ道樂的に勉強して居た學問は玆に目的あるものとなつた。而して今迄に數倍する奮起心を

そそつた。そしてあらゆる方法を講じて勉強をした。時には常福遍照院の老僧に行つて教へて貰ふた。しかし老僧にも近頃出來た書物はよく分らなかつた。或る時は本山寺の茶屋の親爺に佐吉と云ふてよく學問の出來る男があつたから此男に讀本の質問をしたことさへある。此時分予が獨りで苦心したことは非常なものである。今とは違つて更に獨學の便利がなかつた。此苦心をして居る予を常に慰めて呉れた者は母であつた。予が始めて此決心をした朝、起るとすぐに之を母に語つた。母は半信半疑で之を迎へたがしまいには滿腔の同情を表して呉れた。またいろ〳〵と奬勵して予の成功を祈つてくれた。母は心に予の決心を喜んだに違ひない。予は此の時　は母に對して唯だ一人して孝養を盡して居た。母は若い時から一方ならぬ心身に苦勞した。又非常に働いたから年に比して衰弱して居た。折へ持つて來て總領の兄が身持がよくない。田地を賣り拂つて女につぎ込む、母は喪心云ふべからざる苦悶を感じて居た。予は常に母を慰藉した、母は諦めのよい女であつて決して愚痴など云はなかつたがそれ丈け心では心配した。予が一兩年の後愈々故鄕を辭して學問に出るようになつて母はいろ〳〵無理算段して藥物など津山にこさへてくれた。そして予の健康にして勉強して居るのを喜んで呉れた。

さて愈々學問を以て身を立つることに決したもの丶その方法は皆目知らない。又誰に相談することも出來ない。友人知己とて他鄕にあるではない。だが、決心は之が爲に動かない。何とかして勉強せんと苦心した末に終に弓削の小學校に助教に出る事となつた。月一圓の報酬を貰ふて毎日通ふて一年生の教授をした。之で餘程勉強することが出來るやうになつたが何分にも正當なる教育を受けずして助教をするのであるから頗る困難であつた。先生からは外史の論文を講談して貰ふた。かくして一年ばかり通ふた。

予は明治十一年の秋弓削小學校の助教を辭した　そして津山在の楢月村勸善寺に行くこととなつた。之は遍照院の老僧がこの寺に轉住したからである。そして此寺に小學校があつたから此處に助教をして勉強する爲めであつた。先生は大土井鐵之助と云ふて立派な人であつた。予は生れて始めて故鄕を離れて他鄕に行くこととなり。この懷しき愛すべき樂しき故鄕！二十歳の年月を暮したホームを去ることは何となく別れを惜まざるを得なかつた。殊に母と別れるのは非常につらかつた。併し予は學問をするにはかくなるは當然のこと丶決心はして居た。それでも愈々去る時は悲しかつた。予は實に此時より純然たる學生生活を始めたのである、そして獨立して自己の運命を造出さうといふのであるから前途に對する感慨に一種云ふべからざるものがあつた。されども予は百姓をしたおかげで餘りに無理な考を起さず始終百姓が作物に對する感念を持つて世渡りをした。これは或る點より見ればマノロイやうであるが結局確かである。愛山が予を駄馬的男だと云ふたがその通りである　予は人より見れば臆病者である。否自分も臆病だと感ずることがある　故に學生時代にも大膽なる行爲又突飛なる事をした事はない。臆病であるから何でも充分に考へねば斷行せぬ、又臆病である故に少しは苦痛でも現狀に滿足する。これは予に非常なる耐忍力を與へた、從つて臆病性は一變して耐忍性となり如何なる困難に遭遇しても挫折せぬ樣になつた。此困難に耐へると云ふ自信は一種の勇氣を生じて來た。そして學生時代には一歩も退却したことなく常に進取的方針を執つて來た。固よりこれ等のことは予　學生生活を語る時實際に述ぶるであらう。予は今故

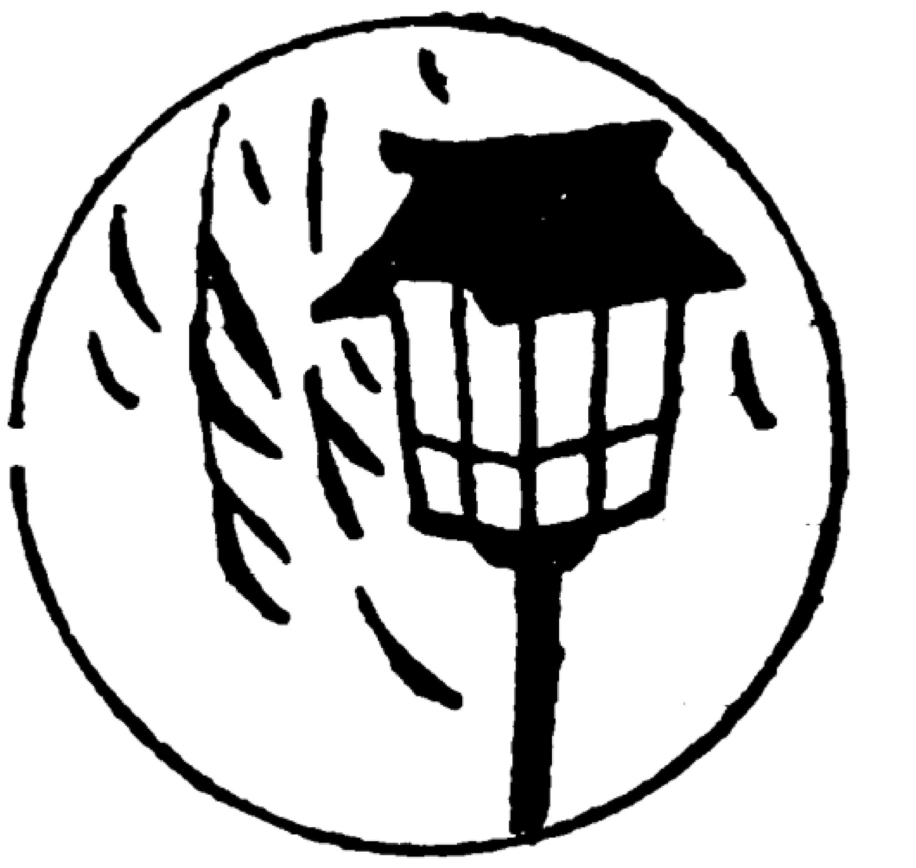
郷を去るに臨み一つ語ることがある。それは予の宗教である。之は予の性格を築く上に多大の關係がある、而して學生時代に於ても故郷で得たる宗教的教育は無視することの出來ないものがある。

予の家は代々天台宗である、而して家内中のすべてが神佛に對して信仰を持つて居た。予も彼等に感化されて子供の時より信仰を養はれた。母や祖母に連れられて屢々神佛に參詣をして心から幸福を祈つたものである。而して惡い事をすれば神佛の罰を蒙ると信じて居た。予の子供時代の宗教々育は家庭に於ける習慣的のものゝ外に有力なるものがある。其は予の隣家に「三世相」と云ふ大きな古い書物があつて予は幾度も其を借りて來て母や曾祖父に教へて貰ふた。固より繪入でいろいろの事柄を示してあるから面白い。此の三世相は予の宗教的思想を築く上に非常なる感化を與へて居る。固より佛法的迷信であるが先入主となつて今日も尚ほ抜けない迷信がある。皆此の書物から得たものである。殊に夢に關する斷案の如きは今でも迷信と知りながらその判斷を無視することが出來ない程である。子供に見せる書物の撰擇は非常に注意せねばならないものであると思ふ。予の子供時代の宗教は神佛混淆の姿であつた。そして宗教は百姓の精神上に非常なる勢力を持つて居たものである。殊に神道は何處にも〳〵神があつて人は非常に束縛されて居た。水には水神、山には山の神ありと云ふ風であつた。而して一寸頭痛がしても腹が痛んでも神主に行つて祈禱して貰ふ、スルト神主は祈つて之は荒神様のおとがめである、金神様の行合であるなど、神佛のたゝりとか何とか云ふて種々神様をなだめる方法を示して尚ほ護符を與れた。これを水で飲むと腹の痛みが止つたもので神主は醫士の代用をしたのである。併しこれ等の迷信は學生時代にはなくなつた、只その眞理は予の爲めに勢力となつて來た。彼の天道人を殺さず、生死は天命なり、などの信仰個條は予の生涯に向つて多大の自信力を與へたものである。

偖て以上は予の故郷に於ける生涯の一班である。學生々涯の事は他日語ることゝして今は之れで止む。(つゞく)

終に此の記事を書くことを許可されたる東京監獄に向つて深く感謝するものである。

明治四十五年五月四日



三くだり半の話

法學博士　穗積重遠

一　三くだり半の標本

『三くだり半』は離緣狀、離緣は即ち離婚である。今日の法律語では離緣と離婚とを使ひ分ける。離緣は養親と養子との離別、離婚は夫婦別れを云ふ。所が以前は——今日でも俗にはさう云ふ用ひ方もするが——兩者を引つくるめて離緣と云つた。殊に離緣狀は離婚狀である。所で私は我國で以前用ひられた離緣狀の標本を蒐めたいと思つて居る。實は年來東西離婚制度の比較研究をして居るのであるが、西洋諸國の材料は却つて相當に集まつたけれども、肝心の我國の材料が乏しいには困つて居る。我國の材料を殊に欲しいのが即ち『三くだり半』の實例だが、これが存外手に入りにくい。存外……ではないのかも知れない。離緣狀などは人手に渡すべきものではなく、必要な間は大事に仕舞つて置くだらうし、入用でなくなれば破るか燒くかして仕舞ふだらうから。一寸手に入りにくい筈である。中田薰博士が整理して居られる東京帝國大學法學部の法制史研究室には四通の標本がある。外に私は四通の寫しを手に入れた。合計八通では勿論材料が充分でないが、兎も角もこれを種にして我國の離婚制度に關する何物かを引出して見たい。

便宜上先づ右の八通の中、特別の意味を含む三通は後廻しにして、五通だけを原文の字配り通り御目にかけやう。

りゑん状

一其方事不縁に付我等
此度離縁致候然る上は
何方に縁付候共差構
無之仍而如件

夫六兵衛事
長次郎印

おきんとの

(岡村金太郎博士所蔵　年代不詳)

りゑん状

一其方事我等勝手に付
此度離縁致し候然る上は
向後何方に縁付候共差構
無之仍而如件

七月十一日

玉三郎(爪印)

ふゆ殿

(大學植物園室田老樹翁氏所蔵)
文化二年頃のものと云ふ

一札之事

一貴殿御息女我等妻貰請候所
不叶心候ニ付此度致離別候然ル上は
何方へ縁付被遣候共少茂構無御座候
為後日一札仍而如件

寛政十年戊午六月

岩瀬友二郎
敬信(花押)

横山庄三郎殿

(法學部研究室所蔵)

暇状之事

一共許令再縁罷在候所此度
暇遣候處實正也然る上は
向後外々に縁付被致候共
申分無御座仍而一札如件

萬延元年申九月

田中吉次郎（花押）

お永殿

（法學部研究室所藏）

りゑん狀之事

一此よねト申者我等勝手ニ付
此度離緣致候然る上は
向後何方え緣付候共差
構無之仍如件

文久元年
酉九月

龜吉印

およねどの

（法學部研究室所藏）

二　なぜ三行半に書くか

右の五つの標本中一つが四行一杯になつて居る外は、皆型通り三行半に書いてある。後に掲げる三通中二通も同様だ。卽ち三行半に書くと云ふ正式が相當に遵守されて居る樣であつて、卽ち離緣狀を『三くだり半』と云ふのである。併しなぜ離緣狀を三くだり半に書くのか、どうも充分にわからない。三田村鳶魚氏編『東海道中膝栗毛輪講』に此點についての二說が出て居る。第一說は數學的說明とでも申さうか、

『契約書は必ず七行に書くものだといふことがあります。女房に貴下の娘を貰受けると書く時に弘前、あの邊では七行に書くものだとして居ります。それから離緣になる時にはそれを半分に切つて返してしまふ。それだから三くだり半になる。』

と云ふのだが、どうも充分腑に落ち兼ねる。第二說は三くだり半に書くのは離緣狀には限らぬと云ふので、

『そのはじめ遊女が客へ贈りて客を引き寄するお定まりの文などは大概ね三行半位なりしが如し。それが後には男女の間に用ふるお定まりの文（離緣狀など）の型と極りしにあらざるか。言語と云ひ風俗と云ひ、遊里より起りて後には一般的となりしもの少からざるは先刻御承知のこと——元祿寛永頃の

ものと思はるゝ名ごや山三たんぜんせりふ「われ見ても久しくなりぬあげやまち、きしのしんぞういくよねぬらん、むつ事ときみはしらじな水ぐきの、三くだり半のかへすがき……」を參照すべし。』

とある。成程これはさうもあらうかと首肯されるが、併しなぜ三くだり半に書くかと云ふ説明にはなつて居ない。此點はなほ研究を要する。

三　いつから三行半に書いたか

それなら離緣狀を三くだり半に書くことがいつから始つたかと云ふに、それもまだハツキリ分らない。前記『膝栗毛輪講』には、

『小柴垣の五に「夫婦いさかい兩隣をさわがせ男もきかぬ氣になつて一も二もないと三下り半のいとま狀をさらりと書いて」とあれば、元祿より以前に云ひ慣したることとなるべし。』

とある。『小柴垣』と云ふのは元祿年間醉狂庵著の好色本で、醉狂庵は西鶴だらうと云ふ。なほ徳川時代の戯曲類に『三行半』と云ふ言葉の出て居る例については、中田薫博士の論文「徳川時代ノ文學ニ見エタル私法」(宮崎教授在職廿五年記念論文集)を見られよ。

四　離緣狀の必要

三くだり半に書くのはいつ始まつたか分らぬが、離緣狀其ものは餘程古い制度である。既に大寶令にも、

『夫手書棄之。與尊屬近親同署。若不解書。畫指爲記』

とあつて、離緣狀を離婚の要件とした制度の様であるが、徳川時代の離婚制度に於てはそれが極めて明白であつて、幕府は刑罰の制裁を設けて離緣狀交附を勵行した。即ち徳川幕府の刑法たる『御定書百箇條』に左の規定があつた(第四十八條追加)。

寛保二年極

一　離緣狀不遣後妻を呼候もの　所拂
　　但利欲之筋を以之儀に候はゞ家財取上江戸拂

從前々之例

一　離別狀を不取他に嫁候女　髪を剃親元に相歸す
　　但右之取持いたし候もの　過料

一　離別狀無之女他に緣付候親元　過料
　　但呼取候男　同斷

五　ユダヤの離縁狀

所で離縁狀が離婚の必要手續であつたのは我國のみではないのであつて、古代のユダヤ民族間でもさうであつたことが、聖書に見えて居る。即ち新約全書馬太傳第五章（三一、三二）の『山上垂訓』中に、

『まだ曰ることあり、凡そ人その妻を出さんとせば之に離縁狀を與ふべしと。然ど我爾曹に告ん。姦淫の故ならで其妻を出す者は之に姦淫なさしむる也。又出されたる婦を娶る者も姦淫を行ふなり。』

とあり、又同第十九章（三―九）の『パリサイ人問答』には更に右の敎旨を敷衍して、

『パリサイの人きたりてイエスを試み曰けるは、人なにの故に係らず其妻を出すは宜か。答て彼等に曰けるは、元始に人を造り給ひし者は之を男女に造れり。是故に人父母を離れて其妻に合。二人のもの一體と爲なりと云るを未だ讀ざるか。然ばはや二には非ず一體なり。神の合せ給へる者は人これを離すべからず。イエスに曰けるは、然ば離縁狀を予て妻を出せとモーゼが命ぜしは何ぞや。彼等に曰けるは、モーゼは爾曹の心の不情に因て妻を出すことを容したる也。されど元始は如此あらざりき。我なんぢらに告ん。もし姦淫の故ならで其妻を出し他の婦を娶る者は姦淫を行ふなり。又いだされたる婦を娶る者も姦淫を行ふなり。』

と說いてある。而して右のモーゼの命令と云ふのは、舊約全書申命記第二十四章の劈頭に、

『人妻を取てこれを娶れる後、恥べき所のこれにあるを見てこれを好まずなりたらば、離縁狀を書てこれが手に交し、これをその家より出すべし。』

とあるのがそれである。此等の本文によつて見ると、イエスは離婚禁止主義であつたけれども、ユダヤ民族間にはモーゼの昔から離婚が許され、唯だ夫から妻に離縁狀を與へることが其要件にされて居たのである。

六　離縁狀は再婚許可狀

扨て右のユダヤの離縁狀だが、これにも大體お定まりの書式があつたらしく、其書式の今日傳はつて居るものを見ると、我

國の離緣狀と符節を合する如しと云つても宜い位である。但し三行半ではない。モット長たらしい。併しそれは聖書にもある通り『アブラハムの裔なるダビデの裔イエスキリスト』と云ふ流儀に書くから長くなるので、內容は同一である。今右の書式の英譯を要部だけ寫して見ると左の通りである。

"……; and hereby I do release thee and send thee away and put thee aside that thou mayst have permisson and control over thyself to go to be married to any man whom thou desirest, and no man shall hinder thee in my name from this day forever. ……"

即ちユダヤの離緣狀も我國の三くだり半も共に二つの部分から成立つて居るのであつて、假に名づければ、前半が離別文句、後半が再婚許可文句である。而して實は後半の方が寧ろ大切なのであつて、左の如き再婚許可文句だけの離緣狀もある。

一札之事
一此女何方ゝ緣付候共此方に
而少茂構無御座候爲後日
仍而一札如件
明和四年
亥ノ十一月十日　　利兵衛

（法學部研究室所藏）

この離緣狀が結局再婚許可狀であることは、離婚問題全體として注目すべき現象と思ふ。離婚は其後に前配偶者以外の者との再婚が行はれ得ること、併せて考へねばならない。イエスが離婚を禁じたのも、離婚其のものよりも寧ろ絕對的一夫一婦主義から再婚を嫌つたのである。隨つてキリスト教では離婚は禁じるが別居は禁じない。又離婚を明白確實にしないで再婚することは悶着の種であり、延いては社會の平和を害するから、モーゼも德川幕府も再婚許可狀の意味の離緣狀を取らずに離婚することを禁じたのである。

があるに相違ないが、其原因を發表證明しなくては離婚を許さない制度と、具體的原因を表へ出さずに離婚することを許す制度とがあり得るから、前者を特に有因離婚と名づけ、後者を無因離婚と稱する。無因離婚は要するに自由無制限に離婚を許す制度である。有因離婚は法律が豫め斯う云ふ原因があれば離婚を許すと列擧して置く制限離婚制度に傾き、而して個々の場合に右の法定離婚原因があるかどうかを裁判所が調べる制度が今日普通に用ひられる。我國現在の離婚制度は、夫婦間で離婚の相談が成立つた場合には所謂『協議上の離婚』として無因離婚を許し、夫婦の一方だけから離婚を請求するには所謂『裁判上の離婚』即ち有因離婚でなくてはならぬと云ふことにして居る。所で我國古來の制度はどうであつたかと云ふに、大寶令い

つたが、兎も角これだけの原因がなければ妻を離別することは出來ぬとなつて居たのである。其上三不去と云つて、妻が『舅姑の喪を經持したる』場合、『娶る時賤くして後貴き』場合、及び『受くる所有りて歸す所無き』（歸すべき實家がなくなつて居る）場合には、妻を離別することは出來ぬと云ふ禁止もあつて、要するに有因離婚制限離婚の制度だつたのである。併し元來此大寶令なるものがどれだけの地方にどれだけの年代行はれたかゞ問題であつて、日本全國に亘つて永く行はれたものでないことは確かである。そこで大寶令の離婚制度も段々崩れてしまひ、武家時代封建制度の下に於ては、一般に男尊女卑が一層甚しくなつた關係もあつて、離婚制度も無因離婚即ち何等の原因を示さずに妻を離別し得る制度に變つたのである。前掲の離緣狀の標本を見て

も、『不緣に付』と書いたのがあるが、折合が惡いと云ふだけで何等具體的の離婚理由を示して居ない。又『我等勝手に付』と云ふのがある。勝手と云ふのは今日云ふ勝手氣儘の意味ではなからうが、兎も角當方の都合に依りと云ふのである。又『心に叶はず候に付』と云ふのは最も露骨に無因離婚である。其他全然此等の漠然たる理由さへも書いてないのがある。即ち此等の離緣狀が書かれた時代の夫は何等具體的の理由を示すことなしに妻を離別し得たのである。

八　追出し離婚

而して夫のみが妻を離別し得たのであつて、妻の方から夫に對して離婚を請求することは出來なかつたのである。今日は夫婦の相談で離婚が出來、又夫からも妻からも離婚を請求し得るのであるが、昔はさうでなかつた。離婚のことを英語でdivorceと云ふのは御承知の通りであるが、其原語はラテン語のdibortium である。所がラテン語にはも一つ離婚と云ふ字がある。それは repudium で英語の repudiation である。此兩語がどう違ふかと思つて簡單な羅英辭書を見る、divotium=parting with, repudium=putting away とあつた。簡にして要を得て居る。前者は夫婦が對等の資格で相別れるのである。後者は夫が優越の資格で妻を追ひ出すのである。三くだり半に現はれた離婚は即ち此『追出し離婚』で、離緣狀のことを一名『去狀』とも『暇狀』とも云ひ、又本文中に前揭の通り『暇遣し候』と書いたのがあるのも、右の趣を示して居る。こゝに一つ面白い離緣狀がある。

離緣狀

一我等此度存外之不始末致親類ゑ迷惑相掛
中譯茂無之右ニ付其元離緣致候以來何方ゑ
緣付候共一言之中分無御座候依之
離緣狀一札如件

慶應二年寅十二月廿四日　平兵衛㊞

おふさとの

これは林若吉氏所藏の『平兵衛離緣一件云々』と題する記錄中

に依つて居るのであるが、其記錄を讀んで見ると離婚原因は全く夫平兵衛に在るのであつて、離緣狀の文面にも見へる通り夫の方があやまり閉口して居るのに、やはり夫の方から離緣狀を與へて妻に離婚を申渡す形にせねばならぬのである。卽ち妻の方から離婚を請求することは、法律上も認められぬ所であり、道德上もあるまじきことゝされたらしい。德川時代の小說戲曲類に其觀念が現はれて居る例は外にもあらうが、有名な『三勝半七酒屋の段』に、

『唐も倭も一旦嫁にやつた娘、嫁はれふがどふせふが、男の方から追出す迄、取戻すといふ理屈はない筈、』

とある。更にモット古い北條時代の材料を引いて見ると、無住禪師（後に大圓禪師と勅諡され高僧 正和元年八十七歲にて遷化）の著した佛說訓話集たる『沙石集』第七卷第十六話『慳貪者（けんどんしや）の事』と云ふのに斯う書いてある。

『奥州に百姓ありけり。慳貪にして、妻子にもなさけなかりければ、妻にげにげするを、たびたびこらへてぞおきける。ある時五六歲なる子を懷きて、地頭のもとにゆきて申しけるは、「夫にて候もの、餘りになさけなく慳貪に候ゆゑに、絶えて忍びてあひ添ふべき心地も候はず、御下知を蒙りて離れ候はゞ然るべく候ひなん」と申す。地頭、「夫こそ妻をさるならひなれ、妻として夫をさる事何（いか）なる仔細ぞと尋ぬるに・・・』

此話では結局地頭が妻の離婚願を取上げるのであるが。併しそれは特別處分だと云ふ風になつて居る。

九　緣切寺

斯く妻は離婚請求權を與へられなかつたのであるが、こゝに唯一つ妻が離婚を主張して其目的を貫徹し得る手段があつた。併しこれは最終の非常手段である。德川幕府の法制を摘錄したものとして信用を置かれる『律令要略』に左の一項がある。

『夫を嫌致二家出一比丘尼寺へ欠入比丘尼三年勤レ之暇出候旨於レ訴レ之は親元へ引取らす。』

これが所謂『緣切寺』の制度である。この緣切寺なるものは他の地方にもあつた樣であるが、有名なのは鎌倉松ヶ岡東慶寺である。東慶寺は由緒ある尼寺であるが、これが緣切寺として用ひられたことについては德川時代の川柳が證據になるのであつて、『松が岡』は當時の川柳子の好んで取扱ふ題材であつた。勿

論川柳子有勝ちの假構と誇張とは割引して考へねばならぬが、併し川柳の様な民衆文學から當時の制度の實情を探るのも面白研究である。東慶寺に關する川柳は西原柳雨氏著川柳膝栗毛に五十餘句出て居るし、其以外に私の聞いて居るのもある。其中餘りに駄句でないものを分類的に引きながら、緣切寺制度の大略を述べて見たい。

先づ離婚を欲する妻は寺へ驅け込むのであるが、江戸からも逃げて行つたものであること、左の數句で知れる。

鐙からくらきで鎌の一騎落

十三里先だにたつた四里尋ね

たしかに此道嫁のあと十三里

次にどうして十三里の遠路を走らねばならぬ様なことになつたかと云ふ原因事情については、

外科などにかかつたもある松が岡

ぬれた袖嫁鎌倉の松で干し

高砂にいびられ嫁は松へ逃げ

みんなしていびりましたと松ケ岡

鎌倉へ行く前川へすでのこと

などゝ云ふ句がある。而してさう云ふ連中が同時に數人づゝあつたと云ふことを想像させる左の數句があるが、これ等は例の假構誇張かも知れない。

ひどい事松ケ岡への連れが出來

松ケ岡相見互の癪を押し

十三里先で男をそしつてる

わつちがも行くとぶつさと松ケ岡

そこで妻が寺へ逃込むと、

すは鎌倉と仲人かけつける

と云ふ川柳がある通り、仲人なり又は親や夫があとから追つて來ることもあらうが、寺の方からも夫又は實家に對して通知狀召喚狀を出すのである。林若吉氏所藏の『鶡鵲齋漫錄』と云ふ隨筆（寫本、此部分は天保四年八月十六日記錄の旨附記してある）左の如き通知召喚狀の一例が載つて居る。

以飛脚申達候其元娘つなと申女
山内ニ駈入離縁寺法願候ニ付様子相尋
候得共女之義故一向相分申候間此書状
着次第當山役所ニ早々可被罷出候
尤其趣名主組頭へも可被相屆候此段
申達候以上

松岡
　御所
二月廿一日　役人
此書付持参可被致候
　藤澤宿
　　大野尾
　　　半左衛門

そこで關係者出頭の上和解が調つて妻を連歸ることもあり得る。卽ち

　みどり子にひかれてお松立歸り
　道々も異見で戻る松ケ岡

と云ふ次第である。或場合には又寺の當局者が裁斷して卽時に離婚をさせることもある。

　鎌倉の嚴命に従ひ離えん

と云ふ句があつて、川柳としては頗るまづいが、一種の裁判離婚が行はれたことを示す資料として貴重である。其場合には夫から寺に對して受書を差出す。前掲の鸚鵡齋漫錄に其文例が載つて居る。

差上申一札の事

一私妻なを
御山ニ駈入離縁御寺法奉願候ニ付御屆
之御奉書拜見仕委細奉畏候
以後右之女何方ニ嫁付候共少も構
無御座候爲後日連印差上申候所仍如件

天明三年極月四日
　武州多摩郡宅部村
　　當人　常五郎印
　　五人組　次郎右衛門印
　　同　六兵衛印
　　同　半次郎印
　　同　八左衛門印
　　名主　市左衛門印

鎌倉松ケ岡
　御所様
　　御役所

更に又夫は妻に對して離緣狀を渡す。現に東慶寺に其一通が殘つて居るさうで、尾佐竹猛氏が其寫を持つて居られるが、

> りえむ狀
>
> 一其方事望に任せ此度離緣致候然る上は向後何方へ緣付候共差構無之仍如件
>
> 元治元年丑年　三月　安西玄蕃
>
> おとし殿

と云ふのである。右の文例で特に注目すべき點は、『望に任せ』の一句であつて、即ち妻の請求に依る離婚であることを示して居るのである。

扨て右の通りに和解が出來るか離婚が即座に行はれるかしなかつた場合には、妻は三年間寺に居なければならない。

　鎌倉に鰹も食はず三年居
　去狀をとるうち年が三つふけ
　武夫は日歸嫁は三年目
　鎌倉をもどれば桃や栗もなり

などゝ云ふ句がある。そこで三年辛抱すれば愈々緣が切れるのであつて、

　緣談は出雲破談は松ケ岡
　引からむ緣をかき切る鎌の寺

と云ふ結末になるのである。要するに妻の方から離婚を請求して其目的を逹するには隨分な難行苦行をせねばならぬのであつて、それ程までにしても離婚を遂げたいとするにはよくよくの事情があることと同情される。然るに當時の人々はやはり妻から離別を求めるなどゝはけしからんと云ふ方に考へたらしい。川柳も

　鎌倉のさばきを受ける氣の强さ

情の強さうながはいる松ヶ岡
とんだ嫁お寺で年を三つとり

など丶妻の方を批難して居る。夫妻の不平等も又甚しい。

一〇　我國女權擴張史の第一頁

斯くして德川時代は夫妻不平等の儘で經過したが、明治維新は此點についても維新であつた。卽ち明治六年五月太政官布告第一六二號布告なる法律を見よ。

『夫妻の際已ムを得ザルノ事故アリテ其婦離緣ヲ請フト雖モ夫之ヲ肯ンゼズ之レガ爲メ數年ノ久ヲ經テ終ニ嫁期ヲ失ヒ人民自由ノ權理ヲ妨害スルモノ不レ少候自今右樣ノ事件於レ有レ之ハ婦ノ父兄弟或ハ親戚ノ內附添直ニ裁判所へ訴出不レ苦候事』

卽ち妻にも離婚請求を與へたのであつて、我國の離婚が之によつて Repudium から divortium になつたのである。而して妻に離婚請求權を與へる理由を『人民自由權理』と云ふ根本理論に求めたのも頗る面白い。今日の用語の樣に權利と書かないで權理と書いてあるのも、權利觀念の變遷を示すものとして注目すべきだが、別問題故こゝには說かぬ。要するにこの明治六年の太政官布告は正に我國女權擴張史の第一頁に特筆大書せらるべき所謂エポックメーキングなものである。其後民法戶籍法等の制定によつて離婚制度の內容形式が充實整備すると共に、三くだり半の離緣狀は法律上の必要を喪ひ、實際上も段々用ひられなくなつた。今や私は法制史的一資料としての三くだり半數通を手にして、轉た舊日本から新日本への進轉を懷ふ。然かも又同時に新日本の離婚にも、制度の上で又實際に於て、まだ舊日本の舊思想を全然脫し切れぬ點があり、明治六年太政官布告の大精神が充分徹底されて居ないと云ふことを考へさせられる。姦通を以て離婚原因とする點についての夫婦の不平等が其一である。制度上は協議離婚で事實上はまだ追出し離婚が行はれることが其二である。併しそれ等の點の議論は又別の機會に讓り、今は唯だ『三くだり半』を通して舊時代を顧みるに止めやう。



12

北郊雜記

阿部次郎

六月の五日、大阪からの歸りに京都へ寄つて、六日、大學の集會所で先輩や諸友と食事を共にしたあとで、三高の朴と二人で東山めぐりをした。吉田をぬけて眞如堂の門前に出れば、其處には十餘年前自分が一夏を過した下宿がある。見れば今は店を閉してしもた屋になつてゐる樣子であつたが、自分は此處を通つてあの當時のことを頻りに思ひ出さずにはゐられなかつた。其處から眞如堂をぬけ、黑谷に法然上人の紫雲石を拜み、木立の靜けさ身に沁みる法然院や、躑躅の紅が女らしく咲き殘る二人の宮女の墓や、若葉の茂り多い若王子や南禪寺などをめぐり、都ホテルの庭をぬけて圓山の上の林道を稚兒ケ池から淸水の方へ廻りながら、自分の想ひは十餘年前の昔に流れて行つた。さうして自分の追懷の中には、いつも亡くなつた宿南の姿が立つてゐた。

自分は明治四十年の夏休に山形の父の家で始めて宿南に逢つた。當時彼は京都の醫科の學生で鄕里も自分とは遠く、普通ならばお互ひに相識る機會もない譯であつたが、兩者共通の親友、今三井にゐる長澤の緣によつて東北旅行の途中僕をたづねて來たのである。あとで長澤にきけば、宿南は僕の印象を書き送つて「偉丈夫のやうに想像してゐたのが白皙短軀の秀才型だつた」と云つたさうだが、僕が受けた彼の印象は禪坊主のやうな飄然とした男だといふことであつた。

彼は僕のところに一二泊して更に北に向ひ、月山や鳥海山にのぼり、更に南部の恐山を捜つて、藏王山越しに再び山形に寄つたさうだが、その時僕は莊内の祖父の家へ歸つてゐたので、同じく登山の癖ある父と暫く山嶽の話をして歸西の途についたさうだつた。

同じ年の秋、同じく長澤の肝煎によつて信濃飛彈の登山旅行が企てられた。東京からは死んだ魚住や、今獨逸に行つてゐる小山や、長澤や僕が出がけた。京都からは宿南や、今大阪の高等商業にゐる河本や、もう一人その後消息をきかぬ某君が來た。東京連は淺間にのぼり善光寺を見、塩尻から木曾街道を徒歩して木曾川添ひに下り、京都連は岐阜の方から逆に川添ひにのぼつて來て、寢覺の床で落合つた。それから木曾の御嶽にのぼりて飛彈に降り、野麥峠を越えて又信濃に歸つて、大野川や白骨や上高地などの温泉を夜のとまりとして落合ひながら、彼等は乘鞍や穗高や槍ケ嶽などにのぼり、僕等は足をいためて麓をめぐつて歩いた。丁度紅葉のいゝ頃で、上高地から島々へ歸る梓川畔の紅葉などは、今でも忘れ難い印象として鮮かに殘つてゐる。この十餘日の旅行によつて僕と宿南との間も亦大部親しみを増して來た。恐らく彼も僕に對して所謂秀才以外のものを認めるやうになつたであらうが、僕も亦彼の中に禪坊主以上のものを――こまやかな、悩みを知る人間らしさを認めるやうになつた。

遺稿の年表によれば、宿南は四十年の二月に基督教の洗禮を受け、その四月西田天香氏にお眼にかかつてゐるが、一緒に旅行した當時はまだ著しく眼につくほどの宗教家にはなつてゐなかつた。併しこの旅行中に彼の宗教的傾向は著しく進歩したのであらう。――歸來彼は菜食主義を始め、西田氏の親しい弟子としてその教義の實行を試みるやうになつた。後になつて彼の性急な理想主義は表面上頗る緩和されたが、彼は死にいたるまでその内心の信仰をかへなかつたらうと思はれる。

僕が京都に一夏を過したのは、その翌四十一年であつた。魚住は東京を先發して、京都に寄つて、僕達の前にその郷里の播摩に歸つた。僕と長澤とはその後を追うて確か七月の始めに京都へ來て、眞如堂前の河本の下宿に行李を解いた。この時分宿南はもう酒も飲み魚肉も食ふほどになつてゐたが、僕は此處で母を敬ひ妹を愛する宿南を見ることが出來た。彼の善良で情に厚い性質は、その家族の間にゐて特にその自然な發表の處を得てゐるらしかつた。當時の宿南は母堂と妹と姪と四人で京都に家を持つてゐたが、この四人の人の親しみは、今でも自分の心に最も美しい記憶を殘してゐるものゝ一つである。併し特に當時の僕達には、一つの共通な問題の苦しみがあつたので、それが一層僕達を親しくした。八月になつて、僕は宿南や長澤や河本とも別れて一人になつて、奈良や吉野や高野の邊をさまよひながら、あの年頃の定めなき思ひを漂遊の間に寄せてゐたが、歸途には金がつきて宿南から汽車賃をたてかへて貰つて、九月漸く東京に歸つて來たのだつた。

宿南はこの年の冬醫科を出て外科の副手となつたが四十二年の夏患者の病毒に感染して遂に八月十五日に死んでしまつた。あの當時は僕の方でも、精神的物質的兩様の意味で最も困惑の狀態にゐたときであつた。思ひがけず彼の死亡の電報を受取つて、京都に直に出かけるにも旅費の持合せがなく、蒲團にくるまつて横臥しながら輾轉した當時のことを思ふと、今でも心の痛みを覺えずにはゐられない。

自分は林と一緒に東山を歩きながら、林に話したことのない當時のことを一人で思つてゐた。青春は過ぎ易く、今にして思へばあの當時こそ自分の青春の最後であつたのだつた。併し青春を共にした人の思出ほど永久に鮮かに殘るものは少いであらう。自分は東京をたつ前に長澤等と相談した遺稿改訂のことを又思ひ出した。吾々の經過して來た青年時代の思想と感情とを語るものとして、宿南の遺稿は魚住の遺稿と共に長く人の心を動かす力を持つてゐるであらう。

13

自分が他人に金を借りてそのまゝに返さずにゐるのが、自分の記臆するところでは今迄に二つある。その一つは前に云つた歸京の旅費で宿南から借りたものである。宿南の死後長澤を通じて母堂にその話をしたら、どうぞその心配は無用にしてくれといふことであつた。もう一つは今北海道大學の豫科にゐる藤原から借りたものである。學校を出てから久しい間自分はいつでも金に困つてゐたが、當時藤原は友達の間に金持で通つてゐた。或時自分が下宿の拂ひに困つて二三十圓の立替を賴みに行つたとき、藤原は都合が惡いやうな樣子であつたが、藤原の妻君が傍から「困る時には誰も同じ事だから貸しておあげなさいよ」と云つてくれた。その後間もなく藤原は地方の中學に赴任したが、あとできけばあの當時は藤原も大變困つて居た時で、地方行の理由も一つは其處にあつたらしいので、自分は甚だすまないことをしたと思つた。併し藤原は地方に行つて、僕達の仲間では一番收入の多い身分となつたので、この金も返さずにそのまゝ御流れになつて今日になつてしまつた。

此間友達が集つてお互の貧乏話をしたとき僕がこの話をしたら、安倍が「それは十倍にして返す價値があるね」といふから、「僕もさう思ふよ」と云つて、しみ〴〵した心持で一緒に笑つた。かうやうな借金の記臆を持つてゐる自分は、決して友達連が惡いとは云へないやうに思ふ。

14

大本教も遂に馬脚を出してしまつたやうに見える。自分は始めから大本教を信ずることは出來なかつたが、同時に始めからこれに第三者としての同情を持つてゐた。自分はその筆先を讀んで、此處に偏つた智見を持つ者に宿る[illegible]な道義的情熱を見ることが出來ると思つた。この道義的情熱が宗教的ヴイジヨンを産んで樣々の豫言となるのも、當否は兎

に角主觀的心理的に見て同情と尊敬とに値すると思つた。自分の考へに從へば、大本教にとつて致命傷となるものは、たゞそれが詐欺虛構の意志から出てゐることを證明されることでなければならなかつた。然るに豫審調書の一部と稱するものが發表されたのを見ると、正にこの致命的な缺點が證明されたやうに思はれる。王仁三郎が所謂「大化物」としてこの口供を再び覆すときが來たら格別だが、今日のところ大本教は王仁三郎の陳述によつてすつかり根抵から覆されてしまつたと云つても過言ではないであらう。自分は今でも教祖直子の純眞を信ずることは出來るやうに思ふ。併しその御筆先の豫言に今後三十年目に世の立替があるといつてゐるのは王仁三郎の細工で、その實明治三十年と書いてあるのだといふ一事は、既にその豫言が最も根本的な點に於いて當らなかつたといふ證據になるのを如何ともすることが出來ない。又自分は淺野氏の正直をも許すことが出來るやうに思ふが、氏の誠實を悉して信じてゐる御筆先が王仁三郎の僞造であるとすれば、氏の信仰の理由も最早奪はれてしまつたと云はなければならないであらう。固より流傳の御筆先を最初の形に返して、既に不的中が證明された豫言を迷妄として排斥してもあとには猶直子の道義的情熱が殘るには違ひない。その道義的情熱を根本として大本教が更に如何なる發展をすることが出來るか、それは今後の事實に徵して見なければならないところである。併し一定の時期に於ける世界建てかへの豫言を中心信仰とする現在の大本教は、もう存立の根據を奪はれたやうに自分には思はれる。

自分は王仁三郎の陳述を讀んで痛切にゴーゴリの「檢察官」を想起する。王仁三郎が或人の本を讀んで感心して、著者名をかくしてこれを他に與へる。貰つた人はこれを王仁三郎の著書と信じて了ふから、最初にはこれを自分の著書とする氣がなかつたのを遂に自分の著書といふことにしてしまふ。王仁三郎が風邪のために髮をのばしてゐる、信者はこれを見て長髮を神意であると思ひ込んでしまふ。凡てこのやうにして、始めの嘘が誠となつて、遂には自分でもうそとう

するとも出來ないやうになつてしまふといふのは、眞實すぎで寧ろ痛々しくさへ思はれる位である。法廷に於ける彼の陳述は、例へば火いたづらをしてそれが意外の大火になつたのを見て泣きわめく子供を見るやうに不見識なものである。王仁三郎は、このまゝでは、永久に世間の眼から見て救はれることが出來ないであらう。

併し自分は今でも淺野氏には同情する。「三十年」とあるのは「明治三十年」の改竄であるときいたとき、彼は驚いた顏をしたと書いてあるが、この言葉をきいたとき、彼は定めて足下の地盤が崩れるやうな氣がしたであらう。その一生を賭して、眞摯な回心(コンヴァーション)を經て信じたところのものが詐欺の上に築かれてゐたと悟つたときの心持はどんなだらう。欺かれて蹂躙された事を悟つたときの處女も、賣られて敵手に渡されたことを發見する軍將も、この場合ほど根抵を震撼するショックを感じはすまいとさへ思はれる位である。尤も淺野氏はまだその信仰をかへないだらうから、自分が今想像するほどの事もなかつたかも知れないが、眞相がわかるに從つてこの幻滅が增して行くとすれば、自分は氏に對しては氣の毒といふより外はないやうに思ふ。

併し縱令王仁三郎は詐欺漢であつても、彼に欺かれた者が悉く詐欺漢であるといふことは無論出來ない。大本教が勢力を得たといふことは、少くとも一つの眞實を――「信ぜむとする意志が吾々の間に起つてその對象を模索してゐるといふことを――證明する。大本教は詐欺でもこの眞實は動かす事が出來ない。政治家はこの事實を如何に處置せむとするか。この點に大本教事件の眞正の意義が潜んでゐる。さうしてこの問題は檢事と警察とだけでは、固よりどうすることも出來ない問題である。吾々はこの一事を牢記して置かなければならないだらう。(六月十二日記)



昆布の囁き

賀川豊彦

碧海の底の昆布は私の親しい友である。私は孤獨の樂みを人のように山と林に求めようとはし無い。私は海に行く。海は私に限り無き自由を與へてくれる。

私は海に行く。私は昆布に行く。私は薄暗い海底に行き、昆布と囁く。私は螺蠑い友であり、蟹の知己、昆布の肉親である。

低く落ちた東京の空に何の靈感があらう。阿片と砂利に詰つた日本の空に何の靈動があらう。赤い旗とパンのことのほか喚くことを知らぬ唯物主義者に何の發見があらう。私は海底に行く。私の海の憬れはそんなに強いものである。私は空氣より水を愛し、山より深海を選び、松の木より、昆布の林が好きである。

夏の空の輝きも捨てたものでは無いが、海底のほの暗い光に虹の如く輝く海面を見上ぐる喜びに較ぶ可くも無い。

空氣の溷濁より脫れ、嘗て何人も濁さ無い澄み切つた、大海の蔭に隱れることは、自由を愛するものには悅びである。

自由を愛するものは海に行く。狭く區切られた地域の大小に迷ひ、ダイナマイトの工夫と地雷火の設置法と十四吋砲の据付に忙殺せらるゝ地面の害虫より脱れ、鯛とひらめと昆布を友人にして鯨の自由を知るとも心地の善く無い者でも無い。

潮流と共に進み、潮流と共に止り、潮流の廻る時に廻り、暖流に寒流に大きな自由を呼吸することは、實に嬉しいことである。此處にはカイザルも治め無ければ、ニコライも居ら無い。レニンもトロツキーも蝶螈は知ら無いと云ふて居た。

私は海驢の如く北氷洋を潜り歩く。氷山も私の友人であり、氷河も私には楽しいものである。たとひ、颶風が海面を打つとも、私は波の背より背に傳ひ行きて、怪物の如くに海の上に跋扈する。

それは一人の跋扈である。何人も私を妨げ無い。暴風は私に接吻し、龍巻は私を背め廻はす。海嘯よ翔れ、津波も来い！私は鯨の如く海驢の如く、そんなものに吃驚するものでは無い！赤道直下より暴風も吹いてこい。私は暴風に乗つて、海の上に跳らう。海中の噴火も、海床の激動も私には日常の茶番である。私は水の如き恬淡もて凡てを受け流す。

私は海流に逆は無い。昆布の柔和もて西に北に潮のさすまゝになびく。

妖雲海面を蔽ひ、水面に怪光が射す時があつても私はそれを恐れない。不知火も燐光も私にはそれがイルミネーションである。

私は凡て海の誇を知つて居る。燃ゆるが如き珊瑚珠の光榮も、月の如く輝く眞珠の輝きも、海の秘密を知つて居るものが初めて知る誇である。

海は凡ての慰の源である。凡ての大陸は海から生えて居る。日本の根を探がす爲めに一萬尺の深

きに潜り入る。私の努力は無效であつた。日本には遂に根が無かつた。海底の昆布も日本の根を見たことが無いと私に告げた。日本は海上に浮流する。日本は潮の儘に引張られて行く。月が出ると月に引かれ、日が出ると日に引かれる。月と日の無い時には闇に引かれて居る。

日本は太平洋上の迷兒である。日本は潮のまゝに流れ行く日本の底に綱をつけ、亞細亞の東にくくりつけよ。日本は太西洋の渦卷きにだん／＼吸ひ込まれて行く。

海のことを知るものは海に居るものである。私は海のことを知る海の精である。北極光の輝く日に私は海に魅せられてオコツク海の海の精に乘りうつられた。

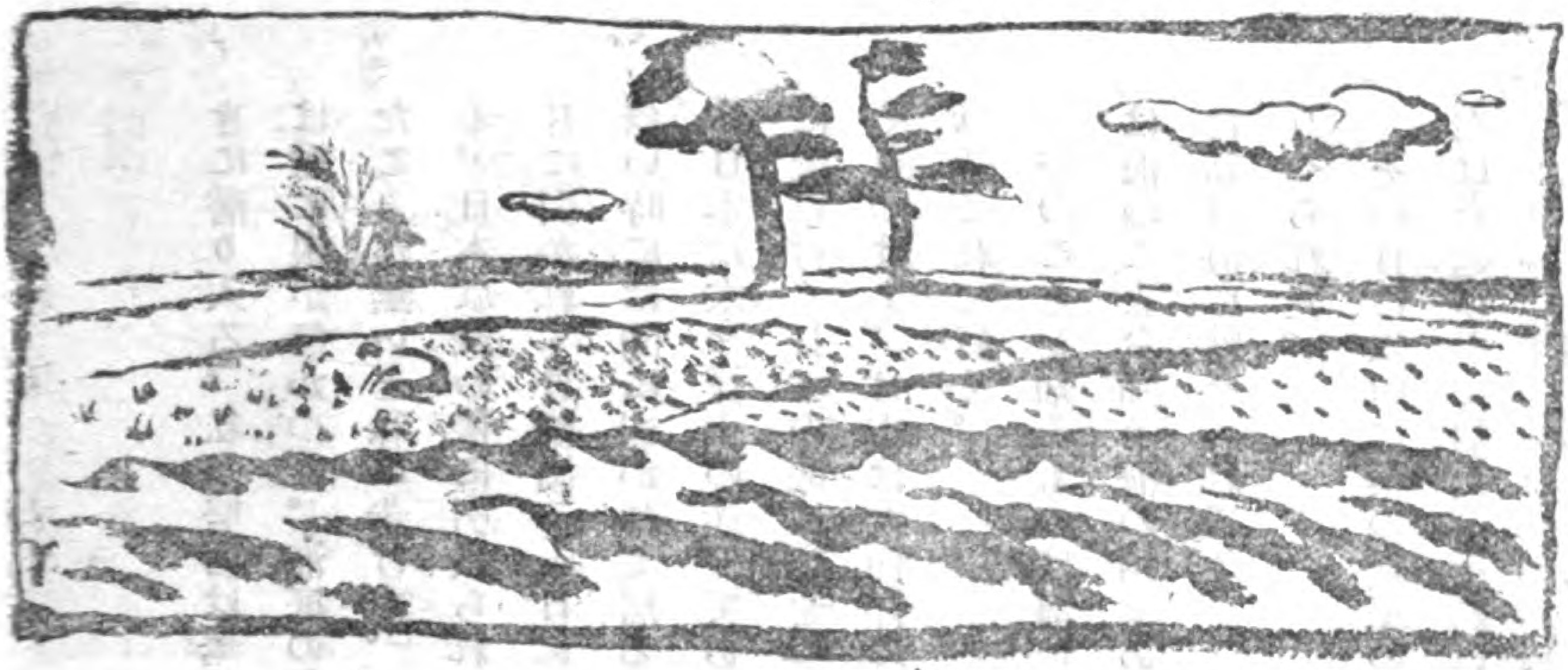
その日に氷山は紫の寶玉の如く輝き、深海の昆布は脊延びして居た。それは、私を祝福せんが爲めであつた。螺蠑は長き沈默を破つて私に近寄り囁いた。

大きな望もて、凡ての海草は海と海の自由を讃美した　それに私も同意した。

北極光の輝く日に私は海に魅せられて、オコツク海の海の精と結婚をした。その日に昆布が脊延びして、私を祝福してくれた。昆布は海の底から海面まで脊延びして、海面より一寸と首を出して、天空をのぞいた。そして小さい靜かな聲で私に囁いた――海は自由だ。海は光榮だと。

海嘯よ起れ！　津波よ來れ、南より暴風も吹いて來い。私は昆布に抱かれて、海面上に過ぎ行く凡ての波立ちを海底より默視しよう。

昆布はあの天鵞絨のような滑かな葉の中に七卷半まで私を卷いてくれて、凡ての危險より守つてくれる。昆布は私のよき友である。



ホワイト・フアング（白牙）

Jack London 著
堺利彦 譯

第二篇

三　灰色の子狼

彼は兄弟姉妹共と違つてゐた。彼れの兄弟姉妹は既に、其の母（即ちかの雌す狼）から遺傳した赤ちやけた毛色を現はしてゐたが、彼ひとりは、此の點に於いて其の父に似てゐた。彼は其の一腹の中で、一疋だけ灰色の子狼であつた。彼は正直正銘の狼に生れついてゐた。即ち體質上、老いた『片目』そのまゝに生れついてゐた。但し只つた一つの取除けがある。それは外でもない、父が一つしか目を持つてゐないのに、彼は二つ持つてゐた。

此の灰色の子狼は、まだ目があいてから間がないのに、もうハツキリと物を見る事が出來た。そしてまだ目の塞がつてゐた間にも、よく感じ、味はい、且つ嗅ぐ事が出來た。彼は二疋の兄弟と二疋の姉妹とをよく知つてゐた。彼はまだ弱い、ヨチ

ヨチした恰好で、もう其の兄弟姉妹と一緒にふざけちらし、時としては喧嘩をしたりしてゐた。そして勢ひこんで來た時には、其の小さい喉にゴロゴロといふ變な音をさせて、他日の唸り聲の先驅を示してゐた。彼は猶、目のあかないズット前から、觸覺と味覺と嗅覺とに依つて、よく其の母を知つてゐた。暖かさと、液體の食物と、柔しさとの源として知つてゐた。母は柔しい、撫でさするやうな舌を持つてゐて、彼れの軟かな小さい體がそれに嘗めまはされると、彼は好い心持になつてしまひ、覺えず知らず母の體に擦りついて、ウトウトと眠つてしまふのであつた。

彼れの生活の第一月の大部分は、斯樣にして眠る事の中に過された。然し今ではモウよく物を見る事が出來るので、よほど長いあいだ目を覺してゐて、段々によく自分の世界を學びはじめてゐた。彼れの世界は陰鬱であつた。けれども彼はそれを知らなかつた。彼はまだ少しも他の世界を知らないからであつた。彼れの世界は薄暗かつた。けれども彼れの目はまだそれより外の光に接した事がないのであつた。彼れの世界は甚だ小いさかつた。其の限界は卽ち其の產所の穴の四壁であつた。けれども彼はまだ外部の廣い世界を少しも知らないので、自分の生活の窮屈さに壓迫される事がなかつた。

然し彼はモウとうから、彼れの世界の一方の壁が他の壁と違つてゐる事を發見してゐた。それは卽ち洞穴の口であり、又光の源であつた。彼はまだ少しも自分の考へといふ考へがなく、少しも意識的の欲念がない頃から、其の一方の壁が他の壁と違ふ事を發見してゐた。彼れの目があかない、從つてまだそれを見ないズット前から、それは彼れに取つて不可抗の引力であつた。それから來る光りが彼れの閉ぢられた眼瞼を打つのであつた。そして彼れの兩眼と視神經とが震動して、暖かそうな色をした、妙に氣持のいゝ、小いさな火花を起すのであつた。彼れの身體の生命、彼れの身體の各纖維の生命、彼れの身體の實質であり、そして彼れの個的生命と別物である所の生命が、此の光にあこがれてゐたのであつた。そして丁度、植物の巧妙な化學作用が其の植物を太陽の方に押しやると同じように、其の生命が彼れの身體を光の方に押しやるのであつた。

彼は初めから、其の意識的生活が生れぬ以前、いつでも洞穴の口の方に這ひずるのであつた。そして其の事に於いては、彼れの兄弟も姉妹も全く同一であつた。其の期間には、彼等の中、一疋として、後ろの壁の暗い隅々に向つて這ひずる者はなかつた。彼等は植物であるかのように、光の方へ引かれてゐた。彼等を構成する、生命の化學作用が、生存の必要物として光を要

求したのであつた。そして彼等の幼い身體が、葡萄蔓の卷鬚のように、盲目的に且つ化學的に這ひずるのであつた。それから後になつて、彼等が銘々に個性を發達させ、銘々の衝動や慾望を意識するようになつた時、光の引力はいよいよ增大した。彼等はいつでも其の方に向つて這ひずりまはり、のたくりまはり、そしていつでも母親から追ひ返されるのであつた。

斯樣にして灰色の子狼は、自分の母が、柔しい、撫でさするような舌より外に、更に他の屬性を持つてゐる事を知つた。彼が執拗に光の方に這ひずる時、彼は自分を鋭どく突きのけて懲らし答める鼻を、母の中に發見した。次いで又、彼は自分を打ち倒して、加減をしながらコロコロと轉がしまはす母の手を發見した。かくて彼は危害といふ事を學んだ。そして其の末に、危害を避ける事を學んだ。第一には危害を受けないようにする事、第二には既にそれを受けた時、身をかわして跡しざる事を學んだ。凡そ是等の事は意識的行動であつて、即ち彼が世界に對する最初の推論の結果であつた。これより以前には、彼は只、機械的に光の方に這ひずると同じく、機械的に危害を避けてゐたのであつた。然るに、これより以後、彼は危害を認知して、それを避ける事になつた。

彼は獰猛なる狼であつた。彼れの兄弟姉妹も亦た同じであつた。それも其の筈、彼は食肉獸であつた。彼は鳥獸を殺し、鳥獸を食ふ種族から生れたものであつた。彼れの父も母も全く肉食で生活してゐた。彼れが最初のかよわい生命を以て吸つた所の其の乳は、即ち直接に肉から變形された乳であつた。そして今、生後一個月ばかりになり、目があいてから既に一週間ばかりになると、彼はもう自分で肉を食ひはじめてゐた。但し其肉は雌す狼が半ば消化させてから吐き出してやるのであつた。彼女の乳はもはや、生長する五疋の子供等の過大の要求に堪へないのであつた。

然し彼は又、兄弟中で最も獰猛な奴であつた。彼は兄弟中の誰よりも一層高い聲で、ゴロゴロといふ唸りを發してゐた。彼れの幼い荒び方は兄弟のに比べて遙かに烈しかつた。巧妙な足の打擊で他の子狼を轉がす術を知つたのも、彼が初めてであつた。又、他の子狼の耳をくわえて引きずりまはし、堅く食ひしばつた兩顎の間から唸り聲を發したのも、彼が初めてであつた。猶又、母親が子供等を洞穴の口から遠ざける時に、一番骨を折らせられたのも、確かに彼であつた。

此の灰色の子狼に對する光の魅力は日々に增大した。彼は絕えず洞穴の入口に向つて一ヤードばかりの冒險を試み、そして絕えず追ひ返されてゐた。但し彼はそれを入口とは知らなかつ

た。彼は入口といふ者、卽ち一の場所から他の場所に行く道といふ者を少しも知らなかつた。彼はまだ他の場所といふ者を知らないから、そこに行く道といふ者も固より知らなかつた。だから彼に取つては、洞穴の入口は一つの壁——光の壁であつた。外部の居住者が太陽に對すると同じように、彼は此の壁を自分の世界の太陽と思つてゐた。燈し火が蛾を引きつけるように、其の壁が彼を引きつけた。彼はいつでもそこに行かう行かうと努めてゐた。彼れの體内に、速かに伸びつゝある生命が、彼に迫つて絶えず其の光の壁に向はせるのであつた。彼れの體内の生命は、それが出口である事を知り、彼がそれを蹈ぐべき約束の道である事を知つてゐた。けれども彼自身は少しもそんな事を知つてゐなかつた。彼は全く外の世界のある事を知つてゐなかつた。

只、此の光の壁について一つ不思議な事があつた。彼れの父——（彼は既に自分の父を、此の世界に於ける今ひとりの居住者として、光に近く眠り又肉を持つて來る、母に似た一つの動物として見知つてゐた。）——其の父は白い向ふの壁の方に眞直に歩いて行つて、そして姿を隱すといふ遣方をするのであつた。灰色の子狼はそれを理解する事が出來なかつた。其の壁に近づく事は母が一度も許してくれなかつたけれども、彼は他の壁には近づいた事がある。そして自分の柔らかな鼻の先に手嚴しい撃衝を受けた事がある。鼻は隨分痛かつた。それで、まだ幾度もそういふ冒險をやつた後、彼はもう壁には構はない事にした。そして彼は別段の考へなしに、壁の中に姿を隱す事は只だ父の持前だと思つてゐた。乳と半こなれの肉とが母の持前であるのと同じように。

實際、灰色の子狼には物を考へる事が出來なかつた。少なくとも。人間のするような考へ方が出來なかつた。彼れの腦髓は只ボンヤリと働いてゐた。けれども彼れの斷定は、人間のやる斷定と同じように、正確であり明晰であつた。彼は事物を受け容れるのは、『何故』及び『何の爲』といふ事を問はない流儀であつた。それが實際上、分類の働きであつた。彼は或る事が何故に起つたかを、決て思ひわづらはなかつた。彼に取つては、それが如何にして起つたかといふ事で十分であつた。かくて幾度か後ろの壁に鼻をぶツつけた時、彼は只、自分は壁の中に姿を隱すわけに行かないといふ事を受け容れた。彼は又それと同じく、彼れの父は壁の中に姿を隱し得るといふ事を受け容れた。けれども彼は聊かたりとも、父と自分との差異に對して、其の理由を發見しようといふ要求に煩はれされなかつた。論理も物理も、彼れの心的構成の中に存在しなかつた。

雪地の諸動物の大部と同じく、彼は早くから饑餓を經驗した。肉の供給が止まつたばかりでなく、母の胸から最早や乳も出なくなつた時節が來た。初の間、子狼等は泣いたり、うめいたりしたが、時の大部分は眠つてゐた。けれども暫くすると、彼等はもう饑餓の昏睡に陷つてゐた。彼等の間にいさかひもなければ喧嘩もなかつた。荒れ狂ひもなければ唸り聲もなかつた。そして向ふの白い壁の方に行かうとする冒險も全く止んでしまつた。子狼等は眠つてしまつた。そして彼等の中に在る生命は、ちら／＼と明滅しつゝ、遂に全く消えてしまつた。

片目は一生懸命であつた。彼は遠く廣く歩きはつた。そして其の寂しい、みじめな巣に寐る事は極わづかであつた。雌す狼も子供等を殘しておいて、肉の搜索に出かけた。分娩後の當座片目は幾度もインド人のキャンプにあともどつて、其の兎わけを盜んでゐた。然し雪が解けて川が開けると共に、インド人のキャンプは移轉してしまひ、從つて供給の源が塞がれてしまつてゐた。

灰色の子狼が生命を回復して、再び向ふの白い壁に興味を持つようになつた時、彼れの世界の人口が減少してゐる事を發見した。彼れの妹が只つたひとり殘つて、他は悉く居たくなつてゐた。彼が段々丈夫になつて見ると、彼は獨りで遊ばねばならなかつた。妹はモウ頭も上げず、體も動かさなかつた。彼は今ま肉を食つて、其の小いさな體が肥えふとつて來たが、彼れの妹には其の食物がモウ遲かつたのであつた。彼女は皮にくるまれた小いさな骸骨になつて絕えず眠りつゞけ、生命の焰が段々弱く其の中に閃めいて、遂に全く消えてしまつた。

兎かくする中に、灰色の子狼は、父がもはや壁の中に現はれたり、隱れたり、又入口に眠つてゐたりするのを見なくなつた。それは、二度目の（先ほどは烈しくない）饑餓時代の末に起つた事であつた。雌す狼は何故に片目が戾つて來ないかを知つてゐたが、彼女は自分の見た事を灰色の子狼に知らせる方法がなかつた。彼女は自身でも肉を追うて、あの山猫の住んでゐた、左の川叉を登つて、そこで一日前の片目の足跡をつけて行つた。所が彼女は、其の足跡の末に於いて、彼（若しくは彼れの殘物）を見出だした。そこには烈しい戰ひのあつた證跡、又山猫が勝利を得て自分の巣に引揚げた證跡が多く殘つてゐた。雌す狼はそこを立去る前に、其の山猫の巣を見つけたが、どうも山猫が中に居るらしい樣子が見えたので、彼女はそれを襲擊する事を敢てしなかつた。

其後、雌す狼は左の川叉を避けて獵をするのであつた。山猫の巣には子猫の一組がゐるとを彼女は知つてゐた。そして又、

山猫が烈しい毒性な動物であつて、恐るべき戰鬪者である事を彼女は知つてゐた。若し五六疋の狼がゐるなら、山猫に泡を吹かせ毛を逆立てさせて、木の上に追ひあげる事は何んでもなかつた。けれども狼が一疋で山猫に出合ふ事は、殊に其の山猫が饑ゑた子猫を背後に控へてゐる場合は、全くそれと譯が違ふのであつた、

然し野性は野性であり、母性は母性である。母性は野性の有無に係はらず、常に猛烈な保護心を持つてゐる。從つて、離す狼が灰色の子狼の爲に、遂に左の川叉を登つて、岩の間の洞穴の巣を侵し、そして山猫の激怒を侵すべき時節が來るのであつた。

四　世界の壁

母親が狩獵の遠征の爲に洞穴を出はじめた頃、かの子狼は入口に近づく事を禁じられた其の律法をよく心得てゐた。此の律法が、母の鼻と足とに依つて、强制的に、そして幾度も幾度も、彼れの上に刻みつけられたばかりでなく、彼れの身內には又、恐怖の本能が發達しつゝあつた。彼は其の短かい穴居生活に於いて、未だ曾て恐怖すべき何者にも出會はなかつた。それでも恐怖は彼れの身內に在つた。それは幾千萬の生命を通して、遠かの祖先から彼に傳はつてゐるのであつた。彼は其の相續を、片目と、かの離す狼とから直接に受けたのであるが、其の總共は又、先祖代々の總ての狼を通してそれを傳へられたのであつた。恐怖！といふ此の野性の遺産は、如何なる動物も免かれる事の出來ない、又取りかへる事の出來ないものであつた。

斯くて灰色の子狼は、恐怖の何者であるかを知らないで、それで矢張り恐怖を知つてゐた。恐らく彼は、生活上の束縛の一つとしてそれを受け容れたであらう。生活上に種々な束縛のある事は、彼れの既に學んでゐた所である。饑は既によく知つてゐた。そして其の饑をいやす事が出來ない時に、彼は束縛を感じてゐた。洞穴の壁で堅く遮斷された事、母の鼻で烈しく押しつけられた事、母の足で散々になぐりつけられた[illegible]の饑饉で饑に苦しんだ事、それらに依つて彼は、此の世界が自由ばかりでないといふ事、生命には種々の制限があり束縛がある事を深く感銘されてゐた。此の制限と束縛が即ち律法であつた。そしてれを遵奉する事が即ち危害を免かれ幸福を得る所以であつた。

彼は此の問題を、こんな人間式で推論したのではなかつた。彼は只、害になる物と害にならぬ物とを類別した。そして其の類別の後、生の滿足と報償とを享樂せんが爲に、害になる物（即ち諸種の制限と束縛）を避けた。

斯樣にして彼は、母から與へられた律法を遵奉し、又恐怖と

らへて、只ジット靜かにしてゐた。

或る時、目をさましてゐると、彼は白い壁の爲に變な物音を聞いた。彼はそれが大鼬であつて、それが自分の意氣込で身震ひしつゝ、穴の外に立つて注意ふかく中の物を嗅ぎわけてゐるのだとは知らなかつた。彼は只、其の嗅き音が變であつて、今までの分類の中に無い物であつて、從つて不思議な恐ろしい物である事を知つてゐた。其の不思議といふ事が即ち恐怖を構成する主な要素の一つであつた。

毛が灰色の子狼の脊は逆立つた。然しそれは沈默の中に逆立つた。此の嗅ぎ音を立てゝゐる者が、毛を逆立てゝ對すべき者である事を、彼はどうして知つたのであつたか。それは決して彼れの知識から生れたのではなかつた。それは只、彼れの體内に在る恐怖の發露であつて、其の恐怖は彼れの生活上、如何ともする事の出來ないものであつた。然るに恐怖は又他の本能、即ち潜伏の本能を伴なつてゐた。彼は恐怖に震へてゐた[illegible]。それでも彼は身動きをせず、音を立てず凍りついたように[illegible]押しの[illegible]

ら[illegible]猛烈な恐怖を我が子に浴せかけた。そして子狼は、何か知らんが大きな危害を免かれた事を感じた。

然るに子狼の體内に他の諸勢力が働いてゐた。それの最大なる者は成長であつた。本能と律法とは彼に服從を要求した。然し成長は彼に反抗を要求した。母と恐怖とは彼を白い壁から遠ざけた。然るに成長は生命である。そして生命はいつでも光に向つて進むものである。されば彼れの體内に高まりつゝある、――彼が呑みこむ肉の一口と共に、彼が吸ひこむ空氣の一息と共に高まりつゝある、其の生命の瀬を堰きとめる事は、どうしても出來ないのであつた。或日遂に、恐怖と服從とが生命の迸りの爲に拂ひのけられた。そして子狼は入口の方にノソノソと這ひだして行つた。

彼が從來經驗した他の壁とは違つて、此の壁は彼が近づくと共に後しざるように思はれた。彼が其の柔らかな小さい鼻を[illegible]めしに前の方に突きだして見ても、それにブツつかる堅い表面[illegible]かつた。壁の實質は光と同じく、透きとほり得べく、[illegible]物の條件は、彼れの眼

中には形體として映じたのであるから、彼は壁と思はれた物の中にはいり、そしてそれを構成する實質の中につかつたわけであつた。

然るに驚くべし、彼は其の實體の中を泳ひまはつてゐた。そして光は益々明るくなつて來た。恐怖は彼を跡戻らせようとしたが、成長は彼を前に押しやつた。忽ちにして彼は洞穴の口に出てゐた。彼は壁の中にはいつてゐると思つて居たのに、其の壁は忽ちにして彼れの前方なる、測る可らざる遠距離に飛びのいた。光は痛いほど明るくなつてゐた。彼は目まひがした。彼は又、此の急激な驚くべき空間の擴大に依つてフラフラとした。彼れの目は自働的に、其の明るさに對して調節を爲し、外物の増大した距離に適合すべく其の焦點を合せた。最初、壁は彼れの視界の外に飛び去つたのであつたが、今ま彼は再びそれを見る事が出來た。然しそれは甚だしい遠方に在つた。そして又、其の形狀が變つてゐた。今ではそれは雜色の壁で、流れを縁取つてゐる樹木、樹木の上に聳えてゐる向ふの山、及び其の山の上に高まつてゐる青空から成立つてゐた。

大なる恐怖が彼を襲うて來た。餘りに恐ろしい不思議であつた。彼は洞穴のふちにしやがんで其の世界を眺めてゐた。彼は怖くて堪らなかつた。彼れの知らない不可思議物は卽ち彼れの敵であつた。彼れの毛は背筋に沿うて直立した。彼れの唇は烈しい威嚇の唸りを發しようとして、ピク／＼と震へてゐた。彼は其の弱小と驚愕との中から、此の廣い全世界に對して挑戰を試みた。

何事も起らなかつた。彼は眺めつゞけてゐた。そして面白さに唸る事を忘れてしまつた。ついでに怖い事も忘れてしまつた。こゝ暫く、恐怖が成長の爲に押しのけられた。そして成長が好奇心といふ外貌を着けてゐた。彼は漸く近い處の外物を認めはじめた。卽ち太陽に反射してゐる　川の開けた部分。傾斜地の麓に立つてゐる、雪折のした松の木。それから、彼がしやがんでゐる其の洞穴のふちの　僅か二フイートばかり下まで高まつて來てそこで止まつてゐる其の傾斜地自身。

所が、灰色の子狼は其の時まで平面の地盤にばかり住んでゐた。彼はまだ落ちる事の危害を經驗してゐなかつた。そもそも落ちるといふ事を知らなかつた。それで彼は空中に向つて大膽に歩みだした。彼れの後足はまだ穴のふちに殘つてゐたので、彼は逆樣になつて前方に落ちた。地は烈しい打擊を彼れの鼻に與へて、彼を泣かせた。それから彼はコロコロコロと傾斜面を轉かりだした。彼は恐怖狼狽の極に達した。不可思議物が遂に彼を捕へたのであつた。それは無殘にも彼を引つ摑んで、何か

恐ろしい危害を彼の上に加へようとするのであつた。成長は今や恐怖の爲に抑しつけられて、彼は只だ怯氣のついた子狼としてキヤンキヤンと叫んでゐた。

此の不可思議物が一體どんな恐ろしい危害を加へるとも分らないので、彼は只だ仕切りなしに泣き叫んでゐた。此の場合は不可思議物が直ぐそばに潜んでゐる時、凍りついたような恐怖の狀態で、ジツトしやがんでゐるのとは、譯が違ふのであつた。今は不可思議物が既にシツカリと彼を捕へてゐるのであつた。沈默に何んの効能もない。それに、今ま彼が襲へてゐるのは、未來に對する恐怖ではなく、現在の怖さ恐ろしさであつた。

然るに傾斜は次第に緩かになり、そして其の麓には草が生へてゐた。そこで彼は轉がりのハズミを失つた。それでいよいよ彼れの體が止まつた時、彼は又一つ最後の悲鳴を擧げ、そして更に長いうめくような泣聲を放した。それから彼は如何にも當り前の事らしく、既にこれまでの生涯に千たびも化粧をしたかのように、今ま自分の體をよごしてゐる其の土を嘗め取りはじめた。

それが終つてから、彼は座り直してアタリを見まはした。人間が初めて地球から火星に上陸した時も、恐らくこんな樣子であらう。子狼は世界の壁を踏み破つた。不可思議物は彼を放してくれた。そして彼は何んの怪我もなくてこゝに居るのであつた。然し初めて火星に着いた人間は、此の子狼ほどに新奇の感を經驗しなかつたであらう。子狼は今、何等の先行知識もなく、斯ういふ物が存在してゐるといふ何等の豫告も受けないで、忽然として全く新らしい世界の探險者になつてゐるのであつた。

所で、恐ろしい不可思議物は既に彼を放してゐたので、彼は其の不可思議物の恐ろしい事を忘れてしまつた。彼は只だ自分のまはりにある總ての物の新奇のみ感じてゐた。彼は自分の下にある草、ツイ向ふあるに苺の木、それから木立の中の空地のふちに立つてゐる雪枯の松の幹などを點檢した。其の幹の根を走りまはつてゐた一疋の栗鼠がフト彼れの眞前にやつて來たので彼は大いに驚いた。彼は腹這ひになつて唸りだした。然るに栗鼠も同じようにビツクリした。彼は木に駈け登つて、其の安全な位置から獰猛な齒ぎしりを投げ返した。

これが子狼の勇氣を助長した。次に出會つた啄木鳥にもビツクリはしたが、それでも彼は自信を以て其の道を進んで行つた。彼れの自信はそれほど強くなつてゐたので、ムーズ鳥が生意氣に彼れの前にヒヨコヒヨコと出て來た時、彼は戯れに足を

差し出してそれにからかつた。すると其の結果は、彼れの鼻の頭に於ける烈しいツツつきとなつたので、彼は縮こまつてキャンキャンと泣きだした。其の物音にムーズ鳥もしたたか驚いて、早速飛び立つて逃げてしまつた。

斯ういふ事の間に子狼は學びつゝあつた。彼れの朦朧とした小いさい心が既に無意識の分類をやつてゐた。即ち、世界には生きた物と、生きてゐない物とがある。そして生きた物に對しては用心をしなければならない。生きてゐない物はいつも一つ處にジツトしてゐるが、生きた物は動きまはる。從つて何をやりだすか分らない。生きた物に豫期し得る事は、こちらの豫期しない事である。彼はそれに對して準備をしなければならない。

彼は頗る不器用な恰好で歩きまはつた。藪に踏みこんだり、色々な物にブツつかつたりした。遙かの向ふにあると思つた小枝が、次の瞬間には彼れの鼻を打つたり、脇腹を引つかいたりした。地面には種々の凸凹があつた。彼は屢々足を踏みこみすぎて鼻を物にブツつけた。又屢々踏みこみが足りないで足を物にブツつけた。それから又、小石や石ころを踏んだ時、それが足の下で轉げるのを見た。そんな事からして彼は、生きてゐない物でも、洞穴の中とは違つて、皆が皆な同じような靜止の狀態を保つてゐるものでない事を知つた。又、生きてゐない物の中で、小いさい物は大きい物に比べて、落ちたり轉げたりしやすいといふ事を知つた。兎にかく一つのシクジリ每に、彼は學問をしてゐた。段々長く歩く中に、段々良く歩きだした。彼は自分を物事に適應させつゝあつた。自分の筋肉の運動を考へ、自分の體力の限度を知り、外物と外物との間、及び外物と自らとの間の距離を測る事などを學びつゝあつた。

彼れの初旅は幸運であつた。肉の狩獵者として生れた彼は(自分ではそれを知らなかつたけれども)、初めて世の中に出ると其まま自分の洞穴の直ぐ外で肉に出くわした。ほんのまぐれ當りではあつたが、彼はフト巧みに隱されたタルミガンの巢にブツつかつた。彼は其の中に落ちこんだのであつた。彼は倒れた松の木の幹に沿うて歩かうと試みてゐた時、其の腐れた木の皮が彼れの足の下で崩れこんだ。彼は失望の泣聲を立てながら、彎曲した下り坂を轉げ落ち、小藪の茂みの中を突きぬいて、其の藪の眞底の地の上の、タルミガンの雛の七疋ゐる其の眞中に落ついた。

雛共が騒きたてたので、初めは彼もビツクリした。けれども直ぐに彼等が甚だ小いさいのを見て、大膽になつて來た。彼等は動いてゐた。彼が其の一疋の上に足を置くと、それの運動が

増進した。それが此には頗る面白く感じられた。彼はそれを嗅いで見た。口にくわえて見た。すると、それがもがきだして、彼れの舌をくすぐつた。同時に彼は飢の感じを覚えた。彼れの兩顎がシツカリと締つた。柔かい骨がポリポリ砕けて、暖かい血が口の中に流れた。其の味は頗る良かつた。これが即ち母親が吳れたのと同じ肉であつた。只、それは自分の歯の間で生きてゐるだけ、母の吳れたのよりも一層良かつた。それで彼は其タルミガンを食つた。彼は猶ほ引續いて其の雛の全部を食ひ盡した。それから彼は、母親がしたのと全く同じように、自分の唇を舐めた。そして藪の中から這ひだしはじめた。

　彼は鳥の羽の旋風に出くはした。彼は其の旋風の突撃と、怒翼の毆打とを受けて、狼狽して目がくらんでしまつた。頭を足の間に隠して泣き叫んでゐた。襲撃はいよいよ増大した。母親のタルミガンが荒れ狂うてゐる　であつた。漸くにして彼も亦唸りだした。彼は唸りつゝ起きあがつて、足を以て頬を打ちはじめた。彼は其の幼ない歯を一つの翼に嚙みこんで、グングンと引きずり引つ張つた。タルミガンは身をもがいて戰ひつゝ、片方の翼で盛んに打撃を浴せかけた。これは彼れの初陣であつた。彼はのぼせてゐた。彼は全く不可思議物を忘れてしまつた。彼は最早や何物をも恐れなかつた。彼は今、自分に襲つてかゝる生きた物を引き裂きつゝ戰つてゐるのであつた。況んや、其の生きた物は食肉であつた。殺慾が彼れの身を捕へてゐた。彼は今の先、小いさな生きた物を殺した。そして今度は大きな生きた物を殺さうとしてゐるのであつた。彼は嬉しいといふ事を知るには、餘りに忙がしく餘りに嬉しかつた。彼は此の珍らしい、そしてこれまで知つた事よりは一層大きな仕　に、熱中し狂喜してゐた。

　彼は翼をくわえつゞけて、堅く嚙みしめた歯の間で唸つてゐた。タルミガンは藪の中から彼を引きずりだした。そして彼女が向を變へて、藪の蔭に彼を引きずり返さうとした時、今度は彼が彼女を廣場の方に引つ張りだした。其の間、彼女は絶えず叫びを發して片方の翼で打撃を續け、羽根は雪のように散亂してゐた。彼れの昂奮は絶頂に達してゐた。狼族の戰鬪の血が悉く彼れの體内に湧き出で、彼れの全身に漲つてゐた。彼はまだ知らなかつたけれども、これが即ち狼の生活であつた。彼は世界に於ける彼自身の意義を覺りつゝあつた。彼は、自分が其の爲に作られた事――即ち肉を殺す事、及びそれを殺す爲に戰ふ事――を爲しつゝあつた。彼は自己の生存を是證しつゝあつた。それが生命の爲し得る最大事である。生命は只だ自己の負荷された事を究極まで行ふ時、眞に其の絶頂に到達するものであ

る。

暫くしてタルミガンは其モガキをやめた。彼は猶ほ彼女の翼をくわえてゐた。そして兩方が地の上に仆れて互ひに顔を見合せた。彼は猛烈に威嚇の唸りを發しようとした。彼女は彼れの鼻を啄いた。其の啄きは、これまでの冒險にも似ず、今は大變に痛かつた。彼はしよげたが、それでも矢張り食ひついてゐた。彼女は幾度も幾度も彼を啄いた。彼はしよげる所を通りこして、泣きだした。彼は彼女を避けようとしたが、其の翼をくわえてゐるので、自分が後しざると共に彼女を引きずつて行く事になるのを忘れてゐた。彼れの鼻はむごたらしくも雨の降るように啄かれた。戰鬪の氣が漸く引潮になつて來た。彼は敵を放して尻尾をそちに向け、不名譽の退却を爲しつゝ廣場を横ぎつて駈けだした。

彼は廣場の向ひ側の藪のふちに寢ころんで、舌を吐きだし、體を波うたせて休息した。鼻は矢張り痛むので、彼は猶ほ泣きつゞけてゐた。所がそうして寢てゐる中、急に何か恐ろしい物が襲つて來たといふ感じがした。不可思議物が有らゆる脅威を以て彼れの上に迫つて來た。彼は本能的に身を縮めて藪蔭に逃げ込んだ。丁度その時、一陣の風が彼をあほつて、大きな翼のある物體が氣味わるく空中を掠めて、そして靜かに行き過ぎた。鷹が青空から舞ひさがつて、あぶない所で彼を逸したのであつた。

彼が此の恐ろしさからヤツト回復して、藪の中からコワゴワ覗いて見ると、タルミガンは廣場の向ひ側で掠奪された巣の中から飛びだして來た。彼女は其の哀傷の爲に、空のハタメキに注意を拂ふ事を忘れてゐた。然し子狼はそれを見た。そしてそれが彼れの爲に警告であり教訓であつた。即ち鷹の敏捷に舞ひさがり、地面をスレスレに掠めて行く其の體のこなし、タルミガンの體に打ちこまれた其の爪、タルミガンの苦悶と恐怖の啼き叫び、そしてタルミガンを浚つて青空に舞ひ登る鷹の姿。

稍や暫くして子狼は其の隱れがを出た。彼は多くの事を學んでゐた。生きた物は即ち肉であつた。それは食べる物であつた。然し生きた物の大きな奴は、自分に危害を與へる者であつた。だからタルミガンの雛のような小さな生きた物を食つて、タルミガンの親鳥のような大きな生きた物は放して置く方がよいのであつた。けれども彼は又、少しく野心のきざしを感じた。あのタルミガンの親鳥と今一度戰つて見たいといふ内心の慾望を感じた。然るに惜しいかな、鷹が彼女を浚つてしまつた。然し外にもタルミガンは居る筈であつた。彼はこれから行つて探して見ようと思つた。

彼は傾斜の緩かな岸を下つて川ばたに出た。彼はまだ水を見た事がなかつた。足場は大丈夫らしかつた。表面の凸凹もなかつた。彼は大膽に其の上に踏みだして落ちこんだ。そして恐怖の叫を擧げつゝ不可思議物に包まれてしまつた。それは冷かつた。彼はハツトして急に息を吸ひこんだ。平生ならば、息を吸ひこめば空氣が肺の中にはいるのだが、今は水がはいつて來た。其の窒息の感じは死の苦しみの如くであつた。彼に取つては、それは正に死を意味してゐた。彼はハツキリした死の智識を持つてゐなかつたが、總ての野生の動物と同じく、死の本能を有してゐた。死は危害の最大なる者として彼に面してゐた。死は不可思議物の根本であつた、不可思議物の總ての恐ろしさの合計であつた。それは彼に對して起り得べき、最後の絶頂の思案し得べからざる破滅であつた。彼はそれについて何事をも知らず、只それについて有らゆる事を恐れてゐた。

彼は水面に浮み出た。すると氣持のいゝ空氣が彼れの開いた口の中にはいつて來た。彼は再び沈まなかつた。彼は恰かもそれが多年確立した習慣であるかのように、四つ足で水を搔いて泳ぎだした。近い方の岸は僅かに一ヤードばかりの處にあつた。然し彼はそれに脊中を向けて浮みあがつたのであつた。從つて彼が先づ目を向けたのは向ふ岸で、彼は直ちにそれに向つて泳ぎだした。其の川は小いさな流れであつたが、そこの淀みは二十フィートばかりの幅さになつてゐた。

其の渡りの中程で、早瀬が子狼を浚つて下流の方へ押し流した。彼は淀みの末の小瀧の中に卷きこまれた。そこではモウ迚も泳ぐ事が出來なかつた。靜かな水が急に激怒してゐた。彼は、或時は沈み、或時は浮びあがつてゐた。そして始終、身體を激動されて、或はグルグルと轉がし廻はされ、或は岩に叩きつけられた。彼れの行程は泣き叫びの連續であつて、それに依つて彼れの出くわした岩の數が擧證されたかも知れない。

瀧の下には第二の淀みがあつた。そこで彼は渦卷に捕へられて、靜かに岸の方に運ばれ、又靜かに小岩の床に揺り上げられた。彼は狂氣のように水の中から這ひあがつて打ち仆れた。彼は世の中の事について更に多くを學んだ。水は生きてゐなかつた。けれどもそれは動いた。又水は地と同じように堅く見えてゐたが、實は少しも堅くなかつた。物は必ずしも外觀のとほりでないといふのが彼れの結論であつた。不可思議物に對する彼れの恐怖は遺傳性の疑惧であつたが、それが今は經驗に依つて更に强められてゐた。これから以後、彼は事物の性質に關して、永久に其の外觀に對する疑惧を持たうと思つた。彼が事物に對して信を措くには、必ず先づ其の眞實を知らねばならぬと思つ

た。

今一つの冒險が、其の日、彼れの爲に運命づけられてゐた。彼は母といふ者が此の世界にある事を思ひだした。そして世界の一切の物よりも、母の方が懐かしいといふ感じが起つて來た。其の日の冒險の爲に、彼れの身體が疲れてゐたばかりでなく、彼れの小さい腦髓も同ぐく疲れてゐた。彼れの生涯の總ての日數を合せても、腦髓は此の一日間ほど烈しく働いてはゐなかつた。おまけに彼は眠むくなつてゐた。そこで彼は洞穴と母とを求むべく出發した。そして同時に、寂しさと心細さとが堪らないほど迫つて來るのを感じた。

　或る藪の間をたどつてゐる時、彼は一つの鋭どい威嚇的な叫び聲を聞いた。そして何か黄色い物が目の前に閃めくのを見た。それは鼬がすばしこく飛びはねて、逃げて行くのであつた。鼬は小いさい生きた物であるので、彼は少しも恐れなかつた。すると又、彼は自分の足元に、極めて小いさい――僅かに二三インチの長さの――生きた物のゐるのを見た。それは彼と同じように、母の仕付に背いて冒險に出かけてゐた子鼬であつた。子鼬は彼れの前から逃げようとした。彼は前足でそれを轉がした。子鼬は變な、ギシギシといふような聲を立てた。すると早速、黄色い閃めきが再び彼れの目の前に現はれた。彼は再びかの威嚇的の叫びを聞いた。そして同時に、自分の首の脇に猛烈な打撃を受けたと思ふと、親鼬の鋭どい齒が自分の肉を嚙み裂いてゐるのを感じた。

　彼がキヤンキヤンと泣き叫んで、あとしざりをしてゐる中、親鼬は自分の子の上に飛びついて、それを連れて近くの茂みに隱れてしまつた。彼女が彼れの首に與へた傷はまだ痛んでゐた。然し彼れの感情はそれよりも一層痛ましく傷つけられてゐたので、彼は尻を据えて情なさそうにうめいてゐた。あの親鼬はあんなに小いさくて、そしてあんなに獰猛であつた。鼬は其の大きさや重さの割合からすると、此の蠻地のあらゆる殺戮者の中で、最も勇猛で、最も執念ぶかく、最も恐るべき者である事は、彼の今後に學ぶべき所であつた。然し其の知識の一部分だけは、直ぐに彼れの者となつた。

　彼がまだうめいてゐる時、親鼬が再び現はれた。彼女は、既に子を安全な處に置いて來たので、今後は直ぐに彼を襲はなかつた。彼女は前よりも用心ぶかく彼に近づいて來た。それで彼は今初めて、彼女の細長い、蛇のような體と、其の眞直に持ちあげた、熱の籠つた、同じく蛇のような頭とを、つくづくと見る機會を得た。彼女の鋭い、威嚇する叫び聲が、彼れの脊筋の毛を逆立たせた。そして彼は彼女に向つて警告的の唸りを發し

た。彼女は段々に近づいて來た。彼の不熟練な目には見分けのつかない程の、素早い飛躍があつたと思ふと、其の細長い黄色い體は暫く彼れの眼界から消えてしまつた。すると次の瞬間には、彼女は彼の喉に飛びついて、彼れの毛と肉とに其の齒を埋めてゐた。

　初め彼は唸りを發して、戰はうとした。けれども彼はまだ子供であつた。此の日が世の中に出た最初の日であつた。彼れの唸りはウメキと變じ、彼れの戰ひは免れようとするモガキとなつた。鼬は決して其の齒を緩めようとしなかつた。彼女は食ひさがつたまゝで、彼れの生命の血の鼓動してゐる大動脈の處まで、其の齒を押し進めようと努めてゐた。鼬は血液の愛飲者で、而も生命其者の喉からそれを飲むのが、彼女の常に嗜みとする所であつた。

　若し此の時かの雌す狼が藪を押しわけて馳けつけなかつたら、灰色の子狼は死んでゐただらう。そして彼について書くべき何等の話も殘らなかつたであらう。鼬は子狼を放して雌す狼の喉に飛びついたが、遣り損じて僅かに其の顎に食ひついた。雌す狼は鞭でも振るように自分の頭を振り散らし。遂に鼬を振り放して空中高く刎ねとばした。そしてそれがまだ空中にある間に雌す狼の兩顎は、既に其の細長い黄色い體をシッカリとくわえてゐた。そして鼬は其のパリパリと嚙みつける齒の間に死んでしまつた。

　子狼はこゝで又、母親の愛情の發作を經驗した。母親が彼を見つけだした其の喜びは、見つけだされた彼れの喜びよりも一層大きな者であるらしかつた。彼女は彼に鼻ずりをし、彼を撫でまわし、そして鼬の齒から受けた彼れの傷口を嘗めてやつた。それから親子二人で、其の血好の鼬を食つて、そして洞穴に歸つて寢た。

親愛なる讀者よ

一、六月號「赤瀾會の眞相」中、だいぶ抹殺された箇所が多く、從つて讀者に對しても、何とも申譯がない次第です、これと云ふのも編輯締切後に於て其筋より抹殺されたものであります、どうか讀者もかくの如き事情でありますから御許しを願ひます。

一、それから校正の行き屆かぬことです、すまぬ〳〵と心へつつも編輯を急ぐのと、校正子が新米であるために筆者の意思のあらぬ所をも無茶苦茶にしたこともあります、必ず氣をつけます、暫く讀者も筆者も許して下さい。

世界文藝全集

メレジュコフスキー著　米川正夫氏譯

第三編

神々の死

メレジュコフスキイは、露西亞文壇の耆宿。其作中最も聞えたるは、「神々の死」「神々の復活」「反基督」の三部作である。歐洲今日の文明を以て靈を主とする基督敎的精神と肉に傾く反基督敎的精神、希伯來主義と希臘主義との葛藤の間に産れたるものと考へた作者は、此三部作に於て人類の歷史を一貫した思潮の脈絡を示さうとしてゐる。即ち第一編「神々の死」は、基督敎に對して手套を投げたる偉大なる最初の挑戰者ジュリアン皇帝の苦悶の生涯を敍した高華雄渾の小說で、規模の大、描寫の精、古今東西の文壇に多く匹儔を見ない大作である。米川氏の原文譯は、既に定評あり、その無比の好評なるは、喋々を要せぬであらう。

四六版六百頁
總洋布最上製
價貳圓五拾錢
郵送料拾貳錢

(1)ボヴリイ夫人（改譯第六版）

フロオベル著　中村星湖氏譯　▼定價貳圓五拾錢（總洋布製 天金美本）▼郵送料十貳錢

(2)ギルヘルム・マイステル

ゲェテ著　中島清氏譯　▼定價貳圓五拾錢（總洋布製 天金美本）▼郵送料拾貳錢

久米正雄氏著

脚本集　阿武隈心中

菊池寛氏序　山本有三氏跋　▼定價金貳圓　▼郵送料拾錢

脚本家としての久米氏の傑作選集也。東奧の一寒村に起れる愛慾の葛藤を材として人間生活の暗面を剔抉せる『阿武隈心中』を始め、『牧場の兄弟』、『夏の日の戀』、『心中後日譚』、『梨の花』等何れも稀有の名篇を以て許されたるものゝみ也。兩家の序跋は讀者の感興一層ならむ。四六版四百四十頁、總布製の美本。

菊池寛氏著

脚本選集　藤十郎の戀（十一版）

定價八拾五錢　郵送料八錢

内容 ▼藤十郎の戀 ▼屋上の狂人 ▼父歸る ▼奇蹟 ▼敵討以上（恩讐の彼方へ）

東京牛込矢來三番地　振替東京一七四二番

新潮社

電話番町 八〇九番　八九九番　九三六番

□或る男　武者小路實篤

□狹い籠　エロシエンコ

□埋葬そのほか　葛西善藏



或る男

武者小路實篤

一

彼のことを一番よく知つてゐるのは恐らく自分であらう。自分は彼のことは殘らず知つてゐるはづだ。自分は彼自身だからである。しかし自分は記憶のいゝ方ではない、又正直に何にもかもかくことの出來る程の人間でもない。又自分の筆は何んでも表現が出來ると云ふわけにはゆかない。又彼は一個の人間であつて見れば、彼のことをのこらず自分が知るわけにはゆかない。しかし兎も角くかいて見やう。

「彼のことをかくのはいゝが、御自慢だけはよしてもらいたい」

自慢出來ることがあれば自慢したいが、しかし彼の今迄來た生活は至極無難で、色彩が乏しい。自分は彼のことを今かく氣はあまりないのだ。

「それなら書かなければいゝぢやないか」

書かないつもりでゐた。始めたのまれた時、自分はすぐ断つた。處が自分は今一つ他に仕事をしてゐるので、自分はその方に自分の想像力を全部つかはうと思つて

ゐるので、彼のこと以外に別に面白いものをかくわけにゆかないのだ。無理してまで書く必要はないかも知れないが、しかし書く約束をした以上はそれを果さないのは氣になる。たのまれるとつい承知がしたくなる。それに金と云ふもののあるに越したことのない今の身分では、つい何かかく氣になる。實際、たのまれてかくと云ふことがなかつたら、そして〆切りと云ふものがなかつたら、自分は未熟品や、速成品をつくらずにすむであらう。そして純粹な作品だけをかいてゆくわけにゆくだらう。しかし自分はたのまれてかいたもの、金のためにかいたもの、雜誌の爲にかいたものが全部だめなものとは思つてゐない。そしてたのまれなければ書けなかつた作品が、かけたことを喜んだこともある。しかし耻かしい作品を時々發表することがある。今後はさう云ふことはくり返したくないと思つてゐる。そのくせ今後も無理をしさうだ。自分は雜誌とか、金とか、批評家とかのゐない處でのんびり、靜かに仕事をしたいと思ふことがある。さうすれば、完成品だけを發表出來ると思ふ。自分のかきたいものだけをかくことが出來ると思ふ。そして亂作しないですむと思ふ。しかし自分は、今のまゝつゞけてゆくのもわるいと許りは思はない。そして今度、彼のことをかくことにしたら、それもわるくないと思つた。たゞ、まだ彼のことをかくにしては彼は未完成な男であり、彼の半生は變化のない、ごく單調に、生長したにすぎない。だから讀む人は氣の毒に思ふ。同時に雜誌にも彼にも氣の毒に思ふ。しかし兎も角くかくことにする。今迄の自分のかいたものと重復する處も多いと思ふが、それもその處に達した時の氣持で重復も恐れずにかく時もあらう。又はしよる時もあらう。第一自分は何處まで書く氣になれるか、それもわからない。自分が一番先にあきることを恐れる。しかし自分のことを饒舌ることは誰もあまりあきないものかも知れない。殊に自分は嫌ひではないやうだ。しかし自分はこゝで告白をしやうとは思はない。又事實に忠實になり切らうとも思はない。自由にかきいゝやうに、こゝに一人の人間を生かしてお目にかけられゝば、それで自分は滿足する。云ひ譯はこの位いに

二

彼は一八八五年五月十二日に東京の麹町元園町で生れた。彼は自分の生れた月日が、自分の好きな八、五、十二、と云ふ數からなりたち、そして八と五が重なつてゐることにある不明な喜びを感じてゐる。

何時頃に生れたかは、彼の母はまだ生てゐるが、彼は聞いたことはない。

たゞ彼の耳にはさんだ處によると、彼の父方の叔母（あとで話すが、父の叔父の子である）が不義したと云つてその夫にどなり込まれたので、その母にあたる祖母が氣絶した。それで母も心配して彼が生れたのは少し早すぎた、顏は紫色だつた、母の實母樣は心配して、かにばゞを顏にぬつた處へ、醫者が來て、困つたさうだ。

彼の兩親は公卿であつた。しかし二人とも妾腹であつた。父の實母は彼の二十二三までは生てゐた。彼等はそれを身體が大きいので大きお祖母さんとよんでゐた。前にかいた祖母と云ふのは、父の父の家の本妻で、その祖母には女の子切りないので父があとをついだ。この祖母の方を身體が小さいので、彼等は小さ祖母さんとよんでゐた。小さ祖母さんは公卿出であつた、大き祖母さんより一つ齡上だつたが、大き祖母さんの世話で、彼の家にかたづいて來たのださうで、正式な時は小さ祖母さんが上座に坐つてゐたが、普段は大き祖母さんの方が威張つてゐた。

話がとぶが、叔母と云ふのは、この小さ祖母さんが往來を歩いてゐて、或籍屋の前を通つたらその時死んだ籍屋の娘の人玉が小さ祖母さんの袂とか懷中とかに入つて出來たので、籍屋の娘の生れかはりだと彼達は話されてゐた。ともかく二三度離緣になつて、最後にはある小さい漢法醫の細君になつた。彼の傳記にはあまり出て來ないからついでにかく

が、彼はこの叔母を子供心に輕蔑はしてゐたかも知れないが厚意はもつてゐた。その醫者は新宿の遊廓のすぐそばに住んでゐて、子供の時其處に遊びに行つて物見臺にのぼると遊廓の蒲團がならべてほしてあるのを今でもぼんやり彼は思ひ出すことが出來る。

彼の母方の祖父は非常な嚴格な人間で、學者肌で、公卿華族の内で最も漢學にくわしく、本をよむことが何より好きで、書齋には一切人を入れないので、塵がたまつて、下駄はいて出入りしてゐたと彼は聞いてゐる。この祖父がなぜ妾をおいてゐたかと云ふと、それはその祖父と結婚するはずの女の人が白痴にちかいので、その實家、同じく公卿であつたから妾をつけてよこしたのださうで、その女なら自分の娘を大事にしてくれると云ふ信用をしてよこされたので、非常に快活な、忠實な働くことの好きな人であつた。藤島さんとか、よしさんとか皆によばれてゐた。

大き祖母さんの名は玉浦と云つた。藤島も玉浦も農家の出である。だから彼の血には兩方の祖母を通して百姓の血がかよつてゐると云へる。

彼の母は八人の子を生んで、彼はその末つ兒である。始めの五人は育たなかつた。小さ祖母さんや、大き祖母さんは之を母のせいにしてゐた。しかしそれは父の道樂が原因の病氣から來てゐるらしく、父がその病氣をなほしてから、あと三人子供が育つた。

そのかはり彼の父は彼の生れる時には、もう死病にとつかれてゐた。

三人の内一番上は女の子で伊嘉子と云つた。次ぎは男でKと云つた。彼の生れた時二人は叔父の處に邪魔になるのでやられてゐた。その時姉は六つで、兄は三つだつた。

姉の伊嘉子と云ふ名は母が姉をうむ時、藤島と一緒に伊香保に行つた。そしてその爲に姉が兎も角育つたと云ふので

伊嘉子と名づけた。當時汽車のない時分に伊香保に行つて、それから子供が育つやうになつたと云ふことは、伊香保ゆきの主張者だつた藤島の祖母さん（彼等は始め、この人を神田のお祖母さんと云ひ、あとでは三浦のお祖母さんとよんでゐたが）の一生一代の自慢で、彼等は何度その祖母から伊香保ゆきの話をきかされたか知れなかつた。「又始まつた」と皆笑つた。

大久保彦左衛門の「嶌の巣山」？のやうなものである。この時母の妹も出かけてそれから子供が出來るやうになつたのださうだから、祖母の自慢するのも無理はなかつた。

殊に彼の家では五人つづけて死んだ。小さ祖母さんや大き祖母さんはその度にがつかりすると同時に腹をたてた。そして母を逐ひ出して丈夫な子供の出來る妻を迎へたがつた。そして子供が出來たらしいと云ふと、また石塔が一つふへるのかと露骨に云つた。だから母や藤島にとつては今度又子供が死んだら自分達も死ぬ位の決心をしてゐた。そしてその決心の甲斐があつたのだ。藤島の自慢は其處から來てゐる。

實際彼の母は、何度も死ぬ覺悟をしたらしい。そして實家へ逃げて歸らうと思つたことも一度や二度、十度や二十度ではなかつたであらう。

しかしついに辛抱した。そして彼の同胞三人が生れた。

三

彼の父は病的の疳癪持だつたさうだ。頭は公卿の內で一二を爭そひ、公卿で最初に演說したのは彼の父であると母は云つてゐた。そして岩倉さんと一緒に西洋へ行つたので、いろ〳〵未來のことについても考へてゐた。そして父の云ふことは皆あたつてゐると母は云つてゐる。今に女中なぞはつかへない時がくると父が云つてゐたが、本當にさうだと母

はいつか云つてゐた。父の友は大概大臣になつてゐる、それで父が居れば大臣になつてゐるだらうと母は云つてゐる。

實際彼の父はいろ／＼のことをくわだつた。東北への鐵道をつくる發起人にもなり、華族會館をつくつたのも彼の父の主張だつたと彼は思つてゐる。しかし仕事が出來上ると何か不快なことが目につくので喧嘩してはやめてしまうのが癖らしかつた。彼も大きくなつて或日、古い反古の内から父が「それ哲人は何とかを愚ちよ」とか云ふ文句で、何か辭職した時の草稿を見たことがある。

しかし彼は父のことをあまりくわしくは知らない。父が死んだ時、彼は三つだつたから、何にも父については覺えてゐない。兄が少し覺えてゐるのが彼には羨やましかつた。彼は人間には兩親のあるものだと云ふことはずつとあとで知つた。學校へ入つた頃には、親は一人のもので、母だけのものと思つてゐた。父と云ふものゝ味は彼は知らない。彼はよく父の位牌の前に坐らせられた。毎朝父の位牌の前に丁寧に坐つてお辭儀をするのが仕事であつたが、父と云ふものは本當の意味ではわからなかつた。

よく母から「お父さんは今に青いお馬をもつて歸つていらつしやる」と云はれたことを覺えてゐるが、お父さんがなんだか自分にはわからなかつた。たゞ何となくなつかしいもので、その上、馬がほしいので、よく母に「いつお馬もつて歸つていらつしやるの」と聞いたことを今でも彼は思ひ出す。

しかし彼はそれを信じ切ることは出來なかつた、母や姉や兄を嘘つきとは思はなかつたが、何んだか信じられない夢の話のやうに思つてゐた。

四

父は子供を非常に愛した。死ぬ時でも、子供がさわいでゐるのを聞くのは父の一番のよろこびだつた。あまり子供達

がさわぐので母が叱ると、母は反つて父から叱られた。

彼は三つだつたので、何も知らずに、父の頭の慮を元氣よく歩いた。彼の兄はもう父の病氣を知つてゐた。それで靜かに歩いた。父は反つて兄の心づかいを氣にして、なぜ元氣に歩かないのだと云つたさうだ。

父は彼の兄を見て、「この子はわるくいつて大使にはなれる」と云つたさうだ。そして彼を見て、「この子をよく育てゝくれる人があつたらなー」と云つた。「さうしたらこの子は世界に一人と云ふ人間になるのだが」。

この言葉は三才の彼を見て死んでゆく彼の父が云つた言葉であつたが、彼の一生には大きな力を持つてゐる言葉である。彼が何となく運命を信じ、說くことの出來ないものゝ存在を信じるにも、この言葉は力があつた。彼に勇氣と決心を與へるにも役に立つた。この言葉は始め、彼を一番愛してゐた大き祖母さんの口から彼は聞かされた。彼が母にそれは本當かと聞いた時、母は彼の自惚れるのを聞いて嘘だと云つた。しかし彼が大きくなつた時、母は父のその言葉を彼に聞かせて、勇氣を起させた。

彼は父を嘘つきにはさせたくなかつたし、父の期待には背きたくなかつた。彼はそれを私かに得意にも思つた。しかし同時に大任を托されたものゝやうな氣がした。

五

彼の未來を豫言した最初の人が彼の父であつたならば、彼を教育した最初の最大の師は彼の母であつた。

彼の母は辛抱の權化のやうな女だつた。外は實に優しく、溫和しかつたが、內には誰にもまけない決心をもつてゐた。

父は死ぬ時に當時、三十五だつた母に云つた。「お前は死ぬ覺悟でゐてくれなければ家はたもてないし、子供は育たない」

母はその言葉を實行する決心をしてゐた。實際母なら死を恐れないで自分のすることは立派にやりとげられるだらうと彼は信じてゐる。事實、父が死ぬとまもなく、大叔父にあたる男が怒鳴り込んで、刀をぬいて母をおびやかし、「自分がこの家をつぐのが本當だから出てくれ」と云つた。

その時母は、おちついて「殺すなら、殺して下さい」と云つた。

その度胸のいいのには二人の祖母はおどろいたさうだ。「優しさうな顔して怖い人だ」と祖母達は批評したさうだ。

その時、そのことを聞いて彼の家の俥夫がすつかり怒つてとびこんで來て、「奥さんを殺すと云ふ奴は私が殺してやる」と云つたさうだ。

大叔父（と云つても父よりも齢下で彼等は猿樂町の叔父さんと云つて居た）はその見幕におどろいて、祖母達が俥夫をなだめて、その場はおさまつたさうだ。

いつか母と舊派の芝居のお家騒動を見た時、彼はその不自然におどろいてゐた時、母は「本當にあの通りだつた」と云つた。彼はそれを聞いておどろいた。あれも本當においては寫實だつたのだと思つた。

六

實際母が彼の家に來てからの苦心は一通りでなかつた。母は十六の齢に彼の家に來た。彼はあまり多くのことは知らない。しかも母が辛抱し切れないで、自殺しやうと思つたり、家出しやうと思つたりした氣持はよくわかつた。實際彼が人心がついてからも、彼は母が二人の祖母の間にはさまつてよはつて居たことを直接に彼は見た。

まして來たては、刀をぬいて母をおどかした大叔父も、彼が生れた時不義したと云はれた叔母も家に居た。まだ小さかつたが惡戯ははげしかつた。又母と同年の女の子も居た。

その間にたつて癇癪持の父に仕へた母は容易でなかつたことは察しがつく。

母と同年の女の子は、母がくるとまもなく死んだらしい。その時母もその人も同じ病氣にねてゐて、いつ死ぬかわからなかつた。一方が死んで母はたすかつたが、その一方が死んだ時、母はまだそのことを知らなかつた、母は熱にうかされてゐた、その時一羽の鳥が家にとび込んで來て、母の頭にとまつて羽ばたきして髪の毛をもつて行つた。それから母の病氣は目に見へてよくなつたさうだ。

之は鳥が巣をつくる爲に髪毛をぬすみに來たのであらう。しかし時が時であり、又家のなかに入つて人の頭にとまるなぞと云ふことは滅多にないことで、彼の母はそのことを不思議に思つた。又その女の人が新しくつくつた着物をとりに母のねてゐる室の箪笥へとりに來てそれを墓場のある處へ持つて行つた夢を母は見た。そしてなほつた時に墓に行つたら、幻で見たのとまるで同じだつたさうだ。

彼はそんな話と、母が特別に毛虫と地震が嫌ひで、毛虫がゐると彼の兄弟はそつと母の氣がつかないやうにとりすてることにしてゐる位なのに、彼の大叔父が毛虫を身體中にくつつけて母を追ひまわしたことは忘れられなかつた。その時祖母達は母に、子供をよろこばせる爲につかまつてやれと云つて母の逃げまわるのを不親切のやうに非難した話とは忘れない。

七

彼が人心がついた時には、彼の家族は、母と、小さ祖母さんと、大き祖母さんと、彼の姉と、彼の兄と、彼との六人であつた。

しかし彼はその他、一人の家つきの祖母さんをかすかに覺えてゐた。

その人は將軍に仕へてゐたとか聞いてゐる。彼がその人について知つてゐるのは、その人がいつもねてゐたので、「よいよのお祖母さん」とよんだことゝ、その人が死んだ時、彼の庭にある一番大きな樅の木の下で姉達と遊んでゐたことを覺えてゐる。或は長屋の女の子とかも知れない。そして遊びを中止して、大事件のやうに祖母の方へ走けて行つたことを覺へて居るが、そのさきはまるで覺えてゐない。その人は大變おとなしい人だと聞いてゐる。

その他母が來た時は小さ祖母さんの夫の人が生てゐた。この人は大へん吝坊であつたさうだが人はよくつて、母を可愛がつてくれたさうだ。そして自分の妻の小さ祖母さんに頭があがらないので、影で「鬼ばゝあ」とよんでゐたと聞いてゐる。

この祖父の父（或は兄）は非常に意地がわるかつたさうで、御所で若い者を意地目たので、祖父が來たら仕返しやうと皆手ぐすねひいて待つて居たら、祖父があまりおとなしいので、皆力ぬけして、今度は父が來たら意地目やうと思つたら、父も皆に可愛がられる質で、とう〳〵意地目られずにすんだと、彼はいつか聞いたことを覺えてゐる。

彼の先祖にはその他、泥棒が居たさうで、先づ自分の家の藏に穴をあけてそれをぬすみ出したのを手はぢめに子分をおいて泥棒をしてゐたさうだ。彼は、先づ自分のものをぬすみ出したのが面白くつてその話を忘れずにゐる。

その他あまり大した人は居なかつた、一人和歌がうまくつて大臣になつた人が居るが、それは例外で彼の家は大臣になる資格はなかつた。その和歌の名人も、彼にはあまり興味はもてなかつた。彼が文學をやりだしてから、ある用で佐々木信綱さんが彼の處をたづねた歸りに、あなたの處では實隆さんのやうな人を出してゐるのだから、あなたもまけずに歌をやつたらどうですと冗談を云はれた時、彼は實隆さんでは始まらない、その位いなら文學なんかやるものかと心に思つたことがあつた。しかしその人の和歌がどんな價値があるのだか知らない。しかし生命があつたら、もう少しは

た和歌にすぎないと思つてゐる。

もう一人少しましな歌よみが居たさうだが彼は興味をもつことは出來なかつた。

八

彼が一番小さい時の記臆は、芝居へ家中で出かけた時、彼が鐵砲の音におどろいて泣いたので乳母が外へ負つて出た。その時負はれてゆきゝした兩側が板がこいになつてゐた、その板がこいだけを覺えてゐる。前後は想像でつけたしたので、本當におぼえてゐるのは、板がこいから日光がもれてゐる光景だけだ。

それから彼の母方の祖父が死ぬ少し前、大きな室で祖父から小刀のやうなものをもらつたことを覺へてゐる。子供に小刀もおかしいが、そんな氣がする。この祖父の死んだ時のこともごくかすかに覺えてゐる。この祖父は一人のこらずから貴族議院員に撰ばれたさうだが、まもなく死んだのだらうと思ふ。

一たいに彼は記臆のいゝ方の男ではなかつた。子供の時のことも覺えてゐるのは實に少ない、そして斷片的で、おどろいた瞬間が多い。そしてそれが可笑しく、その場所と一緒になつて覺えてゐる。神田の大火事の時も、母の實家がまるやけになつた報告を母のそばに居て聞いた時の廊下を覺えてゐる。

大久保の躑躅を大勢で見にいつて迷兒になつた時、母を待つて待ち切れなくなつて歩き出した處を覺えてゐる。そしてその時あはてゝ歩いた坂道を覺えてゐる。

九

その時のことは彼のはつ切り覺えてゐる最初の出來事の一つだ。

彼は母や兄や姉や、叔父や叔母や、從兄達と大勢一緒に[illegible]見にいつた。そんなに大勢で出かけたことは前後にないと云ひたい位なので五つか六つ、まだ小學校に入らない時分の彼は大よろびで、元氣だつた。しかし彼の記憶に殘つてゐるのは、大勢で歩いてゐた時と、彼が樺色の鸚鵡を見て珍らしく思つてそれを欲しがつた位のことだ。そして彼は母とある道傍の露店の前に立つてゐた。そして皆も待ちあはせしてゐた。彼の母はこの時、彼の兄や姉、八つと十一、或は九つと十二の兄や姉のくるのを待ち切れなくなつたのか、或は何か買ひものを思ひついたのか。

母は彼に其處にぢつとしてゐるやうに云ひつけて出かけていつた。彼は母のうしろ姿を見てゐたが、やがて母の姿が見へなくなつた。彼はその時別に不安を感じてはゐなかつた、見知らぬ人許りが大勢ぞろ／＼通るのを見てゐた。その內に母が段々戀しくなつた。そして段々心細くなつた。同時に彼は母の入つた家を見てゐたと思つた。それで待ち切れずに出かけていつた。そして其處に母を見出さなかつた時、彼はあはて出した。そして元へ歸るよりも、探し出した、そしてとう／＼歸る道を忘れてしまつた。彼は次ぎの瞬間には人流れの內に自分を見出した。そして段々あはて出し、心細くなつた。とう／＼泣きながら段々人の數のへつてゆく坂道をおりていつた。その時分にはもう「お母さん、お母さん」と云ひながら、わい／＼泣いてゐた。

その時一人の三四十位の男が彼をなだめた。そして彼の家を聞いた。そして俥をやとつて彼と一緒にのつて彼の家につれていつた。今迄泣いてゐた彼が家が見へると急に元氣になつて歌をうたいだしたと、その人があとで云つてゐたさうだが、彼はおぼへて居ない。

大き祖母さんは留守番してゐて、彼の迷兒になつたことと、それでつれて來たことをその人から聞いて大へんよろこんで禮を云つた。その人の名前や所をきいても中々云はなかつた。しまいにとう／＼祖母は聞いた、神田の人だと云ふこ

とを三十年あまりたつ今でも彼はおぼえてゐる。彼はその人を自分の恩人に思つて、その時のその人と祖母の話を尊敬して聞いてゐた。

彼は母姉の歸るのが遲いのを氣にしてゐた。すると姉とKの叔父（母の妹の夫）があはてゝとびこんで來た、そして二人は彼を見るとすつかりよろこんだ。十一、二の姉はすつかり元氣になつて、彼が番地をちやんと覺へてゐたことをほめて、そしてお母さんがきつと御褒美に樺の蹴鞠を買つて來て下さると云つた。彼はすつかり元氣になつて、叔父さんがあはてゝ彼のゐたことを報告に行つた、彼はそれを門まで送つていつて、あはてゝいそがして俥を走らせた叔父の俥が角でひつくり返つて叔父がおつこちたのを見た。しかし之は彼が本當に見たのか、それとも話で聞いて本當に見たやうな氣になつたのかわからない。門まで送つていつたと云ふ記憶は彼にはないのだ、たゞ叔父のおつこつた姿を見たことだけを覺えてゐる。その俥の傾いた所なぞも。

彼は大得意になつて母の歸るのを待つてゐた。それから一時間あまりたつて母と兄とが歸つて來た。彼は母を見るとすぐ、「蹴鞠は」と聞いた。

彼を見た母は心配が一時に怒りにかはつた。「それ處ですか、お前のおかげで今日、折角の皆さんのおたのしみがすつかり臺なしになつてしまつた。なぜ私が待つてゐろと云ふ處に待つてゐなかつたのです。」

彼は惡かつたと思つて、しよげて居た。彼の姉は仕切りと彼を辯護し、なぐさめてくれた。彼が見へたくなつたので皆があはてゝ、母が半狂氣のやうになつた話や、方々の交番に聞きに行つた話や、そして彼が泣いて歩いてゐるのを見たと云ふやうな話を彼は聞いた。

聞きにいつた交番はあの交番だらうなぞと彼はその時見た交番を思ひ出した。

その後彼の母は大久保にゆくのを嫌つた、その時の心配を思ひ出すのがいやなので。

その時、よろこんだ二人の祖母も、あはてたK叔父も彼の愛する姉も、もうとつくにこの世から去つてゐる。自分はその人達の幸福を望む。神田の彼をたすけた人は今どうしてゐるだらう。當時を思ふ度に彼はその恩人のことを思ひ出す。

十

その時分のことで彼の思ひ出すことは、彼が母や姉や兄と、猿樂町の叔父（大叔父）の處へゆく時、彼は始めつれてゆかれないことになつてゐたのをたのんで許しを得た。それでうれしいのであはてゝ自分の下駄を玄關の石段におかうとした。上から下駄をおとすことを知らずに、石段に置かうとして前こごみになつた拍子に、頭の重さで落ちて、石段の角で額を打つけた。血は隨分出た。彼は顔中繃帶されても猿樂町の叔父の處へ行くと云つて聞かなかつた。母からその話を聞いて叔父はよろこんでくれた。

彼は子供の時から非常に強情ばりで疳癪持だつた折れることを實に嫌つた。母は彼の父が疳癪持で折角仕事を乘氣で始めても、いつも大事な時に疳癪を起して駄目にしてしまうことを殘念に思つてゐた。それで彼の疳癪癖をなほす爲には母は隨分苦心した。

十一

彼の家族は前に云つたやうに六人だつた。

二人の祖母は家のことを考へないわけでもないが、二人は彼の兄よりも、叔母や、大叔父を愛してゐた。小さ祖母さんは自分の一人子の叔母を愛し、大き祖母さんは自分を唯一のたよりにしてゐる大叔父を愛してゐた。尤も小さ祖母さ

んは自分の子よりも彼の姉を愛し、大き祖母さんは大叔父よりも彼を愛してゐた。二人は母にあたる時だけ聯台してゐた。

二人は母を非難することを日常の仕事にしてゐるやうに見へた。しかし二人にとつても母は弱敵ではなかつた。表面は何處までも折れて出た。しかし家の爲にならないと思ふことは一歩もゆづらなかつた。

母は何處までも彼の兄を戸主として奉つた。兄は六つの時から一家の主人である。母も兄には仕へるやうにして見せた。そして祖母も兄には頭が上らないやうにした。だから祖母達は兄をよろこばなかつた。しかし一家を保つにはそれが必要だつた。祖母達をだまさうとした人達、利用しやうとした人達は可なりあつた。そして祖母達は利用されやすかつた。しかし母はそれにはのるはけにはゆかなかつた。手をかへ品をかへ、いろ〳〵の手段を要ひて來ても母は瞞されもしなければ、動かされもしなかつた。母は我が子の爲に決心してゐた。何と思はれ、何と云はれても子供の爲に耐えやうと決心してゐた。

三つと六つと九つの子供を自分一人で立派に育てゝゆき、そして僅かのきまつた收入だけで一家をさゝへてゆくのには母の決心が必要だつた。

彼の家にくる女中達はよく祖母達に泣かされて逃げていつた。彼の祖母達は人がわるいと云ふよりも、特別な性質をもつてゐた。二人とも惡口がうまかつた。小さ祖母さんと云ふ方は、母から母として尊敬されなければならない位置にゐた。しかしその方は、背がひくゝつて太つてゐた。そして自分が意地められてゐると云ふことを吹聽することが好きだつた。そして元園町の三人の有名な祖母さんの一人だつたさうで、お前の處の子僧の顔が氣に喰はないから、お前の所では何にも買つてやらないなぞと云ひにわざ〳〵出かける質であつた。貧乏な粗末な風をすることが好きで、買ひ喰

ひをする爲に、彼の家に昔奉公してゐた女が、大きな藥屋の嫁になつてゐたので、その藥屋のセンジ藥を入れる袋を縫ふことを内職にしてゐた。一兩の小パンを一圓で紙くず屋に賣つたことなぞもあつた。そしてよく紙屑屋を自分でよんで來て賣つて、それで買ひ喰ひをすることがすきであつた。

彼等は母からはお土産をもらつたことはないが、祖母達からはよくお土産に、露店で賣つてゐる菓子をもらつてよろこんで食つた。

大き祖母さんの方はがみ／＼怒りつける方で、小さ祖母さんの方はちく／＼いや味を云ふことが名人だつた。

しかし二人とも子供にはあまかつた。彼は子供の時、よくこたつにあたつてゐる大き祖母さんの處に出かけて、膝を立てゝねてもらつて、その膝の上で器械の龜の子をやつたり、こたつのやぐらからとびおりて見せたりした。

しかし二人はどんなに怒つても母の口には叶はないで、いつも母の方がだだと思はされて引こむことになつてゐたが、二人はそれをよろこんでゐるのではなかつた。

子供は三人聯合して隱然と母の加勢をしてゐた。しかし祖母達に可愛がられることはよろこんでゐた。彼は祖母達の缺點は知つてゐるが、二人を憎むことは出來なかつた。そして死んだあと夢に見るとよく涙ぐみ、又泣いた。祖母達は彼の二十二三までは生てゐた。

母は祖母達の皮肉や、小言や、露骨な惡口を四十年の間耐えた。このことは母の兄弟には人間わざには見へなかつた。

彼の母には四人の兄弟があつた。兄弟と云つても、三人は妹で、一人の男は弟だつた。

彼は痔瘻持の所は父から受けついだ。そして辛抱強い性質は母からうけついだ。この二つの矛盾が彼の性質をかたちづくつたことは、彼には仕合せに思へた。又仕事をくわだてる性質は父からうけ、それを執念深くもちこたへる力は母

から受けてゐる。

十二

彼の父には進取の氣があつた。たへず何かくわだて、將來のことを考へてゐた。彼の母はそれを不安心がつた。しかし父のくわだてたことは殆んどすべて成功したが、その時には父はもうその仕事からはなれて、又ちがうことを考へてゐた。

母は實に運命に從順だつた、新しいことをくわだてることは母にはむかなかつた。母は與へられた運命には甘受する驚くべき力をもつてゐたが、運命がくるまでは恐れた。

彼の性質で常に何かしたがるのは父から來てゐる、しかし内氣で、臆病で、遠慮して、そのくせ圖々しく、辛抱強く、根氣のいゝのは母から來てゐる。そして一こくな質は母かたの祖父から來てゐる。

彼は子供の時から强情ばりで、よく母をもてあまさした。

そして彼は侮辱と嘘には敏感だつた。

彼がまだうがいをちやんとつかへなかつた時だつた。齢は覺えてゐないが、六つか七つ位いだつたと思ふ。或は生來非常に不器用に生れついてゐるのだから、もつと上だつたかも知れない。何しろ彼がうがいの出來ない時に、喉をわるくした。そして喉をやく必要があつた。彼の母は喉をやく時に、うがいがうまく出來ないのを心配した。そして喉をやかれるのをいやがつてゐるのを利用して、それを早く覺えさそうと思つて、うがいがうまく出來るやうになつたら喉はやかないでもすむと云つた。

明日迄とか、明後日までにとか、日がきめられてゐた、彼は喉をやかれるのがいやで、熱心にうがいの稽古した。そ

して母に云はれてゐる迄にうがいが出來るやうになつて、得意になつて母にして見せた。母はうまいと云つてほめた。

するとまもなく醫者が來た。

彼は喉はやかれずにすむと信じてゐたので安心して口開いて見せた。その瞬間に瞞し打ちに喉をやかれた。彼は非常に侮辱された氣がした、許せない嘘を母がついたと思つた。正直にたのんでくれたつて、うがい位やつて見せる、瞞すのはひどいと思つた。それから十何年たつたあとまで、彼はその時のことを思ふと腹を立てた。「お母さんは嘘つきだ」と思つた。

それは母の愛から出たものだ、しかし自分を信じてくれないのが腹をたてた。

彼は強情はり出すときりがなかつた。母はその癖をなほす爲に、決してさう云ふ時にはなだめやうとはしなかつた。いつまでも泣かしておいた。その時、間にたつて心配する役は、彼より六つ齢上の姉の仕事であつた。兩方が折れなかつた。母は自分の方から折れると癖になると思つてゐた。それで間に人がたつて彼のかわりにあやまるまでは許さなかつた。彼は又あやまるのを絶對にいやがつた。

少し大きくなつてから、彼はよく兄と議論をした。彼があまりひつつこいので兄の方があきてしまふのが常だつた。さう云ふ時母は兄には負けておけとそつと注意したが、彼は聞かなかつた。

彼は弱虫だつたが、そしてよく泣く子供だつたが、一度泣くと怖いもの知らずになつた。皆そうなると手がつけられないので、さはらないやうにした。

十三

彼の兄は學問がよく出來た。學校でいつも一番だつた。學校は學習院だつたが、學習院全體でもぬきんでてゐた。し

かし彼は五番から十番の間にゐた。

　學習院に入る時は彼は隨分よろこんだ。自分も兄と同じやうに大きくなつて學校に入れるのがうれしかつた。そして學習院の初等科（小學校）は背嚢を背負つてかようのだつた。それで、兄に背嚢を背負つては學校まであるけないだらうとからかはれたので、學校の道だけのながさを兄におそはつて背嚢しよつて根氣よく歩いて見たりした。彼は學習院に入る前にもよく、學校のお祭りに出かけた。そしていろ／＼の餘興や、學生達のさはぐのを見るのをよろこんだ。そして自分も早く大きくなつて學習院へゆきたいものだと思つてゐた。そしてとう／＼その時が來たので彼はよろこんだ。

　しかし學校へ行つて見ると面白いこと許りではなかつた。

　學問の方は母が熱心なので、彼は學校へ行つてむづかしいとは思はなかつた。しかし身體が丈夫でなく、運動が下手で、遊ぶことのまづい、友達づきあいの嫌ひな彼には學校は面白くなかつた。

　殊に上級に一人と、同級に一人、意地のわるい子供がゐて、廊下で出くはすと通ふせん棒したり、からかつたり、おどかしたりした。彼はそれに腕力で勝つことはとても出來なかつた。それで或時なぞは自殺して、幽靈になつてやつけてやらうかと眞面目に考へたこともあつた。彼は子供の時に、さう樂しい記憶はない。彼は學校へは病氣の他は休まずに出かけたが、それは義務だからであつた。

　その時分に親友らしい親友は一人ももつてゐなかつた。彼は學校の授業がすむとまつすぐに自分の家に歸つた。

十四

　彼は勉強を嫌つた。同じ處を二度よむことは彼にはつまらなく思へた。もう知つてしなつたことをくり返すのは、子

供の知識慾に反してゐるやうに彼には思へる。彼は從弟と一緒に自分の家の書生に敎へてもらつてゐたが彼は少し勉強するとすぐあきた。書とりなぞは殊に嫌ひだつた。彼の嫌ひな課目は、體操と、圖畫と、作文と、習字と、唱歌だつた。好きなのは算術と、讀方だつたが、それも新しくおそはることが好きだつたので、その他の時はよそ見したり、他のことを考へたりさきの方をよんだりしてゐた。

彼はよく歯がわるくつて、大き祖母さんにつれられてよく歯醫者に出かけた。その時、大き祖母さんに本屋で小波のおとぎ噺の本、日本昔噺とか、日本お伽噺なぞを買つてもらつた、よろこびは今でも思ひ出す。

自分の子供の時、崇拜してゐたのは楠正成であつた。孤城にたてこもつて天下の大軍をやっつける處が好きだつた。そして忠義より他にそれに匹敵する美徳を自分は認めてゐなかつた。

十五

彼は母から「お前のやうに正直すぎても困る」と云はれたが、正直と云ふものを尊敬する念は强かつた。

彼は學校で地理の時間に、先生から太陽も月も東から出て西に入ると云ふことを敎はつて歸つて、兄にそのことを得意になつて話した。すると兄はそんなことはないと云つた。「太陽は東からのぼるが、月は西からのぼるのだ」と云つた。

「それでも先生がさうおつしやつた」

「それだつて月は西からのぼるのだから仕方がないさ」

彼には兄が噓ついてゐるとは思へなかつた。なんだかさう云はれると西の方から月があがつたやうな氣になり出した。それで翌日學校で、先生に「月は西から出るのではないのですか」と云つた。

「太陽が東から出て、月が西から出たら、途中でぶつかるから、そんなことはないのです」と云つた。

彼は「兩方から出たつてぶつからずにすむことも出來さうなものだか、先生が云ふのだから、ぶつかるといけないので兩方とも東から出るのかなー」と思つて、默つてしまつた。

歸つて兄に話したら、兄はたゞ笑つてゐた。

彼はその時、始めて先生に反對してがんばつたのを、何んだか腑におちなかつたので、今でもそのことを覺えてゐる。

彼は又從弟から、雨がふる時、注意して見ると水溜りに海老の子がおよいでゐることがよくあると話されてから、雨がふる度に注意して見たが、海老を一疋も見つけることが出來ないのでがつかりした。

十六

彼は又學校でワシントンが斧で櫻の木を切つた時、正直にしてほめられた話をきいて、大き祖母さんの眼鏡をこはした時、正直に云つて大變怒られたのを不思議に思つたこともあつた。女中がものをこはした時、一番怒鳴りつけるのは大き祖母さんなので、母はよく彼をかげによんで、何とかはお前がこわしたことにしておくからね、さもないと女中が氣の毒だからと云はれた。さう云ふ時、大き祖母さんに怒られた記憶はあまりない。

彼は子供の時から母や兄にぶたれた記憶は一度もない。祖母からもぶたれた記憶はない。彼の兄は雷が嫌いだつたので、母は雷のひどい時に、兄をつれて庭に二人で立つてゐたことがあつたさうだ。又兄が勉強しないとか、何とかで、

母が兄にそんな子供は家においておくわけにはゆかないと云つて、格子戸から兄を無理にひきづり出したら、兄は格子につかまつた。

「主人を出すつて方がありますか」と泣きながら云つてゐたと云ふことを彼は母から聞いたが、自分自身にはさう云ふ記憶はなかつた。

十七

母の實家が神田の大火事でやけてから、すぐか、二三年たつてからか、深川の方に引越した。祖父はもう死んでゐて、叔父が（彼の十の時、三浦へ行つたので、その叔父のことを三浦の叔父さんとその後はよんだが）當時セメント會社をやつてゐた。その會社が深川にあつたので叔父の家もその近くに引越した。

其處へ彼達はよく遊びに行つた。それは彼の住んでゐる麹町元園町とはちがつて州が澤山あつて、掘割が幾條も走つてゐた。彼にはそれが珍らしかつた。橋の上を歩いたり、川べりを歩いたりして、水のなかにおよいでゐる小さい魚を見るのがすきだつた。見るよりも取るのは一層に好きだつた。其處には雨溜りの水とちがつて海老もゐれば、目高もゐた。タナゴも居た。ヘヤや、鮒も居た。彼は同齢の一番仲のいゝ從弟と、よくそれをしやくつたり、釣つたりした。それが實に樂しかつた。其處らの水は綺くなかつた。そして溝十呂の臭が強くした。十何年あとでも彼は溝土呂の臭をかぐとよく當時を思ひ出した。九段坂の下を通る時、よくその臭ひがするので當時を思ひ出してなつかしい氣がした。

彼は四つから九つの間、毎年夏は鎌倉に行つた。始めは光明寺に泊つた。高島嘉右衛門か誰かにすゝめられて鎌倉にゆくことになつた。海岸にゆくことは醫者にすゝめられたのだと思ふ。何しろ彼の三人の兄弟の內、兄だけはわりに丈夫だつたが、彼と彼の姉は丈夫な質ではなかつた。それで母が心配して毎年鎌倉に出かけた。

田圃のあつちこつちにポツリ〳〵と家がたつてゐた。そして別莊の出來出したのはそのあとであつた。しかし避暑客もポツ〳〵は居た。ともかく彼は鎌倉へ行つてから丈夫になつたと云はれてゐる。彼は貧乏な處に生れたら、三つか四つ少くも十二三でこの家を去る運命をもたされたであらう。長が生きすることは、幸福であるか、不幸であるか、彼は客觀的には知らないが、彼は自分が弱い身體でゐながら育つたことは、元より母の苦心にはちがいないがこの世の不公平の御利益にもよることを否定することは出來ない。だから彼は一人の人間を健全に生長さすことの出來ない程の貧乏をこの世からのぞきたい、その爲に働きたい氣は强くもつてゐるのである。しかし母の手から奪はれて公共的に育てられたら、彼は落伍者として十二三にならずに同じく死んだであらう。子供を育てるには母の愛をなるべく無視しないことを彼はのぞむのである。

尤も母をなくなした子供は不幸であるると云ふべきであるが、母親が死んだのだつたら仕方がない。公共的に子供を育てるのは母親の權利或は母親のない子を育てる時に、やむを得ず行ふことにするものでありたい。

十八

[illegible]い。鎌倉の生活は彼にはよろこびだつた。當時のことを思ひ出しても彼は自分を子供[illegible]とつて

子供は強らし[illegible]では、子供は子供なりに自分は利口なものだと思つてゐ[illegible]に思へる。

だとは思へない。[illegible]

は尊敬すべきものは兄だけであつた。兄とも議論はするが兄は戸主として尊敬すべきものと母から何となく教へこまれてゐた。只のよく學問が出來たり、他の同年の人より兄がまぐれてゐるのを見るのは弟として傲りでもあり、よろこびでもあつた。

或時兄が潜つて、水のなかゝらあぶくを出すことを發明して大得意になつて、母や姉にして見せた。そして二人から賞讃をうけた。彼にも見せてやらうと云つた。彼も見たいのでよろこんだ。しかし彼の立つてゐる處はあまりに淺かつた。彼の記憶ではさう淺いとも思つてゐないが、事實隨分淺かつたのにちがいない。それでもう少し深い所へ來たら見せてやると云つた。彼はそれが見たいので勇氣をおこして少し深い方へ行つた。そして兄が首を水のなかに突込んであぶくを出すのを一心に見てゐた。その時、不意に波が來て彼をさらつた。母はそれを見てふと彼が泳げるやうになつたと思つた瞬間に、彼の姉は「Aちやんがながされる」とあはてゝ云つた。そして母もおどろいた時に、氣違いのやうになつて十一、二の姉は彼においつき彼を抱きおこした。

彼はその時から姉を生命の恩人のやうに思つた。

十九

彼の思ひ出すことをなんでもかいては切りがない。自分は彼が段々生長してゆく處を見やうと思ふ。

子供の思ひ出は澤山あるが、彼が鎌倉で見て忘れなかつたことはさる夕方。海岸を歩ゐたら、ひーひー人の泣きさけぶのを聞いた。何かと思つて行つて見たら、一人十七八の少年の腕にもりさがつてゐるのだ。魚をさすモリで喧嘩して刺されたらしい。日にやけた腕からはくろづんだ血がだく／＼と流れて居た。それを大人がゆかうとするのだがひつかゝりが、肉にくいこんで肉をひきちぎらないとどれないのだ。それで引いては見るが、その度にたまらない聲を出す。

彼はあはてゝ逃げ出したが、その聲は彼の耳をおいかけて來た。

二十

彼は子供の時に九段の遊就館に入つて其處にある武器や、戰爭の血みどろの畫を見ると自分が、その武器でやられることや、その畫のなかでやられてゐるやうな目にあふことを想像しておびやかされた。

彼が戰爭を嫌ふ原因は招魂社の遊就館から始まつてゐるのは一種の皮肉である。

二十一

彼は子供の時には小刀や、切れものをあつめる慾望におそはれたことがあるが、彼の小遣ひはそれを許さなかつた、又小さい彫刻物も愛したが、彼はそれを買ふことは出來なかつた。彼は毎月一冊か、二冊子供の雜誌を買ふことが、一月のたのしみだつた。

しかしそれは十位の時かも知れない。

彼の母は子供に金のことを知らすことをよろこばなかつた。子供を鷹揚にそだてたがつた。だか彼は子供の時から人は金でくらすもの、金がなければ困るものだと云ふことを知らずに來た。金がなくつてもくらせるものゝやうに思つた。そして母や祖母が金のことで心配してゐる氣持がわからなかつた。

深川の叔父の家がセメント會社がつぶれて破產した時、母なぞは心配してゐたが、彼は破產がなんだか知らなかつた。たゞ深川へ遊びにゆけなくなり、毎年一度か二度セメント會社の内にある池を、水車でかいぼりして魚をとることを見にゆけなくなつたのが、殘念な位いであつた。その池のかいぼりは彼等にとつては大なるよろこびだつた。その度に彼等は呼ばれて行つた。水車をふんで水をかいだす人の姿は今でも彼は思ひ出せる。水がだん／＼へるのをたのしみ

に見てゐる。池に大きな魚が入つてゐることをいろ／＼空想して兄や叔弟と話しあふ。そして魚が澤山ゐることを祈りながら水のへるのを今か今かと見てゐる。段々水がへる。魚が背を高くしておよぎまわる。大人が入つて鯉だとか、ぼらだとかをつかむ、鮒なぞは無數にザルに入る。鰻がによろ／＼する。彼等は一々歡呼して池のまわりをとんで歩く、そして獲物の多いのを自慢しあい誇張しあつて、手をたゝいてよろこぶ　自家に歸つてお祖母さんたちに自慢する。とつて來た鰻を鰻屋にもつていつて料理してもらう。

そのたのしみがなくなつた。

二十二

彼の叔父は破産する迄は隨分道樂者で亂暴ものだつた。學校もおいだされ、交番の前に小便して巡査と喧嘩したとか叔母が來た晩に、乃ち結婚の當夜に友達と吉原に行つたとか、そんな噂は子供の耳にも入つて、何か面白いことのやうに記憶された。

その叔父は破産すると同時に、酒も道樂もやめた。そして他人の世話になる以上は贅澤なことをしてはいけないと云つて、煙草もやめ、南京米を食ふことにしたりした。彼も叔父の日暮里の家で南京米を御馳走になつたことを子供心におぼへてゐる。

その前、叔父が本所へゆくもつと前に、麹町の富士見町に一寸ゐたことがあつた。その時、彼れが七つ位の時だつた。神田の火事のすぐあとだつたかも知れない。彼のすぐそばに火事があつて、彼の家に火の子が盛にとんで來た。彼はその時、學校の本を背嚢に入れて背負つて高下駄をはいて富士見町の叔父の處へ逃げ出した。家には母がのこつた。彼達は叔父の家の門から火事を見ながら母の身の上を心配してゐた。早く逃げてくればいゝのにと兄弟達で話してゐた。だ

ん〳〵心配になつた。火の勢ひが減じるとよろこび、増すと心配した。母は逃げて來なかつた。その内に火は消えかゝつた。使ひが來て風の向きがかはつて家が燒けずにすんだことを知らせて來た。彼達はよろこんで家に歸つた。歸つて見ると家はすつかり散らかつてゐた。木の引窓などは火の子が來て燃えたあとがのこつて居た。しかしその時、母はおちついて最もよき手くばりをしたことを見舞に來た人々の口から聞いて、子供心に母を今更に信頼する氣になつた。

その叔父の家で、叔父の處にゐた俥夫が何の理由もなく首をくゝつたとある朝彼は聞いた。

その家は家相がわるくつて入つた人の家には必ず不幸が起るのだと云ふ噂を聞いた。

俥夫の首をくゝつた梁は切つて川に流したと云ふことも聞いた。

その後深川に叔父はゆき、それから日暮里に行つたのだと思ふ。

彼は日暮里の叔父の家では一つつまらぬことで忘れることの出來ないことがあつた。

それは例の從弟と、近所の田圃の溝に魚をしやくいにいつて、蛭に足をすはれて血を出しながら、魚をバケツに入れて大得意で歸つて來たら、一人の見知らぬ男にあつた。男はいきなり彼に

「朝、ひるに吸はれるとはこれいかに」

と云つた。九つの彼はとつさでおどろいた。そして氣まりもわるかつたので默つてゐたが、すぐうまい答へが口から出なかつたのを恥のやうに思つた。

「ひるにかつても麻と云ふが如し」

と返事がまもなく出來たのだが、云ふ氣にはなれなかつた。

當時はそんな問答がいやにはやつてゐた。彼はなんだか自分が一休なぞにまける人間のやうな氣がして腹をたてた。

そんなことは大したことぢやない。現在その時は壁になつてゐた。なぞと云ひわけをしたが、叔父の處へ行つても自分を馬鹿のやうに少くもあまり利口ではないやうに思へて子供心に腹を立てた。

二十三

彼は子供の時には何よりも腕力家になりたかつた。そして餓鬼大將をやつつけて、溫和しい子供の味方をしたかつた。學校は腕力の世界であつた。力のないものは力のあるものに屈伏するより仕方がなかつた。彼は幸ひさう云ふ爭ひの仲間からはづれてゐた。彼は誰もが相手にしない例外の仲間に入つてゐた。

彼はどつちかと云ふと醜く生れてゐた。誰もが彼を誘惑もしなければ、彼を押えつけやうともしなかつた。このことは彼にはよろこびだつた。彼がもし美しく生れてゐたら、彼は誘惑にはもろかつたにちがいない。負け嫌ひで、他人の云ふことを聞くのは實に嫌ひだつたが、性慾については危險性をもつてゐた。しかし彼は醜かつたので、意地惡るはされても、それはあくどい意地わるではなく、當時學習院にもはやつてゐた、男色の犧牲になる心配もなかつた。彼は權力の爭鬪のいつも範圍外にゐた。しかし彼は暴力のバツコにたいする怒りを內に感じないわけにはゆかなかつた。そして自分の腕力を強くしたいと思つて、力の強くなる法なぞと云ふ本を私かに買つてよんだりしたが、力は少しも強くならなかつた。

彼は牛若丸の話を愛讀して、そして牛若丸のやうに武術の達人になりたく思つて、棒をふりまわして木をたゝいたり雨だれの落ちてくるのをなぐつたり、石をもちあげて見たり、從弟とうらの崖にゐる蜥蜴の尻尾を切りにいつたりしたが、とても牛若丸の千分の一もうまくはなれなかつた。學校へゆく途中よく往來を歩きながら、前を歩いてゐる男に腹のなかで氣合をかけて、頭の眞中を見かけて棒でうちことむこを想像して歩いてたが、相手はいつも平氣で歩いてゆく

のでがつかりした。

しかしそれは彼れが十をこしてからの話かも知れない。しかし力が強くなりたくなつたのは七つ位いからだつた。學校へゆくとすぐ侮辱に手向へる武器は腕の力より他なかつたから。

二十四

十位までゞ彼の記憶にのこつてゐることで彼の一生に影響するやうなことは他になかつた。たゞ彼は學校の勉强するのが、いつも嫌ひだつた。彼は三十分と机に向つてゐるのが嫌ひだつた。すきな本ならよむけれども、嫌ひなことはする辛抱はなかつた。彼を敎へてゐた書生は、彼の頭の兄に負けないことを母につげた。母は兄と同じく彼も一番にしたかつた。しかし彼は同じことをくり返して、頭が向かない時に、つめこむやうな勉强は絕對に嫌つた。それで母にはよく泣かれた。彼は怒られたり、叱かられたりしても聞かなかつた、母に泣かれたり、たのまれたりするのには手向ふことが出來なかつた。しかし三日坊主ですぐ元のなまけものになつた。彼と同級で又従弟になる人の母親が彼の母と知りあいなので彼の母の處に來た時、彼は明日試驗だと云ふのに庭に出て、木をポン／＼たゝいてゐたので、その人はおどろいてだのが、よく一つ話になつた。

ある時母は彼に云つた。

「お前は勉强さへすればお兄さんに負けないのだから、本當に勉强しておくれ」と云つた時彼は「勉强すれば出來るのはあたりまえです。しかし勉强が出來ない質なのだから仕方がありません」と答へた。

二十五

彼の兄は母の云ふことはすなほに聞いた。

しかし彼は一々母に云ひかへした。しかしどつちが事實で母の云ふ通りになるかと云ふことはわからなかつた。

彼は何か云ふのでもひっつかつた。

「お兄さんは、お前見たやうに何べんもひっこくは云ひませんよ」

「だつてお兄さんの云ふことは、お母さんがすぐ聞くけれど、僕の云ふとはお母さんがすぐは聞いてくれないからです」

實際戸主の兄さんの云ふことは彼の云ふことより母には自づと重じられてゐた。母は彼にさう云はれると少しは思ひあたつたらしい返事をした。

母はまたよくかう云つた。

「たとへて云ふとK(彼の兄)の方は私が上野へ行かうと云ふとすぐよろこんで承知する。だがS(彼の名、兄や姉は彼をAちやんとよんでゐた)はさう云ふ時、飛鳥山にゆきたいと云ふ。そして二人は議論をする。Kはお母さんがよろこぶのだからおとなしく上野へ行つたらいゝだらうと云ふ、Sはお母さんは子供がよろこべばそれでお母さんもよろこぶのだから自分達のゆきたい處に行つてよろこぶ方がいゝのだと云ふ。二人の云ふことが尤なので困つた」

實際彼にはさう云ふ處があつた。彼はさう云ふへんな頑固さを次男根性とよんでゐる。

二十六

彼は母に似て遠慮する時は、しなくつていゝ程遠慮するが、がんばり出すと切りがなかつた、それで子供の時から皆に馬鹿にはされなかつた、そのかはり時々、皆を相手に議論することはあつた。そして人々の皮肉を一人でうけてがんばり通すやうな淋しさは時々味はつた。

彼は從兄弟中で一番醜くゝつて、一番偏屈で、風がだらしがなく、頑固だつた。そして又負け嫌いで、海へ入る時で

も皆がさわがつてゐると、最先にとび込むことを癖にしてゐた。母は彼のことを偏人と云つてゐた。へんな子がうまれたものだと云つた。そして癇癪を起すと、「きつとお前は今に氣違ひになるよ」と云つた。「用心しないといけない」と云つた。

　しかし親類仲間に彼はへんに人氣があつて、親切もので、正直ものだと云はれた。しかし彼はさう云はれるのをよろこだんが、彼は自分の缺點や、秘密を知つてゐるので、得意にはなれなかつた。しかし彼は、兄に一種の階級的尊敬を拂つてゐる他、別に誰も尊敬はしてゐなかつた。自分のことをほめる人があつても、そんな賞め方では喰ひたりないと云ふ氣位をもつてゐた。

二十七

　彼は十一、二の時、一度、明治天皇の出仕になるやうにと云ふ内命をうけた。當時忠義心のあつかつた彼はそれをいやがりはしなかつた。しかし母は出仕になると勉强は出來ないといふのを心配して、祖母達はよろこんだのだが、宮内大臣を丁度知つて居たので、おことはり出來るやうにたのみに行つた。

　一年近くたつて彼は又お目見得に上れと云ふ命を受けとつた。

　明治天皇は三條(實美)さんを大層愛されて、三條さんの一族の者からなるべく出仕を取るやうに命ぜられてゐるのだと彼は母から聞いた。三條さんは彼の父を愛され、何かの時に彼の家に逃げて來て、一寸かくれてゐたこともあつたやうに聞いてゐた。そして三條さんは彼の父の癇癪を起すのを心配して、わざ／＼「靜座見群如」と云ふ額を書いて彼の父に下さつたのだと彼は母から聞いてゐた。彼の家の座敷にはその額がかけられてゐて、子供の時からその字がうまいのだと聞かされてゐた。

忠義心の強かつた彼はお目見得にゆくことを名譽のやうに心得た。しかし彼の母は、出仕に出ると學校を一日おきに休まなければならないのを恐れた。

彼はお目見得に親類の家扶につれられていつた。彼より一つ若い彼の一族の子供が一人矢張り目見得に來てゐた。(その人が園池だつたことは二十年のちに彼は園池から聞いた)

二人は侍從のやうな人につれられて、隨分うすぐらい廊下を通つて、あつちまがりこつちまがりした。或處で彼等は溝のやうな處をとびこさなければならなかつた。一つ齡上の彼はそれを勇氣を皷してとびこしたが、齡下の子供はそれがとびこせなかつた。

陛下はくもりがらすばかりの障子にかこまれた大きな室の眞中に、椅子の上に腰かけてゐられた。彼はその前に立つて心からの敬禮をして下つた。

彼は菓子を食つてゆくやうにかゝりの人にすゝめられたが早く歸つて、母や祖母に話がしたかつたので、それを斷いて歸ることにした。

母はよろこんで迎へてくれ、そしてついて行つた人が、彼の態度をしきりとお世辭的にほめたのをよろこんで聞いてゐた。

しかし母は

「忠義の爲ならば、仕方がないけれども、Sが出なければならないと云ふことはないのだから、勉強してあとでお役に立つ方が反つて忠義にもなるのだから」

と云つて、彼がとられないやうに、骨折つた。彼は祖母から出仕にでると、いろ〳〵拜領ものがある話を聞かされ、

その上、忠義をつくしたくつて仕方がなかつた彼はとられることをむしろ望んでゐた。しかし母の言葉を聞くととられない方がいゝらしくも思へた。

そして彼はとられずに、彼と一緒に行つた人がとられることになつた時、少しはがつかりしたが、母が安心するのを見ると、自分も安心した。勉強して立派な人間になつて、お國の爲に働くのだ、と彼は心に思つた。

二十八

しかし彼は勉強家にはなれなかつた。彼の生活はごく單調であつた。朝起きると顔をあらつて、それから父の位牌の前にお辭儀して、それから飯を食つて、そして少し時間があると一寸勉強して、そして本を背嚢に入れて、そして又父の位牌の前にお辭儀して、そして母や祖母に「行つてきます」と怒鳴つて出かけるのであつた。ひどい雨の外は歩いて通つた。

歸りにもし雨がふつたら俥にのるやうにそして俥賃は四谷の學習院から元園町まで三錢だと敎へられてゐた。その後五錢になつたことを覺へてゐる。その後は俥にのらなかつたから知らないが、七錢になつたことを覺へてゐるやうな氣もする。

鎌倉で子供の時、茄子が一錢に百だと聞いて兄とやすいのにおどろいて、どうしてそんなにやすく賣つてもうかるのだらうと氣の毒な氣がしたことを覺へてゐる。

それから授業がすむと、すぐ家に歸つて、そして父の位牌の前にお辭儀して、そして母達に聲をかけて、そして庭にとび出して木をたゝいてあるいたり、家根や木の上にのつかつて本を大きな聲を出してよんだりした。

机に向つて本をよむのはあまりすきでなかつた。夜は兄と向ひあいに置かれた一とまわり小さい兄のお古るの机で丸

時まで勉強するのだつたが、よく居眠りして叱られて、びつくりして目をさました。居眠りする程氣持のいゝものはなく、叱られてびくつとする程いやなことはないやうに思つた。そして九時がなるとすぐ寢床にとびこんですぐねた。

之が小學校時代の彼の日常生活だつた。

もつと子供の時には母の寢床に入つて、夏は蚤にせめられて、かゆい〳〵と云つてよく母をお起して、着物を着かへさしてもらつた。

或る時、寄席に行つてお菊の幽靈の人形芝居を見て、一晩、ねずにおびやかされて母にかぢりついたことを今でもおぼへてゐる。あの一枚、二枚と數へる言葉が耳についてはなれなかつた。

子供の時は、今のやうに活動寫眞はなかつた。曲馬團を一番よろこんだ。しかし年に一度か、二度より多く見に行つたことはなかつた。芝居は子供の時行つて鐵砲の音を聞いて泣いた記臆の他は行つた覺へはない。

二十九

學校の先生は彼に何にも缺點はないが、溫和しすぎるのが唯一の缺點だと云つた。小學校の時代に一度喧嘩したより外、喧嘩らしい記臆はなかつた。その時なぜ喧嘩をしたか彼は少しも覺えてゐない。たゞ黑い木塀のわきで友の下になつてなぐりあいしてゐた樣を覺へてゐる。大勢が見て通つたうち、誰かゞ仲に入つて喧嘩をやめさした。その時彼は先生から「Mのやうな人は時々喧嘩する方がいゝのだ」と云つて、喧嘩したことをほめられた。

三十

彼は走けつこでは大概びりで、相撲ではびりから三四番だつた。しかし雪合戰なんかの時は、彼は中々負けてはゐなかつた。雪がふるとよく學校で遠足をして、雪合戰をした。殊に體操の時間は、體操をやめて雪合戰をした。彼は兀よ

りとつくんではすぐたほされるが、かぢりつけばはなれない、雲のあたる痛さはあまりおどろかなかつた。勇敢に戰ふものはあとで體操の先生に黑板に名前をかゝれた。彼はいつも書かれないのを內々不服に思つてゐたが、彼の溫和しい方と、弱い方が有名なので彼よりも戰はない人の名の方がよくかゝれた。しかし彼の名も一度かゝれたことがあつた。棒とりや、牛けちとりの時も、彼は氣だけはかつてゐたが、力がともなはなかつた。皆が遊びの時、彼は決心してやつてやつと一人前になつた。しかし五六人の人にはどうしても叶はなかつた。

彼は中學になるまでは殊に誰にも勝つことは出來なかつた。議論では誰にも負けなかつたが、議論がなにゝなるだらう。暴力の世界ではたゞ暴力だけが支配する。彼の級には一人の餓鬼大將が出來た。皆、それに屈服してゐた。誰もそれに手向はなかつた。その人は益々暴力を振つた。彼はのけものになつてゐたが、少し強い仲間は。よくいぢめられた。殊に美しい子供達は無理な要求をされた。そしてそれが通つた。しかしよるとさはると不平が語られた。しかし誰も先にたつ人が居なかつた。暴威はます〱ふるはれた。そして晝の休みにはそれは媚びてゐるもの達によつて犧牲者がよび出されてつれられていつた。

彼はいろ〱の噂を聞いたが、彼は知らん顏するより仕方がなかつた。するととう〱三四人の彼の級では骨ぶしの太い連中が立ち上ることになつた。もう辛抱が出來ないと云ふので、殆んど全級が一つになつて、その男にかゝつた。その時も彼は傍觀してゐた。その男でもさうなつては叶はなかつた。皆にやつつけられて。そして教場で皆で先生にその男の惡い點がつげられた。その時、彼は興奮した顏して淚ぐんでゐたと云つて、彼の級で一番美しい男に嘲さゝれた。しかし彼は自分の力のないのを恥るより仕方がなかつた。

三十一

彼は母の妹のうちで一番美しい叔母を子供らしく愛したことがあつた。その後、彼が美しいと思つたのは同級のその男の兄であつた。彼はそれより美しい男も女もより得たいやうに思つた。

彼の愛する美には二つの憬れがある。それは叔母と、その男とを通り、彼が三番目に愛した女を通つて彼の妻に來てゐる。

しかし美しい者には、變化が多い、彼はその美しい男には、影武者がゐるのではないかと思つたことがあつた。同じ顔してゐながらある時は美しさに輝いてゐるが、ある時はそれが死んで、すべてが生てゐない。こんなはづはないと思つた。

一人は他のカリカチユアに似てゐた。片方の美しさは他の方に認めるわけにはゆかなかつた。輪廓はたしかに同じだ。しかし感じはあまりにちがう。二人ゐて、時々かはつて學校へ出てくるのではないか知らん。子供心にそんなことを思つたことがあつた。

或時、三四人の人がその人を責めて仕切りと、△△△△△△△じを白狀させやうとしてゐた。彼等は皆、十二三であつた。その美少年はそんなことは知らないと云つてごまかさうとした。しかし皆にせめられてとう／＼白狀した。その時彼は思ひあたることがあるのを耻かしく思つた。あれがあれなのかも知れないと思つた。

その後、彼はある時齒醫者の歸りに、俥の上から、一人の男が一人の小供をおさへつけていたづらしてゐるのを見た。それから學校で露骨な眞似をする意味をさとつた。

しかしその時は彼は中等科になつてゐた。

彼は父がゐなかつた。子供の出來る秘密も性慾の秘密も、男女の秘密も知るのがおそかつた。あとの話であるが、彼

がある女を愛した時、その姉が飯を食つて腹がはつたのをさすつて見せて、「子供が出來たのよ」と云つた。その時彼は、自分の妹を愛してゐるのを自分が愛されてゐると姉が思ひちがいして子供が出來たのかと一寸思つた。彼があまり眞面目な顔をしたので、その姉は笑つて云つた。

「うそですよ。子供なんか出來たのではないのですよ。たべすぎなのよ」

と云つた。彼は安心した。その時彼は十七位いだつた。

三十二

彼には善友もなかつたが、惡友もなかつた、遊び相手には叔弟がゐたが、話がよくあふとはゆかなかつた。舟にのつたり、魚をとつたりする遊び相手としては實によかつたが、深い話をする仲ではなかつた。同時に惡いことを彼に教へる仲間ではなかつた。彼はよく二人で江戸川で舟であそんだ。又、二人でお茶の水の下を舟で通つて隅田川に出た。引潮で水が少なくなつて舟がたてこむと二人の舟はあつちぶつかりこつちぶつかりして、方々で怒鳴れた。

しかし川遊びはすきだつた。日暮里にゐた叔父が三浦の金田灣に引こんで、半農の生活を始めるやうになつてから、彼等も毎年の夏、金田にゆくやうになつた。彼は十の時から二十才になる位まで毎年金田に行つた。鎌倉も面白かつたが、金田には彼の從兄弟が殆んど全部あつまつた。彼より齢上の從兄や、彼より齢下の從妹なぞがあつまつた。

その時分に日清戰爭があつた。彼は元より大の愛國家で、日本の勝つことをのぞんでゐた。しかし別に彼の記憶にのこつてゐることはない。

社會の出來事で彼のいくらかでも覺へてゐるのは、彼の五つか六つの時の憲法發布の時のお祝ひに二重橋にいつて、人ごみにおされて馬場下門の處を出る時には兄のたすけがなかつたらあぶなかつた、その日は其處であとで死傷者がある

つたやうに覺へてゐる。當時、九つか十の兄が中々しつかりしてゐる大人のやうに思つて兄の云ふことを聞いてゐれば安心のやうに思つてゐた。

兄に早くわかれたので、政治問題には一切無頓着にすごした。彼の家は又一さい交際はしなかつた。彼の母は一年中引こんでゐた。たゞ夏休みだけ子供の爲に出かけた。始めて金田に三浦がよいの小さい汽船にのつた時、ひどいしけで、皆すつかりよつて半死半生と云ひたいやうな氣持で、金田について、はしけにのる時は生命がけだつた。母は非常に舟によはかつたが、子供等が舟によつてはくのを自分もはきながら世話した。しかし母は子供の爲にはすべてを犧牲にしてゐた。彼は海岸に舟にのつたまゝおし上げられる迄うつぶしになつてゐた。濱へおりても目まいがしてしやがんだ。舟によう程いやなものはないと思つた。しかし叔父や叔母は本當によろこんでくれた。

三十三

彼は天氣がいゝと毎日海へ入つた。其處は鎌倉より靜かだつたし、彼も少しはおよげるやうになつてゐた。始め一年は海から五六町はなれた、叔父の子供の乳母の家に彼の一家はすんでゐた。其處から毎日海岸にかよつた。地引きをひくのを見たり、夕方、生け洲をあげて章魚を殺すのを見たりした。

てんぐすや、つのまたなぞをひろつたり、とつたりするのもたのしみだつた、磯で小さいさゞえなぞをとるのも得意にしてゐた。

そして姉や母がつのまたで髮をあらうのを見ると自分達のとつたものが役に立つのがうれしかつた。

その時、一人の人相見が來て、彼の一家の人を見た。そして彼を一番ほめて大將になると云つた。立見大將も私が見ておひたのです、まちがいはないと云つた。

彼はその時、大將よりももつと偉いものになるつもりでゐた。大將は日本にだつて幾人もゐる。世界にはなほ澤山ゐる。自分は世界に一人きりゐないものになるのだ。しかしそれになる前に一度、大將になるのもわるくはないと考へた。

それから彼は軍人志願で彼の母を苦しめた。母は矢張り公卿の性質がぬけないので、軍人をいやがつてゐると彼は思つた。しかし彼はあとになつて母が承知してくれなかつたことを感謝した。

三十四

彼は夜の海の凄さと美しさを金田で知つた。金田では東京へゆく汽船は夜の十二時頃でなければ出なかつた。彼は東京に歸る人を送つたり、自分が東京に歸る時、いやをうなしに眞夜中まで海岸にゐて、汽船のくるのを待たなければならなかつた。彼等子供はその間ぢつとしては待つてゐられなかつた。火をもしたり、歌をうたつたり、海に石を投げこんで夜光虫の光るのを面白がつたりした。

人々は雨の夜には滅多に歸らなかつた。いゝ天氣でなぎの時に歸ることにした。だからさう云ふ夜は星が一ぱい天にちらばつてゐた。そして海は靜かによせては又歸つていつた。

濱は海よりも暗かつた。しかし舟は一層黑かつた。彼等は舟をあそび場所にして、その上にのつたりおりたりした。

そして汽船のくるのを待つてゐた。夜が段々深かくなつて來た。夜露がおりて來た。彼等は段々ねむくなつて來る。それをさますためになほさわいだ。遠くから汽笛の音がする、まだ舟は岬に姿を見せない。房州の連山があるが、それはあまり高くはなく、星は地平線の近くまで見へる。

やがて舟の明りが、見へだす、マストとへさきに靑色と赤色のあかりが見へる。子供達はよろこぶ、汽笛がなる。ハシケが用意される。歸る人が挨拶する。

「さよなら」

「さよなら」

そして歸る人々は舟にのる。汽船からはさいそくの汽笛がせはしくなる。船頭は舟の前に滑棒をおく。そして舟をおす。波のなかにすべつて入つてゆく、波が舟にあたつてくだける。艫の音がして舟は進んでゆく。

「さよなら」

「さよなら」と彼等はよびかはす。

そして家に歸らうとする。夜の浪のよせてはくづれ、くづれてはよす、音が彼等をおくる。やがて又汽笛がなり、スクリユが動き出し、そして船の明りが去つてゆく。彼等はそれをふり返りながら一種淋しさをうける。

彼等は三十日以上、五十日近かく共處に居る。東京が戀しくなる。彼等は又夜の船をまつて、叔父や叔母や小さい從妹達にわかれをつげて舟にのり、艫の動くたびに光る夜光虫に氣味のわるい美しさを感じる。

はしけは眞黒な怪物に近づく、船腹の入り口に、ゆれてゐるはしけからもぐりこむ。なかは魚の臭で一ぱいである。客の室に入ると三崎と松輪のお客で一ぱいになつてゐる。皆ねたふりをしてゐる。よくねてゐるものもある。足をふみ入れるすきもない。やつとどうにかたのんですき間が出來る。子供達はまづねかされる。知らない人の足や、身體がびつたりくついてくる。ちゞこまるとなほ押してくる。すべての人、老人も子供も男も女も、百姓も漁師も學生も、紳士も皆平等で、せまくるしい魚の臭でむせ歸るやうな室にぴつたり雜こねする。

彼等は臭ひがしないやうに鼻の上に手ぬぐいや、たもとをおく。その内にねぐるしいねむりにおちる。下浦につくと又客が入つてくる。やかましく云つてゐる内にどうにかかたがつく。舟はたへず音をさせながら進んでゆく。

東京の町が、今目ざめたと云ふやうな顔して彼等をむかへる。

彼等は夢中でよろこぶ。朝日がのぼる。彼等はよろこんで太陽にあいさつする。

しかし太陽のまだのぼらない内に東京の土をふむことが多い。そして彼は所々目さめた町を俥にのつて家へ歸る。

三十五

彼の家は別にきまつた宗教はなかつた。

光明寺の坊主が時々來たが、子供心になまぐさ坊主だと敎はつて尊敬する氣にはなれなかつた。坊主のいろ〳〵の唱は子供の耳にも入つて、輕蔑の念を起さした。彼の父の命日のお祭りは神道であつた。しかし彼の母や祖母は毎朝太陽を拜んでゐた。それから祖父さんが、父さんの位牌をおがんだ。その他、おいなりさんのやうな神さまを、おがんでゐた時もあつたらしかつた。しかし大してこつてはゐなかつた。宗教なぞは別に大して認めてはゐなかつた、家内安全と死んだ人達の冥福を祈られる位ゐだつた。毎夜、祖父や父の位牌の前には燈火があげられた。

しかし何の宗教にも入つてはゐなかつた。母は人にすゝめられて雲照律師の處にかよつてゐたこともあつたが、義理にすぎなかつた。母はたゞ子供のことより他、考へなかつた。

そして彼の父は進歩主義であつて、あまり宗教的な方面は考へてゐなかつた。彼の母も父の位牌にお辭儀させることより他は無頓着だつた。毎月二十五日に、近處の天神さんにお參りするのがくせだつた。しかしそれはお參りよりも縁日の見席の方が彼をひきつけたことは云ふまでもない。しかし參りもし、そして誰かにおさい錢を出してもらつて、鈴(どら?)をがんとならして、「どうぞ字がうまくなりますやうに」と拜んだ。

しかし彼はあまり字がうまくなりたいとは別に思つてゐたわけではなかつた。

三十六

彼はもう中學になつたことにする。

まだいくらでも書くことはあるであらう。

例へば明治二十六年の地震の時や、いやついでにかいておかう。讀みたくない讀者にはとばしてもらうことにして。彼は學校がひけて學習院の門を出て、前の土手の上を調子をつけてあるいて五六町來た時であつた。無數の人が——と彼は記憶してゐる——あはて切つて四谷通りから彼のゐる方に逃げて來た。彼はふと氣違ひ牛に皆おいかけられて逃げて來たのかと思つておどろいたとたんに、地面がはげしくゆれて、もう少しで彼は堀のなかにおちる處だつた。彼はあはてゝ土手からとびおりて皆と走つた。するとまもなくやんだ。方々の店がこはれてゐた。殊に陶器屋は見ぢめだつた。

彼は出來るだけ急いだ、彼は母のことを心配した。あの地震嫌ひの母はさぞおどろいたらう、負傷はなかつたか知らんと思つた。そして走られるだけ走つて歸つた。皆元氣だつた。母は彼が無事に歸つて來たのを見て安心した。一家のものが皆無事にあつまつた。庭の石燈籠が倒れたのが地震のあつたことを物語つてゐる。兄も姉も彼も興奮して地震の話をした。子供は事件を大きくしてよろこぶものだ。翌日の新聞で死傷の多かつたのを知つた。そして學習院もひどくこわれた。彼の教場もすつかりこはれてしまつた。もう三十分早く地震がゆつたら自分は生きてはゐなかつたらうと彼は思つた。

三十七

彼は中等科になつたことをよろこんだ。洋服の赤い筋がなくなり、ヅボンがながくなりなんとなく大人になつた氣が

した。

しかし彼の一番嫌ひなのは武課だつた。殊に器械體操だつた。分隊長、小隊長、中隊長は上級生だつた。その内には隨分意地のわるい人が多いと聞いてゐた。

彼は器械體操は殊にまづかつた。そしていろ〳〵彼には恐ろしいと思ふやうな器械が多かつた。彼は鐵棒にとびつくのでさへ、手がうまくつかめなかつたらどうだらう。仰向けにたほれて頭をうつにちがいないなぞと思つた。

しかし鐵棒には彼はとびつけた。しかしトラツペースにとびつくのはとても彼には恐ろしかつた。きつととびつきそこなつて落こつて頭をうつにちがいない。手がはづれて額をぶつけるかも知れない。牛若丸の眞似をすることを理想にしてゐた彼はトラツペースには閉口した。梁木の上を走ることも彼には出來なかつた。彼は落ちることが想像されて、柱に頭をぶつけて頭をわることが目に見へるやうで恐ろしかつた。

皆が平氣でやつてゐるのだし、人殺しの器械が學校にあるわけはないと思つたが、へんに不器用に出來た彼の身體は、他の人に平氣なことも、又樂しみなことも彼には恐ろしかつた。しかし彼の仲間も二三人はゐた。そして彼は一番びりの組にゐた。そして武課の器械體操の時は、いつもひや〳〵してゐた、しかし幸ひ、トラツペースにとびつくことなしにすんだ。彼はそれを今でも感謝したく思つてゐる。

その他は彼にはさう恐ろしいことはなかつた。陸軍大將になることを望んでゐた彼も器械體操には閉口した。しかし俺は大將だから器械體操は出來ないでもいゝのだと思つてゐた。

彼は一番數學が得意だつた。彼のくみで、一人切り出來た人がなかつたと、他の組で先生が云つた時、その一人は彼だと思へばまちがいがないと思はれてゐた。しかしまもなく近眼になつたので黑板の字がよめなくなつたので數學も不

得意になつた。

或は彼がトラツペースを非常にこはがつたのも、彼の近眼のせいかも知れない、彼は十六度になるまで近眼と云ふことを知らなかつた。そして射的の時も、彼は自分の丸が何處にあたるかまるで見當はつかなかつた。皆さうなんだらう位いに思つてゐた。だからトラツペースも、鐵棒も彼にはちやんとはつ切りあるべき所に一本で存在してゐるものとは思へなかつたので、こはかつたのかも知れない。しかし恐らくよく見へても彼はこはかつたであらう。勿論見へなかつたからなほ怖かつたのではあらう。

三十八

彼はその時分に自分の臆病をもてあました。

彼は自分がいぢけてゐるのにあきて來た。そして彼は小さくなつてゐては切りがないことに氣がついた。彼は自分を腕力家にすることには失敗したが、自分を大膽な何にも恐れない人間にしたく思つた。

彼は膽力養成法とか、禪學的な本をわからずなりによんだ。そして夜、兄逹がねたのを見て、眞暗なかで座禪をくんで見たこともあつた。又金田にゐる時、草のぼう〳〵はへてゐる處をわけ入つて、小さい瀧をあびて見たりした。そして彼は學校で先生におこられたつて、皆に意地目られたり、なぐられたりしても殺されることはないと云ふことを發見した。

彼のうちに燃えてゐる力は、彼の遠慮小心とは調和しないものだつた。彼は自分を段々勇氣のある、大膽な男にしやうと思つた。その時分彼はひそかに亞細亞の王さんになることを夢見てゐた。地理の時アフガニスタンの話を聞いてアフガニスタンで旗上げして英國とロシアを戰はせて、西方をたほして、亞細亞を西洋人の手から獨立させて、いや獨立

させるのではなくつて彼はその王さんにならなければならなかつた。そして忠義者の彼はそれを日本の天皇に捧げなければならなかつた。

彼はそれには兵法を知る必要があつた。それで彼は兄や母に秘密に孫子呉子の講義の本を買つて來て机の奥にかくしておいて時にそつと出してはよんで見た。そして又武術の奥義のかいてある本なぞをよんだ。そしてある時その本を見つけられて兄と母に怒られてとりあげられた。

彼は學校の本はそつちのけにして、他の本許りをよんだ。何しろ學校の本は彼には面白くなかつた。そして彼を少しも大膽な人間にも、勇敢な人間にも、大人物にもしてくれないやうに思へた。彼は學校なんか碌にやらずに偉くなつた人物を尊敬した。そして兄や母がくると机の上には學校の本がおかれてゐてそれをよんでゐるふりをしてゐたが、兄や母がゐないとすぐ机の下から他の本が持ち出された。それをよむと彼は元氣になれた。

彼の母は彼れがどんな人間になるか氣味がわるかつた。彼は本より他に誰も相談相手がなかつた。本は彼に勇氣を與へた。

「精神一到何事かならざる」

「至誠天を動かす」

「書は名姓をしるすに足る」

そんなやうな文句は彼をよろこばした。

勉強が嫌ひになるやうな本を彼は愛讀した。しかし彼はかゝさずに學校にいつた。怠けてはゐたが、しかし學校の成績はわるい方ではなかつた、大概、褒賞はもらつた。しかし彼の兄はいつも特別優等なので、兄はいつも母からほめら

れ、褒美ももらつたが、彼はほめられたことはなかつた。相かはらず小言を云はれてゐた。何處の兄弟も二人ともよく出來るのに、お前が出來ないので肩身がせまいとよく母に叱られたりなかれたりした。

彼はやつと及第して褒美をもらう學生もあるのに、ともかく褒賞をもらつて叱られるのは內心不服だつたが、事實怠けてゐるのだから仕方がないと思つた。そして或時書生に山王山につれられてゆかれて勉强してくれと泣かれた時、「學校の稽古はしなくつていゝと思ふけど、忍耐の稽古と思つて勉强しやう」と云つた。

しかしその後まもなく勉强しないでもいゝ出來事が起つた。

それは姉の死であつた。

三十九

しかしその前にまだかきたいことがある。

彼が愛、戀と云つてもいゝ、を知り出したのは中學の一二年であつた。その前から彼は同級の美しい人を、美しいとは思つた。しかしその人を本當に戀する前に彼は一人の友を愛した。

その友は學習院の上野の方にある分校にゐた。中學になると分校の人は皆、本校の人と一緒になつた。分校からくる人は兎角、輕蔑された。人數も少なかつた。本校の人は六十を越してゐたが、分校の人は十人ゐるかゐないかであつた、新しく學校に入る人には好奇心をもつものだ、そして美しい人が入ると學校中評判になつた。分校からどんな人がくるかと彼は好奇心をもつてゐた、所が分校から來た人は誰も彼の期待を滿足させるものは居なかつた。殊に分校の一番で彼と机をならべることになつた人は、瘠せたひよろ長い、醜い人だつた、少くも始め彼はさう思つた。そしてその人が彼の手本をまちがへたり、いろ〳〵そゝつかしいことをするので、彼は不快さへ感じた。そして彼の級は甲乙にわかれ

てゐたが、他の組になつた友がその人のことを聞いた時、彼はあまり氣持ちのいゝ人ではないやうに云つた。所が知るにつけて、彼は段々親しみをましていつた。

今迄誰もが彼にたいしてもたない位い、その人は彼に厚意を見せ、そしていろ／＼話をした。休みの時はいつも一緒に話した。

溫和しい處と女性らしい處が、彼には親しみを感じて、氣樂に話せた。そしてしんみり話が出來た。

二人はいつも一緒になつた。他の人がひやかすやうになつたが、彼等は常に一緒に話したり、笑つたりした。彼は氣のをけない友を始めて見出した。そして話がはやくわかつた。その友も算術が得意だつた。いろ／＼考へたり空想したりすることが好きだつた。そして彼の長所を誰よりも認めることが出來るやうだつた。

彼は一日もその友に逢はないと淋しくなつた。氣樂に話す相手がないのでぼんやりした。始め醜く思つたり、そゝつかしく思つたりしたのが、すまない氣がして來た。殊に友達に惡口を云つたのが氣になつた。しかし彼はその友を愛してゐるとは思はなかつた。たゞ親しい友に思つてゐるだけだと思つてゐた。

しかし招魂社のお祭の時、彼は一寸用があつてその友にわかれて、あとで遊就館で逢ふ約束して、遊就館に出かけた時に、少し約束があいまいだつた處があつて、どうしても出逢はなかつた。すると彼は今迄になく、友が戀しくなつた。そしてあつちさがし、こつちさがしゝて、すつかりおちつかなくなつた。その氣持は、戀に似てゐた。そしてその友がゐなくなつてはどんなに淋しいだらうと云ふことを心から感じた。そして二時間以上もあと／＼とおつて、やつと友をさがし出した時、友も彼をさがしてゐたことを知つて二人はよろこんだ。それから、彼はその友を愛してゐることを知つた。

しかしその愛はいつのまにかあはいしかし親しい友情にかはつた。そして彼はいつのまにか、かの美しい男の子を愛するやうになつた。

その子とは彼は少しも親しくしてゐなかつた、組も別になつてゐた。たゞあふと挨拶する位いだつた。愛嬌のいゝ女のやうな媚をふくんだその少年の笑顔は彼を天國につれてゆく力があつた。しかしその男が何かで彼に挨拶するのを忘れてゐる時、彼は一日氣持がわるかつた。時間によつては甲乙に別れた組が一緒になることがあつた。さう云ふ時、彼はすつかり心を奪はれて、本をよまされても、顔がほてりボーツとして本の字がはつ切り見へなかつた。しかし彼はそれを皆に知られるのをいやがつた。その男は珍らしく美しかつたので、多くの男が、その少年のまはりに集つた。彼は一寸手を出すわけにはゆかなかつた。

彼はその少年が彼の處をたづねてくることを想像したり、その男から手紙がくるのを想像したり、又祈つたりした。そして時々門へ出たり、郵便函を見たりしたが、來るわけはなかつた。彼はその男が不意に醜くなることを望みさへした。その時、すべての人はその人をすてるだらう。その時、本當に自分を愛するのは彼であることを知らせることが出來ると思つた。自分はその男の魂、女性的な優しい心を愛してゐるのだと彼は思はうとした。しかしそれはうそであつた。前にかいたやうに彼はその男の表情が日によつて、あまりに變化するのをおどろいた。ある時は夢中にその男を愛した。しかし翌日その男を見ると、どうも自分の愛してゐる男とちがう、影武者のやうな氣がした。

「あの男は何人影武者をもつてゐるのだらう」

そんな氣がしたことさへあつた。

四十

へ、彼は兄の古や、古本ですませた。洋服はいつも太つた兄の古でだぶついてゐた。帽子も古るで新聞紙がつめられてゐた。靴も兄に小さくなると彼のものになつた。

彼は戀を知るやうになつてから、それが今迄より氣になつた。しかし彼が一番氣にしてゐたのは、辨當をうちからもつてゆくことだつた。

自家から辨當をもつてゆくのは彼許りではなかつた。彼の家よりももつと貧しい人もゐた。しかし彼の愛してゐる男の家は金持であつた。そして學校のまかなひの辨當も、十錢が十五錢位のものだつた。食堂はまかなひの勢力範圍にあつた、だから、辨當をうちからもつてゆく人はまかなひから冷淡にあつかはれた。彼は食事の時だけでもその男のわきにすわりたかつた。學校の辨當をとるものは、いゝ位置に辨當が並べられてゐた。だからその男の人も辨當をとつてゐたから、それに近くのには辨當をとる必要があつた。そしてその仲間は仲よく元氣に話してゐた。そして彼達は隅の方で飯をたべるのだつた。そんなことを彼はあまり氣にしない方だつた。しかしどうかしてその男に聲一つでもかけたい望みが唯一の望だつた彼には學校の辨當をとりたかつた。それで彼は母に學校の辨當をとりたいと云つた。

そして母に贅澤なことを云ふと云つて叱られた。彼が學校の辨當を食ひたいと云ふ理由は、賤しく思へるので、彼も威張つて主張するわけにはゆかなかつた。それで彼はとう／＼泣きね入りするより仕方がなかつた。

彼はその時分、學校で「[illegible]」から云ふことをならつた。

「[illegible]」

彼にはこの句は實に[illegible]感じられた。そして彼は、何度この句を口の中で云つたらう。そして自分を勇氣づけた。

四十一

彼の價値は次第に近くの人に認められた。彼は議論では同級の誰にも負けなかつた。遠足で議論くらべを皆でやつた時、彼は例外にされた。彼の兄達も彼の屁理窟には閉口した。云ひあふと彼は相手の言葉よりも心をめがけて皮肉を云つた。そして時々兄をおこらした。

彼の級は頭のいゝ人がわりに多かつた。そして彼の級は甲乙あはせると、七十人位いだつた。しかし誰も理屈では彼をまかすことは出來なかつた。その後も彼は議論して相手をまかすまでに突込まずにすんだことはあつたが、自分の方が馬鹿だと思つたことはなかつた。自分が遠慮してやつてゐるのだと云ふ氣が腹の底にした。

中學の一、二年の時彼の級で一番だつた彼も厚意をもつてゐた、今百萬石の養子になつてゐる男が汽車の上で彼に自分は汽車と同じやうに早いと云つて足ぶみをして見せた。

彼はそれを見ると、すぐ自分は汽車より早いと云つて歩いて見せた。その男はぶつ眞似をした。

少くも彼は誰もから、馬鹿だとは思はれなかつた。偏屈だとは思はれてゐたが、變りものとして或人からは敬遠され、或人からは厚意をもたれた。しかしそれのみが同級の人に限つてゐた。そして彼は一番皆に馬鹿にされてる、少しまぬけた人間とつきあつてゐた。その方が彼の頭が休まつて氣持がよかつた。そしてそれ等の人は彼を利口だとは思つてゐなかつた。彼は同級の三四人の一番利口な人にのみ、より利口だと云ふことを認められてゐた。彼はそれで滿足してゐた。そして頭のにぶい、神經のたゝない仲間と日なたぼつこして呑氣な話をして笑ふのがすきだつた。彼は下等な話は嫌つた。それに私かに好奇心はもつてゐたらうが、恥と怒りが、さう云ふ話をきくと頭をもたげて怒らないわけにはゆかなかつた。それは神聖なものを害されるやうな氣がした。

そして彼は同級の人から疳癪玉とあだなをつけられた。之は彼が私かに愛してゐた美しい男からつけられた名のやうに彼は思つて、よろこんでその名をうけた。彼は泣くまではよはかつたが、それからは手がつけられなかつた。疳癪玉と云ふ評判をとつておけばいたづらするものがないから反つていゝと彼は思つてゐた。

彼はその時分、どんなに力の強い男も、自分を殺すことは出來ないのだと思つた。だからさう恐れる必要はないと思つた。しかし亞細亞の王さんになる彼は、その爲にいろ〳〵考へたり、鍛へたりしなければならなかつた。元より子供だから、一方吞氣ではあつたが、身體を鍛へることゝ、膽力を養成することゝ兵法を心得ることゝ、智慧を研き、謀りごとを研究する氣持ちだけは、毎日もつてゐた。

そして粗食や、苦痛や、饑や、風雨に自分の身體をきたへやうと思つた。彼はよく休日にはあてもなく歩きまはつて晝飯も食はず水ものまずに、夕方近かくまで歩きまわつて、腹がへつてへと〳〵になつて歸つて來た。之ではまだだめだと思つた。雨風のひどい時には裸足でとび出して棒をふりまわして母に心配さしたことも多かつた。

この子はどんな子になるのだらう。このおちつかない、怠けものゝ、強情ぱりな子は、母はさうよく思つたと白狀してゐた。

へんな子が生れたものだ。母のよくさう云ふのを彼は聞いた。それは内々彼にはうれしかつた。

母はよくかう云つた、「お前は私の三十三の時の子だから、三十三の子は親を養ふと云ふから、私は安心してゐる」ともかく母は彼の父の遺言と、彼の星のいゝことゝ、三十三の子だと云ふことで、無理にも安心しやうとした。彼の兄は理想的な子供であつた。頭もよく、學校も出來、運動も出來、そして皆から尊敬され、期待され、誰にもまけない賢こさと身體をもつてゐた。

彼もその點、兄自慢だつた。又兄がゐるので、兄が彼を保護してゐるので、いたづらものゝ多い兄の級の人も、彼には厚意を見せてゐた。そして先生も彼の頭のいゝことを認めた。あの兄の弟だから。しかし同時に、同じ兄弟でも出來のわるい弟だと思つたにちがいない。彼は先生にはたゞおとなしい怠けものとしか見へなかつたらうと思ふ。彼は段々先生を内心馬鹿にしだした。

實際學習院は、生徒の方が威張りやすかつた、學生の父の威光や、舊藩主の威光は學校にもとゞいてゐた。骨の強い先生は二三人だけだつた。さう云ふ先生は學生の方でちやんと知つて用心してゐた。彼はさう云ふ先生にも、あまり尊敬はもてなかつた。しかしたゞ冷淡にしてゐて、落第しない程度に怠けることを目的にしてゐた。そしてその目的なら容易に叶へられた。あとの時間で、彼はすきな本をよんだり、すきなことを考へたり、歩きまわつたり、棒をふりまわしたり、木のぼりしたり、家根の上にのつたりしてゐた。

遠くを見はらせることは子供のよろこびだつた。そして此處でお山の大將のやうな氣になつて大きな聲を出して學校の本をよんでゐた。他の本の時は、だまつてかくれてよんでゐた。

四十二

彼の姉は十八九になつて、所謂婚期が近づいて來た。十六で父の處に嫁いで來た母は、姉が十八九になるとそろ〳〵姉の夫になる人を捜し出した。彼は十二三であつたからはつ切りしたことはわからなかつたが、ともかく姉に二三の男の人が近づかうとしてゐることを覺えてゐる。

姉は琴をならいに行つてゐた。そして彼の家で琴の會をやることが時々あつて、盲目の女の先生が三人位、自分達名々の弟子をつれて、集つて來たこともあつた。彼の家は建築中に彼の父が死んだので半出來の形だつた。座敷はすでに

出來てゐた。座敷の十五疊と母の室の六疊と、小さ祖母さんの六疊の室の間の襖をはづしたのが會場にあてがはれて、七八十人の知らない人々、その多くは外出着を着た若い女たちだつた。彼は大勢人があつまつたのをよろこび、殊に姉が尺八とあはせて、何かむづかしい許しのものをやるのを得意に感じてゐた。

その尺八を吹く人が時々あそびに來た。小さ祖母さんの姉は秘藏つ兒で、琴のさらいにはよく小さ祖母さんが自分でいつていつた、この尺八をふく男も小さ祖母さんにとり入つてゐた形だつた。尺八をあはせにも來、話しにも來た。母はあまりその人を喜んでゐなかつた。自分達も何と云ふことなしに、男のくせに尺八をならつて、女の處へ出かけてくると云ふだけで輕蔑してゐた。それから大き祖母さんの甥にあたる軍人の人が來た。この人はよく彼や兄に面白い話をきかせてくれた。姉はその席にゐた時も、ゐない時もあつた。

彼はその男がなぜくるか、なぜ自分達に厚意を見せるか知らなかつたが、話が面白いので、その上軍人だつたので、尺八の人よりは厚意をもつてゐた。

しかしそゝつかしい男で、尊敬しなくつてい〻男のやうに母から何となく知らされて、さう思つてゐた。この男はその後日露戰爭で死んだ。

その時分、彼達の處にくる齡上の男の人では、一人だけ彼達にいく分か尊敬されてゐた。その人は鎌倉にも來、百人一首もしに來た。母が知つてゐた、隣りに住んでゐたことのあるその時分宮内大臣をしてゐた人の甥であつた。この人は兄よりも齡上で、泳ぐことも、百人一首することも彼の兄よりもうまく、そしていろ〳〵遊ぶことを彼の兄弟に敎へた。色の黒い、やせた、しかし身體のしつかりした運動家で頭もよく動いた。

この人だけは彼等からいく分兄さんかぶに思はれてゐた。この人は姉とも親しく話してゐたが、姉にこびるやうなこ

とはなかつた。
姉の心を知るものは誰もない。姉は戀を知つてゐたか、知つてゐなかつたか、誰も知らない。しかし姉は母からある處に嫁がないかと云はれた時、いやがつたことはたしかだつた。それは親類の人の世話で、理學士で、學校の先生してゐる人で、別にとり柄のある人でも有望な人でもなかつたが、品行がよく、おとなしい人で、けい累がなかつた。母にはそれが第一に氣に入つた。
姉はのり氣ではなかつたが、どうしてか何時のまにか話がきまつた。姉は反對する理由がなかつた。それから誰もに心をうちあけることが出來なかつた。兄は十五六で、彼は十二三である。姉は自分の器量には自信がなかつた。決して美しくない女とは彼は思つてゐなかつた。しかし男には寬大だつた母も、女の姉には中々嚴格だつた。
ともかく姉は結婚の承知をした。姉の婚禮の仕度は、あまり立派ではなかつた。事實、仕度が立派に出來ないでも片身のせまくない處に母は姉をかたづけたがつたのだ。
子供の彼の目にも母が金の方の心配をしてゐることが不思議に思へた。そして琴の古ものなぞが買はれたのを彼は不思議に思つた。
しかし姉の爲に新しい着物が出來、帶が出來、簪や、櫛が出來て來た。その他嫁入りの道具が出來て來た。それは子供の彼には嬉しかつた。そして人々がそれを見てお世辭にほめたり、感心して見せたりする。
母は仕度が立派に出來ないことを姉に氣の毒に思つてゐるらしかつた。しかし祖母や、女中は感心して見せた。そして叔母や從妹は來ると見せられて「まあ美しい」とか、「まあ綺麗」とか云つた。
嫁入りと云ふことは子供には一つの神秘な世界であつて、それはお祭りに似てゐる。彼の姉は嬉しさと淋しさとを同

時に昧はつてゐたらう。彼の姉は夫になる人と見合ひした時にも、あまりのり氣にはなれなかつたらしい。しかしその理由ははつ切りしなかつた。姉の感情は進まなかつたにしろ、姉の理性は夫になる人の缺點を見出すことは出來なかつた。母は夫になる人の瘠てゐることゝ、目方の輕いのを心配してゐたことを彼は覺えてゐる。しかし彼は姉の嫁入りすることをお伽噺の世界の出來事のやうによろこんでゐた。

兄さんが一人出來るのだ。親類が一つ出來るのだ、今迄知らなかつた家が姉の家になるのだ。さう云ふことは彼にはたのしかつた。

彼の家は華なことや、變化にはとぼしかつた。それだけになほ、一人の姉の嫁入りは一つの出來事のやうに彼には思へた。

結納がとりかはされ、姉の荷物ははこび出され、儀式が紅葉館であげられることになつた。その前に彼も夫の人にあつた。そしていゝ人だと思つた。又さう思はうと努力してゐた。

紅葉館の式について彼の覺えてゐることはこの世で見られないやうな幻のやうな美しさとして彼にはのこつてゐる。彼の世界は彼の家に限られてゐて、彼は一二の友の家より外に出かけたことはなかつた。それも一年に一度か二度と云云ひたい位いだつた。宴會のやうなものには出たことがなかつた。又出る機會がなかつた。父を早く失なつた彼は、人生の歡樂や華な方面や贅澤の方面はまるで緣がなかつた。紅葉館にはその後彼は行つたことがないので、幻影はそのまゝにのこつてゐる。

彼は其處の廣い、よくみがゝれた緣側をおぼへてゐる、其處に手すりがあつて、ガラス戸があつて、下には黑く木のしげみがあつて、遠くには町の光りの海があつて、空には一面に星がまたゝいてゐる。彼は其處を美しい着物着た女に

つれられていつて、指さしてもらつてあすこはどこで、あすこはどこだと云ふことを聞かされてゐる。

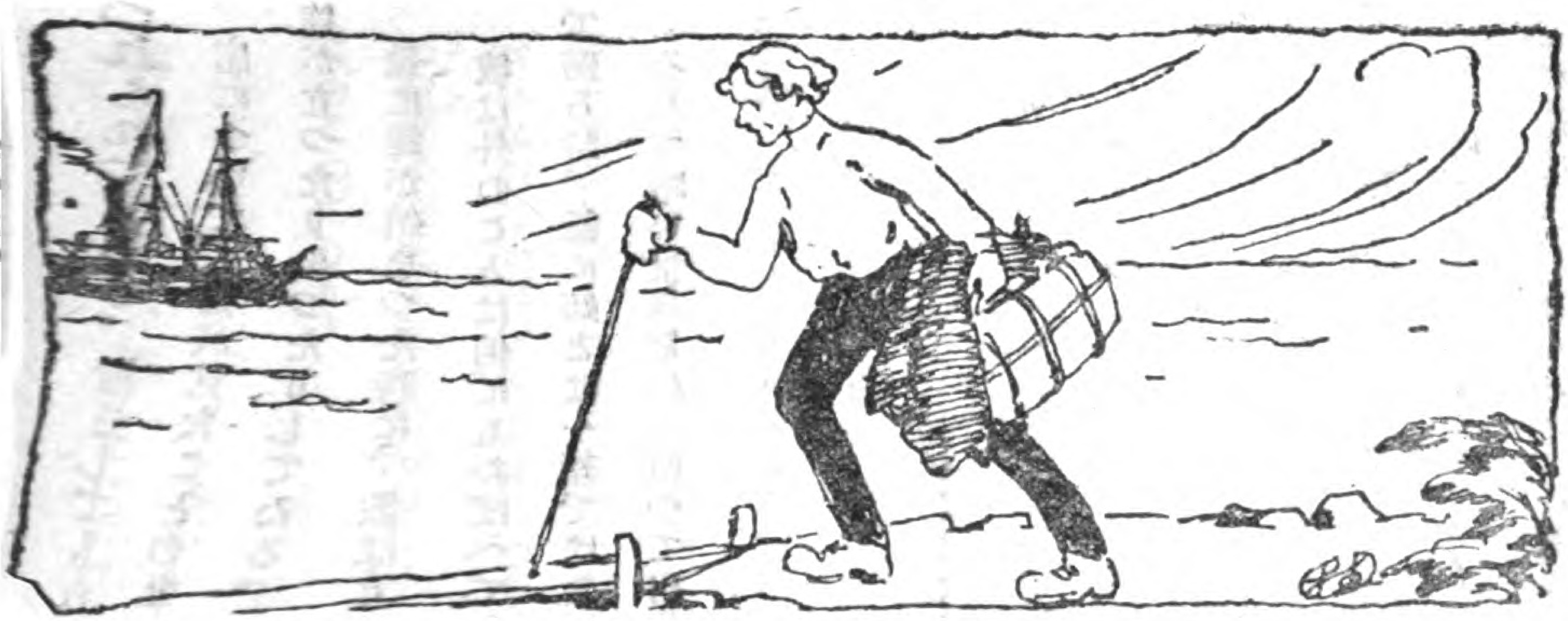
席についても彼が見たことのないやうな御馳走がならべられて、多くの人が樂しさうに話してゐる。其處に美しい女達が立つたり坐つたりしてゐる。

殊に舞が始まつた時に、彼はこの世にもこんな所があるものかと思つた。

彼は外のことは何にもおぼへてゐない。たゞお伽噺のやうな華かな世界を一ぺつしたことを覺へてゐるだけだ。そして歸る時、既に姉とは一緒ではないことを覺へてゐる。

そして暗い世界を俥にのつて自分の家に歸つたことを覺えてゐる。

（つゞく）



狹い籠（虎の夢）

ワシリー、エロシエンコ

虎が疲れた………。

毎日毎日同じこと………。

狹い籠、籠から見える狹い空、籠の周圍に見渡す限り又狹い籠………。

その列は何處までも〳〵動物園の圍を越えて世界の果までも續いてゐるやうに思はれた。

あゝ虎が疲れた………虎が全く疲れて仕舞つた。

毎日毎日同じこと………。

見物に來るあの阿呆の顏、あの阿呆の笑ひ聲、嘔吐を催ほすその臭………

『あゝたゞあの阿呆の下品な顏だけ見ないで濟むやうに出來たら、あの阿呆の嫌な笑い聲だけ聞かずに濟むやうに出來たら………』

併し、その阿呆の群は見渡す限り何處までも果しなく動物園の圍を越えてあの世界の果までも續いて、あの野卑な笑ひ聲は恐らく宇宙の續く限りは響いてゐる

と思はれる。

あゝ虎が疲れた……、全く疲れて仕舞つた……。

虎は猫のやうに圓くなつて顔を深く隠し嫌悪のため身顫をしながら、

『あゝ虎の生命といふのは、あの阿呆の顔を見ることに過ぎないのだらうか。生きるといふことは、あの阿呆の笑ひ聲を聞くことに過ぎないのだらうか……』

その胸から重い痛ましい嘆息が出た。

『おい虎が泣いてるよ』と見物人が騒いで方々から虎の檻(おり)の方へ走つてきた。虎のからだ全體は憤怒と嫌悪のために痙攣を起し其の尾は無意識に烈しく檻の床を叩いた。

彼は、いつかまだ彼が自由に林に住んでゐた時に、その深い、林の奥に何千年たつたか解らない大木の下にあつた花に飾られた石の神様を思出してゐた。遠い村から人々は其處へ來て、凡て彼が近くに居ることさへ忘れて、その石の神様の前に膝づいて一心不亂に祈つて居た。

時々嘆息を漏らしながら、又、時々は涙を花の上に落しながら、その涙は露と混つて月の光に照らされて不思議にも夜光石のやうに光つてゐた。あるものは歡喜に滿ちて花の上に跳り、或るものは草の葉末に瞑想に耽つて光つてゐた。そして人間の涙と夜の露とを見別けることが其の折の彼の好きな遊の一つであつた。

或晩、彼が神様の前に落した寶石のやうに不思議に光つた人間の涙を舐めてみた。彼は、まだ神様には人間の捧げ物の中では寶石よりも又どんな立派なものよりも其の涙ほど一番尊い捧げ物はないと云ふことを明瞭(はつきり)知らなかつた。それで彼は初めて人間の涙をたつた一度。しかもたつた一球舐めてみたのであつた。そしてその晩彼は捕へられた。彼には

それは石の神樣の前であつたと思はれた。

今それを思ひ出して虎の胸が痛く、泣く程痛くなつた。そして彼もあの人間が石の神樣の前に敬虔しやかに膝づいて祈つたやうにあの石の神樣に向つて膝づいて叫んだ。

『神樣よ、たゞあの阿呆の顔だけ見ないで濟むやうに。たゞあの阿呆の下品な笑ひ聲だけ聞かずに、濟むやうに……
……』

すると、いつの間にかあの阿呆の笑ひ聲がだんだん遠く微かになつて春の夢のやうに霞の中に消えて行つた、虎は耳を欹たてゝ聞き入つた、彼の耳には何處からともなく涼しい小川のささやきが聞こえてきた。そして嘔吐を催ほす人間の臭い香も消えて其處ら中馥郁しい花の薫に滿ちてゐた。

虎は驚いて目を睜りキヨト〳〵あたりを見廻した。

虎の喜を誰が想像することが出來ませう。窮屈に思つたその狹い籠の中も人間の阿呆の影も今はもう見えなかつた。彼は何千年たつたか解らぬ大木の下で花に飾られた石の神樣の前にねてゐた。人間の淚はまだ月の光に照らされて不思議に花の上に光つてゐた。

その淚の球を舐めやうと思つた時に、彼は寢入つたのだなということがやつと解つてきた。

『あゝ愉快だ、すべては夢だつた、あゝ嬉しい。』

虎が跳上つてそして尻尾で橫腹を打ちながら、月の光の中を喜び躍つて駈け廻つた、其の胸は自由に滿たされ、その身體は小さな纖維まで不思議な力に溢れてピク〳〵動いてゐた。

『あゝ痛快だ、狹い籠も人間の阿呆も眞實だとのみ思つたのに、やつぱし只嫌やな夢だつた、而し夢にしろ眞實にし

ろ籠程嫌なものはない。

それだけは眞實だ、それだけを俺は死ぬまでも忘れまい』

と言ひながら虎が何んの目的もなく木の間を歩き出した。

二

飛んだり匍つたり草の上に鞠のやうにゴロ〳〵轉がつたり、寢ころんだりして虎が幾哩幾里歩いたか知れないが、或所で廣い原野に出やうとした時に變な臭に打たれて彼が急に止つた、彼の大きな鼻はそれを嗅ぎわけやうとしてピク〳〵動いた、

『あゝ羊だ、何處か近くに羊の居る所があるナ、…………

しかし、なんだか久しぶりのやうに思はれるが………』

と、言ひながら虎が音のしないやうに忍びやかに、羊の臭を目標にして、高い草の中を匍つて行つた。

しばらくの中に彼の前に高い垣根が見えた、そしてその垣根に圍まれた羊の寢むさうな聲もきこえてきた。かう云ふ垣根を虎が既に何百度見たんだらう。又、何百度かう云ふ垣根を飛越えて羊をも犢をも捉へてきた事だらう。併し、今夜に限つて此の垣根を見て虎の心には言ひ知れぬ憤怒の炎が燃えた。

『籠、狹い籠………』

と、云つて彼が矢よりも早く飛びかゝつた、雷よりも恐ろしい吼聲を出しながら電光のやうな勢でその垣根に飛びかゝつた。凡てを破壞せずにはおかない大風のやうな、彼の強い足に打たれて太い杭で堅固に拵へられたその垣根も風に吹かれた蜘蛛の巣のやうに搖らぎ出した瞬たくうちに丈夫な太い杭も小供が遊ぶ寄木の家のやうに一つづゝ倒れて行つ

た、そして二三分の中に高い垣根には馬車が通れる程の大きな門が出來た。

『おい羊よ。可愛いゝ兄弟よ。自由の世界に出よ、籠の外へ早く出よ』

と雷のやうに怒鳴りながら彼は垣根の破壞を續けた。併し恐怖のため失神してゐる羊の群は一隅つこに一塊になつて身動きもせずたゞブル〳〵慄へてゐた。羊にも自由の世界ほど不安な恐ろしいものはないやうに思はれた。虎は火のやうに怒つて喚いた。

『おい、人間の奴隷、見下げた奴隷よ、自由を欲しくないか、狹い籠が自由の世界よりも懷しいのか、卑屈な奴』

と言ひながら慄へ上つてゐる羊の群に割り込んで片つ端から一匹づゝその強い足で捉へて垣の外へ投り出した。

それでも、外へ出された羊は鈍い小刀で生きながら腸を剔ぐられるやうな痛ましい泣聲を出して、又、再びもとの所へ逃げ歸らうとした。此の光景に番人もその番犬も驚かされて、只だ呆然して手を拱いてゐたが次第に元氣を回復して虎を擊退しやうと一氣に襲い寄つた。二三發の銃丸が續けさまに虎の身體に打ち込まれた、犬群は恐ろしい咆り聲を出して隙があつたら嚙み附かうと身構へてゐた。

『羊よ、お前達こそ見下げた奴隷だ、お前達こそ仕様のない畜生だ。無智な犬どもより卑しい奴等だ。お前達こそ永久に救はれないのだ』

虎は血を吐くやうに言ひ捨てゝ五、六度跳ねながら林の中にはいつて仕舞つた。そしてその姿は直ぐに見えなくなつた。

石の神様の前に蹲くまつて彼が傷を舐めながら泣いてゐた。

『あゝあの痛ましい羊の聲だけはきこえないやうに……』

——と兩方の耳を塞いで石の神様に祈つた。

『あの恐ろしい聲だけを……。あの世界の果までも響く痛ましい奴隷の聲だけをきこえないやうに……』

彼が泣いてゐた。

三

虎が殿様の立派な別莊の側を通りかゝつた。彼がヒマラヤの嶮しい山の方へ長い旅行に出かける時にも、ベンガルのまだ斧鉞も入れない鬱蒼とした森や荒野の中を驅け廻る時にも、彼は前に幾度となく其の別莊の前を通つたことがあつた。その高い石垣やその深い叢に無頓着の一瞥を投げて。

併し、今度に限つて別莊の前に差しかゝると虎は惡魔に掴まれたやうに突然叢の端に立ち竦んでしまつた。心臟の動悸は烈しくなり息は詰つてきた。

『篩、又狹い篩……』

宏壯な別莊にはラヂアの二百人の美しい女が花のやうに裝つて贅澤な生活を送つてゐた。

別莊を通りかゝる村人はその女達の生活をどんなに羨しく思つたことだらう。若い娘達は野良の歸途に幾度となく其の叢の木影に立ちつくした。そして彼女の貧しい荒屋まで草籠を背にしながら其の華やかな而も放慢な生活を繰返し〳〵想像してゐた。併しどうしたのだらう。虎には今あの美しい女達の自由を慕ふ深い嘆息がはつきりきこえるやうに思はれた。

彼は齒をギリ〳〵と喰いしばつた。

彼の前には高い石垣に圍まれて別莊の高い屋根が木立の間から强い日光に黄金のやうに光つて見えてゐた、垣の外側

には深い二、三十尺もある濠が鐵鎖のやうに廻つて居た。

虎は小さい時から人間を憎んでゐた。ずつと、小さい時から、まだお母アさんの乳房に縋つて居た時から、それでも、今何故か自分にも解らないが高い石垣に圍まれた美しい女達を考へると彼の心臟はたまらぬ程、ドキ〳〵と烈しくなりその息は詰りさうになつてきた。

彼は二三度別莊の周圍を廻つてみた、彼が大きな鐵の門に止つて濠の向う側から引上げられた長い橋を茫然眺めて居た時に廣い道から人間の近づくのがきこえた。

虎は灌木の中へ駈け込んでピタリと身を地に臥せて息を凝らして人間の來るのを待つてゐた。漸らくたつと多くの從者に取圍まれた華麗(はなやか)な行列が木の間を通つてやつてきた。行列の中程に奴隷に擔がれた美くしい金塗りの駕籠(パランキン)が二箇か三箇か見えた。一つは殿様(ラヂヤ)の駕籠(パランキン)で一つはラヂヤの若い二百一人目の新しい妻の駕籠(パランキン)であつた。灌木の影にかくれた虎に氣付かずに靜に通つて行つた。虎はラヂヤの歡樂の情に燃えた愉快さうな顏をも見た。そして頭から足の指まで寶石と綺羅に埋まつてゐるラヂヤの二百一人目の新しい若い妻をも見た、併し、その顏はベールにかくれて彼には見えなかつた。たゞ美しい優しい春の空のやうに蒼く潤んだ目だけが美しく輝いてるのを見た。その目を見て虎が思はず身顫ひした。

『確かに俺はあの目を何處かで見た事がある、確かに。あの優しい悲しさうな恐怖にふるへた目を……

あゝ、解つた。たしかにさうだ。』

虎が悲しく笑つた。その目は虎が何度も捉へた鹿の目に全然(すつかり)似て居た。

虎が淋しく笑つた。

そんな事を考へてる中に殿様の行列は別莊の方へ行つて仕舞つた。その長い橋が靜に下りて大きな鐵の門が開かれた。その門からベールに顏をかくしたラヂヤの二百人の女達が笑ひながら二人を迎へてゐた。

併し、橋は直きに上り門は直きに閉ぢた、虎の耳には錠を下ろす大きな音だけが長く〳〵響いた。

太陽は西の山を越えて見えなくなつた、豺犬(ジヤカール)の鳴聲が夏の夜の近づくのを告げた。別莊の屋根は木立ちの奥で夕靄の中に溶け込んでゐた、虎は石垣に魅せられたやうに濠の端に呆然立ち竦んでゐた。

虎にも出來ないことがある。此の二、三十尺の廣い濠とあの高い石垣を誰が跳び越えることが出來やう。

虎が嘆息した。

『あゝ、虎にも出來ないことがある…………』

向ふ側に音がした、誰が逃げて誰か追つかけてゐる。虎が目を瞠(みは)つて石垣の向ふを見上げた。その上に突然ベールに顏をかくした美しい目の若い女が現れた。彼女は結婚着のまゝ跣足(はだし)で石垣の上に立つてゐる彼女の嫋(しな)やかな姿は恐怖に滿たされて夕靄の中に慄えてゐるのが虎にもよく解つた、まるで鹿が虎に追つかけられたやうに。

彼女は濠に飛込もうとした。併し彼女が飛込もうとした時彼女の目は突然向ふ岸に立つて彼女を凝視(みつめ)てゐた虎の不思議に光つた目と相會うた。彼女は本能的に後ろへ退つた。その瞬間に後から飛んできたラヂヤは彼女を捉へて虎が鹿を啣へて行くやうに彼女を無理に持つて行つた。

虎の耳にはたゞ彼女の失望した微かな聲だけが殘つた。その聲をきいて虎は何もかも忘れて仕舞つた、身體は火のやうに燃えてブル〳〵顫へでゐた、彼は凡ての力を出して濠の中へ夢中になつて飛び込んだ、二三分の後彼は石垣を大きな猫のやうに攀ぢ登つてゐた。そして間もなくその姿は石垣の上に現はれた。其處に暫らく立ち止つてゐたが直ぐ彼は

ラザーの庭へ消えて行つた。

此處ではもう凡てが靜寂であつた。……噴水の寂しい音。たゞ花の囁き……。虎の血は次第に靜まつてきた。

彼は暫く立ち止つて何かを探すやうに鼻をピク／＼させてゐた。

花の薫に滿たされた夕暮の空氣はドンヨリと濁つて人間の臭さへ溶け込んでゐるやうに思はれた。虎が二、三度その香を深く吸込んで、そしてやつと探してゐた香を嗅ぎつけた。

彼が何の音も立てず輕く、廣い椽に上つてビロードのカーテンの中を覗いてみた廣い華麗い座敷の中には誰も居なかつた。虎は靜つと中へはいつて　もう一度部屋を見廻した。

ガランとした座敷はいろんな立派な道具や寶石の光とで奇妙な輝に滿ちてゐた。椽に近く大理石の臺に載せた大きなガラスの函の中で金魚は月の光線と遊んでゐた。室の一つの隅にはカナリヤが華奢な籠の泊木の上に靜にねむつてゐた。虎がそれを見て凡てを忘れて又怒り喚いた。

「籠、又狭い籠……どこえ行つても籠ばかり。」

虎は輕く跳んで籠のそばに近寄つた。

『カナリヤよ、早く出よ、外へ出よ、自由の世界に早く飛べ。あの美しい森は月の光を浴びてお前を待つてゐる。』と言ひながら虎が一足輕く打つてその籠の半分を壞した。カナリヤは驚いて身體を慄はせながら籠の一番遠い隅つこに逃げ隱れやうとバタ／＼した。

『おれはお前に自由を與へるんだ、その狭い籠から早く飛べ。自由の世界に早く飛べ……』

併しカナリヤには自由ほど怖い、自由の世界ほど不安な恐ろしいものはないやうに思はれた。

『人間の見下げた奴隷。卑屈な奴。自由が欲しくないのか』

虎が片足を籠の中に入れてバタ〳〵するカナリヤを無理に外へ引出した。

しかし外へ出されたカナリヤはもう息をしなかつた。虎はその小さな死骸を足の上にのせて暫時は月の光で呆然眺めてゐた。

『奴隷だけれど可愛いゝね。そして美しい。』……

しかし急に何かを思ひ出したやうに彼がその死んだ冷いカナリヤを座敷の眞ん中の一番明るい所に置いて又金魚の方へ輕くとんで行つた、彼は月の光に水をすかしてガラス函の金魚を覗いた。

金魚は大きな口を開けて水に映つた月をパク〳〵喰べ、時々は仰向けにその腹を見せながら月の光と戯れてゐた。

虎の目には同情の色が浮んだ。

『哀れな小さい金魚よ、

おれはお前を廣い美しいガンジス河に連れて行かう。其處ではもつと綺麗な水が流れてゐる。俺はお前を廣い自由な限りなき海に連れて行かう。其處ではもつと美麗い月が浮んでゐる。その自由の美しい世界に連れて行かう……』

しかし金魚は驚いて底へ沈んだ、金魚には美しいガンジス河程怖い、廣い自由な限りなき海程不安な恐ろしいものはないやうに思はれた。

『奴隷、又人間の奴隷どこへ行つても奴隷ばかり』

虎が右の前の足を水に入れて金魚を捉へやうとした、しかし金魚は彼を嘲弄(あざけ)るやうに何の努力もせずにその足から滑つて逃れた。虎が怒つた。後足で座るやうにして立ち兩方の前足を水の中に入れて金魚を捉へやうと水をバチャ〳〵掻[illegible]

廻した。

それでも金魚は足の間を矢のやうに、うまく滑つて行つた。

『畜生ツ、人間の奴隷』

虎は一生懸命に怒つて水を激しく掻き廻した、その拍子にガラス函は平均を失つて恐ろしい音を立てゝ床に落ちた。その音に驚愕いた虎が本能的に戸の方へ駈けて行つた。二三分もたゝぬ中に家の奥からカーテンを急に引いて右の手にピストルを持つたラヂアが寝卷のまゝ飛び込んできた。勢よく駈け込んだラヂアの目が怒に慄へてゐる虎の鋭い目と一瞬間、たつた一瞬間睨み合つた……。

鋭いピストルの音、別荘の土台まで震はせるやうな虎の唸。人間が生命を慕ふ最後の呻吟……。

それから又印度の夏の夜の不思議な靜寂がつゞいた。

たゞ噴水の涼しい音。たゞ花の囁き……。そして廣い立派な座敷の床の上では月の光を浴びて金魚がピチ／＼跳ねてゐた。ラヂヤの二百一人の女は息の根さへ止めて居た。

四

虎が林の奥の石の神様の前にねて胸の深い傷を舐めてゐた、胸も足も身體全體づき／＼と痛んでゐたが併し彼はもう泣かなかつた。たゞ痛ましい深い嘆息を漏らしてゐた、彼は胸の傷がなほるやうに石の神様に祈らうとはせず沈鬱な顔をして物思ひに沈んでゐた。彼はもう人間のやうに石の神様に助けてもらい度くはなかつた。

印度の夏の夜は又暮れ初めて、その黒いマントで凡てを靜かに覆うて行つた。豺犬の遠吠がその來るのを告げてゐた、虎は眠らうとしたが遠くから鳥の何か心配さうな聲がきこえてきた。この不安さうな夜の靜寂が虎の心を靜に落付いて

眠らせなかつた、彼は首を上げでジツト前方を見つめて耳を欹てた

『なんだらう?。人間か知らん……。

あゝ。又誰か祈りに來るらしい……。おや一人ではないぞ。幾人だらう。

一人二人三人四人………。まあ大變だ。たくさん來てるぜ』

彼が心配さうに香を嗅ぎ付けやうと忙しく鼻をピク〳〵さした。

『あゝ、知つてる奴も居るぜ。誰だらう?。

　獵人のヂムでもない……

樵夫(きこり)のアナンダでもない……

托鉢僧(ファキール)のラマでもない……。ははあ、解つた、鹿に似てゐる女か。

おや、ラヂアの香もするやうだが……

冗談ぢやないぜ。彼奴の頭をたしかに四つに割つたんだが………確かに四つに割つた。

波羅門の奴も居るぜ。一人二人………一體何をするつもりだらう?

ははゝ秘密の組織か。又生きた女を棺と一所に燒くのか、まさか鹿に似てゐる女をラヂアの棺と一所に燒くんぢやないだらうナ。』

彼は身慄いして呟いた

『それだけは承知しないぞ。

どんなことがあつても。鹿に似た女だけは』

彼は灌木の影に隱れて靜に動靜を窺つた。丁度その時反對の方から靜かな風がソツト吹いて新しい臭を木の間を通して虎の鼻に運んできた。

『あれは一體なんだらう?』

彼は大きな鼻をピク〳〵さして注意深くその臭を嗅ぎわけやうとした。

『あゝ又人間か。

彈藥の臭もするぜ。フン印度兵の奴か……

白人の奴も居るぜ、役人か知らん……

危ないぞ、此處を取圍まうとしてるらしい、誰も氣がつかないやうに……

一體どうするつもりだらう、誰かを捉まへやうとしてるらしいが……

まさか狩をするつもりでもなからう。たくさん來てるぜ……

百人以上居るかも知れないよ』

波羅門に導かれて二、三十人の立派な葬式の行列が石の神樣の前に止つた、併し波羅門もお供も何かに怯えたやうにおづ〳〵しながら、なるたけ音をさせずに靜にしてゐた、そして皆恐怖の色を浮べながらキヨト〳〵あたりを見廻してゐた。鹿に似た女も林の中へ心配さうな目をなげてゐた。併し彼女は誰かを待つてるやうに、誰か早く來て自分をバラモンの手から救つてくれるやうに賴んでゐるといふことが虎にははつきり感ぜられた。

『俺を待つてるのだらう、おれが此處に居ることを知らないで……

俺を林の中から呼んでゐる。

虎の心は喜んだ……。虎は嬉しく笑つた。

奴隷が仕事をせわしさうに初めた、十分もたゝぬ中に美しい林の眞中には高い薪の山が出來上つた、それでも鹿に似た女はまだ祈つてゐた、その哀れな祈は永久に續くやうに思はれた。波羅門も他の人々もいら〳〵して居た。

『早く、早く、聖なる火があなたを待つてゐる天神があなたの靈をあなたの淸い靈を待つてゐる』

奴隷は立派な金に飾られたラヂアの棺を薪の上に靜にのせた。それでも鹿に似た女は祈りつゞけて急がなかつた。彼女は失望したやうな目で印度の夏の夜を通して誰かを呼んでゐた虎は嬉しく笑つた。

波羅門の小さな目は針のやうに鋭く背張つたその顏に光つてゐた。

『早く早く

マハデワ（大なる神）はあなたの最後の淸い犧牲を待つてゐる、あなたの夫に對する最後の義務を盡すのを待つてゐる。』

奴隷は蛇の舌のやうに赤く燃え立つ炬火を手にして薪の山に火をつけやうと波羅門の相圖を待ちかねてゐた。

鹿に似た女は最後の目を林の方に投げ捨てゝ二人の波羅門に殆んど無理に連れられて薪の山の上にのぼつた、微風に吹かれたベールの下でベールよりも蒼白になつた彼女の顏が虎にはつきり見えた。

波羅門の奇妙な祈りが初まつた奴隷は四方から火をつけた。

薄い煙が最期の別れの嘆息のやうに高く靜かに夜の空に登つて行つた。

虎はもう凡てを忘れて人間の中へ飛び出さうとした、併しその瞬間に今迄誰も氣付かなかつた赤い兵隊が方々から葬式場へ矢のやうに飛んできた。波羅門の顏もその伴の者どもも此の印度兵の姿を見て恐愕そのもののやうに變つて立す

くんで仕舞つた、たゞ鹿に似た女の喜に滿ちた呼び聲があの遠いヒマラヤの山までも響いたやうに思はれた。その聲が虎の胸を短刀で剜るやうに突き刺した。

『おれをでなく白人を待つてゐたのだ』

彼は、その胸が痛みのために割れないやうに兩足でその胸をかゝえた……。悲しい苦しい嘆息が漏れないやうに兩足で胸を抑へてゐた。白人が變な紙を振廻しながら何か命令を出した。そして突然鹿に似た女を薪の上から下ろして自分の胸に抱きよせた、それを見て波羅門の目は稻妻のやうに光つた、そして虎の胸は破裂したやうに痛んだ。

波羅門が恐怖とも憤怒とも付かず全身を慄せながら石の神に向つて高く手を上げて喚いた。

『印度の神樣、印度の國を昔から守つて下さる神樣方。

あなたを裏切つた此の女に無間地獄の苦しみを呪ふ』

その供達が谺のやうに『此女を呪ふ』と繰返した。

『印度の國、印度の國民の敵を愛し、印度の神樣方に使はれたる吾々を裏切つた此女を呪ふ』

その供達は皆一所に『此女を呪ふ』と叫んだ

呪咀の言葉をきいて鹿に似た女はふるへた、併し白人が兜咀の言葉をきけばきく程ふるへる女を強く〳〵自分の胸に抱き寄せた。勝利を得た喜に輝いたその白人の顏は鹿に似た女の顏に近いた、そして虎には愛の言葉がきこえたやうに思はれた。

やがてダチヤの棺は奴隸に擔がれ波羅門やその供達は兵隊に連れられた鹿に似た女は白人の手に抱かれて夏の夜の夢のやうに、なんの跡をも殘さずに消えて仕舞つた。

只薄い煙が最後の嘆息のやうに微かに空へ舞ひ上つて行つた。

五

虎は飛上つた、その胸はたえない程痛んでゐた、その胸が自分にも解らない今まで感じた事のない苦しい熱情に燃えてゐた、彼はなんの音も立てず石の神様にみえないやうに誰も氣付かぬやうに靜に高い草の中を潜つて夏の夜の夢のやうに消えて仕舞つた人間の跡を追つかけた、印度の夏の夜は靜に更けて幾千億と數知れぬ林の葉つぱどもは月の光を雨のやうに浴びて深い寢に落ちてゐた。

突然誰かの鋭い叫び聲がきこえて夜の寂寞を破つた、續いて又二三發の銃の音、人々の動搖。木影を颱風のやうに飛んで行く黒い影。それから又不思議な夜の寂寞がつゞいた。

虎が竊つと空地に現れてきた、その足にはまだ生温い血の跡が見えた、彼は横から石の神様の顔をちよつと覗いた

『大丈夫、何も知りやしない、なに知つたつて大したこともあるまい、白人の奴が一人少くなつただけだ』

と呟きながら灌木の影に隠れた、流石に彼にも石の神様の前に行つてその花の上にねる勇氣はなかつた。印度の夏の夜は凡てをその黒いマントで覆ふて靜であつた。

豺犬の遠吠が眞夜中を告げた。

突然夜の黒いマントを破つて林の中から神様の前に鹿に似た女が、かけ出してきた、白いベールは後ろへたれて、その一滴の血の氣もない蒼白い顔には髪の毛が振りかゝつてゐた。その美しい潤んだ目は失望そのものゝ象徴のやうに思はれた彼女の嫋やかな手には銀に飾られた短刀が鋭く光つてゐた。

石の神様の前に膝づいて彼女は何か祈らうとした、併し凡ての祈禱を、凡ての祈禱の言葉を一つまでも彼女は忘れて

仕舞つた。

月に照らされた祈る言葉の一つまでも忘れた鹿に似た女の顔は石の神様も必ず長く忘れないことだらう。彼女は祈の言葉を一つでも好いから思出さうとした、併しそれは無駄だつた、祈禱の言葉は一つまでも彼女に忘れられてゐた。

『私は國の神方に呪はれたものです、私は聖なる波羅門の意志にそむいたものです。

私は印度の國の敵、印度の神様方の敵を愛しました、私にはもう地獄に行く道より外にありません』

彼女の手にした銀の短刀は彼女の胸に鋭く煌めいた。

虎は自分の胸が短刀で刺されたやうに叫んだ。そしていきなり灌木から飛出して彼が倒れた鹿に似た女の頭を片足で擧げてみた……。彼は短刀を彼女の胸から出してみた……。石の神様は前のやうに靜に立つてゐた。その神様に最後のさゝげものとして女の胸から血が花の上に落ちてゐた、虎は靜になつてくる女の顔を見て考へてゐた。

彼は、初めて人間が目に見えない強い足でも壞すことの出來ない狹い籠に入れられてることを明瞭（はつきり）感じてきた、籠のことを思ひ出すと虎が又怒つた。

『人間こそ見下げた奴隷だ、人間こそ畜生だ、だが人間を目に見えない籠に入れて奴隷のやうに、畜生のやうに取扱つてる奴は一體誰だらう？』

彼は横から石の神様の顔を覗いた。

『いゝえ、あの奴ではない、あの奴はなんにも知らない……そんなら誰だらう？……』

花の上に落ちた血の球は露と混つて月の光で不思議な寶石のやうに光つてゐた。まるで天上から舞下りた天女の頸に光る夜光石のやうに。

『奴隷の血はよく光つてる、ルビーのやうだ。

だがその味はどうだらう。

ちよつと舐めて見たいが……』

彼は、も一度横から石の神様の顔を覗いた。

『大丈夫、解りはしない、たゞ一珠だけを――たつた一珠……。』

彼が花の上に寶石のやうに光つた奴隷の血をそつと舐めやうとした。すると寶石のやうに光つた血も石も石の神様もだん〳〵遠くなつて小川の涼しい流れや何千年の太い木の噂はぜんだんに人間の聲に變つた。心も溶かして仕舞ふやうな花の薫はいつの間にか嘔吐を催ほす人間の群集の臭に變つてゐた。

虎が大きく目を見開いて見廻した、彼は狹い籠に固くなつてねてゐた、その籠の前にも横にも見渡す限り又狹い籠、そして黒く集つた阿呆の顔、その外にはもうなんにも見えなかつた。虎が失望したやうに恐ろしく吼えた。

『やはり狹い籠や人間の阿呆の顔は事實に限つてゐる……』

見物人は『虎が吼えてるぞ、虎が起きたぞ』とワイ〳〵騷いで大喜で喝采した。

虎が飛上つて全力を振り起して檻の鐵柵を強く打つた、併しその足にはもう檻の鐵柵を壞すだけの力がなかつた。

彼はもう一度恐ろしい唸り聲を出して飛上つてそして自分の頭を鐵柵に強く打つけて血に浴びた檻の床に倒れた。

初めから驚いて逃げてゐた見物人は又虎の籠に詰め寄せて愉快に笑つた。

『あゝあの阿呆の顔、あの阿呆の下品な笑い聲……』

虎は目をつぶつた。

そしてもう一度自分の前に石の神前の姿を呼出した。『石の神様よ、この血を最後の捧げものとしてあなたに差上げます。

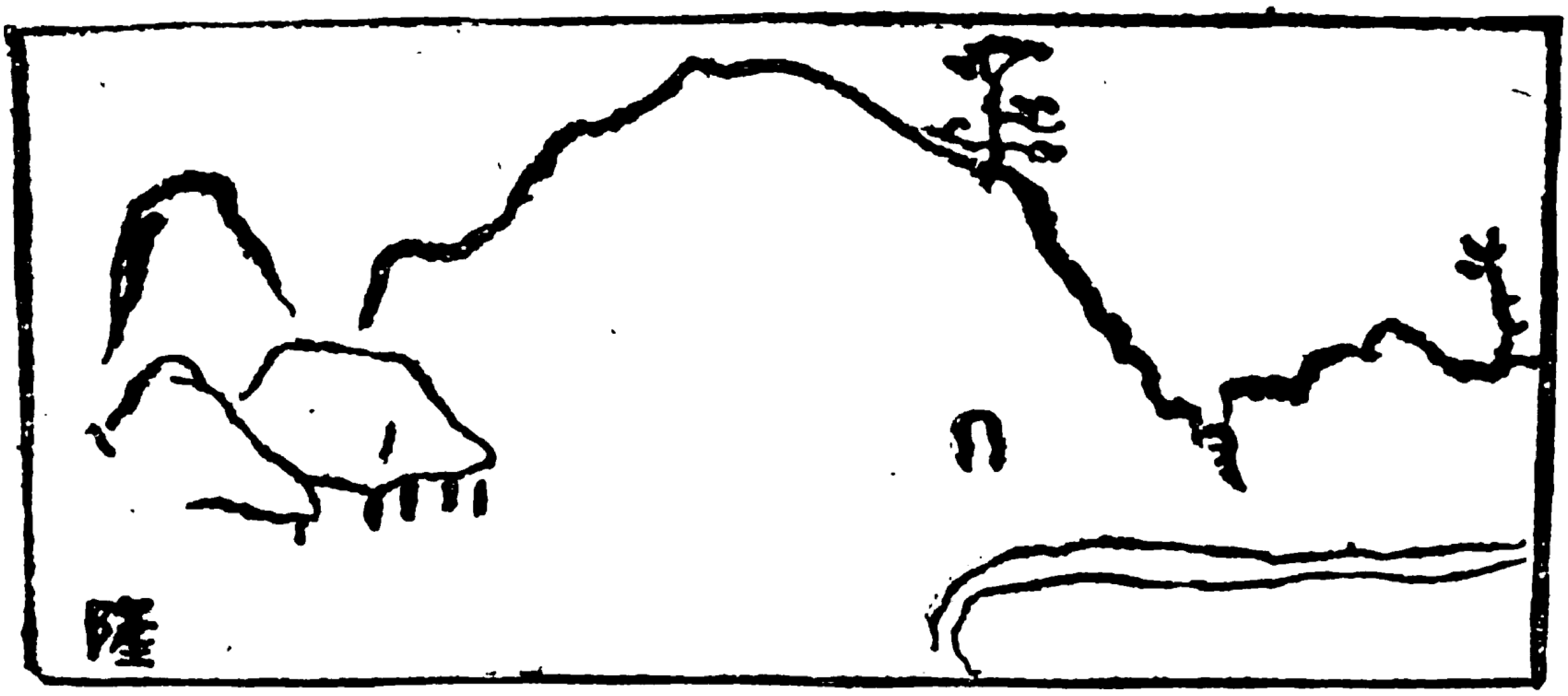
たゞあの阿呆の顔だけは見えないやうに

たゞあの阿呆の下品な笑い聲だけは聞えないやうに……』

それは印度の石の神様に印度の虎の最後の祈りであつた。

すると阿呆の笑い聲はだん〳〵遠くなつて印度の夏の夜の囁きに變つた。

人間の群集の臭はだん〳〵に印度の原始的な林の香に變つた、併しもう虎が自分の愛した美しい空地をも石の神様をも又何千年の古い大木をも寶石のやうに不思議に光つた奴隷の血をも見る爲に目を開けなかつた。彼には目を開けるにはもう勇氣がなかつた。（終）



埋葬そのほか

葛西善藏

前川の忠僕嘉七は、今日の弔詞を、小學校の老校長先生に賴みに行つた。

『村では誰も讀まない？……何、無言の弔詞？あの連中そんなこと云つてゐたか。しかし誰が讀まなくても俺だけは讀むつもりだ。尤もあの連中たちとしては、見殺にしといて、今更死んで歸つたからいゝわで、讀まれもしまいて。生きて歸られたら皆困る連中たちばかしだからな。それにしても嘉七さんもえらく力を落したな今度は……』と、老先生は嘉七を慰めて云つた。

『まつたくどうも。……生きてさへゐて呉れたら、いつかまたどうにかなる、さう思つて待つてゐたんでしたが、あゝ骨になつて歸て來られたんでは、どうにも仕樣がごわせん。わしは滅多に夢なんか見ない質なんですがな、此頃はよく旦那の夢を見るんで、このあひだの晩も、二人で山へ行つた夢を見ましてね、旦那が雉を一羽射落して、わしが腰にさげて歸つて來たんでしたが、あの山神堂の裏まで來ると、雉が二羽だつたと云ひ出しましてね、わしがいくらさう云ひましてもね、どうしても二羽だと云つてわしをひどく叱りつけて、あんな優しい旦那だつたのにこれは腹

を立てましてね、しまひにはとうとうその一羽もわしがいくらあやまつても聽かないで、雪の上へ來てさせたんでしたが、雪の上へ來てるとその雉の咽喉から眞紅な血がドロ〳〵流れ出たんでね、わしは眼がさめてからも厭な氣がされましたが、何しろ旦那もこゝの病ひだつたと云ひますから…』と、嘉七は深い溜息をついて言葉を切つた。

『正夢と云ふ奴だつたらうさ』と、老先生も眼をつぶつて云つた。

前村長、前三等郵便局長、前信用組合長、前何々の前川彌吉氏の粗末な葬式の行列が、主家も土藏も取毀されて離れの一棟のだゞ廣い屋敷の前から、十二月半ばの雪路を、村の下手の方へ繰り出された。官林村の拂下げに村の元老株四五人と共謀して一寸とした利益を貪つたことが曝露して、この二月に彼一人が責任者として郷里を出奔し、長い漂泊の揚句二三日前東京で骨になつて歸つて來た――形ばかしの小さな輿が、紋服に袴の股立高く取つた、嘉七の日にやけた太い首筋に吊りさげられて、カンカン――チャラリン〳〵と、婆さん達の和讃念佛の聲に送られて、嘉七の夢の場に現はれた山神堂側のだら〳〵坂を麗麁な北向墓地へと運ばれて行つた。靑年團と小學生の養生會から寄贈――それも老先生の厚意からの晒し白布の二本の旗が淋しい影を往來で見送つた人々の胸に投げられた。十七の娘を頭に末が六つの四人の子供たちを始め、送葬者の燒香が濟んだところで、詰襟服に足駄履きの老先生は壇の前に出て、ガツシリした身體の腕を張つて、一句一句と云つた調子で讀みあげた。

君の人格、君の素養を以てしては、これから本當の仕事が出來るべきであつたのに、轗軻不遇不幸にして旅で、まだ四十と云ふ年で、死んで來たと云ふことは、まことに殘念で、哀悼に堪えない次第である。――斯う云つた意味のことが、明晰な調子で讀みあげられたが、そこまで來た時に、老先生の調子が一段と張りあげられた。

『…或は、君近時の行動に對し、妄りに漫罵酷評を加ふるものあれど、蓋し、眞の聲名は棺を蓋ふて後始めて定まる

べく、君の眞實の人格が今後に於て始めて理解せらるゝに到るべきは予の確く信じて疑はざるところ、君また良心省みて一點の疚しきを覺えざりしならん。幸ひに瞑せよ！……」

老先生の聲も、張られた腕もブル〳〵震へて見えた。村へ來て三十年、未だに獨身生活を續けて居る老先生が、これまで斯うした不幸な不遇な弟子達のために、幾度斯した弔詞を讀んで來たか！薄給の中からひそかに見舞ひの金を送りつゞけてゐたのは彼ばかしではなかつたか！……無言の弔詞連中も、さすがに殊勝らしく頭を垂れてゐた。……

遺失

死ぬ二十日程前だつたが、十一月の下旬で、その時は私はある文壇的な祝ひの會へ出席するため鎌倉を出て行つたのであるが、彼を見舞ふと、その時分にはもう彼は階下の便所へ起つのも不自由な程衰弱してゐた。長い漂泊の旅から歸つて來て、五月の初旬私を鎌倉に訪ねて來た時、彼は郷里へ歸るつもりだつた。今彼の看護に當つてゐる彼の從弟の庄治君と、彼が私を訪ねて來た前の晩帝劇へ出かけて、偶然郷里の方の人と會つたが、その人から彼の弟が流行感冒で死んだと云ふ話を聞いて、郷里へ歸る決心になつたのであつた。がそれが後で虚報だつたことがわかつたが、しかし彼の方でもまたやつぱしその時歸る決心を鈍らしてしまつたのであつた。彼はやはり東京へ引かゝつてしまつた。

八月の初旬だつたが、彼はまた郷里へ歸る決心になり、郷里から出てゐたH代議士を日比谷附近の旅館に訪ねて行つて御馳走になり、旅費の金を貰つて、九時過ぎ頃日比谷公園を通つて歸つて來た。暗い、蒸すやうな暑さの晩であつた。彼は池の傍のベンチに腰かけて、噴水の音に、自分の生命の放散して行くやうな悲哀の甘さを感じた。復活の望みのない社會的廢人――彼はさう自分のことを思つた。そしてまた、たゞ時の問題である不治の病氣のことを思ふと、彼はや

はり郷里へ歸つたつて仕方がないと云ふ氣がされた。彼等は自分の歸郷を悅ばないであらうが、地獄では、自分の友人たちや肉親の人たちやが、どんなにも歡迎して吳れるに違ひない。自分に取つては最早生は執着ではない。死は恐怖ではない。……

二十五歲の時、彼は父への反抗から妻子を棄てゝ出奔した。大正三年村長時代に公金の流用問題で失脚して滿洲へ逃げた。今度は三回目である。彼は今度の半年近くの漂泊の間絕えず死の恐怖に脅かされて來た。生きては歸れまいと云ふ豫感に脅かされて來た。しかし、どんな未來が自分を待つてゐて吳れる……？

噴水のしぶく音は、生命の放散の甘さから彼を眠りに誘つた。彼は何十分かさうしてうつら〳〵してゐたが、突然白絣にパナマ帽の男に荒々しく搖り起され、無理に體に引張られて行つた。普選問題で喧ましい時分であつた。彼の鞄の中には發賣禁止になつた雜誌の切拔や、某顯官の名刺など這入つてゐた。それに彼は僞名を使はねばならぬ事情に置かれてゐた。彼は穢しく南京蟲と蚊に責められて、朝々の白い光に指を繰つて二十五日〇〇署の留置場で送つて來た。

此世の人間と思はれないやうな、歩く力すら失はれたフラ〳〵の姿になつて、彼は神田のある工場に働いてゐる從弟の庄治君を訪ねて來た時は、彼の脚は丸太棒のやうに腫れあがつてゐた。それから十二月の中旬息を引取るまで、彼は庄治君夫婦の借間の四疊半で慘めな病床の人であつた。……

その晩私は庄治君の御馳走になり、酒を飲みながら遲くまで彼の枕元で話した。氣分には變りがなく、言葉の調子も元氣であつた。歸る時私は彼から日記帳と書翰紙に三十枚位ゐ書いたものを渡された。それは今度の事件の內容と漂泊中の旅日記であつた。事件に出て來る人達は私もよく知つてゐた。彼が失踪中に事件の解決をつけて、彼を迎ひに來るべき筈だつたのだが、その解決がまだ附けられてなかつた。私は彼の手記を材料として揶揄的な對話風なものを書くつ

もりだつた。そこには、憎むにも憎まれないやうな、しかしそれは不正であり虚僞であるに違ひないやうなことが平氣に鈍感に行はれてゐる私の地方の生活相は、私の揶揄性を刺激するものがないでもなかつた。

彼はまづ郷里から東京――京都、城崎温泉、山陰線で出雲、松江、東郷温泉、倉吉町、鳥取市、――京都、大阪、――船で門司、小倉、八幡、福岡、二日市温泉、太宰府、久留米、別府、四國の多度津、琴平、八嶋、――岡山、大阪、京都、東京、鎌倉、東京――

大體斯んなやうな順序で、彼は三月餘りの遍歴の旅を重ねて來た。その詳しい旅日記であつた。二つとも私自身の爲めにも、また庄治君の豐かでない、家計の爲めにも差迫つて役立てなければならない重要なものでまた彼が四十度近い熱の身體から絞り出された執心の産物でもあつた。

『もつと詳しく書くつもりだつたけれど、此頃少し疲れてるやうで、よく書けなかつた。それにあの連中たちのことを書くんだと思ふと、餘りいゝ氣持ぢやないからな』と、彼は淋く笑つて云つた。

十二時近くなつて、私は早稻田の終點から電車に乗り、飯田橋で下りて神樂坂の友人の下宿へ泊つた。朝、ご飯をたべてしまふ時までも私はそのことに氣がつかずにゐたが、『オヤツ、ゆうべたしか持つて來たやうな氣がするが……』と、私は氣がついて急に狼狽しはじめた。『しかしゆうべは隨分醉つてゐたから、持つて來たつもりで置き忘れて來たのかも知れない』斯うも思つて見たが、氣が氣でなくなつた。私は神樂坂から戸塚まで、胸をドキ／＼させ、眼も眩みさうな氣持で、膝頭がガタ／＼するやうな恐慌に壓倒されて、駈けるやうに歩るいて行つた。駄菓子屋の店先きから案内も乞はずミシ／＼する梯子段を登つて行つたが、庄治君の細君が留守で、彼一人仰向いて寢てゐた。

『私ゆうべこゝへ風呂敷包みを置いて行かなつたでせうか？』と、私は障子を開けるなり突立つたまゝで云つた。彼も

ヘツと驚かされたやうな顔して、

『いや、たしかにこゝを出る時は持つて行つた。あなたの手帳といつしよに風呂敷に包んで持つて行つたが、外套のポケツトへ這入らないやうなので、隨分酔つてゐたやうだから途中どうか知らとは思つたが、現にこゝを出る時は持つて出たですよ』と、喘ぐやうな調子で云つた。

『やつぱしそれでは電車の中だつたかなあ。出て呉れるといゝがなあ……兎に角車庫へ行つて検べて見よう』

私はもうすつかり落膽して、煙草も吸はずあたふたと出かけようとすると、

『オヤ、雨が降つて來たやうぢやありませんか。洋傘を持つて行つたらいゝでせう』と、彼に注意されて見ると、窓の外の曇つた空からポツリ／＼落ちはじめてゐた。

彼が旅で持ち馴れた洋傘を出して、サツクを抜き取らうとしたが、あわて切つてゐる私にそれが容易に取れない。彼は見兼ねた態で『どれ／＼、僕取つてやらう』斯う云つて、はじめて床の上に起きあがつて、痩せ細つた腕に力を込めてとうとう抜き取つたが、

『しかし、あまり心配せんがいゝですよ。僕氣分がよかつたら、明日からでもまた書いて置くが、しかしあの連中たちもあなたに書かれたくなつたのかも知れないな……』

彼は斯う云つて、ちいつと、私の顔に、彼としては私の方を却つて氣の毒――さう云つた意味だつたやうに思はれるが、ちいつと覗入つた彼の深く暗く落込んだ眼――魂の苦惱の暗さ深さを覗かしてゐるやうな眼に、はじめて氣づいて、冷めたい不安な豫感に襲はれた。しまつたことをしたぞ。油斷だつた。恐らく彼自身も死に對して油斷してゐるのだ――

私は早稲田の車庫から丸の内の本社へも廻つて調べて見たが、やつぱし出て來なかつた。私はそれから雨の中を會王

催の講演會へも聽講に出かけ晩餐會へも出席した。三百名に近い盛大な晩餐會であつた。眩ゆきばかりの席上、趣向を凝らした餘興――さう云つた間に在りながら、私の心は洞窟のやうに暗く陰氣だつた。

越年

叔父の骨を送つて、二十幾時間汽車に揺られて、私は郷里に歸つて行つた。そしてまた三晩通夜をした。そしてまた二十幾時間上野まで乘り、鎌倉の室を借りてる寺へ歸つて來た。伜の清吉は一人でいろ〳〵な恐怖の妄想に襲はれながら、私の歸りを待ち侘びてゐた。

私は悲嘆と疲勞とでほとんど病氣になつた。それでなくつてさへ、私はいろ〳〵な生靈とか死靈とか云ふやうなものを信じなければならないほどに不幸な慘めな生活をして來てゐる自分のことだから、歸つて來ると、半月ばかしの間、明け暮れ、彼の死靈と語り合つてゐた。それが感傷的な慰めでもあつた。酒でも飲むと、ボロ〳〵涙がこぼれた。叔父は都會で窮死同樣な死方をし 行つたのであつたが、しかしニコ〳〵の往生だつた。そのニコ〳〵顏が、私にはかなり強い死の魅力であつた。

大晦日があと二日と迫つた日、私は清吉をつれて、叔父の死靈に勵まされて、東京へ金策に出かけて行つた。大晦日の日は朝から雪降りであつた。私は降りしきる雪の中を、ほとんど狂氣のやうになつて、一寸ばかし顏を見知つてる位ゐの人のところへも出かけて行つた。乞食だと思はれたら、乞食でもよろしい。詐欺師だと思はれたら、詐欺師でよろしい――そんな氣持で私は押かけて行つた。しかも私は最後の最後までも失望しなかつた。死靈のニコ〳〵顏がついて廻つてゐた。私は始終勵まされ慰められてゐた。彼は生前私の唯一の保護者であつた。彼の死靈が決して私を失望に終ら

せないだらうと云ふことを、私は信じない譯に行かなかつた。

が悉くが徒勞に終つた。私はすつかり疲れ切つて、空腹と痛い脚を引ずりながら、淸吉ひとりを殘して置いた山の手の宿の方へ歸つて來た。その時途中で、ふとK醫院と云ふ電燈の下の表札を認めて、私は脚をとゞめた。一寸した門構への家で、院長の若い醫學士とは私は叔父のところで二三度會つてゐた。『こゝだつたのか……』斯う思つた刹那に、私は死靈の誘惑にかゝつてゐた。叔父がたうとうこゝまで私を導いて來たと云ふことに、私は深い因緣を感じない譯には行かなかつた。叔父の御禮も申し上げる義務がある——斯う云ふ理由に考へ及んだ時、私は猛然として勇氣づけられた。そして私は院長に面會を求めた。もう十一時近い時刻であつた。

三十を越したばかしの、血色のいゝ、髭の美しい、金緣の蔭に細い柔和な眼した、大島揃ひの院長は、看護婦に案内された明るい診察室に、一寸ばかし待たせて、這入つて來た。彼は微醺を帶びてゐた。家庭の幸福、新年の希望——さう云つた無限に樂しげな氣分のものが、彼と共に這入つて來た。私は私の死靈の影が急に薄くなつたのを感じて、狼狽した。

『此間中はどうもいろ〳〵と御厄介になりまして、お蔭で葬式も濟ましまして……』と、私はかつと逆上せた氣持で狼狽した調子で云つた。

『いやどういたしまして、まことにお氣の毒なことでした。何しろ私の診た時分にはもうすつかり心臟の方がいけなくなつてゐたので、それでないとまた方法もあつたのでせうが、何分にも少し手遲れになつてゐたやうでしたから……』

『何しろ當人があの通り觀念し切つてゐるので、どうにも仕樣がなかつたので、やう〳〵あの時分になつて醫者に診せると云ひ出したやうな譯で、それまでは何と云つても聽き入れなかつたので、當人もまさか死ぬとは思つてゐなかつた

でせうから……』

『いや私も最初にあがつた時でしたが、熱が四十度を超えてるのに、今日は少しばかり氣分がわるいやうだと云つてた位ゐでしたからね、あの病氣は最後まで氣分がはつきりしてますからね、うつかりすると素人の方は油斷をしますから』

『まつたくどうも、まさか死ぬ病人だとは思つてゐませんでした。何しろあの通り觀念し切つてゐたので、あれも一寸えらい男だつたのでしたが、ある事情からつひあんな死方をして行つたのでしたが、私は實に殘念で……惜しい人間だつたのですが……私はつひもう毎日……』

私はつひ斯う云ひかけたが、醫學士の怪訝さうな瞬きに氣がついて、私は言葉を呑んだ。そして何かしら身のまわりが振りかへられた。狼狽と困惑が感じられた。――何う云ふつもりで俺は這入つて來たのだつたらう?……金を借りる?……オヤ〱變だぞ――私はすつかり狼狽してしまつて、二つ三つペコ〱頭をさげて、こそ〱と門の外へ出て來たが、雪の中で叔父の死靈が、生前滅多に見せたことのなかつたひどく陰氣な佛頂面を見せて、私のことを『馬鹿!』と怒鳴つた。

獲物

一月以來私は毎日、空氣銃の練習で日を送つて來た。それは、生の忘却――と云つたやうな意味で私には有益なことであつた。酒と睡りと空氣銃――私はそれで、充分に滿足してゐた。贅澤を云つても、それは及ばないことであつた。

四月半ばの日曜日だつたが、私と清吉とは町の方へ雀を撃ちに出かけて行つた。最初のうちに清吉の方がうまかつ

たが、學校があるので、それに私の病的な練習ぶりから、此頃では私の方はずつと自信を得てゐた。それで、當然彼の方が私のポインターの役目をすべきであつた。

材木座の別莊にA君が創作をしに來てゐた。そこの庭へ雀が澤山來ると云ふので、私たちは前から訪問を約束してゐた。私は今日こそは自分の技量を實地に試して、大いにA君を驚かしてやらうと思つた。

八幡前の、石の鳥居のすぐ傍の電線に雀が一羽とまつて、そつぽを向いてチョン〳〵啼いてゐた。『淸吉！』と云つて私は彼の擔いでゐた銃を取つて、覘ひを定めてプスッとやると、ピクッともせず陽炎立つた日光の中を羽をひろげて落ちて來た。三角ダマが尻の方の柔かい部分を突拔けて、傷口にちつとばかし血が浸染んでゐた。

『うまいもんですなあ、……何を覘つてゐたのかと思つた』葉櫻の間の往來をぞろ〳〵やつて來た遊覽客の一群が傍に寄つて來て私の技量を賞讃した。

小町の方へ曲つて、往來に向いた茅葺屋根の棟で春の悅びを交換し合つてゐるそのどちらだつたかに覘ひをつけて、プスッとやると、囀り聲がシーンとしたと思ふと、コロッと一羽轉がり出したが、途中で引かゝつてしまつた。私たちはたいぶ屋根上を恨めしく眺めて待つて見たが、諦めて一町ばかしあるいて來ると、後から子供が『今落ちて來たからと云つて追かけて持つて來て吳れた。私は少年の親切を謝した。今度のは眼玉を完全に射拔かれて血が吹き出てゐたので、少し殘酷な感じであつた。それからA君の別莊へ行く途中ではみな射損じてしまつた。

A君のところには近所に住んでゐる友達のS君が遊びに來てゐた。S君は本當の鐵砲を持つてゐた。君のところへは東京から友人達が遊びに來ると云ふので、十二時幾らの汽車へ迎ひに出て行つた。その間本當の鐵砲を持出して來たS君と私たちは、裏の山へ登つて鵯の聲を追かけたりして遊んだ。やはり時間を持て餘してゐるS君は、昨年の暮に買つた

のだが、まだ二三度しか持ち出してないと云ふことだつた。

『やはり一人では、相手がないと億劫だらうから、今によくうちのポインターを馴らして置きますからね、そしたら日曜に貸しますよ』と、私は清吉をからかつたりした。

『何か獲つて見た？』

『いや、この前たつた一羽鷺見たいな鳥を撃つたがね、脚の方だつたものだからまだ活きてゐてね、口を開けて抵抗する風をしたりしてね、氣味がわるかつた』

『そいつを喰べて見た？』

『いや喰べなかつたね』

『なぜ喰べなかつたかねえ』と、私は惜しい氣がされた。

東京から來たA君の若い友人の三人と、年頃の令孃と、女學校へ入つたばかしの女學生二人と、A君S君、私たちといふ大勢で、海岸の方へ繰り出して行つた。何と云ふ四月のいゝ天氣、いゝ海、いゝ人達であらう。すべてが輝かしく、爽かであつた。鬱積した、溷濁した、老廢した私の魂にも、新鮮な悦びを感じさせた。S君が眩しく陽炎立つた空中に向つて、一發パーンと放つた。そして彼等は一齊に滑川の方に向つて駈け出した。彼等には若さがあり、健康があつた。A君の友人のO君が、クリーム色のパラソル翳した令孃と肩を並べて何事かを語り合つて行く姿も、美しい繪のやうに思はれた。私たちはめい／＼に鐵砲やステッキを兵隊のやうに擔いで、滑川の海岸のトロッコの線路の橋の上に並んで立つて、持つて來た小型の器械で寫眞を撮つた。鎌倉ドンキホーテ——A君は私の姿をさう評した。由井ケ濱では團體の宴遊會の幾組かゞ、各趣向を凝らした餘興を演じてゐた。

長谷で遅い晝飯を濟して、電車で藤澤へ廻る一同と別れて、私と淸吉とは長谷の通りを自働車や馬車の埃りを浴びながら歸つて來た。私はかなり疲勞を覺えたが、しかし愉快な一日であつた。淸吉は細紐で頸を結えて、日光と人目を避けるためその上を新聞紙で蔽ふた獲物をさげて、やはり疲れた樣子の步きぶりであつた。彼等と別れて、私たちは何となく哀愁を感じた。それを紛らさうと云ふやうな氣持から、私はまた途々擊つて見たが、最早當りさうもなくなつた。

『もうせめて二羽位ゐほしいものだな。一羽づゝではほんの一寸だらう』と私は云つた。

『いや僕は喰べなくてもいゝよ。お父さんだけ喰べるといゝ』一體が氣味わるがり家の彼は、眉を寄せるやうにして云つた。

『いやお前も喰べて見るさ。そりやうまいよ。喰べて見たことがないだらう？……早く歸つて僕が料理をするからね。A君に聽いたやうに、まづ腹を割いて、それから鋏で兩方の肋骨をパチン／＼と鋏んでそれを開くと臟物がそつくり出て來るさ、それを醬油をつけて燒いて喰べるんだね。そりやうまいだらう……』

料理をすることも面白さうだし、斯んなに簡單に擊てるのだからこれからは每日お湯へ來たついでに二三羽づゝもセシめて行つて、貧しい晩酌のお膳に珍味が添えられることゝ思ふと、二十五圓と云ふ大金を奮發した甲斐もあり、數ケ月練習の効も空しくなかつたと、淸吉の理解を超えた私には滿足があつた。練習に棄てた何千發と云ふ彈丸が惜しい氣がされた。實地の方だともつと早く上達もしたであらうし、相當の獲物もあつた譯で、酒と眠りには獲物と云ふものがないが、此方は一擧兩得の働きをする結構な物だと云ふことに、新らしく氣がつかれた。今夜の晩酌がいかにうまく飮めるだらうかと、私は淸吉の倦怠の色に氣が咎めながら、胸の中に空想して樂んだ。

私たちは行きつけの小町の裏通りのお湯へ這入つて、それから師範學校の前を通つて八幡樣の境內へ這入り、參詣の

舗石道のあたりまで來た時、
『お父さん、雀が一羽しきやないよ……』と、淸吉は顏色を變へて云ひ出した。
『一羽しきやない？　そんな筈がないぢやないか‼　お前が氣をつけないものだから落して來たんだろう。いつだってお前はさうぢやないか、物事に對しても實に粗略で、不注意だよ……』と私はすつかり不機嫌になつて、殊にさつきからの彼の倦怠ぶりが氣に觸つてゐたところだつたので、私は口を尖らして怒鳴つた。
『さうぢやないんだけど、……さつきお湯屋を出る時はたしか二羽あつたと思つたんだけど……』と彼はすつかり怯えた顏して、引返して搜して來ると云つた。
『ぢやあ、あそこの師範の石橋のとこまで行つて見て來い。それで見つからなかつたら歸つて來い！』
私は彼の駈け出して行く後姿を見送つて、云ひやうの無い暗鬱な嘆息が感じられた。不幸な慘めな感じであつた。お互ひに慘めで孤獨な私たちの生活の間では滅多に來ないであらう今日の樂しかつた一日の終りに、斯うした豫期しなかつた不幸な破綻が待つてゐたのであつた。私は彼を憫れむと同じやうに自分を憫れまずにゐられなかつた。
『なかつた……』と云つて、彼は悄然として歸つて來た。
『ないものは仕方がないね…』と、私たちは默り合つて歩るき出したが、境內と往來の境の小さな流れの橋まで來た時に、
『そいつも棄てつちまへよ……』と云つた。
夕方の迫つて來たごぶくろ坂を、二人はいつまでも暗く默り合つて、歸つて來た。練習だけにとゞめて置くべきであつた――いつまでか二人の記憶に今日の雀一羽のことが刻み込まれるであらうと云ふことは、私には遣る瀬ない後悔で

あつた。

お神籤

『一度は流感で死んだと云ふ噂さまで立てられたが、その時も助かつたし、情死では死損ふし、やつぱしまだこの娑婆に緣があつたのですね。まつたくモルヒネの量にも間違ひがなかつたんだから、それで二人とも助かつてゐる、……ほんとに醫者も不思議がつてゐましたよ』と、死んだ彌吉氏の弟のT君は、相手の女と二人で撮つた寫眞や、まだ商賣に入らない前の女だけのやら旅鞄から出して、私に見せながら云つた。

『成程、かなりの美人だ。これ位ゐだとやはり一等格の方でせうね。そして、今もやはりいつしよに居るんですね。細君たちとはすつかり離緣になつたんださうですね……』

『いや、女はまだ年が明けてないんですよ。いつしよに居るなんてのは世間の噂さですよ。女のおふくろや弟たちとはいつしよにゐるんですが……』

『それにしても離緣とは、細君たち可哀相ぢやありませんか……』

『そんなことあるもんですか！ 年の若い自分が云つては變なものだが、死なうとまで思ひ詰めて來るとそりや妻子のこと位ゐ何でもないもんですよ。あなたなんか經驗がないからでせうが、そんな點では實に不徹底な氣がしますね。あなたの書くものなんかでも、そんな點では隨分齒痒いところがあると思ひますね』と、彼は例の調子で云つた。

彌吉氏の葬式が十二月に村で行はれたのだが、M市の情人の實家に潜伏してゐたT君は、たうとう葬式にも出て來なかつた。が今度幸ひに、縣教育會から補助のある教育活動寫眞の興行權――そんなやうなものを握ることが出來て、そ

の用事で出京したのであつた。

『そりや死んだ者の方がどれほど幸福だか、有りたけの財産を悉く使ひ盡して、何も無くなつたところで旅でこつそり死んで歸る――兄ほど幸福な人間はないぢやありませんか。生き殘りの自分なんかこそ不幸だ、死ぬには死なれず‥‥しかし今度は大いにやるつもりです。さう云ふ方にかけては今度の女は性格的に非常によく出來てますよ‥‥‥』

『さうだと結構ですね』と、私も云ふほかなかつた。

やはり丁度昨年の五月の初旬頃だつたが、彌吉氏が漂泊の旅から歸つて來て一晩泊つた時、二人で牛僧坊のお神籤を引いたが、彌吉氏は吉で、私は五十四番の凶であつた。その時彌吉氏は何と思つたか、私に『あなたは女難の相がゐるから注意しないといけない』と云つた。

私はその時のことを思ひ出して、T君にすゝめた。彼はひとりで出かけて行つたが、九十六番の大吉を引當てゝ『素敵々々！』と云つて歸つて來た。

『これで益々前途有望と云ふ譯かね。大いに貴人の庇護を得ん、と云ふところもすつかり當つてますね。殘り者の果報で、兄は身代りに死んで呉れたんだらうし、さう思ふと、兄の死も有難いことになるかな。兎に角大いにやりますよ、‥‥大吉！　大吉！』彼は恭しく額にいたゞき、情人の寫眞の間に大事に挾んで、二晩泊つて雨の中を昂然として歸つて行つた。

敎育活動――兄の死――情死未遂――お神籤――佛殿の前で彼を見送つた私は、何かしら不安定な暗い苛立たしいやうなものが殘された氣がして、佛殿の前の地面にむごたらしく崩れて雨にたゝかれてゐる牡丹の花瓣を眺めては、しばらく立つてゐた。そして、神意に占はれた彼の前途を祈りたい氣になつた。

――十年五月――

嵐の前

中澤臨川著

◇四六版上等紙天金函入美本◇

◇定價金貳圓・送料拾貳錢◇

八版發行

彼、天才的大哲學者、ニイチエが青年期は、實に苦惱そのものであつた。一度び青春の危さと、懷疑の恐ろしさとに戰慄を覺へてから、彼の心は幾度か絶望し、また幾度か强い反抗心を以て、死と戰つて來たのであつた。而も病苦から來る肉の痛苦は、一層彼れの心を焦ら立たせた。彼は遣瀬ない惱みと、病軀とを抱いて、旅から、旅へと轉々として漂泊つた。漂泊の旅は彼に一つの戀を與へたが、それも遂には空しいものであつた。彼は再び、否以前にも增して、淋しい、孤獨を抱きしめ乍ら、ひたすらに生の苦惱と鬪ひつゝも、悲壯な「驗者」としての新らしい道へと驀進したのであつた。本篇は、この苦惱其ものであつた、苦き日のニイチエを描けるものにして、深き感激の情を禁じ能はざる、稀有の一大思想小說である。

東京芝區櫻田久保町

改造社

振替東京八四〇二番

◇一世壓する完璧

改造社編輯局編纂

文化哲學叢書

監修者として哲學界の完璧を網羅し、一世を壓する權威の所產を社會に提供することは既に前號に豫告せる如し。今回愈々その準備成り、各方面に亘りて一粒選りの新銳を物色して執筆を依囑したり、尙全部十二册とする考なりしも、佛國のアルカン叢書の如く、册數を制限せず、頁數も制限せず、その出版の年限を定めずして、永久に「文化哲學叢書」の名を以て發行するに至るべし隨つて大體は著書の形式を採るべきも、中には飜譯の形式を取る者もなしとせず。

監修者（いろは順）

文學博士 波多野精一
文學博士 西田幾太郎
文學博士 朝永三十郎
文學博士 米田庄太郎
文學博士 田邊元
法學博士 左右田喜一郎
文學博士 桑木嚴翼
文學博士 藤井健治郎
文學博士 深田康算

の哲學書出づ◇

執筆者

ニイチエの文化哲學（本年九月發行） 文學士 和辻哲郎

新ヘーゲル派の法律哲學（本年九月發行） 法學士 恒藤恭

ラッセルの哲學及社會思想（本年九月發行） 文學士 土田杏村

デルタイの哲學 文學士 勝部謙造

マッハの哲學 理學博士 桑木彧雄

題未定 文學士 岡野留次郎

新カント派の歷史哲學 文學士 板垣鷹穗

題未定 文學士 植田壽藏

マイノング對象論 文學士 務臺理作

ヴィンデルバント リッカート價値論 文學士 河瀨憲次

リッカートの哲學 商學士 杉村廣藏

編輯を了へて

◇ボツ／＼睡魔が襲ふてくる時には魔に克つたり、時には敗ける奴も出てくる、敗けてやらぬと魔の存在が認められぬから。そして敗けてやることが惡魔へ對しての中元である。

◇六月は可なり忙しかつた、「臨時」號を出すので二倍の努力を出した、ただ七月號に作者病氣のため「暗夜行路」を休揚したのは殘念であつた、しかし志賀氏も、もう全快したから八月號から間違なく續稿を登載する。

◇武者小路氏快心の長大篇「或る男」は本月號より連載さるゝこととなつた、氏の努力の結晶が、いかに江湖に歡迎されまたその作がいかに發展するか。蓋し志賀氏の「暗夜行路」と共に文壇の二大讀物として嘖々の盛名に謳はるることだろう。

◇ラッセル教授病漸く減退し胸部は殆んど全快の域に達したが、脚部の新症のために北京の客舎に靜養中である、從って我國に於ける本社主催の講演は中止する。しかし寄稿だけは歸國の後も依然として戴くことになつた、或は七月初旬我が別府その他に轉地さるるかも知れない。

◇論壇の偉才阿部次郎氏近く渡歐に決した、そして氏は錦田義富氏と共に新設さるべき東北文科大學教授に内定した青葉城下が文壇の一樞地となるは遠いことでもあるまい。

◇八月號には創作欄に出色の大文字が現るることとなつてゐる、論文に於ても然りである、かくして一號は一號と充實し來り、現在では斯界の最高權威となつたのは、何れも筆者と讀者の賜物である、厚く謝する。

◇世界的詩人として盛名があつたエロシエンコ氏は遂に國外へ放逐さるるの悲運に立至つた、盲人として不自由な體の持主であつた彼は非常なる我國の愛慕者であつた。

◇その放逐の理由はどう云ふのであつたかは玆に記述するの自由を奪はれた、氏は出發に際し本誌所載の純藝術小說「狹い籠」一篇を我國に遺した、その藝術的價値は玆に贅するまでもない、しかしいかに深刻であり、哲學的であり、芳香の高いものであるかを讀者に批判してもらひたい。

◇我社は社會問題の怒濤の中に、哲人の姿を現はして見た、現代八大哲學家の姿を現はして見た、唯物主義にも幾多缺陷が認めらるる如く、總てが心的崇拜の一途のみでも解決され得ぬ現代である、彼等の叫び聲——本質への——研究がどれ程深みがあり、人生への根據があるか、乞ふ今後の論壇に見よ。

◇先づ欄の兩面に照せよ、我社はこの唯心、唯物戰に高き渦卷きを卷き起さしめ、血みどろの戰士をして決戰せしめて見たい、輝く夏の海、燦、がやうな眞晝の砂上、何れも我等を象徵する好箇の自然の色彩である。

◇青桐の青み、皐月つゝじの眞紅等、一陣の薫風にも夏の色が濃く出でて來た、山開き、川開きの凉しい聲々も彼方此方で聞こえるやうになつた。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	七十錢	二錢
半ヶ年	四圓二十錢	不要
壹ヶ年	八圓四十錢	不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正十年六月二十日印刷納本
大正十年七月一日發行

本號特價 金八拾錢

編輯兼發行兼印刷者 東京府[illegible]七七〇 横關[illegible]
印刷所 東京市京橋區[illegible]町 秀英舍
發行所 東京芝區櫻田久保町 改造社